芭蕉発句全講

Ⅳ

阿部正美著

明治書院

目　次

凡　例

一、句の排列は成立年代順とし、年代の明らかでないものは、推定時期の下限を以て排列の基準とした。概ね拙著『芭蕉伝記考説』作品篇の年代考定に準拠したが、その後の私見によって修正したものもある。

一、注釈は最初に発句の本文を掲げ、以下、季語、語釈、大意、考の各項にわたって細説する。句形は諸種あるうち、最初に掲げるものを本位句とし、年代の古い最も信頼し得る俳書或いは資料の本文を掲出して、他の同句形のものは書名・資料名を挙げるにとどめた。本文の下の括弧内が本文の拠った書名・資料名である。本位句には句頭に番号を付した。

一、本位句の次に、順次異形を挙げた。掲出の要領は本位句と同じである。これら凡て濁点を加え、底本にある濁点は右傍に（ママ）と注記した。脱字は［　］に入れて補った。

一、異形のうち、年代の降る書に見える小異などは、本文として掲げなかったものもある。

一、句の前書に関する語釈は、本位句の前書についてのみ記し、他は省略した。異形句の前書も含め、本文として挙げなかったものは、「考」の条の初めにまとめて掲げた。

一、「考」の条では、成立年代、推敲過程、解釈鑑賞上の要点等、多岐にわたる問題を扱った。

元禄四年

三日口を閉て、題正月四日

647　大津繪の筆のはじめは何佛（俳諧勧進牒）

正月四日ヲ題ス

大津繪の筆のはじめや何佛（蓮の実）

瓜作・陸奥鵆・泊船集・篇突・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

小松原・芭蕉庵小文庫・柱暦・誹林良材

春季（筆のはじめ）。

語釈　○**三日口を閉て**　「三日口を閉ぢて」。正月三箇日の間、句を作らなかったことをいう。「二日にも」（Ⅱ *338*）の句参照。「二日には三座三日は四座初日」（『柳多留』七十三編）「われいはん言葉もなくて、いたづらに口をとぢたる、いと口をし」（『笈の小文』）「**Cuchi, I, Meuo tozzuru.**」（『日葡辞書』）。○**題正月四日**　『蓮の実』の前書によれば、「正月四日に題す」ではなく、「正月四日を題す」と訓むのであろう。「題」は、詩歌の類を書きつけること。「自題落柿舎」（『猿蓑』巻三、去来発句「柿ぬしや」前書）「**Xôguachi.**」「**Xôguat.**」「**Dai.**」（『日葡辞書』）。○**大津絵**　「オホツヱ」。近江国大津の追分や三井寺辺で売られていた画。寛文頃から始まり、元禄頃までは阿弥陀・三尊仏・十三仏・不動尊など彩色の仏画を主としていたが、後には鬼・座頭を始め種々のものに及び、粗い筆法の戯画になって、旅の土産にされた。伝説では浮世又兵衛に始まるといわれ、近松の『けいせい反魂香』の題材になっている。この曲の吃又について、

……追分や、大津のはづれに店がりして、妻は絵の具おつとはゑかく、筆の軸さへほそもとで。のぼり下りの旅人の、わらべすかしのみやげ物、三銭五銭の商ひに、命も銭もつなぎしが、……

などとあるのが参考になろう。「物もゑいはぬ吃めが推参千万。似合ふた様に大津絵かいて世をわたれ」（『けいせい反魂香』上）。○**筆のはじめ** 「筆の始め」。普通「筆始め」「書き初め」「試筆」といえば、新年を迎えて最初に筆を執り字を書くことで、正月二日に行われる。ここはそれを大津絵の場合にしたので、新年はじめての絵をかくことである。「ゆづり葉や口にふくみて筆始　其角」（『俳諧勧進牒』）「**Fajime.**」（『日葡辞書』）。○**何仏** 「ナニボトケ」。何の仏を描くのか、の意。

大意 大津絵では、正月の筆始めに何の仏を描くのだろう。

考 「正月三日都に出るとて」（『瓜作』）「嶋の海辺に年をこえて、三日觜を氷ス」（『芭蕉庵小文庫』）「四日」（『柱暦』）「湖頭の無名庵に春をむかふ時、三日閉口題四日」（『篇突』）等の前書があり、『泊船集』の前書は『俳諧勧進牒』と同じである。『勧進牒』では、正月五日付曲水宛芭蕉書簡を収め、句は前書と共にこの書簡中に出ている。書簡の年代は元禄四年と推定され、同年正月四日に大津の乙州の新宅で成った句を、翌日の書簡で報じたのであった。この書簡の句の後に、

金平が分別のごとくことしは休に致候而、歳旦おもひよらず候へば、如此御座候。

として、歳旦吟を作らなかったことに触れている（「金平が分別のごとく」というのは、この年の井筒屋歳旦帳、其角引付に見える曲水の発句「金平も分別やすむ朝かな」を踏まえ、自分が歳旦吟を休んだことにかけて戯れたのである。「金平」は金平浄瑠璃のこと）。この外去来の『旅寝論』には、

又、大津絵のまへ書の事、其とし我方へ書送り給ひしは、嶋鳥の嶋の浮淵に春をむかへし、三日口ばしをからす、題四日と侍りき。

とあり、当時芭蕉は去来にも手紙を書いて、この句に『芭蕉庵小文庫』の所伝に類似した前書を付していたことが知

られる。『瓜作』（琴風撰、元禄四年刊）の前書は誤伝、『篇突』の粟津無名庵での作とする所伝も信じ難い。
「筆のはじめや」という異伝は疑問の助詞とみられ、散文ならばこの方が形は整うけれども、この場合疑問の意は「何仏」で足りていて必ずしも不可欠の語ではない。『蓮の実』（賀子撰、元禄四年刊）『小松原』（只丸撰、元禄四年刊）等は他門の集で誤伝の可能性が大きく、「筆のはじめは」の方が信用出来る。
大津の乙州宅で新年を迎えた芭蕉は、この地で売られている大津絵に惹かれたのであろう。其処にこの句の第一の動機があった。四日の筆始めということについては、古く孟遠の『秘蘊集』（享保年間成）に「元日三日迄は神道なれば、何仏の発句四日に題せられたり。僧衆の礼四日よりはじまる也」という説が見える。「僧衆の礼」と大津絵は同一視出来ないにしても、三箇日の間は神道ということは尤もに聞えるし、「題正月四日」とした背景には、そういうことを考えてよかろう。この年芭蕉が歳旦吟を休んだことについては、
此方年〻事故、当春は致非番候。たれせつくものも無御座、是まで年〳〵の骨折さへくやしき事に覚候。（正月三日付北枝―推定―宛）
とも述べているが、自身にとってもこの句が筆始めであった。内容は別にむずかしいことではなく、大津の名物を持ち出して土地への挨拶としたまでで、淡々とした逸興を軽くまとめている。
現代の写実的な刺激のつよい俳句を見馴れた目には、どこか鷹揚で物足らぬ感じもあろうが、このように何か心のゆらめきといったものが漂う句もまた至芸というべきである。（『芭蕉全句』）
という加藤楸邨氏の見方が適評であろう。

648　木曽の情雪や生ぬく春の草　（芭蕉庵小文庫）

泊船集・蕉翁句集・水鳶刈

春季（春の草）。

語釈 ○**木曾の情** 「木曾の情」。「木曾」は、源平時代の武将木曾義仲を指す。（Ⅲ539）参照。「情」は、その気持、気質をいう。この句はここで切れるのであろう。「ナサケ」と訓んでは良くない。「木曾は長坂をへて丹波路へおもむくともきこえけり」（『平家物語』巻九）「山は静にして性をやしなひ、水はうごひて情を慰す」（芭蕉「洒落堂記」―『白馬』）「Iŏno couai fito.」（『日葡辞書』）。○**雪や生ぬく春の草** 「雪や生え抜く春の草」。雪の下から春の草が芽ぶいて、茎を伸ばしているさまをいった。加藤楸邨氏は「生ひぬく」と訓み、「従来ハエヌクと読むのが通例であったが、句意からみて抑えた声調の方がよいと思うのでこう読んでおく」（『芭蕉全句』）と述べられたけれども、「生え抜く」の語には仮名書きの例もあり、強いて聞き馴れない言葉を採る要はあるまい。「雪」の次に「を」を補って解したい。「や」は疑問の助詞とする説もあるが、私は詠嘆の間投助詞と見ている。但し、切字ではあるまい。「春草……わか草は。まだはつはるのわかばへなればしるゐてつめどもかすけなきさま。雪に萌黄のうはじらけしたる気色などもいひなす」（『山之井』）「二王立に立たるは、こんりんざいよりたちまちにはへぬいたるがごとく也」（『嫗山姥』第一）「いろ〳〵の名もむつかしや春の草　珍碩」（『ひさご』）。

大意 木曾義仲のしたたかな気性のあらわれか。春の草は墓畔の残雪を押しのけて芽ぶき、茎を伸ばしている。

考 『蕉翁句集』には「題しらず」と前書があり、『芭蕉庵小文庫』では史邦の自序の冒頭に、

木曾の情雪や生ぬく春の草と申されける言の葉のむなしからずして、かの塚に塚をならべて、風雅を比恵日良の雪にのこしたまひぬ。

と引かれている。即ち「木曾」は地理的な木曾路の意ではなく、木曾義仲を指すことは分明であろう。これに関連して、句の成立及び内容の理解に資すべきものとして、去来の『旅寝論』に左の記事が見える。

一とせ人〻集りて木曾塚の句を吟じけるに、先師一句も取給ず。門人に語りて曰、都て物の賛・名所等の句は、先其場をしるを肝要とす。……句の善悪は第二の事也となり。我むかし、先師の木曾墳の句を拙き句なりと思へり。此時はじめて其疑ひを解ぬ。乙州木曾塚の句はすぐれたる句にあらずといへども、此をゆるして猿蓑集に入

べきよしを下知し給ふ。

「木曾塚の句」とは「木曾塚を題とした句」の意であって、蕉門の師弟が会したというのも、木曾塚義仲寺境内の無名庵に於いてであったろう。乙州の木曾塚の句は、『猿蓑』に「木曾塚」と題して収められた「其春の石ともならず木曾の馬」を指すのである。今栄蔵氏は、右の『旅寝論』にいう無名庵の会を元禄三、四年の早春と見て、芭蕉の「木曾の情」の句も、乙州の「其春の」の句と同時同所の作としておられる（「芭蕉句「木曾の情」の作年次」—『近世文芸資料と考証』Ⅳ—）。しかし、私は「我むかし、先師の木曾墳の句を拙き句なりと思へり。此時はじめて其疑ひを解ぬ」という去来の書き方からして、今氏のように「同時同所の師弟の作」とは考えない。無名庵の会より前に「木曾の情」の句は成っていたとおぼしく、何れにせよ元禄三、四年の作ではあろうが、例えば師弟の会が四年春であれば、芭蕉の句は三年春に出来ていたという位の、時日の隔りはあったと思う。また、制作の時は早春とは限らず、木曾塚の草庵に居れば、何時この句のような想が浮んでも不思議はない。尾形仂氏は『松尾芭蕉』で作年時を元禄三年三月末と見ておられ、伊賀から再び湖南へ出て来たこの時を擬するのも有力な見解であろう。兎に角当面の句の成立年次が元禄四年春を降らないことは確かであって、『蕉翁句集』が元禄五年の部に入れているのは、明らかな誤りである。この句を含む廿一日付野坡宛芭蕉書簡も知られているが、真簡とは認められず、内容も信じ難い。

この句を木曾路での吟、或いは木曾の早春の趣を思い遣ったとする見方は古来多い。

木曾は信州也。木曾三日の間は幽谷を通る也。……日影乏しくて弥生迄も雪残る也。されども陽気上にさかんなれば、雪を生ぬきて生ると也。生ぬくの手爾葉にて寒国と春の陽気をふかく云述たり。（東海呑吐『芭蕉句解』）

此句の情といふは春情の事にて、陽気発生の気をいへる也。句意は木曾山家の雪国とても春陽の気のなさけは有難きものにて、雪の中より草ともあを〳〵と生ぬき出たるよといへるなり。（素丸『説叢大全』）

等を始め、このような立場をとる注書は、数からいえば義仲を偲んだとするものよりまさるであろう。しかし、初出

の『小文庫』に「言の葉のむなしからずして、かの塚に塚をならべて」とあるのが、義仲寺の芭蕉の奥津城のさまに符合し、木曾塚を題とした句とする『旅寝論』の記事もあって見れば、そのような解が真を得ていないことは自明である。そして、義仲の本性を、残雪を押しのけて伸びる春の草に象徴したところに、芭蕉の義仲観が窺われ、その一生の運命に同感する思いも深かったことが知られる。さればこそその人の塚と並んで永く眠ろうとしたのでもあろう。その点を思えば、巧みな句ではないが心惹かれるものがある。最後に諸家の鑑賞を引用しておこう。

　雪の中を耐えぬき、季節の催しとともに堅く凍った大地をつき破って萌え出ずる「春の草」のわりなさは、まさに強情我慢の「木曾の情」を象徴するものでなければならない。それは木曾塚に対する感銘を、最も木曾塚らしいありかたにおいてとらえたものであって、西行に対するものでもなければ、また義経の遺蹟に対するものでもなかった。去来が「この時はじめてその疑ひを解きぬ」といったのは、その〝本情〟の把握に想到したからにほかなるまい。

　この句は、歴史の陶汰(ママ)、季節の変化に耐えてよみがえる生命力をとらえている点において、『ほそ道』の「夏草や兵(つはもの)どもが夢の跡」の句と一脈通う点がある。……一句は、それぞれの中に流転と永劫とを含んだ素材の対置を通した一大共鳴音の中から、流転の相それ自体を永遠と観ずる芭蕉の大きな諦念と、永遠なるものへの思いを訴えかけているのだ。木曾の情を雪の中を生えぬく「春の草」に見出だし、義経の情を茫々と乱れ茂る「夏草」にとらえたのは、芭蕉の詩人的直観力である。（尾形仂氏『松尾芭蕉』）

　……「木曾の情雪や生ぬく、春の草」と読むのと、「木曾の情、雪や生ぬく春の草」と読むのとでは、微妙に解釈が違ってくる。いずれも「雪や生ぬく」に最もアクセントがあり、中七文字の「や」は「をや」の省略……には違ないが、前者なら春草を眼前にして、雪に耐抜いた義仲の心根を思う句になるし、後者なら、「生ぬく」のは「春の草」そのものである。この場合、「木曾の情」は、木曾塚とか木曾路に寄せて義仲の生涯を偲ぶ作者

の情である。前はむろん木曽塚での吟と見るのがふさわしいし、後の方なら、木曽塚から一旦出てどこか別の場所で詠んだ、と考えたくなる。どちらの解釈をとるにしても、あたりに残雪の眺も消えた季節では「雪や生ぬく」がそらぞらしくきこえて、具合がわるい。下ってもこれは仲春までの吟だ。（安東次男氏『芭蕉発句新注』）

右の安東氏の鑑賞に関連していえば、私は「木曽の情」で切って解しながら、春の草を眼前にして義仲の心根を思う句と見るのである。また、「木曽の情」を「義仲を偲ぶ作者の情」とするのは無理であろう。

餞乙刕東武行

649　梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　（猿蓑）

俳諧勧進牒・葛の松原・泊船集・をだまき綱目・三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・俳諧古今抄・蕉門録

春季（梅・若菜）。

語釈　○**餞乙刕東武行**　「乙刕の東武行を餞す」。「乙刕」は、大津の蕉門俳人川合乙州。既出（Ⅲ*633*）。「刕」は「割く」意味の字であるが、ここでは「州」の異体字である。「東武」は「東国武蔵」の意で、江戸の異称。「行」は、旅。「餞」は、旅立つ人に贈物すること。この場合は乙州に発句を贈るのである。「餞す」と音読してもよい。「参宮する従者にはなむけして」（『猿蓑』巻二、其角発句「みじか夜を」前書）「亡父の墓東武谷中に有しに」（『猿蓑』巻四、園風発句「まがはしや」前書）「千里のかうは一歩よりはじまる」（『曽我物語』巻四）「Fanamuqe.」（『日葡辞書』）。○**若菜**　「ワカナ」。正月七日の七種粥に入れる春の七草の総称。子の日の若菜摘みとも関連して初春の季題になる。（Ⅰ*223*）参照。「若菜　……菜つみは春也。　……菜とばかりは雑也」（『御傘』）「初わかな。七くさ。なづな。はこべら。芹。菁。かぶらな也。ごぎやう。すゞしろ、すゞな。仏の座。菜つむ、　……むかしは若菜を上の子日に内蔵寮幷に内膳司より禁中にたてまつれると也。或は十二種供する事もありし由、公事根源に侍。其中には苣・蕨・あふひ・よもぎ等もあり。今は在家七日に福わかしとてこながきをいはひ侍り。六日の暁より七くさはやすとて、わかなを盤にのせて、唐土の鳥と日本の鳥となどいふ事をうちはやし侍り」（『増山井』）「つみすてゝ蹈付がたき若な哉　路通」（『猿蓑』巻四）「Vacanauo tçumu.」（『日

葡辞書』)。**○まりこの宿のとろゝ汁**　「丸子(まりこ)の宿(しゆく)のとろゝ汁(じる)」。「まりこの宿」は今の静岡市丸子。東海道五十三次の一で、東の府中宿と西の岡部宿との間に位置する。「とろゝ汁」は薯蕷(やまのいも)の根を摺りおろして作る汁で、これを飯にかけて食べる。蜀山人の『改元紀行』(享和元年成)に「芭蕉翁が発句に梅若菜とめでしとろゝ汁いかゞならんと人して求るに、麦の飯に青のり・とろゝをかけてきたれり」とあり、『東海道中膝栗毛』二編下にも、この宿に入った北八が「爰はとろゝ汁(じる)のめいぶつだの」と言っている。「とろゝ汁」は近代以降秋の季語とされるが、古くは季語ではない。「馬のとをれば馬のいなゝく　冬文　さびしさは垂井の宿の冬の雨　舟泉」(『あら野』員外)「**Xucu.**」「**Tororo jiru.**」(『日葡辞書』)。

大意　今頃旅に出れば、街道筋には梅が咲き、若菜も青々と萌えているだろう。丸子の宿のとろろ汁は、さぞうまかろう。楽しい旅をして来なさい。

考　「乙州が江戸へ起(ママ)くとき」(『俳諧勧進牒』)「乙劦が江戸え趣時」(『蕉翁句集』)等の前書がある。『猿蓑』『勧進牒』共にこの句を発句として歌仙一巻を収めているが、芭蕉・乙州・珍碩・素男・智月・凡兆・去来・正秀らの連衆による二十句までが共通で、以下は『猿蓑』が半残・土芳・園風・猿雖・嵐蘭・史邦・野水・羽紅ら上方連衆中心、『勧進牒』が探志・其角・路通・曲水・里東・芹花・素葉・寒水・落荷・飛陰ら、当時江戸在住の連衆である。乙州の江戸行は発句の前書からして元禄四年正月の出発と見られ、『猿蓑』巻四に、

武江におもむく旅亭の残夢
寝ぐるしき窓の細目や闇の梅　乙劦

と往路の吟、『己が光』には、

江府よりの登にいせへ参りて
あひの山誰追かけてほとゝぎす　乙州

と帰路の吟が載っている。芭蕉の『嵯峨日記』(元禄四年)に、「乙州が武江より帰り侍るとて、旧友・門人の消息共あ

また届」（四月廿二日条）「乙州来りて武江の咄」（同廿五日条）とあるのによれば、四月二十二日までには大津に帰った筈である。芭蕉は恐らく二十句までの付合を携えて伊賀に赴き、当地の門人に巻き継がせて、更に末四句を京あたりに居た嵐蘭・史邦・野水・羽紅らに付けさせて満尾した巻を『猿蓑』に収めた。一方、乙州も、同じ二十句を旅嚢に入れて江戸に下り、彼の地の人が後を付けた巻は路通編の『勧進牒』に収められたのであろう。土芳の『蕉翁句集草稿』に「此句にて江戸連中巻有。葛松原に入」とあるのは誤りである。

句は唯「梅」「若菜」「とろゝ汁」という三つの物を並べたに過ぎない。これについては土芳の『三冊子』に記事がある。

此句、師のいはく、工みて云る句にあらず。ふといひて、宜しと跡にてしりたる句也。かくのごとくの句は、またせんとはいゝがたしと也。東武に趣く人に対しての吟也。んめ・わかなと興じて、鞠子の宿にはといひはなして当(あて)たる一体也。（赤雙紙）

これによれば、作者自身趣向を巧んで仕立てた句ではなく、無意識に口を衝いて出たものを、後で一応の句にまとまっていると知ったのであって、そういう出来方だから又同じような句を作ろうとは約束出来ないと言ったという。この句では無成心に三つの物が並べられているわけであるが、ただ同質の物三つというのではなく、その間おのずから変化が見られる。「梅」と「若菜」は春の自然の風物で、和歌以来の伝統を色濃く孕むものなのに対して、「まりこの宿のとろゝ汁」は、そうした背景を持たない俗中の俗なる俳諧的素材であった。『三冊子』の「いひはなして当たる」とあるのは「対照をはかる」意の「当(あ)つ」であるから、土芳も十分その事は心得ていたことが分る。支考の『俳諧古今抄』には、

道すがらの優游には梅もあり若菜もあり、まりこの宿にとろゝ汁もあらんと、おもひやりたる風情ながら、若菜は植物と食類との結前生後の働ありて、とろゝは梅若菜のつやを崩す十成の俳諧体なり。これらを三段の曲節と

しるべし。

とあって、「若菜」が視覚と味覚と両方を兼ねて、「梅」と「とろゝ汁」の間で「結前生後」の働きをしていると見たのは思いつきながら、これらは皆後からつけた理窟であって、要は初五の二つと「とろゝ汁」との間の雅俗の対照の面白味が分ればよいのである。なお、「三段の曲節」が三段切れを意味するのであれば、そういう見方は誤りとする外ない。「梅若菜」は、この句のリズムでは一まとまりのもので、「ウメ、ワカナ」と切れるわけではないからである。

右の支考の説に関連して、幸田露伴は、

……道すがらに梅も有り若菜も有りと云へるは甘心せず、梅はまさに此処に在りて此句ありたるなり、想裏ののにはあらで、眼前のものなり。（『評釈猿蓑』）

といい、山本健吉氏もこれを支持して、

……眼前のものを詠みこむことは、挨拶句として当然のことであり、時節・場所・事情の三つの要件のうち、第二のものがこれによって充たされることになる。これが乙州の新居での、乙州への餞別の句であれば、詠まないことこそかえって礼を失することであろう。むしろ、眼前の梅が詠まれていることが、乙州の宅での句である例証であると言ってもいいだろう。あるいは若菜も、この句が詠まれた日付、一月七日を示しているのかも知れず、従ってこれも、七日の朝の七草粥の属目を示しているのかも知れない。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

と述べておられる。按うに、「梅」「若菜」が句中に詠み込まれた契機として、属目の物という事情は考えてよいであろう。しかし、句の中では「梅」「若菜」が乙州亭の物では「まりこの宿のとろゝ汁」との関わりもしっくりせず、「句としては道中の梅としなければおもしろくない」（『日本古典文学全集・松尾芭蕉集』井本農一博士）のである。道中の春の自然を思い遣って「梅」「若菜」の二種が並べ置かれたものと見なければなるまい。

この句の特色は、内藤鳴雪が、

人を送る時は別れを悲しむのが普通であるが、此の如く興じてやるのも餞別の意に適つてゐる、面白い句として推すに躊躇せぬ。

且又た宗匠達は切字をやかましく言ふが、此句には一つも切字がない、而かもよく一句の意は尽きて文章は完結してゐる。（『芭蕉俳句評釈』）

と述べた諸点にある。別れを惜しむよりも興じて人を送るのは、芭蕉自身も旅心しきりなるを覚えているからであろう。「芭蕉の旅心そのものが、躍動して、誦する者を旅にかりたてるような気分にする」（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）ところが、この句の佳句たる所以である。その中に、乙州への親愛の情が籠められていることはいうまでもない。

伊陽山中初春

650　やまざとはまんざい遅し梅花　（真蹟懐紙）

笈日記・喪の名残・泊船集・三冊子・蕉翁句集

春季（まんざい・梅花）。

語釈　**○伊陽山中初春**　「イヤウサンチユウシヨシユン」。「伊陽」は、伊賀国を指す。尾張の名古屋を「尾陽」、加賀の金沢を「加陽」という類である。「初雪に」（Ⅲ *571*）の句の前書の例のように、「山中」の語で芭蕉は故郷伊賀の上野を指すことがあり、ここもその場合である。「山中の初春」とよむことも出来るが、全体の書き方からして音読した方がよかろう。「初春」は既出（Ⅰ *225*）。「我に志深く、伊陽旧里迄したひ来りて」（『嵯峨日記』）「伊賀の山中に父母の古墳をとぶらひ」（支考「今宵賦」―『続猿蓑』上―）「Sanchŭ. Yamano vchi.」（『日葡辞書』）。**○やまざと**　「山里」。既出（Ⅰ *198* 前書）。**○まんざい遅し**　「万歳遅し」。「まんざい」は、新年を祝って歌舞を演ずる門付け芸人。古くは「千秋万歳」といい、訪れた家が永く栄えるように予祝するのである。演者は多く唱門師と呼ばれた階層の人々で、各地に集落を作って住み、春毎に組になってそれぞれの檀那場を巡回した。太夫は烏帽子に素袍

のいでたちで扇を持ち、才蔵は大黒頭巾をかぶって鼓を持つ。才蔵の打つ鼓につれて太夫が舞い、共々に祝言をのべ歌をうたった。時には滑稽な問答を交すこともある。関東を廻る三河万歳、上方を廻る大和万歳が代表的で、ここは後者であろう。その伊賀の上野へ廻って来るのが遅いというのである。「千寿万歳　大和国窪田著尾両村千寿万歳両座太夫来所司庭為鼓舞」「千寿万歳幷猿舞　凡千寿万歳出自窪田・箸尾両村。此両村在南都西南相去三里許。此内有両流。則窪田・箸尾是也。窪田太夫箸尾太夫是准左部右部而称之。各参棗庭而舞」（『日次紀事』）「今世に及て、千寿万歳といふ者、和州村里より来る。唱ふる所の早歌も遥におとる祝詞也。然ば旧例によりてや、正月五日禁裏へも十二人の千寿万歳まいりて、うたひ舞侍りて、それぐの禄を賜る事なんかし。御湯殿のうへの日記にも、元亀三年正月五日、北畠のせんずまんざい三人参云々。北畠とは指南抄に、一条より北、其間三町也といへり。しかれば昔は都の内にもありし事なんかし。今の万歳と称する物は、烏帽子・素袍をきて鼓を打、早歌を唱へ、正月二日より三十日迄京都町々をありく。田舎にも所によりて正月の間ありく也。又一首、江戸万歳とて、鼓をならしめぐるもの、是は平生乞食の類ひならし」（『滑稽雑談』）「万歳を仕舞ふてうてる春田哉　昌碧」（『あら野』巻二）「麦跡の田植や遅き蛍どき　許六」（『炭俵』上）「Manzai. i, Mannen.」「Vosoi.」（『日葡辞書』）。○梅花　「梅の花」と訓む。

大意　この伊賀の山里には、万歳が来るのも遅い。梅の花盛りの今になっても、まだやって来ないことだ。

考　出光美術館蔵の真蹟懐紙の前書によって、作年次が正月を伊賀で過していた元禄四年を降らないことは確かで、『笈日記』が元禄四年に歿した落梧の撰集『瓜畠集』中の句として出しているのも、この推定を裏づける。土芳の『全伝』には、

△四未の年正月初ヨリ三月末迄。正月初ニ大津ヨリ見得テ……

云々とした記事の後にこの句を出して、「此句、橋木子ニテ会の時也」とあり、四年正月の作と見てよかろう。但し『全伝』曰人写本の句頭に「元禄元辰」とあるのは何故か、不審が残る。芭蕉はこの年正月三日付の句空宛と推定される書簡に、「五三日中伊賀旧里に引越候」と述べており、乙州の東行餞別会に出席した後間もなく、正月上旬のうちに伊賀へ帰ったらしい。橋木については、「土手の松」（Ⅲ594）の句の条参照。

この句の解釈については、「まんざい遅し」が、やって来た万歳を見て「遅し」といったのか、それとも万歳はまだ来ていないのか、また、梅の花は咲いているのかいないのか、「遅し」は万歳だけにかかるのか、或いは梅の花も遅いというのか等、いろいろ問題があって諸説区々である。土芳の『三冊子』には、

発句の事は、行て帰る心の味也。たとへば、山里は万歳遅し梅の花といふ類也。山里は万歳おそしといゝはなして、梅は咲りといふ心のごとくに、行てかへるの心、発句也。山里は万歳の遅といふ斗のひとへ(一重)は平句の位也。

（わすれみづ）

とあって、「いゝはなして、梅は咲りといふ心」というあたりの書きぶりを見ると、土芳は「梅の花は咲いたが、万歳はまだ来ない」と解していたように思われる。古注では、

山里は都方より雪も遅く解て、梅の花の盛りも二月かけてなるに、それにもいまだ万歳は来らずとなるべし。遅し、働き考ふべし。（東海呑吐『芭蕉句解』）

山家の幽棲、梅も遅し。時過て万歳のめぐり来るも又遅し。句意おのづから閑なり。（蚕臥『芭蕉新巻』）

等、万歳は来ていないと取るものが多く、「松竹にこそ音づるゝものを、梅の門ゝ舞あるくふぜい、また風流。遅しの語、上下を鎖して、此花の今を盛なる暖和の光景眼中にあり」（杜哉『芭蕉翁発句集蒙引』）のように、両者とも眼前と解するのは寧ろ珍しい。近代に入ると、

万歳は年頭に来るもので誰れも知つてゐるもの、其の万歳は都の方へ先づ行くから山里では万歳の来るのがおそい、其の来た時は丁度梅が満開であつた、即ち梅が咲いてゐる時に恰かも万歳が来たといふ実況を句にしたのであらう。（内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈』）

柴今曰　菱花君は、梅が咲いたが万歳はまだ来ぬ云々と云はれたが、私は万歳が来た処を詠んだものだと思ふ、万歳と云ふものは大概年頭に限つて出て来るのであるが、山里はよろず物不自由に、梅の花の咲く頃漸く万歳も

見えると云ふ意であらう、真率な客観句で、まづ佳句の類である。（『芭蕉句集講義』）

というような説が主流になる。万歳が願望であるよりも、現前の写生であった方が良いという、客観句を尊ぶ風潮が然らしめたのであろう。しかし私は、万歳がやって来ないとする尾形仂氏の『松尾芭蕉』の説を確説と考える。氏は先ず梅の花について、

俳席の約束の上からいえば、一句はおそらく橋木亭の床に活けられた、あるいは庭に咲き匂っている梅の花を題としての挨拶であるべく、これを「遅し」の措辞に引かされて、咲くに遅い山国では梅もまだ固い蕾をほころばせていないと取ることは、理屈としては考え得ても、俳諧の鑑賞としては成り立たない。（『松尾芭蕉』）

と前提して、万歳に関しては次のように述べられた。

……「遅し」の「し」を切れ字とした一句の構造と、「梅の花」と体言をもって強く言い切った座五のひびきに注目すれば、答えはおのずから明らかだといわなければならない。……この「伊陽山中」「山里」の俳席では、梅はすでに清香を放って、春の到来を告げているのだ。その眼前の春色を愛ずる心を、「梅の花」と強く体言止めで言い切ることによって表わした座五のひびきと対照するなら、「し」の切れ字によってこれと対置された初五・中七の世界は、まだやって来ない万歳に対して、春のことぶれを待望する心をのべたものでなければならぬだろう。「梅は咲いたが、万歳法師はまだかいナ」である。……いわゆる竪題としてよみ古された「梅の花」に対して、その連想の枠を飛び抜け、「万歳」を拉しきたってこれに配したのは、奇想天外の〝俳諧〟というべきだろう。これを当座の嘱目から得たものと解しては、作者の苦心は報われない。松の内を過ぎても万歳がやって来ないことに注目したところにはまた、春のことぶれへの待望とともに、文華至ること遅き山里の質朴清楚を愛ずる心持がはたらいている。春を告げて咲き匂う梅花を、その都塵を絶した清楚な雰囲気の中でとらえ、清浄境の象徴としたところに、俳席の挨拶としての〝俳諧〟があった。（『松尾芭蕉』）

右の解釈鑑賞は、間然するところのない優れた見方と思われる。安東次男氏も、梅は現前の物なのに対して万歳は来ていないと解し、「遅れたけれど来たと告げるつもりなら「に万歳遅し」、「の万歳遅し」というもっと適切な遣方がある」（『芭蕉発句新注』）と述べられたのも参考になる。

『三冊子』にいう「発句の事は、行て帰る心の味也」とは、この句に当て嵌めた場合どういうことか。これについても、尾形氏と加藤楸邨氏の丁寧な解説があるので、引用しておこう。

……発句においては、心の動きが一つの方向へ向かって流れてゆくだけでなく、また逆の方向へ流れ帰って来る。その二つの流れの交響するところに発句の世界が成立するというのである。

「山里は万歳遅し」と、切れ字によって強く言い切った余響が、万歳の遅いのに対して「梅の花」はすでに咲いて春を告げているのにというイメージを喚起する。それが「行く」ほうである。逆に、「梅の花」という体言止めの強い言い切りによって、春告草としての梅の清香は、上五の「山里」を初春の陽光の中に包みこんで、万歳が年頭より町々を祝い歩く都の「花の春」のイメージを喚びさまし、山里に春のことぶれを待望する気持をかきたてる。これがつまり「帰る」である。意識がその「行き」と「帰り」の二つの路線を反復往反し、二つの世界が交響するところに、その余情として、山里の初春の清楚な風趣がそぞろに浮かび上がってくる。

切れ字をもって切断することのない平句では、たとえば「万歳遅き山里の梅」といった場合、意識は「行き」だけの片道の単線運行しかしない。共鳴音をもつことがないのである。それは付句を得ることによって、はじめて「帰り」との交響をとげることができる。（『松尾芭蕉』）

……「山里は都とちがって万歳の廻ってくることも遅いことよ」と心を万歳の来方に向けて——つまり「行きて」——そこでうち断っておいて、「梅の花はこんなに咲いているのに」と心を伊賀山中のことに戻す——つまり「帰る」——という発想上の屈折作用を指しているのであろう。……これは一種の重層的構造の必要を説いた

ものというべきである。(『芭蕉全句』)

要するに、この句の場合、上五・中七の想像的世界と、下五の現実の春光とが対置されることによって生ずるイメージの交流・交響を、発句の生命と観じているのであった。芭蕉は一般的なこととして説き、土芳は「山里は」の句を好箇の例証と見て引合に出したのである。土芳は取合わせの説にも触れているけれども、取合わせは複数の題材の配合のことであって、それを持ち出しては、却って事の筋道が不透明になる嫌いがあろう。

651 月待や梅かたげ行小山ぶし (蕉翁句集草稿)

蕉翁句集

春季(梅)。

語釈 ○**月待** 「ツキマチ」。月の出を待って拝む民俗行事。多くは講を結び、当番の家に仲間が集まって、念仏を唱えたり、飲食したりしながら語り合う。毎月行う所、正月・五月・九月に限る所などあり、二夜待・三夜待・お十八夜・十九夜講等がある。もとは信仰行事で、僧や陰陽師を招いて読経や祈禱をさせることもあったが、次第に遊興化した。「なれぬ姫にはかくす内証　沽圃　月待に傍輩衆のうちそろひ　馬莧」(『続猿蓑』上)「**Tçuqimachi.**」(『日葡辞書』)。○**梅かたげ行小山ぶし** 「梅担(うめかた)げ行(ゆ)く小山伏(こやまぶし)」。「小山ぶし」は、年少の修験者。「かたぐ」は「肩」を動詞化した語で、肩にかつぐこと。小山伏が梅花一枝を肩にして歩んで行くさまである。「下ばかまのわかい者かねばこあまたかたげさせ」(『夕霧阿波鳴渡』下、あひの山)「山から下る小山伏　腰に螺手には珠数　御客僧受給ふ　柴垣越に物云ふ」(狂言歌謡、鷺小舞、山から下る)「麦の葉に慰行や小山伏　才麿」(『陸奥鵆』二)「**Catague**, uru, eta.」「**Yamabuxi.**」(『日葡辞書』)。

大意 月待の楽しい席。あの梅の花の一枝を肩にして行く若い山伏も、何処かの月待に招かれて行くのだろう。

考 土芳の『蕉翁全伝』元禄四年の条にこの句を挙げて、「此句ハ正月卓袋ニテ月待の時の句也」とあり、『蕉翁句集草稿』にも「此句にて卓袋宅にて哥仙有」と見える。これらは信じ得る所伝なので、元禄四年正月伊賀上野の貝増

卓袋亭で成った句と認められよう。卓袋、名は市兵衛、富裕な絹糸商で、芭蕉の縁辺の人の世話などもしており、親交があった。宝永三（一七〇六）年八月十四日歿、享年四十八。なお、この時の歌仙は伝わらない。

井本農一博士は、「今夜は月待の夜である。（私が卓袋さんの家に呼ばれて行く途中）小山伏が、これも私同様どこかへ招かれて行く途中なのであろう、大きな梅の枝を肩にかついで行くのに出会った」と解し、

月を待ちながら雑談をしていると、向こうの方を小山伏が通るととる説もあるが、月の出前の暗い時、こちらは家の中にいて（太陽暦二月中旬ごろだからまだ寒い）、山伏が梅の枝をかついで通るのが見えるというのは不自然である。卓袋の家は相当の商家であるから、座敷の向こうがすぐ道路ということもあるまい。また、「月待」と「梅かたげ行小山伏」との直接関係を否定して、ただ情景の写生ととる説もあるが、少しく近代的解釈に過ぎはしないか。（『日本古典文学全集・松尾芭蕉集』）

と精しく見ておられる。単なる写生句ではなく、俳席の挨拶句であることは明らかで、所説一々尤もではあるが、挨拶句に、来る途中出会った小山伏のさまを詠むというのも、そぐわない感じが強い。まだ暗くならないうちに月待の席について、やはり其処から障子の隙間などを通して小山伏が見えたのであろう。

若い山伏は修行の日も浅く、劫を積んだ山伏の、人を人とも思わぬ剛強な感じには程遠い。梅の枝を担げた姿は、そういう気分にぴったりなので、まだ浅いながらも春の長閑な趣も漂う。如何にもくつろいだ暢びやかな調子で情景が的確に描かれ、故郷の人々の温かいもてなしを喜ぶ芭蕉の気持があらわれた佳い句である。

652　不性さやかき起されし春の雨　（猿蓑）

泊船集・四山集・蕉翁句集

不性さや抱起さるゝ春の雨　（枇杷園随筆）

春季（春の雨）。

語釈　**○不性さや**　「不性さ」は、身体を動かすのが懶いさま。「無性」「不精」などとも書き、身綺麗にしていない意味にもなる。「や」は詠嘆の切字。「此男ぶしやうなりときゝて、つれなくやとはざりつゝ」（『仁勢物語』上）「Buxŏ. Xŏ naxi.」「Buxŏsa.」（『日葡辞書』）。**○かき起されし春の雨**　「掻き起されし春の雨」。「かき起す」は、臥している人を抱き起すこと。戸外では春の雨の降っている時に、寝ていて起されたのである。土芳の『三冊子』には、「春雨はをやみなくいつまでもふりつゞく様にする。三月をいふ。二月すゑよりも用る也。正月・二月はじめを春の雨と也」（わすれみづ）として、「春雨」と「春の雨」に使い分けがあるようにいうけれども、この句の場合など「春雨」と同じ趣であって、「春の雨」に格別の意味があるとは思われない。「この御かたはらの人をかきおこさんとすと見給ふ」（『源氏物語』夕顔）「物よはき草の座とりや春の雨　荊口」（『続猿蓑』下）「Neta fitouo caqivocosu.」（『日葡辞書』）。

大意　春雨の降る中を寝ていて、抱え起されてしまった。何と不精なことよ。

考　土芳の『全伝』元禄四年の条に「あが坂の庵ニ在□。初の庵の時也」としており、竹人の『全伝』同年の条にも「赤坂の庵にて」（伊賀上野赤坂町なる兄半左衛門の家にあった庵を指す）として出している。板本としては『猿蓑』初出であるから、元禄四年春伊賀での作と認められよう。士朗の『枇杷園随筆』（文化七年刊）には、二月廿二日付の珍夕宛芭蕉書簡中の句として紹介し、「右真蹟三河都築和楽にあり」としている。若し書写に誤りがなければ、二月二十二日までに中七を「抱起さるゝ」とした初案が成り、それを『猿蓑』に収めるに当って改案したものと思われる。

句の内容は、

ふせらば物ぐさき也。春雨ふりていと長閑なる遅日、あまり久しく寝る事よと、友など来りてむりに引起すさま也。只何となく春雨のつれぐを、よくいひ述たるなり。（東海呑吐『芭蕉句解』）

と解してよい。「かき起されし春の雨」は、言葉つづきとしては理に合わないが、「不性さや」と初五に切字を置いた

為に、中七で切ると三段切れになるので斯うならざるを得ない。「かき起されし」と特に過去にしたのも、この方が良いことは初案の「抱起さるゝ」と比べて見れば直ぐ分ることである。春もやや闌けて、降るとも見えぬ春雨が庭面に煙っている。何となくけだるくて、何時までも床の中でうつらうつらしていると、もう好い加減に起きなさいと掻き起されたというので、「不性さや」という詠嘆が春らしい懶さをよくあらわし、「かき起されし」も、身に添えた人の手の感触まで伝わって来るようである。但し、この感覚を柔媚な春情のように取るのは行き過ぎであろう。要は故郷の気の置けない人々に囲まれたくつろぎと、暖かくなって来る季節感の複合した味わいである。山本健吉氏は、冒頭の「不性さや」が、大胆に、断定的に言い下しているのが面白く、形から言えば下の七・五は、「不性さ」の具象的なリフレーンである。……春雨の感触を捉えた句として、「最前に起きてもよきを春の雨」（召波）と似ていて、いっそう表現に深みがある。（『芭蕉その鑑賞と批評』）と評しておられる。

653　山吹や笠に指べき枝の形ﾘ　（蕉翁句集）

蕉翁句集草稿

春季（山吹）。

語釈　○**山吹**　春の季語。既出（Ｉ*137*、Ⅱ*366*）。○**笠に指べき枝の形ﾘ**　「笠(かさ)に指(さ)すべき枝(えだ)の形(な)ﾘ」。笠の飾りに挿(さ)すことも出来そうな枝の形を賞めたのである。『蕉翁句集草稿』は「笠にさすべき」と仮名書きになっている。「かざしにさせる」（Ｉ*133*）参照。「あやめさす軒さへよそのついで哉　荷兮」（『あら野』巻七）「船形ﾘの雲しばらくやほしの影　東潮」（『続猿蓑』下）「Nari.」（『日葡辞書』）。

大意　山吹の花が見事だ。笠に挿したら丁度良いような枝ぶりをしている。

考　土芳の『蕉翁全伝』元禄四年の条に前の「不性さや」の句と共に掲げ、「此山吹に一折有。人のフト参リタル

時催サレシ也。二句トモニあか坂の庵ニ在□。初の庵の時也」としており、『蕉翁句集草稿』にも「此句にて赤坂庵に巻半有」と見える。元禄四年春の郷里滞在中、兄半左衛門の家の敷地内にあった草庵で成った句であろう。資料としては土芳自筆の『草稿』が最も古いが、下五が「枝の□」と蝕損の為に欠けているので、底本は『蕉翁句集』に拠った。発句に続く半歌仙は伝わらない。枝もたわわに黄金色の花をつけた庭前の山吹を賞めた即興句である。実際にそうするかどうかは兎も角、

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉　　芭蕉
たそやとばしるかさの山茶花　　野水（『冬の日』）

にも通ずる風狂味が感ぜられる。

654　年〻や櫻をこやす花のちり　（蕉翁句集草稿）

春季（桜の花のちり）。

語釈　○**年〻**「トシドシ」。毎年毎年中七以下の事が繰返されることをいう。「師走比丘尼の諷の寒さよ　孤屋　餅搗の臼を年〻買かえて　利牛」（『炭俵』上）「Toxidoxi.」（『日葡辞書』）。○**桜をこやす花のちり**　「桜を肥やす花の塵」。「花のちり」は、桜の花びらが散り敷いて地上にあるものをいう。「こやす」は、自動詞「肥ゆ」に対する他動詞。肥料を意味する「こやし」は、この連用形が名詞化したものである。落花が根に帰って桜の木を肥らせる、の意。「大かた田地五段ばかりはよく肥すべし」（『農業全書』巻二）「花の塵酒の琥珀に吸せけり　几董」（『晋明集二稿』）「Coyaxi, su.」「Chiri.」（『日葡辞書』）。

大意　見事な花だ。毎年毎年花が咲いては散って塵となり、根に帰ってこの桜を育てて来たのですね。

『蕉翁句集』に「万乎別墅」、『花のちり』（撰者未詳、寛政五年刊）に「糸ざくらのもとにて」と前書がある。土芳の

『全伝』元禄四年の条にこの句を掲げて「此句万乎別墅ノ桜見、三月廿三日の事也。一折アリ」とあり、『蕉翁句集草稿』にも「此句にて万乎別墅の巻有」と見える。元禄四年三月伊賀の上野の蕉門万乎の別墅で半歌仙の発句として詠まれた句であった。万乎は大坂屋次郎太夫といった上野の富商で、この時の半歌仙は今伝わらない。

これは「花のちり」で落花の句である。繽紛たる花吹雪の趣を賞して、万乎への挨拶としたのであろう。その表現として、花が散って根に帰り、桜の木を肥やすといったところが独得である。ここには造化の営為に眼を凝らす作者の思いが感ぜられる。花は散ってもそれで終りではなく、根に帰って木を肥やしては又花を咲かす。その大いなる循環を「年〻や」と詠嘆しているのである。こうした発想には、遥かに「花は根に鳥はふるすにかへるなり春のとまりをしる人ぞなき」（『千載集』巻二、崇徳院）という古歌が響いていようし、或いは伊勢を度々訪れた芭蕉は、「花は散りても春は咲く　鳥は古巣に帰れども　行きて帰らぬ死出の旅」の間の山節を連想したかも知れない。但しこの句の持つ気分は寂滅為楽の無常観とは別の物である。

655　呑あけて花生にせん二升樽　（蕉翁句集草稿）

蕉翁句集

春季（花）。

語釈　○**呑あけて**　「呑（の）み明（あ）けて」。樽の酒を呑み尽して空にして。「永日に手水の水やあけざらん　春にふさがるたつのくちとゐ　勝乗」（『鷹筑波』巻四）「AQE, uru, eta. …… Vtçuamonouo aquru.」（『日葡辞書』）。○**花生**　「ハナイケ」。水を入れて花を生ける器。陶製、金属製、竹製等、いろいろある。「おられても又花いけの蓮哉（はちす）　茂昭」（『鷹筑波』巻四）「Fanaiqe」（『日葡辞書』）。○**二升樽**　「ニショウダル」。二升（約三・六リットル）入りの酒樽。樽としてはそれ程大きなものではない。「襟に高尾が片袖をとくばせを　あだ人と樽を棺に呑ほさん　重五」（『冬の日』）「Ixxô. …… Nixô.」「Taru.」（『日葡辞書』）。

大意 恰好の到来物だ。この二升樽の酒を呑み尽して空にして、折柄の桜の花生にしようじゃないか。

考 土芳の『全伝』元禄四年の条にこの句を掲げて、「此句ハ尾張ノ人ノ方ヨリ濃酒一樽ニ木曾ノうど・茶一種ヲ得ラレシヲひろむるトテ、門人多ク集テテ(ママ)時也。」とあり、『蕉翁句集草稿』にも「此句にて赤坂庵に巻有」と見える。元禄四年春伊賀滞在中の作としてよかろう。これを発句とした俳諧は今伝わらない。

名古屋の野水あたりから、蔵出しの原酒を贈られたらしく、珍しくはしゃいで門人達を呼び集めた様子が『全伝』の記事から窺われる。贈り主への挨拶というより、門人達に呼び掛けた趣で、恐らくは花見時だったのであろう。そう見れば、花見酒を呑んでしまった後、樽を「花生」にしようというのは、桜の花の枝を生けようとすることになり、この「花生」は単なる器物にとどまらず、その頃の季節感を持つのである。趣向の背景として、古注以来「酒瓶今已作二花瓶一」という杜詩の一節が引かれるが、『漢詩大観』を引いてもこの詩句は出て来ない。古詩を踏まえたかどうかは、ここでは未詳としておく。兎に角蕪村のような磊落ぶりを見るべき句である。

656 山吹や宇治の焙爐のにほふ時　（真蹟自画賛）

猿蓑・泊船集・蕉翁句集・蕉翁全伝附録

春季（山吹）。

語釈 ○**宇治の焙炉**　「宇治(うぢ)」は京都府南部、今の宇治市の地。「宇治茶」で知られる茶の産地である。「焙炉(ほいろ)」は、茶の葉を摘んで蒸し上げた後に炭火で乾燥させる乾燥機。蒸籠で葉を蒸した後、昔は焙炉の上であぶりながら、手揉みで仕上げるものであった。「ホイ」は「焙」の唐宋音。「此月製レ茶家々蒸レ茶且択レ葉。……依二茶葉之嫩老一蒸レ之有二緩急一。……而蒸終則冷レ之陰乾而焙レ之。其法文火上蓋レ灰隔レ紙焙レ之。而択二葉之善悪一。択レ葉村婦之老少各々行二茶人家一自二早朝一及レ暮其料以レ米償レ之。凡製レ茶有二前後之次第一。故謂二摘茶時蒸茶時焙炉時択茶時一」（『日次紀事』四月条）「龍焙は、天子へ参る焙炉なる

程に龍といふか」（『玉塵抄』二十六）「宇治へまかりし時／つまぬ茶に火いろをかくる蛍哉　政公」（『毛吹草』巻五）「Foiro.」（『日葡辞書』）。○にほふ　「匂ふ」。茶の香りがあたりに漂うさまである。

大意　宇治では焙炉が茶の香りを漂わす頃、山吹の花は今や盛りであることよ。

考　『猿蓑』と『蕉翁句集』に「画讃」と前書がある。柿衛文庫現蔵の山吹の画に賛した幅は、花をつけた山吹の一枝が画面の左から右へ咲き垂れる墨絵で、「芭蕉自画」と署してあり、『蕉翁全伝附録』に臨摸したものの原物である。筆蹟の特色からしても、元禄三、四年の春伊賀で書かれ、地元に伝わっていたのであろう。『泊船集』許六書入れには「画賛、黄逸家珍」とある。

山吹の花の画なので、先ず「山吹や」と打ち出し、「山吹の瀬」などという名所もある宇治へ連想を展開させている。茶所の宇治を背景に「焙炉」の匂いを案じたところが、生活感のある俳諧の新境地であった。「山吹は花の名を以て茶の銘を兼ね、一転して茶といふ意をも有」（露伴『評釈猿蓑』）するのではあるが、茶と山吹とのつながりは「理を以て解スべからず」（空然『猿みのさがし』）で、潁原退蔵博士が、

……季節の取合せであるが、山吹のあの真黄な色と、かんばしい茶の香とが、感覚的な強い刺戟の中で映発しあつて居る。そこには単なる二物の配合から出て、一つの統一された官能の世界が新たに創造されて居るのである。

と言われた通りである。加藤楸邨氏の精しい鑑賞も引いておこう。

芭蕉の詩人的な直覚の働きが見られる。（『芭蕉俳句新講』）

……一読すこぶるいきいきと迫つて来る生動感は単なる画讃とは思はれぬものがある。これはどこから来るものであらうか。

私はやはり、山吹を眼前にしてゐるやうな、又、焙炉の茶の香を鼻にしてゐるやうな、さういふ追体験をまざまざと生かすことの出来る芭蕉の稟質と、その用意とを考へない訳にはゆかぬ。山吹の晩春初夏らしい新鮮な感

じと、焙炉の茶の香の感じとが、実に微妙に融けあつてこの生動感をもたらしてくることに驚く。山吹だけでもない、茶の香だけでもない、第三の新しい感じが漂つてくるのである。いはば、山吹の感じと、茶の香との間には、芭蕉の連句に於けるあの微妙な付味、匂付の味が漂つてゐることを感ずる。前句だけにもなく、付句だけにもなかつた第三の世界が二句付合の間に醱酵するやうに、この発句でも、山吹と茶の香との間に第三の世界が浮き上つてくる。そして、この第三の世界を生み出した山吹と茶の香とが、その新しい世界の中に抱摂せられ、融解せられて渾然たる幽遠な味のみが生動して来る。しかも、この句の組立は実に簡単であつて特に工夫した仕掛や言ひ廻しが見出されぬ。いはば二つの感覚を、そのまゝ並べただけの如くにも見えるのである。私はかうした味を生み出しながら、これまでに簡潔に切りつめて、これまで飾り気なく詞を生かしたことに驚くのである。俳句に畏敬を覚えるとすれば、描写の手腕や、興じ方の奇警さではない。常凡の世界の中に、からまで物の本情に感合してゆき、からまでそれを消し去つて第三の新しい世界を感じとるところの、ずつと深い才能に驚くのである。……悲しいかな、現代俳句は、時代の根本的な本情を、かういふ深処に於て感合把握するまでには至つてゐない。……勿論芭蕉の取合といふやうなことだけをいふのではない。それはすでに古い世界である。たゞ、この古さの中にだけあつて、実は古さの故に現代には忘れられ、その古さの故にのみ保存されてゐた日本的な深みを、私共は自分のものにしたいと念ずるのである。（『芭蕉講座』発句篇(下)）

此処に描かれたものは、表面宇治の地方色であるけれども、山吹と茶の配合によって言い難い品位ある官能の世界が発現し、春色の本情が鮮やかに把握されている。一面また、この時期の「軽み」の一成果としても注目したい。

657 てふの羽の幾度越る塀のやね　（芭蕉句選拾遺）

乍木亭

蟬の葉の幾度越る塀のやね（蕉翁句集）

春季（てふ）。

語釈 ○てふの羽「蝶(てふ)の羽(は)」。「てふ」は、春の季語。「羽」は、「はね」（Ⅰ242）に同じ。「蝶の翅」（Ⅰ192）参照。「雛うる翁道たづねけり　视三　蝶の羽や赤き袂に狂ふらん　北枝」（『金蘭集』）「Fa.」（『日葡辞書』）。○幾度越る「幾度越(いくたびこ)ゆる」。幾度も幾度も越えている、というより、「幾度越ゆることぞ」と疑問の意に解した方がよい。もとより蝶が度々越えているさまを見ていて、疑問の表現にしたのであって、その方が句切れもはっきりする。「狗ほえかゝるゆふだちの簑　芭蕉　ゆく翅いくたび罠のにくからん素英」（『繫橋』）「足をそろへて、しきみをゆらりとこゆるを見ては、これはいさめる馬なりとて、鞍を置かへさせけり」（『徒然草』百八十五段）「Icutabi.」（『日葡辞書』）。○塀のやね「塀の屋根(やね)」。築地(ついじ)塀（土塀）の屋根のあるものをいうのであろう。武家屋敷のさまである。「露おきて月入あとや塀のやね　馬莧」（『続猿蓑』下）「Fei.」「Yane.」（『日葡辞書』）。

大意 先程から見ていると、蝶が羽根をひらひらさせて、お屋敷の塀の屋根を、何度越えたことでしょう。

考 『蕉翁句集』の初五「蟬の葉の」は意を成さないが、「乍木亭」という前書は拠るところ有るように思われる。乍木(さくぼく)は伊賀上野の人原田覚左衛門の俳号と伝えられるが、元禄三年二月、百歳・式之・槐市ら上野の武家を主な連衆とした歌仙篙の笠の巻（Ⅲ584参照）の脇を賦しているから、恐らく武士だったのであろう。『蕉翁句集』には「後見出て句を記ス。年号不知」として追加した中に録してあり、伊賀での春の句とすれば、元禄四年春以前の作と推定されるだけである。

春闌わな武家屋敷の土塀をめぐらした中に、主客が対座して閑談に耽っている。芭蕉の目は先刻からひらひらと庭に舞う蝶の姿に注がれているのだが、蝶は土塀の屋根を越えて外へ舞い出たり、また戻って来たり、春の暖かな陽気に時を得顔である。「幾度越る」という表現で、長閑な時の流れが思われ、ささやかな物を注視する作者の視線も感ぜられよう。

この句は、時間的に長い景情を詠んで居るのと、作者の注意を飽く迄蝶々の羽に集中せしめたところに特色がある。単に蝶々が塀を飛び越えるといふだけでは、平凡になつてしまうが（ママ）、『蝶の羽』と、特別にそこに注意を集中したので、あの弱々しい、大きい羽（その身体に比べて）で、フワ〱と板塀の屋根を飛び越える有様がはっきり印象される。いかにも春日悠々たる趣をよく捉へた佳句である。（『芭蕉俳句新釈』）

という半田良平氏の鑑賞は、よく肯綮に中っている。「羽」は、あえかな蝶の舞姿を描く要の言葉なのである。

之道萬句

658　暫は花の上なる月夜かな（真蹟短冊）

しばらくは花の上にも月夜哉（河内羽二重）

しばらくは花の上行月夜哉（しらぬ翁）

初蟬・喪の名残・泊船集・蕉翁句集

春季（花）。

語釈　**○之道万句**　「シダウマンク」。「之道」は、諷竹の前号。「東湖」（Ⅲ*606*）参照。「万句」は、宗匠披露の為の万句興行をいう。百韻を百巻詠み重ねるのが万句であるが、宗匠になるに当って多くの俳人に参加を請い、何日にもわたって興行する規模の大きいものである。「桃青万句に」（『富士石』巻一、等躬発句「三吉野や」前書）。**○暫は**　「暫くは」。既出（Ⅲ*464*）。**○花の上なる月夜**　「花の上なる月夜」。空を渡る月が花の上にさしかかって、光が花を照らす華やかな光景をいう。「月夜」は、「夜」の意は稀薄で、月そのもの又は月の光を意味している。「ツクヨ」とも訓めるが、ここは「ツキヨ」でよいであろう。「かる〲と笹のうへゆく月夜哉　十二歳梅舌」（『あら野』巻一）「Tçuqiyo.」（『日葡辞書』）。

大意　夜空を渡る月が、今や花にさしかかって、暫くの間は盛りの花の上を照らしている。何と華やかな景色だろう。

考　真蹟短冊は、尾形仂氏が昭和四年五月の京都市六角荒川家売立目録から紹介されたもの（「俳林逍遊」―栗山理一博士編『芭蕉・蕪村・一茶』―）。板本の初出は『河内羽二重』（幸賢撰、元禄四年十一月成）である。真蹟の前書は信ずべきものと思われ、芭蕉と之道との交流は元禄三年六月に始まるので、この句は恐らく元禄四年春、之道が大坂で宗匠として披露目をする時に贈られた祝賀の句と推定される。万句の発句だから当季とは限らないが、一応春の成立と見て此処に配しておく。『河内羽二重』の句形は初出ながら、『しらぬ翁』（遠舟撰、元禄六年刊）の句形と共に誤伝の疑いが濃く、蕉門の諸集に載る句形を信ずべきであろう。華雀の『芭蕉句選』に「しばらくは花の色なる月夜かな」とあるのも杜撰と思われる。『蕉翁句集』が年代を貞享五年として吉野での作中に入れているのは、句柄からの推定に過ぎまい。

盛りの花を照らす朧々たる春の月――、如何にも華やかな夜桜の景を描いて、之道への祝意を表したのである。「暫は」は、やがて傾く月を惜しむ気持と見たい。ここに無常観を見るのは古注によくある説であるが、余りそれを強調するのは、この句に相応しくないと思う。また、「地上は花の影で暗いが、花の上は其花の紅と相映じて、キラ〳〵と光を放つて居る、即ち花の上の月夜である」（『芭蕉句集講義』牧野望東）と解するのは、何やら理に落ちてよろしくない。

……芭蕉は、春の月夜の趣を、桜の花といふ一つの景物に於て捉へた。しかし、それだけでは極めて平凡な情趣に過ぎない。彼はそれで、こゝ暫くの間は、『花の上なる月夜』だといふ特殊な表現によつて、爛漫と咲き盛つて居る桜の花に、朧ろ月がぼんやり光を投げて居る春の夜の情景を描いたのである。全体の発想法に、どこか観念的の臭ひがまつはつて居るが、作者が、さういふ光景を、より高い場所から瞰望したか、若しくは少し離れた場所から遠望して詠んだ句だと観れば、その弊は大に済（すく）はれるであらう。表現に芭蕉ならではと思はせる特殊な味ひがあつて、而もそれが毫もこせついて居ず、いかにも、おほらかな濶々（ひろぐ）とした感じを出して居る点がいゝ。かういふ権道（けんだう）を行つたやうな句も亦捨て難い。（『芭蕉俳句新釈』）

という半田良平氏の鑑賞が、よく行き届いている。観念的な発想を感じさせるのは、「暫は花の上なる」と妙に限定するような表現から来るのであって、恐らく芭蕉は景を眼前にしているのでなく、そういう景をイメージして賀句として作った結果であろう。「之道万句」の際の句ということがまだ知られず、吉野あたりでの句と思われていた時代に、こうした観念性に着目したのは炯眼といわねばならない。しかも、この句はそのような発想をとりながら、如何にも悠揚としたリズムに乗せて、花盛りの夜景の気分を遺憾なく言い取っている。その点をこそ評価すべき句なのである。加藤楸邨氏も、

花と月との映発しあった春の夜の情をつかんで的確な作品である。明るすぎるくらい明るい情景をうたって、その中に一抹の水のような寂寥をにじませているのは、「しばらくは」が、月と花との映りあう美しさの中に、移ろうものの姿を言いとめているからであろう。(『芭蕉全句』)

と述べておられる。

659 獨あま藁屋すげなし白つゝじ (真蹟草稿)

春季(白つゝじ)。

語釈 ○**独あま** 「独り尼」。同居の尼など居ない独り住みの尼をいう。「あま」は既出(Ⅲ580)。「冬ざれの独轆轤やをのゝおく 津島一笑」(『あら野』巻七)。○**藁屋** 「ワラヤ」。藁葺きの粗末な家。「よの中はとてもかくてもおなじことみやもわらやもはてしなければ」(『新古今集』巻十八、蟬丸。『和漢朗詠集』にも所出)「Varaya.」(『日葡辞書』)。○**すげなし** 「素気無し」。そっけない、よそよそしい。「はてさていかにのまぬとて、あまりすげない、一つのみや」(『堀川波鼓』上)「Suguenai fito.」(『日葡辞書』)。○**白つゝじ** 「白躑躅」。白い花をつけるつつじ。春の季語である。既出(Ⅰ32、233)。襲の色目としての「白つゝじ」(表紅、裏紫)は、ここには

関係あるまい。「白つゝじまねくやう也角櫓　嵐雪」（『笈日記』）。

大意 独り住みの尼を藁屋に訪ねたが、応対がよそよそしい。庭には白つつじが咲いている。

考 京都山田氏蔵の真蹟草稿が『芭蕉図録』解説に引用されているが、原物は未紹介である。元禄三、四年四月初めの作と推定される「明ぼのやまだ朔日にほとゝぎす」の句と共に書かれているので、この句も元禄三、四年春の作と見てよかろう。草稿には「妻こふて根笹かづくや」という発句らしい未成の句案も記されている。板本初出は『芭蕉句選拾遺』である。

「独あま藁屋」という言葉続きが不確かで、推敲の余地を残しているが、「独あま」の素気なさと、「白つゝじ」の寂しい感じとを匂い合わせようとした意図は分る。

当吟は白つゝじの有所有体むべ也。尼の藁家すげなしと見立給ふ。華の淋しげ成こそ似合しけれ。（鴫沙『過去種』）という解で大体よいが、単に尼の住む藁屋のたたずまいを傍観的に叙したとするより、作者が尼を訪ねて素気ない扱いを受けたと見た方が面白く、「すげなし」が一層はたらくと思う。

田家に有て

660　麦めしにやつるゝ戀か猫の妻　（猿蓑）

麦めしにやつるゝ比か猫の戀　（鎌鏡）

麦飯にやつるゝ戀か里の猫　（泊船集書入）

泊船集・蕉翁句集

春季（猫の恋）。

語釈 **○田家に有て**「田家（でんか）に有（あ）りて」。「田家」は、田舎の農家、または、都会地でない地方の田園をいう。既出（Ⅰ*40*、Ⅱ*302*）。出

典の時期からして、伊賀の上野を指すと見てよいであろう。「有」は「在」を用いるべきところ。○**麦めしにやつるゝ恋か**　「麦飯に窶るゝ恋か」。「やつるゝ」は、痩せ衰え、憔悴する意。「麦めしにやつるゝ」と「やつるゝ恋」と、「やつるゝ」を上下に働かせた。米ではなく麦飯を食わされて、しかも相手を求め歩く猫のさまの表現である。「か」は、疑問に詠嘆を含む。「むぎめし成共してておいてたもれ」（狂言「腹不切」）「御かたちいたうやせおとろへて……げにやつれ給へり」（『源氏物語』柏木）「Yatçure, ruru, eta.」（『日葡辞書』）。○**猫の妻**　既出（Ⅰ*71*）。雌猫は発情すると落着かなくなって歩きまわり、鳴き声を立てる。それを慕って雄猫が集まるのである。この時期の猫は、ろくに食事もとらない。

大意　うろつきまわるあの雌猫は、麦飯ばかり食わされた上、恋やつれしているのかなあ。

考　『猿蓑』初出の句で、元禄三、四年の春の句と推定される。『芭蕉句選』に中七が「やつるゝ恋や」とあるのも含めて、『鏽鏡』（舎羅撰、正徳三年刊）以下の異形は、何れも杜撰とおぼしく、信じ難い。

相手を求めてうろつく恋猫は、ただでさえやつれる。それを「麦めしに」といって、貧寒な田舎を背景に浮き立たせたところ、巧みな表現である。「猫の妻の麦飯が恋しい為めにやつれて居るのであらう……麦飯に恋ふると云ふたのが、芭蕉の洒落である」（『芭蕉句集講義』星野麦人）と解しては、文脈にも即せず、季題も生かされない。これが猫の恋の句であることは明らかだからである。興じ方がやや露わではあるが、根本には生き物の命に対するいとしみの情があろう。「痩ながらわりなき菊のつぼみ哉」（Ⅱ*308*）に相通ずる気持が、底に動いていると思う。

661　**闇の夜や巣をまどはしてなく鵆**　（猿蓑）

陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集

春季（鳥の巣）。

語釈　○**闇の夜**　「闇の夜」。既出（Ⅰ*141*）。○**巣をまどはしてなく鵆**　「巣を惑はして鳴く鵆」。巣を見失い、迷って千鳥が鳴くと思い遣った表現で、「人が死ぬ」を「人を死なす」ともいうように、「惑ふ」（迷ふ）ことを他動態でいったのである。「鳥の巣」は春

季。既出（Ⅱ282、Ⅰ224）。「鵆」も既出（Ⅰ208）。「入りぬればかげものこらぬ山のはにやどまどはしてなげくたび人」（『宇津保物語』俊蔭）「Madouaxi, su, aita.」（『日葡辞書』）。

大意　夜の闇に千鳥の鳴く音が聞える。あれはきっと巣を見失い、迷って鳴いているのだ。

考　『猿蓑』春の部に初出し、季語は鳥の巣で春季になる。「ほしざきの闇をみよとや啼ちどり」（Ⅱ315）の吟があるように、千鳥の名所としては尾張の鳴海近傍の地が考えられ、志田義秀博士の『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』のように、鳴海に重点を置いた考証もあるが、必ずしも其処に限るわけではなく、このような句は何時でも出来るであろう。ここでは元禄四年春以前の成立と見るにとどめておく。『陸奥鵆』や『蕉翁句集』に冬、『泊船集』に夏とするのは、何れも誤りに過ぎない。後代の注釈にも、「鵆」で冬とするもの、水鳥の巣で夏とするもの等があるが、『猿蓑』で春の部に入れたのは、「鳥の巣」を季題と見たこと明らかであって、それに従うのが当然である。

千鳥の巣は磯の砂をすこし窪め、小石や木屑を敷いて卵を置く。時化や洪水で巣が流されることもあるという。千鳥の声は悲しく切なげな感じのもので、闇夜にその声をきいて、巣を見失ったかと思い遣った句なのである。「千鳥は……巣をも春結ぶものとぞ。さて時節に感じてなくは冬なれど、巣を忘れて尋なくは春也。子を思ふ哀を見出給へり」（杜哉『蒙引』）と解するのが穏やかであるが、「まどはして」の表現が分りにくいのか、

闇の夜に自分の子の居る巣を、他の者に知られぬ様、即ち他より侵害されぬ様に、巣が何処にあるかを知らさぬ手段として、あちらこちらで啼いて居ると云ふ場合を詠んだ句で、惑はしては他の者を惑はしてと云ふ意味である。（『芭蕉句集講義』鈴木苔花）

といった解があり（鳴雪の『評釈』も同じ）、近時の山本健吉氏の『芭蕉全発句』も同説で、「闇だからと言って自分の巣を見失うなどということがあろうとは思えない」と述べておられる。しかし、前記の如く実際に巣が流されてしまうこともあるらしく、そうした場合親鳥が無くなった巣を求めて鳴くこともあるであろう。そうでなくとも、この

句の場合は哀切な千鳥の声をきいて思い遣るのだから、そう実際に拘泥する要もない。更に、この表現には、露伴の『評釈猿蓑』の指摘する如く、「ゆふさればさほのかはらの河ぎりに友まどはせる千鳥なくなり」（『拾遺集』巻四、紀友則）という古歌の影響も考えなければならない。「歌には友まどはせるとあるを、一転して巣をまどはしてとして、闇の夜やと置き、子を思ふ春の千鳥を詠める俳諧の働き」（露伴『評釈』）が明らかに看取されるからである。これはやはり千鳥の詠み方として新しい場であって、だからこそ『猿蓑』にも入ったのであろう。

662 おとろひや歯にくひ當てし海苔の砂　（泊船集）

己が光・今日の昔・蕉翁句集

嚙當る身のおとろひや苔（ママ）の砂　（西の雲）

歯にあたる身のおとろひや海苔の砂　（泊船集書入）

岩島苔摘（ママ）

おとろへや歯に喰あてし苔の砂　（小太郎）

春季（海苔）。

語釈 ○**おとろひ**　「衰ひ」。ここは年齢を加えて体力が衰えることをいう。動詞「おとろふ」は下二段活用で、連用形は「おとろへ」となるのが普通であるが、その変化した「おとろひ」という語も行われ、かなりの用例がある。「殿上のまじはり近き人のすゑぐ〵、世のならひとてをとろひ、あるにも甲斐なかりしに」（『好色一代女』巻一）「Votoroye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**歯にくひ当てし**　「歯に食ひ当てし」。歯に嚙み当てた、の意。「夜神楽に歯も喰しめぬ寒哉　史邦」（『続猿蓑』下）「御はのおひいづるにくひあてむとて、たかうなを、つとにぎりもちて」（『源氏物語』横笛）「**Fauo camu.**」「**Ate, tçuru, eta.**」（『日葡辞書』）。○**海苔の砂**　「海苔」は、食用にする海藻の一種。既出（Ⅱ *280*）。それに「砂」が混っているのである。「けふも亦もの拾はむとたち出る　荷兮　たまく〵砂の中の木のはし　冬文」（『あら野』員外）「**Suna.**」（『日葡辞書』）。

大意　身の衰えをしみじみ感ずることだ。海苔に混った砂を、歯にジャリッと噛み当ててしまった。

考　金沢の丿松が撰した『西の雲』（元禄四年十月跋）が最も早い資料で、その句形が恐らく初案であろう。従って元禄四年春までには初案が成っていた筈である。次いで大坂の車庸撰の『己が光』（元禄五年夏序）に「衰や歯に喰あてし海苔の砂」という改案治定形が載った。『西の雲』の中七が「身のおとろひや」であり、それを初五に移した定案形を採る『泊船集』と『今日の昔』（朱拙撰、元禄十二年刊）は「おとろひや」と仮名書きになっているので、『己が光』の「衰」も「おとろひ」と訓むのが妥当と思われる。ここでは定案の初五の最も早い仮名書きとして『泊船集』を底本とした。『蕉翁句集』は元禄五年の部に出して、「衰や」と表記している。許六の『泊船集書入』に「イ」として出した句形は、『西の雲』と基本的に同じで、推敲の過程を示すというより、初案形の誤伝と見るべきであろう。『小太郎』（全涙撰、正徳五年刊）の句形は定案の初五が標準的語形になっただけで、作者を菊阿（許六）とするのも誤り。前書の「岩島」は越後柏崎付近の地名というが、句に「海苔」が出るところから、其処の海苔摘みを題としたまでであろう。

海苔は今では四季にわたって食膳にのぼるので季感が稀薄になっているが、元来は寒中から春にかけて採取され、季語として古くは初春のものであった。ここは乾海苔か生海苔を煮たものか分らないが、中に砂がまじっていたのをジャリッと歯に噛み当てて、歯がグラついた感じがしたのであろう。山本唯一博士は『芭蕉俳句ノート』で元禄四年初頭の芭蕉書簡を引いて、旧年来の寒気が強かった為に持病の具合が良くなかったことを指摘しておられる。人生五十年の時代、四十七、八にもなれば衰老の感が身にしみることも多かったであろう。

衰老の感慨のぶるに絶たり。老ぬる人此句を吟ぜば、誰か悽くたらざらん。（杜哉『蒙引』）

というのは、この句を素直に読んだ人の標準的な感受である。初案の「噛当る身のおとろひや」では、何を噛み当てたのかが後に廻った為に印象が薄く、「噛当る」が「身のおとろひ」に直接かかるのも不自然の感を免れない。推敲

は必然だったと思われるが、改案の初五に冠せられた「おとろひや」について、単なる衰老の表白ではなく、もっと高次の抽象化されたものとする見解がある。即ち、

「衰」という言葉で示された即時的・直覚的・断定的把握が、具象的なイメージとして、細叙的に、反省的に、低声に、繰り返される。だからこれは、「若い時なら歯に食ひ当てた砂ぐらゐは、そのまゝ嚙み砕いてしまふであらうのに、今はそれほどの気力もない」（潁原退蔵）と、衰老の身を歎じているのではない。砂を歯に嚙み当てた瞬間の、即物的な感覚が、端的に「衰」そのものだと言うのである。加藤楸邨が、「あるかなきかの細かい海苔の砂がかちりと歯にあたる。ここで、全身の衰へが歯に集中して感ぜられてくるのだ」という解の方が、読みとしては深いのである。だがおそらく、「全身の衰へ」というのは言い過ぎで、「衰」という知覚だけを押出しているものと取るべきである。初案の形では、まだ衰老の詠歎であったものが、再案ではもっと乾いた表現、弱々しいくどき文句を超えた表現に達している。「衰ひや」の初五が、衰老感の肉体的諸条件を脱して、抽象化されているから、それによって「歯」の一瞬の感覚に集中した具象的イメージが、詩的真実に昇華しているのだ。「飯の砂」では駄目で、「海苔の砂」でなければ美でない。「海苔」が早春の季感を持っていることも、注意すべきである。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

という山本健吉氏の説である。しかし、「おとろひや」は右にいうが如き抽象化された「衰」そのものと感ぜられるであろうか。私は、それにしては中七以下の具象的事実が些末に過ぎて、初五を抽象的なものとする支えには不足と感ずる。やはりこの初五は、日常生活の中で偶々感ぜられた衰老のしるしへの詠嘆なのであろう。そんなに大袈裟な評価をこの句に下すのは相応しくなく、唯日常の寸感を一句とした佳章と見れば足りる。

この句の推敲に関連して、『猿蓑』巻三に収められた杉風の発句「がつくりとぬけ初る歯や秋の風」の場合を考えて見たい。この句は元禄三年九月廿五日付芭蕉宛杉風書簡には「がつくりと身の秋や歯のぬけし跡」と見え、これを

推敲して『猿蓑』に収めたものとおぼしいが、「がっくりと身の秋や」では、歯の抜けたことで気落ちして身の秋を感ずる主観ばかりが強調されて、感情が上すべりしている。その点芭蕉の海苔の句の初案「噛当る身のおとろひや」と同断であろう。『猿蓑』の句形になると、「がつくりと」は歯が脱ける瞬時の感覚をとらえた語と変り、作者の落漠とした気持は下五「秋の風」の裏にひそめられることになった。恐らくこれも芭蕉の添削であったろう。海苔の句では、「おとろひや」という主観的表白がなお残されているが、「身のおとろひや」の過剰な感傷は薄められた。その辺に、山本説のような見方が出て来る原因があるように思われる。

663　梅が香やしらゝおちくぼ京太郎　（忘梅）

韻塞稿本・泊船集書入・柿表紙・鯰橋

春季（梅が香）。

語釈　**○梅が香**　「梅が香」。「庭興／梅が香や砂利しき流す谷の奥　土芳」（『猿蓑』巻四）。**○しらゝ**　中世の御伽草子。今は散逸した。紀州の歌枕白良（Ⅱ344頁）に因む題であろう。**○おちくぼ**　「落窪」。中世の御伽草子「落窪物語」のこと。「小落窪」「落窪草子」ともいう。平安期の古物語『落窪物語』の継子いじめの話を枠組とし、観音霊験譚に展開させた物語である。**○京太郎**　「キヤウタラウ」。中世の御伽草子「京太郎物語」を指す。用明天皇が東宮時代、大宰大弐の姫にあこがれ、筑紫に下って結ばれる物語。

大意　梅が香のゆかしく漂う中、「しらゝ」「落窪」「京太郎」等の草子に読み耽る姫の姿が思われる。

考　尚白の撰した『忘梅』は、自序（実は芭蕉の代作）の日付「元録（ママ）五年孟春日」によって、同年正月に成ったものながら、撰者の生前には刊行されず、遥かに年を隔てた安永六（一七七七）年に至って蝶夢の手で刊行された。代作の事情が知られる元禄四年九月廿八日付の千那宛芭蕉書簡によれば、この頃千那や尚白との間に隔意を生じていたらし

く、且つ又その秋に撰著の内容が固まっていたとすれば、「梅が香や」の句の成立時期は元禄四年春か、それ以前ということになろう。元禄九年の『韻塞』板本にはこの句がなく、李由自筆の稿本にのみ存するという。蝶夢の『芭蕉翁発句集』等後世の書に、初五が「うめ咲や」となっているのは、その根拠を知らない。

「しらゝおちくぼ京太郎」について、古くは「しらゝ」「おちくぼ」が地名、「京太郎」は上方でいう雲の呼び名などという説もあったが、浄瑠璃の根源となった中世の語り物『浄瑠璃十二段』の姿見の段に、

よみけるさうしはどれ〳〵ぞ。げんじ・さごろも・こきん・まんえう・いせものがたり・しらゝ・おちくぼ・きやうたらう、百よでうのむしづくし、八十よでうのくさづくし、あふぎながしにすゞりわり、

云々とあることが成美の『随斎諸話』に紹介され、これが定説となった。中七以下は古い語り物の詞をそのままに、浄瑠璃姫の読んだ草子の名を列ねて、上五の「梅が香」に配したのである。高雅な梅の香りと古い草子の名の関係は、正に「匂ひ」の感合であって、その間に因果関係や理窟は一切無い。そして、おのずから軒の梅の清香の漂う窓辺に、草子を繙く美しい姫の姿が髣髴とし、「しらゝおちくぼきやうたらう」と列ねた物語の名も、快い響きを持つ。ふと脳裏に浮んだ語り物の一節を、思いつきで取り込んだに過ぎないであろうが、これを「梅が香」に配した表現効果は絶妙といってよい。山本健吉氏は、

……新春の読初め(よみぞめ)に、「草子の読初め」と言って女子は「文正の草子」を読んだが、これも深窓の乙女の草子の読初めのイメージと思われる。(『芭蕉全発句』)

と見ておられる。

664 やまざくら瓦ふくもの先ふたつ　(笈日記)

泊船集・蕉翁句集・鮎橋・桃の枝

春季（やまざくら）。

語釈 ○**やまざくら**　「山桜（やまざくら）」。桜の品種の名ではなく、山に咲く桜をいうのであろう。既出（Ｉ25、105）。○**瓦ふくもの**　「瓦葺く（かはらふ）物（もの）」。瓦を屋根に葺いた建物。寺院などである。木下長嘯子の「山家記」（『挙白集』所収）に、「常にすむところは瓦葺けるもの二つ、函丈二間をばことにしつらひて」とある表現を踏まえた。「斎宮のいみことばに、仏をなかことといひ、経を染かみといひ、寺を瓦葺ものなどいへる事あり。この句のこと葉これによる歟」（蓼太『芭蕉句解』）という説も参考すべきか。「瓦ふく家も面白や秋の月野水」（『はるの日』）「Cauarabuqi.」「Iye, I, yaneuo fuqu.」（『日葡辞書』）。○**先ふたつ**　「先（ま）づ二（ふた）つ」。「先」は「何よりも先ず」の意で、瓦葺きの屋根の印象を際立たせた表現である。

大意　山の桜は今が盛り。その華やかな景色の中に、黒い瓦葺きの屋根二つが、何よりも先ず目立つ。

考　『笈日記』岐阜部、落梧遺編の撰集『瓜畠集』から抄出した句を収めた中に見える。『蕉翁句集』は貞享三年の部に収めるが、その根拠は明らかでない。蓼太の『芭蕉句解』には「よし野にて」と前書があり、積翠の『芭蕉句選年考』は、貞享三年に吉野に居る筈がないことを論じている。しかし、抑々「よし野にて」の前書の拠り所がはっきりしないのだから、かれこれ論じても余り意味はあるまい。ここでは『瓜畠集』所収であることから、落梧の歿した元禄四年春以前と推定するにとどめる。

句は唯、爛漫たる山中の花盛りの中に、瓦葺きの屋根二つが際立って見えるというまでで、「よし野にて」という前書の根拠があやふやである以上、必ずしも吉野山の景色と限定するを要しない。ただ、吉野の景とすれば、「瓦ふくもの」は蔵王堂などの堂塔が思われ、江戸の上野あたりならば、寛永寺の甍が思われるというまでである。また、『句選年考』には、

もし吉野にての前書ならずば、長嘯子の古跡、京都小塩山勝持寺に有り。尤も長嘯の墳あり。境内桜多し。花の寺とも云ふ。然れば若し爰に於ての句とも云ふ可きか。

とあり、潁原博士の『新講』も、吉野の蔵王堂などでは「何の為の山家記であるか訳が分らぬ」として、
やはりこれは挙白集の文に従つて解すべきで、山桜が咲いて居る静かな山麓などに、まづ人家とては閑居の二棟が見えるだけだといふ意である。山家記の言葉を用ひた事によつて、おのづからその閑居のあるじは長嘯子のやうな雅人たる事が想はれる。
と述べておられる。しかし、長嘯子の表現を踏まえたからといって、「山家記」に描かれたような閑居の体に限るのも窮屈過ぎよう。要は、そうした雅人の閑居のさまも含めて、読者がさまざまの景色をイメージすればよいのである。花盛りの雍和の気分と閑情が、こうした句の味わいの中心であろう。下五の「先」について、加藤楸邨氏は、「つづいて次を期待する心のはずみがうかがわれる」(『芭蕉全句』)とされ、堀信夫氏も、
この一句では『挙白集』にない「先」という措辞がキーワードとなっている。この言葉により、山の奥行の深さや、これから展開される興趣への期待感が、的確に表現された。(『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』)
と見ておられる。これらは「先」を時間的に解したもので、この立場からすれば、規模の大きい吉野あたりの景色が最も相応しいことになる。

665 此槌はむかし椿か梅の木か　(其木枯)

此槌のむかし椿歟梅の木か　(芭蕉句選拾遺)　——粟津文庫抄

春季(椿・梅)。

語釈 ○**此槌**　「此の槌」。句材となった花入れが昔は横槌(砧や藁を打つのに用いる槌)だったので斯ういう。[考]に掲げる忤折の文参照。「槌」は既出(I 56)。「Tçuchi.」(『日葡辞書』)。○**むかし**　「昔」。道具にならない前の、素材だった時代をいう。○**椿**

歟 「椿歟（つばきか）」。「椿」は春の季語。既出（Ⅱ319、Ⅲ584）。「歟」は漢文の文末に用いられる疑問詞。既出（Ⅰ187前書等）。

大意 この花入れはもともと砧の横槌だったという。一体この槌のそもそもの昔は、椿の木だったのか、それとも梅の木だったのか。

考 『其木枯』（淡斎撰、元禄十四年刊）には「又花生に題せらるゝ文あり。ことしげくてわすれ侍る。そのほく」として掲げ、「然子の反古の中より出されし也」という付記によれば、惟然の手許にあったものである。「花生に題せらるゝ文」は、『芭蕉句選拾遺』（寛治編、宝暦六年刊）と、義仲寺蔵書、野坡自筆という『粟津文庫抄』に伝わるが、後者の方が完全な形と思われるので、これによって左に掲げる。

杵の折れ　　　芭蕉

杵のをれと名付るものは、上かたにめでさせ玉ひ、かしこく扶桑の奇物となれり。汝いづれの山に生出て、いづれの里の賤がきぬたの形見なるぞや。むかしは横槌たり。今は花入と呼て、貴人頭上の具に名を改む。下れるものは上り、上なるものは心下るといへり。人亦斯のごとし。高きに居て驕るべからず。ひきゝに有てうらむべからず。たゞ世の中は横槌なるべし。

此槌のむかし椿歟梅の木歟

『句選拾遺』には、大津の人所持の芭蕉真蹟を文素が写して井筒屋に伝えた由が見えるが、右の文中「下れるものは上り、上なるものは心下る」の一節を脱している。『日本古典全書・芭蕉文集』の山崎喜好氏の注によると、寛延元（一七四八）年に歿した三井高房の『町人考見録』に、現時京の町人所蔵の銘物道具が多く石川自安の旧蔵だとしてその名を挙げた中に「杵のをれの花生」があり、即ちこの句に詠まれたものであろうという。永く京に伝わったものとすれば、芭蕉は恐らく在洛中にこれを見たのであろう。当季の吟であれば、春に京都辺に居た貞享二年、元禄三、四年等が考えられるが、それ以上確かな拠りどころは求め難いので、姑く四年春以前として玆に配しておく。前文を伝え

る『句選拾遺』『粟津文庫抄』共に初五は「此槌の」となっているが、「は」の方が措辞として穏当に聞えるし、初出板本でもあるから、『其木枯』の句形を本位句とした。
　砧を打つ横槌を利用した花入れから人生の浮沈を観じ、処世の心がけに及んだ典型的な俳文の、とじめとして置かれた句である。「興に乗じてうたいあげる風狂の体で、禅家の問答ふうの口ぶりが感じられる」(『芭蕉全句』)という加藤楸邨氏の鑑賞が的確であって、その気分さえ分れば、特に評価を云々するまでもない。椿や梅は、単に当季の植物として案ぜられたに過ぎず、「花」ではなく「木」なので季感も乏しい。

勢田に泊りて、暁石山寺に詣、かの源氏の間を見て

666 曙はまだむらさきにほとゝぎす（伝真蹟画賛）

明ぼのやまだ朔日にほとゝぎす（真蹟草稿）

夏季（ほとゝぎす）。

語釈 ○**勢田に泊りて**　「勢田に泊りて」。「勢田」は近江湖南、瀬田川の河口に近いあたりの地名。「瀬田」とも書く。既出（Ⅱ*395*）。「日蔓が田家にとまりて」(『はるの日』所収野水発句「蛙のみ」前書)「Tomari, ru, atta.」(『日葡辞書』)。○**暁石山寺に詣**　「暁石山寺に詣で」。「石山寺」は、今の大津市石山寺一丁目にある真言宗の古刹で、山号を石光山といい、西国三十三所観音霊場の十三番札所である。「詣」は既出（Ⅰ*190*前書）。「暁夢に師にまみゆ」(土芳『蓑虫庵集』所収発句「近江路や」前書)。○**かの源氏の間**　「彼の源氏の間」。「源氏の間」は、紫式部がこの寺に籠って『源氏物語』を書いたと伝えられる部屋。『石山寺縁起』にも「この物語かけるところをば源氏の間と名づけて、その所かはらずぞ有るなる」とあり、貴人の参籠の間として使われて、今も本堂の一画に残っている。有名なものなので「かの」といった。既出（Ⅰ*87*、*250*）。「小哥そろゆるからうすの縄　探志　独寐て奥の間ひろき旅の月　昌房」(『ひさご』)「Guenji.」「Maga firoi, l, xebai.」(『日葡辞書』)。○**曙はまだむらさきに**　早朝でまだ明け離れず、紫色の

雲が空にかかっているさまをいう。「曙」は既出（Ⅰ209）。「Murasaqi.」（『日葡辞書』）。

大意　夜明けの空は明け離れずに、まだ紫の雲がかかっているところを、ほととぎすが鳴き過ぎて行く。

考　伝真蹟画賛は『続蕉影余韻』に写真版が見え、筆蹟に問題はあるが、前書と共に拠る所あるものと思われる。『諸国翁墳記』や『芭蕉翁真蹟拾遺』にも同旨の前書があり、元禄三、四年四月初めの作であろう。『芭蕉図録』解説に引用された京都山田氏蔵の真蹟草稿の句形は初案と推定され、『句選拾遺』も同じ形を収めている。

「明ぼのやまだ朔日に」の句は、「独あま」（Ⅳ659）の句と共に書かれており、この形は、まだ夏の初めの四月一日なのに、もうほととぎすの声をきいたという、単純な喜びの情を叙したまでである。必ずしも石山寺や源氏の間と縁がある表現ではなく、その点初案とするのにも疑問があって、ただ用語の共通したものが多いというに過ぎない。「まだむらさきに」となると、これは明らかに「源氏の間」から紫式部を意識した表現である。そして誰しも気づくように、『枕草子』の冒頭「春はあけぼの。やうやうしろくなり行く、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる」を踏まえてもいる。『枕草子』の引用は王朝の女房文学として『源氏』からの連想であろうが、明け方の紫雲はどの季節にも見られるにせよ、清少納言の文章を背景にすれば、春の気分を濃厚に持つ。従って、「まだ明け切らずに紫の雲がかかって春の気分を残しながらも」という余情をもって解すべきであろう。その方が夏の季物「ほとゝぎす」との対照も際立つわけである。場所柄だけに古典的な要素の勝った句になっている。

667　君やてふ我や荘子が夢心　（孟夏十日付怒誰宛書簡）

古河わたり・百歌仙

春季（てふ）。

語釈　○君やてふ　「君や蝶」。「君」は二人称。既出（Ⅱ267）。ここは書簡の宛名人の怒誰を指す。「や」は疑問。○我や荘子が夢心

「や」は疑問。「荘子（さうじ）」は、中国戦国時代の思想家荘周のこと。孟子の仁義を重んずる儒教的礼教思想に対して、無為自然の道を強調し、老子と共に後の道家思想の源流と目される。その著も『荘子』というが、ここは書名ではない。「が」は、「君やてふ」「我や荘子」と二つ並立した疑問の文脈を承けて、「そのやうな夢心」と下へ続ける役割の語である。上に「我や」があるから、「荘子か」と清音によむと疑問の重複になって良くない。「夢心（ゆめごゝろ）」は、夢を見ているような、うっとりとした気持をいう。「芦の穂や貌撫揚る夢ごゝろ　丈草」（『炭俵』下）「Yumegocoro.」（『日葡辞書』）。

大意　あなたが蝶か、私が荘子か、どちらがどちらか分らない、夢のような気分になりますな。

考　出典の書簡は元禄四年と推定されるものである。宛名の怒誰は高橋氏、通称喜兵衛また条助。膳所藩士で、同藩の蕉門俳人菅沼曲水と兄弟と思われる人である。書簡には、

芳情精神不滞不恥不恐、大道自然之対談、誠に不安事共に御座候。

としてこの句が掲げられており、芭蕉が怒誰と荘子を話題にして対談した後に、この書簡を認めたものらしい。この書簡には元禄三年筆の可能性もないではないが、四年二月廿二日付の怒誰宛書簡に、

南経斉物過半に至候由、連衆ゟ申来、大儀之処はかを御やり被成候而御手柄奉存候。随分清眼微細に御開可被成候。

また、同日付の膳所藩士吉田支幽・和田虚水両名宛の書簡にも、

高氏南花斉物半之由、是又幸之義御座候間、御勤被成、御修行可被成候。世道俳道是又斉物にして二つなき処にて御座候。

と、『荘子』斉物論に関する文言が見え、藩の儒臣か祐筆の如き地位だったかと思われる怒誰が、当時同藩の人々に斉物論篇を講じていたと推定される。従って孟夏（四月）十日付の書簡も、同四年の執筆と考えるべきであろう。句は「てふ」で春季になっているが、これは『荘子』の内容に即した趣向の為で、書簡を書く際に作った句と思われる。

『一葉集』には、「怒誰が製して贈りける筆の心殊によろしければ」と前書があるが、筆の芯の事は出典たる書簡の後段に見えることで、句に直接関係したことではない。

句は怒誰と荘子の無為自然の大道について語りあい、二人の気持がぴったり合って通じ合った喜びを、斉物論篇に見える荘周夢蝶の寓言（Ⅰ180、181参照）に寄せて述べたものである。「知らず、周が夢に胡蝶と為るか、胡蝶の夢に周と為るか」の本文を踏まえ、「貴方と荘子の哲学のことを話していると、貴方が蝶なのか、私が荘子なのか分らない程に、二人の気持が融けあい通じあって夢見心地になる」といったのである。荘子をいうのに蝶を持ち出すのは前にも例があって珍しいことではなく、春の季節感も無い。ただ怒誰との心情的な一体感を、即興の句にまとめたまでなのである。

668　うきふしや竹の子となる人の果　（嵯峨日記）

蕉翁句集草稿・蕉翁句集

夏季（竹の子）。

語釈　○**うきふし**　「憂き節」。つらい事の多い世のさまをいう。「ふし」は「竹」の縁語。「都の方のおとづれは間遠にゆへるませ垣やうきふししげき竹柱」（謡曲「大原御幸」）「Vqifuxi.」（『日葡辞書』）。○**竹の子**　「竹の子」。初夏四月の季語。「たかうな」（Ⅰ53参照。「たけの子や畠隣に悪太郎　去来」（『猿蓑』巻二）「Taqenoco.」（『日葡辞書』）。○**人の果**　「人の果て」。人間の末路。「いかなる人の果やらん。その名を名のり給へや」（謡曲「弱法師」）。

大意　この世には憂れわしいことが多いものだ。運命の浮き沈みに翻弄された挙句、竹藪に葬られて、終には竹の子に化した人の末路の哀れさよ。

考　『蕉翁句集草稿』には「さが小督屋敷にて」と前書があり、次に扱う四句と共に挙げて、「此句五ともに落舎逗（ママ）

留之内。自筆の筆すさび有」と注している。「自筆の筆すさび」とは、『嵯峨日記』の草稿を指すのであろう。『蕉翁句集』にも「小叔(ママ)屋浦(ママ)にて」と前書がある。元禄四年四月半ばから五月初めにかけて、去来の別野落柿舎に滞在した間の事を記した『嵯峨日記』には、四月十九日の条に、

十九日　午半、臨川寺に詣。大井川前に流て、嵐山右に高く、松の尾里につゞけり。虚空蔵に詣ル人往かひ多し。松尾の竹の中に小督屋敷と云有。都て上下の嵯峨に三所有。いづれか慥ならむ。彼仲国ガ駒をとめたる処とて駒留の橋と云此あたりに侍れば、暫是によるべきにや。墓は三間屋の隣、藪の内にあり。しるしに桜を植たり。かしこくも錦繡綾羅の上に起臥して、終藪中の塵あくたとなれり。昭君村の柳、普女(ママ)廟の花の昔もおもひやらる。

としてこの句を書いており、成立事情は明らかである。

小督は高倉天皇の寵を得た美人であるが、平清盛に憎まれて内裏から追われ、亀山あたりの嵯峨野に跡を隠した。天皇の命を受けた侍臣源仲国が想夫恋の曲を弾ずる琴の音を便りに小督の隠栖を尋ね当てた話は、『平家物語』に見えて有名である。高倉院との間に姫宮をもうけたが、結局清盛によって追放され、大原の奥に隠棲して天寿を全うしたという。入水自殺したともいわれるが、その根拠は確かでない。芭蕉も小督の遺跡が嵯峨に三箇所あるといっており、東山にも小督の墓と称するものがあって、要するにどれも確かなものではないのである。

句だけでは「竹の子」が唐突でその意を得難いけれども、『嵯峨日記』の中に置けばよく分る。墓が竹藪の中にあったので、「竹の子」は属目のものであり、それが自然と「うきふし」の語を誘い出したのであろう。悲運の美女を弔う句であるが、「竹の子」にはおかしみが強く、俳諧的な軽みが感ぜられる。「昭君村の柳、巫女廟の花に対して、小督の果を竹の子と言つた所に俳諧がある」（潁原博士『新講』）わけだ。

669　嵐山藪の茂りや風の筋　（嵯峨日記）

嵐山藪の茂みや風の筋　（蕉翁句集）

夏季（茂り）。

語釈　**○嵐山**　「アラシヤマ」。現京都市西京区嵐山元録山町に聳える標高三百八十一メートル余の山。春の花秋の紅葉で名高い景勝の地で、国指定の史跡名勝となっている。**○藪の茂り**　「藪の茂り」。「茂り」は、草木の繁茂したさまをいう夏の季語。既出（Ⅰ*61*）。「藪」も既出（Ⅰ*204*）。**○風の筋**　「風の筋」。風の通る道筋。

大意　嵐山の藪の茂りは緑したたるばかりだ。さわやかな風の吹き通る道筋がまざまざと見える。

考　『嵯峨日記』四月十九日の条、前の「うきふしや」の句の次に並んで見え、『蕉翁句集草稿』も落柿舎逗留中の句としている。『蕉翁句集』の「茂み」は写し誤りであろう。

『日記』に嵯峨の臨川寺あたりの景を、「大井川前に流れて、嵐山右に高く、松の尾里につゞけり」と叙してある。嵐山の麓あたり、竹の多い所柄からも、「藪」は竹藪であろう。吹き通る風に竹藪が靡いて、緑の中に風の道筋が際立つ。日中の陽光に映える緑の波動が見えるような、描写力のすぐれた句である。「嵐山」で切ると、「藪の茂りや風の筋」が疑問の意のように受取れる。それでは興じ方が作為的に聞えて句柄が落ちるから、「茂りや」で切って読みたい。それから、杜哉の『蒙引』に、「山おろしの真一文字に嵯峨の竹原を動し過る風情をいへり。尤山の名に出づ」と述べている点も留意すべきであろう。縁語仕立ては古いようではあるが、「嵐山」には「青嵐」の語の連想もあり、下の「風」に響いて行く表現効果は無視出来ないと思う。

670

柚の花や昔しのばん料理の間　（嵯峨日記）

落柿舎閑居　嵯峨日記にみへたり

柚の花にむかしを忍ぶ料理の間　（芭蕉庵小文庫）　――泊船集・落柿舎日記

落柿舎閑居

柚の花にむかししのべと料理の間　（蕉翁句集草稿）

柚の花にむかし忍ばん料理の間　（蕉翁句集）

夏季（柚の花）。

語釈 ○**柚の花**　「柚の花」。「柚」は「柚子」に同じ。ミカン科の常緑小喬木。直立性で多くの鋭い刺を持ち、初夏に紫色を帯びた白い花を開く。揚子江上流原産といわれるが、山口県には野生の株があるという。「時珍本草曰、柚樹葉皆似ㇾ橙、其花甚香。△和産のもの四五月に花あり。五六月に結ㇾ実。是を青柚と称して夏月に賞す。此二物を盃酒に加へて甚佳也。按に、柚は解二酒毒一。飲酒人口気を治るよし、日華本草などにみえたり。又俗の賞するは只芬香ならん而已」（『滑稽雑談』）「柚の花やゆかしき母屋の乾隅（蕪村）」（『新花摘』）「Yu. I, yunosu.」（『日葡辞書』）。○**昔しのばん料理の間**　「昔偲ばん料理の間」。「料理の間」は、大きな邸宅の、料理の盛り付けや膳立てをする部屋。『嵯峨日記』にあるように、落柿舎はもと富豪の別荘だったので、そのような部屋もあったのである。その往時の豪勢さを偲ぼうとする意であるが、「しのばん」で切ったのでは、「柚の花や」と併せて三段切れになって、句の姿が面白くない。「ん」は意志をあらわすのではなく、婉曲表現として「料理の間」にかかると見るべきであろう。要するに「昔を偲ぶ」と同じなのだが、平板に陥るのを避けたものと思われる。（Ⅰ*202*、Ⅲ*482*）参照。「北京遠き丸山の春　嵐雪　三尺の鯉に小鮎に料理の間　其角」（『芭蕉翁古式之俳諧』）「Reôri.」（『日葡辞書』）。

大意　豪勢な往時を偲ぶに足る料理の間に近く、庭先に咲くかぐわしい柚の花がゆかしいことだ。

考

『嵯峨日記』四月二十日の条に、
落柿舎は昔のあるじの作れるまゝにして、処〻頽破ス。中〳〵に作みがゝれたる昔のさまより、今のあはれなるさまこそ心とゞまれ。彫せし梁、画ル壁も風に破れ雨にぬれて、奇石怪松も葎の下にかくれたるニ、竹縁の前に柚の木一もと花芳しければ
としてこの句が見え、成立事情は明らかである。土芳の『蕉翁句集草稿』は、初め「柚の花や」と書き、「や」を見せ消ちにして右傍に「に」としてあり、後に、
此自筆物の句也。猶落柿舎逗留の故古書捨を見れば、むかししのばんとも有。いろ〳〵なしかへられ侍るか。元禄四未の事也。小文庫には、むかしをしのぶと有。
と書いている。彼は「柚の花にむかししのべと」とした真蹟に拠ったのであって、恐らくこれが初案であろう。「落柿舎逗留の故古書捨」とは恐らく『嵯峨日記』の草稿を指し、土芳のいう所は現存する『日記』の真蹟写しと異同がない。これに対して、史邦の『芭蕉庵小文庫』の句形は、これが原拠に忠実なものならば、史邦の見た『嵯峨日記』は、現存のものとは別本ということになる。但し『小文庫』には誤伝の句形が多く、これも誤伝の可能性無しとしない。『蕉翁句集』の句形は、土芳の見たという『日記』草稿と或いは関係があろうが、後世の写本だけに『日記』の句形よりは信憑性が劣る。しかし、「柚の花にむかし忍ばん」とすれば、「忍ばん」で句が切れることは明らかで、[語釈]で触れた三段切れの問題は解消することになり、「忍ばん」を下五にかかると見るよりは、自然な解釈が出来る点が魅力である。何れにせよ、本位句は『嵯峨日記』の句形を採るのが穏当であろう。
「柚の花」について幸田露伴は、
昔は柚の花の蕾を取つて吸口としたものである。吸口は即ち吸物に点ずる香料である。今でもする事である。
(『芭蕉俳句研究』)

といっている。柚子の実も料理に縁の深いことはいうまでもない。処々頽破したとはいえ、豪奢な昔の主の生活を偲ぶに足るものが、落柿舎には随処にあった。「料理の間」とおぼしい部屋の縁先に「柚の花」を見付けたのがこの句の動機になっている。昔の豪奢を偲ぶに恰好の物として、それを初五に打ち出したのであるが、昔を偲ぶといえば、「さつきまつ花たちばなのかをかげば昔の人の袖のかぞする」(『古今集』巻三、よみ人しらず)という古歌が思われる。この句がこの古歌を背景に持つ俳諧化の趣向であることは、これまた露伴が次のように指摘している。

「昔しのぶ」は古歌の橘の縁語である。……此の句は古歌の橘を柚の花で行つてゐるのだ。ここが例の俳諧で、ことにそれを料理の間としたところが、昔の橘の雅味――すなはち和歌の雅味と異つて、平俗の雅味である。此の平俗の雅味を開いたところに俳諧がある。小手もきいてゐる。面白い句である。(『芭蕉俳句研究』)

柚の木は花も実も料理に縁が深く、古歌の「花たちばな」に比べれば俗な素材であった。しかも橘とは同じ柑橘類という相似性もある。「さつきまつ」の歌を背景に、「料理の間」と共にこれを生かして「平俗の雅味を開いた」俳諧の新境地なのである。ただ、初五で切れる『日記』の句形では「しのばん」の所に問題が生ずるのは前記の通りであって、『蕉翁句集』のように「柚の花にむかし忍ばん」とすれば、「忍ばん」で切れることは一目瞭然、「ん」も作者の意志として解釈に何等差支えはない。支考の『俳諧古今抄』がこの句形を採り、「にの字の働き」について云々するのも、その辺の分りやすさから出ているのであろう。

671 ほとゝぎす大竹藪をもる月夜 (嵯峨日記)

蕉翁句集草稿・蕉翁句集・落柿舎日記

ほとゝぎす大竹原を漏る月夜 (笈日記)

落柿舎閑居 嵯峨日記に見えたり

泊船集

ほとゝぎす大竹藪をもる月ぞ　（芭蕉庵小文庫）

夏季（ほとゝぎす）。

語釈 ○**大竹藪**「オホタケヤブ」。規模の大きい竹藪をいうが、嵯峨という所柄からして、竹自体も大きく太いものを思わせる。「大竹」は、大型で太い淡竹の異名でもある。「藪」は本来「ざる」のような物を指す字で、「やぶ」には「藪」を用いた方がよいが、ここは「竹藪」なので、竹冠を無意識に書いたのであろう。「根笹大竹押分ふみ分」（『国性爺合戦』第二）「嶺から半道も下ると、千里が竹といふ竹藪があるのウ」（『浮世風呂』四編上）。○**もる月夜**「漏る月夜」。「月夜」は、ここでは月光の意。「時雨も霜もをく露も、もる月影にあらそひて、たまるべしとも見えざりけり」（『平家物語』灌頂巻）「影ぼうしたぶさ見送る朝月夜伊賀卓袋」（『猿蓑』巻三）「Mori, u, otta.」（『日葡辞書』）。

大意 ほとゝぎすが一声鳴き過ぎた折柄、鬱蒼と茂った大竹藪の隙間を、月の光が漏れている。

考 『蕉翁句集』には「さがにて」と前書がある。『嵯峨日記』には四月二十日の条、前の「柚の花や」の句の次に並んで見え、同日の吟と思われる。異形について、『笈日記』の「大竹原」が信じ難いことは勿論として、『小文庫』の「もる月ぞ」については、いろいろと考え所がある。土芳の『蕉翁句集草稿』は「漏る月夜」の形で挙げて、

此自筆の句也。小文庫に、漏月ぞと有。

と述べてあり、この「自筆」が『日記』草稿を指すのか、他の短冊類を指すのか明らかではないが、土芳の鑑識からしても「漏る月夜」の句形は疑っておらず、『小文庫』の句形は参考として触れているに過ぎない。これと関係のあるらしいものとしては、樗良自筆の伝書『俳諧己開抄並風雅大意』に、「ほとゝぎす大竹藪をもる月よ」として掲げ、「芭蕉真蹟にかくありと伝ふ」と注するけれども、この真蹟は現存しないし、土芳のいう「自筆」と関係あるかどうかも判然としない。積翠の『芭蕉句選年考』は、

伊勢の樗良曰、此句、月夜とは謬也。月夜は地に映る影也。虫はうつむきて聞可し。子規は頭あふぐべし。竹の

葉末にちらくともる月を見ての句なるべし。真蹟は、月ぞとも有り。○案ずるに、嵯峨日記・笈日記・泊船集みな、夜と有り。小文庫のみ、ぞとあり。

と精しく考えている。樗良はここでは「月夜」を誤りとし、「月ぞ」とした真蹟があるとも言っているが、「竹の葉末にちらくともる月を見ての句」という解はその通りながら、「月夜」が誤りということに直接結び付くことではあるまい。恐らく樗良は、「月夜」が月光を指す場合があることを知らなかったか、知識が明確でなかったかして、このような不徹底な説をなしたのではあるまいか。何れにせよ、『小文庫』の「もる月ぞ」について真蹟があるといっているのは樗良だけで、孤立した所伝であり、誤伝の可能性の大きいことは否定し難いと思う。なお去来自筆と伝えられる落柿舎の明細書に「もる月よ」として挙げてあるが、資料自体の信憑性に問題があるので、考究の対象にし難い憾みがある。抑々「よ」を仮名書きしたものは、「夜」なのか詠嘆の助詞なのかはっきりせず、詠嘆の「よ」と誤解して「月ぞ」へつながったかと疑われる節もある。結局信じ得る句形は『嵯峨日記』系のものだけということになろう。

この句には初五にはっきりした休止があり、ほととぎすの鳴き声と、以下の大竹藪の月光とが対照されている。その間に何等の説明の語もなく、作者の主観の表白もない。鋭い鳥の声にふとその方を見ると、嵯峨の大竹藪に月光の漏れる景色が眼に入ったのであろう。安東次男氏が、

初夏の季節、嵯峨の竹藪といえども鬱然たる印象は無かったはずだ。透いた枝づたいに、縦よりむしろ横に射入る月の光は、浅く、平沙のごときものであったろう。(『芭蕉発句新注』)

と述べられたような景が思い描かれる。これについては、

嵯峨では実際に大竹藪の横から光が洩れてくる。竹の幹が薄暗く林立して一寸見れば光など洩れさうでないのに、洩れてくるのである。いかにも「洩れる」といふ語がふさはしい。中々ミステイックな感じである。(『続々芭蕉俳

句研究』）

という和辻哲郎博士の所説もあった。兎に角、ほととぎすの声と、その後の静謐な「大竹藪」に月光の漏れる景とを只提示しただけで、大自然のたたずまいを象徴するような大きな世界を現わし得たのは大手腕という外ない。

あらわに心中を叙べる語を一語も使わぬ純客観的な発想のかたちをとり、発想の契機は自然との感合の中に全くその姿を消し去って、あるのは静謐な月下、時鳥を仰ぐ澄明感のみである。……「月ぞ」の形は、あるいは初案かとも思われるが、句としては発見の驚きの口調は出るにしても、句柄が小さく少しさわがしい。「月夜」となると、大きな自然の静謐そのものが生かされた表現になってくる点に留意して読み取るべきである。（『芭蕉全句』）

という加藤楸邨氏の鑑賞は、間然するところのないものであろう。実境に基づきながら、ほととぎすの配合として卯の花や青葉蔭のあり来りではなく、大竹藪を出したところ、おのずからなる俳諧の新味であった。

672 手をうてば木魂に明る夏の月　（嵯峨日記）

蕉翁句集草稿・蕉翁句集・落柿舎日記

夏季（夏の月）。

語釈 ○**手をうてば**　「手を打てば」。柏手を打って東の空を拝むさまである。「今も神前に向ては手を打て拝をする也」（『貞丈雑記』巻一）。○**木魂に明る**　「木魂に明くる」。「木魂」は、野外の音に対する反響。柏手に対する反響によって夜が明けるかのようなのである。「木魂」は既出（Ⅰ*151*）。○**夏の月**　明けやすい夏の夜の月。既出（Ⅰ*63*）。

大意 未明の東の空に向って柏手を打つと、その反響と共に夜が明けて来て、夏の短夜の月は、なお空に残っている。

考 『嵯峨日記』四月二十三日の条に見え、野村家蔵本では、はじめ「夏の夜や木魂に明る下駄の音」と書いたのを消して、「手をうてば」の句を書いている。抹消された初案は、踏石伝いに庭を散策する下駄の音のこだまするう

ちに夏の夜が明けて来る趣であったのを、「手をうてば木魂に明る」と改案したのであって、印象的な「手をうてば」によって、句に焦点が出来た感じである。

「手をうてば」について、以前は何となく機嫌に乗って手を叩いてみたとするような解釈が多かったが、『校本芭蕉全集』紀行・日記篇の補注に於いて、井本農一博士は「月待」（Ⅳ651参照）の行事で月を拝むことと見て、次のように述べておられる。

……なぜ手を打ったかというと、江戸時代には「月待ち」の風習があり、十七夜・二十三夜・二十六夜は、夜明しをして月を拝んだ。その月待ちの夜に、暁の月を礼拝し、拍手（かしわで）を打つ音が反響するさまである。ただ意味もなく拍手を打ったのではない。それでは四十八歳の芭蕉としては児戯に過ぎよう。もっともこの拍手は芭蕉でなく、近所から聞える拍手と取ってもよい。そうとしても、「月待ち」の暁だからこそ、月に対して拍手を打ち礼拝しているのだ。

ただし、二十三日の記事に二十三夜、すなわち二十四日の暁の句があるのはおかしいという疑問が湧くかもしれないが、「嵯峨日記」のこのところは「廿四日」の日付けを欠いでおり、前後関係から判断すると、発句が四つ並んでいるそのあとは、二十四日の記事らしく思われる。それで二十三日と二十四日の記事はまとめて二十四日の夜にしるされたと判断されるのだが、それは二十三日の夜は月待ちで夜明しをしたためではないかとも想像される。

精到な考証で従うべきであり、句が二十四日の暁に成ったであろうことも確実視される。井本博士は最近「「手をうてバ」を芭蕉自身とする説もあるが、初案の「下駄の音」から考えて他人の柏子の音であろう」（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）とも述べておられるが、芭蕉も月待をしたとすれば、自身のこととして差支えないであろう。

江戸期から明治にかけての注釈が、夏の夜の短いことをいう為の形容と見ているのは良くない。手を打つ音の谺が

聞える時にもう夜が明けてしまった等というのは、こだまが短夜の譬喩のように聞えて、貞門時代の句の趣になってしまう。これに比べると、

手をうてば谺す。その谺に明くる夏の夜。その明方の夏の月。——かういふ三つのものを、言葉で引かけてうまく流動させてゐる。一方ではそのために言葉が簡単になり、他方では表象が渾融し交響する。かういふ風に形を作り上げるのが、俳句の極意かと思う。（『続々芭蕉俳句研究』）

という和辻哲郎博士の鑑賞はすぐれている。「木魂に明る」という微妙な措辞によって、明けやすい夏の夜の本情が生かされ、全体の調べや語の韻きにも流動感のある佳い句である。

673　たけのこや稚き時の繪のすさび　（猿蓑）　——蕉翁句集草稿

竹や稚時の繪のすさみ　（嵯峨日記）

竹の子や稚き時の繪のすまひ　（泊船集）

笋や稚時の繪のすさみ　（蕉翁句集）　——落柿舎日記

夏季（たけのこ）。

語釈　**○たけのこ**　「竹の子」。既出（Ⅳ *668*）。**○稚き時の絵のすさび**　「稚き時の絵のすさび」。「すさび」は、心のままにする慰み事。幼い時遊びとして描いた絵をいう。「旅姿稚き人の嫗つれて　路通」花はあかいよ月は朧夜　同」（『ひさご』）「ながき夜のすさびに、なにとなき具足とりしたゝめ」（『徒然草』二十九段）「Vosanai.」「Fudeno susabi.」（『日葡辞書』）。

大意　嵯峨辺のあちこちに頭を出した竹の子の愛らしさ。子供の時は遊びによくこの絵を描いたものだったが。

考　『嵯峨日記』四月二十三日の条に見え、日付を欠く二十四日までには成っていた句と思われる。『蕉翁句集草

稿』には、句頭に「元禄四未」とし、「此句自筆に、落柿舎の遊吟也」とあるが、ここにいう「自筆」が『嵯峨日記』の草稿を指すかどうか、なお確かでない。現存の『日記』真蹟写しに、初めが「竹や」となっているのは、明らかに「竹子や」の中間の一字を脱した誤筆と見られ、『泊船集』の「すまひ」も明らかな誤りである。「すさび」「すさみ」は何れでもよく、竹の絵の賛として「竹のこや稚時の絵のすさみ」（最後の「み」を見せ消ちして「ひ」に改める）の句を書き、なお後に「みづからかき捨たる絵の反古を見出しけるに、少年のむかしこひしくなりて、此句を書付侍るかし」という文を記した幅が見える。これによると句は伊賀での作のようで、若しこれが『日記』より前ならば旧作を録したことになる。それならば「うき我を」（Ⅲ560）の句の場合のように何かことわりがあるべきであるし、『日記』より後ならば、余り誂え向きになり過ぎる嫌いがあろう。また、頴原博士が『新講』で言われたように、句からして絵も竹の子であるべきで、竹であるのは肯けない。旁々以てこの資料は存疑とすべきものと思われる。

古注には『源氏』若紫の巻の俤としたり、人の成長の速やかなるさまにかけた等、見当ちがいの説が多いが、素直に読めば、そのような事に関係づけずとも、句は安らかに釈ける。

現在に生えてゐる竹の子を見て、竹の子やと言ひ、それにつけて幼き頃竹の子を画いた事を思ひ出して、コンナ竹の子をかいて遊んだ事もあつたよ、と今昔の感を叙したのぢや。（内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈』）

と解すれば十分であろう。竹の多い嵯峨では竹の子を目にすることも多かったろうし、その愛らしい姿から、少年の日に思いが及ぶことは極く自然であって、童心が暢びやかに発露した軽い味の句である。

674 一日〳〵麦あからみて啼雲雀　（嵯峨日記）

麦の穂や泪に染て啼雲雀　（嵯峨日記）

――蕉翁句集草稿・蕉翁句集・落柿舎日記

夏季（麦）。

語釈　○**一日〳〵**　「ヒトヒ〳〵」。一日一日と段々に。「あからみて」にかかる副詞。漢字についても「〳〵」の反復符を用いることは、近世期に時折見られる慣用である。『日葡辞書』は「**Fitoi.**」として項目を立てている。○**麦あからみて**　「麦赤らみて」。麦の穂が熟して色づいて来るさま。「麦」は夏の季語である。（Ⅰ142、239等参照）。「汁の実にこまる茄子の出盛て　沾圃　あからむ麦をまづ刈てとる　里圃」（『続猿蓑』上）「**Qinomiga acaramu.**」（『日葡辞書』）。○**啼雲雀**　「啼く雲雀」。「はらなかや」（Ⅱ278）「ひばりなく」（Ⅲ593）等参照。

大意　一日一日と麦は色づいて熟し、春から続けて雲雀はなお啼いている。

考　『嵯峨日記』四月二十三日の条に見え、二十三、四日頃の成立と思われる。真蹟の写しと見られる『日記』の野村本・曾我本では、「麦の穂や泪に染て啼雲雀」と書いた左側に「一日〳〵麦あからみて啼」と細字で記入してあり、見せ消ち等のしるしはないが、「麦の穂や」の初案を推敲して「一日〳〵」の形に改めたものと推定される。雲雀の涙によって麦の穂が色づくとする趣向を、平明な自然描写に変えているのである。

麦の穂が色づくのを雲雀の涙のせいとするような発想は、「岩躑躅染る涙やほとゝぎ朱」（Ⅰ32）のような貞門時代の句と選ぶ所がない。そういう作為的な趣向を捨てて、「一日〳〵」の句案を得た時、句は面目を一新した。

> 麦があからんでゐて、雲雀が啼いてゐるといふのは尋常の景色ですが、それに、ひと日ひと日麦あからみて、と時間的の奥行をつけた所が此の句のえらい所だと思ひます。その為に眼前の景色のみならず、晩春初夏の迅速に移つて行く野の気分がその移つて行く姿に於て出てくるのです。季節の運行が鳴くひばりの声と共に鳴りひびいてゐるやうな句です。一日一日がよく生きてゐる。（『続々芭蕉俳句研究』）

という和辻哲郎博士の鑑賞は間然する所が無い。「一日〳〵」の字余りが暢びやかな調べを成して、如何にも悠久な

四季の運行を思わせ、麦の穂や雲雀といった微物を通して天地の呼吸を感じさせる働きをしている。それと、初案のような発想をとった背景には、夏になってもなお鳴きしきる雲雀の声に、或る寂しさを感じ取ったことがあるのを見逃したくない。この気分は改案にも引き継がれている筈であって、この雲雀の声には春の頃の張りはもうないのである。いわば移り行く季節の悲しみのようなものが、露わにではなく、倦怠感に似て漂っている。

675

能なしの寝たし我をぎやう〳〵し（嵯峨日記）

蕉翁句集草稿・蕉翁句集・落柿舎日記

夏季（ぎやう〳〵し）。

語釈 ○**能なし** 「能無し（のうな）」。何の能もない者。作者自身を指し、「ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは仏籬祖室の扉に入らむとせしも、……終に無能無才にして此一筋につながる」（『幻住庵記』）「しばらく身を立む事をねがへども、これが為にさへられ、暫ク学て愚を暁ン事をおもへども、是が為に破られ、つゐに無能無芸にして只此一筋に繋る」（『笈の小文』）等の文を思わせる。「我のふなしといはれしに、今は太このやくなれば」（狂言「祇園」）「Nô.」（『日葡辞書』）。○**寝たし** 「眠たし（ねむ）」の意の一種の宛字。ここで切れる。「手のひらに虱這はする花のかげ　芭蕉　かすみうごかぬ昼のねむたさ　去来」（『猿蓑』巻五）。○**ぎやう〳〵し** 「行々子（ぎやうくし）」。燕雀目ウグイス科の鳥で、「葭切（よしきり）」ともいう。ギョッギョッ、ギョギョシギョギョシと鳴くのでこの名がある。五月初めに南方から渡来する夏鳥で、平地から海抜千メートル程度までの水辺の葭原に、葭の茎を組合わせた花瓶形の巣を作る。鳴き声は昼夜を通してやかましい。「和俗の葭原雀と称するものも、雀にはあらずかし。溝三歳の類なるべし。此ものぎやう〳〵し鳥ともいふは、又鷦の類に巧婦の名侍る故にや。猶考ふべし」（『滑稽雑談』）「葭原雀　本名鶷鶡（ガツカツ）。ヲゲラ、ヨシムシリ、ギヤウ〳〵シ、ヨシ雀トモ云。其声甚喧（カマビスク）シテ昼夜鳴。六月土用ニ入即止ムレ声」（『篗纑輪』）「我門に入らぬ御世話ぞ行〳〵し」（一茶『七番日記』）。

大意 何の能もない自分は、ただただ眠たい。そんな私をどうしろというのか、行々子が仰々しく鳴き立てて眠らせてくれない。

考　『嵯峨日記』四月二十三日の条に見え、二十四日までには成っていた句であろう。重厚の『落柿舎日記』（安永三年刊）には中七を「ねぶたし我を」と表記しているが、これは取立てて問題にする程の異同ではない。
句意を「此道に入らば寝てはならじ」（鷗沙『過去種』）とか、「此鳥のかしましき、我が眠をさまさせよ」（杜哉『蒙引』）等と解するのは見当ちがいも甚だしく、それでは閑情が生きない。
何をするともなく、たゞうつら〳〵と眠を貪ぼる我である。その能なしの我をさうやかましく鳴き立てないで眠らせてくれよとの意。無為を愛する隠士の情である。……鳥の声をうるさがりながらも、又その鳥を相手に閑を楽しむ意もある。（頴原博士『芭蕉俳句新講』）
と見るのが至当である。この句で最も眼をひくのは、独得の句切れであろう。普通ならば、「能なしの寝たき我を」と「我」に続けてしまいそうなところを、「寝たし」で切っているのは何故であろうか。これについては、服部畊石氏が『芭蕉句集新講』でいわれたように、「寝たき」では「我」の説明にとどまるのに対して、「寝たし」とすることによって、しみじみ眠い状態をあらわそうとする意図があったと考えるべきであろう。加藤楸邨氏は、
行々子へのよびかけのようになっているが、実際はほとんどひとり呟く体である。「能なしの、ねぶたし。我を、行々子」という短く切れた調子には、もの憂くうとうとした時の独語のような口調があって実におもしろい句である。「能なしのねぶたし」から「我を」への微妙なうつりゆき、「我を」の「行々子」への急転する続きぐあいなど、技巧としても無類のものである。（『芭蕉全句』）
と絶賛しておられる。鳥の名に「仰々し」が掛けてあることも確かであろう。
「能なしの」の「の」についても、色々の考え方が出来る。「能なしの（我は）」の意として通ずるが、「（我は）能なしで、眠たいばかりだ」と取るのも一解である。加藤楸邨氏は『全句』に於いて、連体修飾語と主語と二様の取り方を考えておられるが、「寝たし」は用言だから、「連体修飾語」というのは誤解であろう。また、頴原博士は「我

を」の下に「眠らしめよ」の語が略されていると説かれた（『新講』）けれども、山本健吉氏はこの説を批判し、句意や鑑賞にも及んで次のように述べられた。

……こう言葉を補うと、意味が限定されてしまうきらいがあり、むしろ無限定のままに味わった方が興味深い。半醒半睡のままにつぶやく、片言めいた面白さがある。たとえば、この「我を」について、和辻哲郎は「意味はっきりかたづけて説明することができません。四方八方に響いてゐるのですから」と言っている。穎原退蔵のように、「我を」の下には「眠らしめよ」の語が、おのずから略された形になっていると言ってしまっても、詩の解釈としては浅まなものになる。むしろ、沼波瓊音の言うように、「俺をどうしろといふのか」と言った気持であり、あるいは、放っておいてくれという言葉が口の中で消えて、ムニャムニャムニャというつぶやきになったような感じである。……

「能なし」とは阿呆である。初夏のものうい気候に、呆けてうとうとと眠っている自分ということで、「何の能もない自分」（楸邨）という反省を含んだ言葉ではない。自分を道化にすることで、言葉の布置も表現も、すべて道化ている。「能なしの、眠たし。我を、行々子」という、句がポツポツと切れた表現は、稚拙さの効果とでもいうべきものを、最大限に発揮している。「能なし」「眠たし」「行々子」と、全体として「し」音が脚韻となり、しかも前半はn音が、次いでw音が、最後にg音が優位となって、音韻の変化の上でも快適である。……呟くと言うより、ほとんど寝言を言っているような趣である。むしろ、客体と主体とが混沌と交ざり合ってしまったような表現になっている。「眠たき」でなく、「眠たし」と切ったところも、「我を、行々子」という言葉の連鎖が、つながらないようでつながるところも、不思議な表現効果を発揮している。即興的であり、また甚だウィットに富んでいる。行々子を叱りながら、行々子に向って心が開かれている。「閑古鳥」の句とこの句とを比較すれば、前者は厳粛であり、後者は滑稽であるが、ともに他者に向って開かれた自分、両者の交流によってはじ

めて存在する自分の詩心を示している点では、逕庭はないのである。（『芭蕉その鑑賞と批評』）
右のうち、「能なし」を単なる阿呆と見る説に私は同じ難いが、リズムや音韻の効果とも相俟って、主体客体の渾融した不思議な世界を創っていることは、ここに説かれた通りであろう。対象に向って開かれた心は、即ち「軽み」に通ずる心であったと思う。

676　橘やいつの野中の郭公　（卯辰集）

土佐みやげ

夏季（橘・郭公）。

語釈 ○**橘**　「タチバナ」。蜜柑の古名。小さくて酢っぱい野生の種類は今も近畿以西の山地に見られる。花は夏の到来を知らせるものとして歌に詠まれている。「橘……夏也。……花橘とは盧橘とかけば、是にも花の字は嫌まじき儀ながら、花をほめてむかしのものなづけたれば、花橘と云時は花の字に二句嫌べし。惣別九種の柑類ををしなべ橘とももはな橘とも哥道には申也。さくとか匂ひとかなくば、夏にはなるべからず。其故は天智天皇の御哥に、橘はみさへ花さへその葉さへ枝に霜をけどましときはの木共侍り。此道理は有ながら、花を賞翫して橘とよび出ゆへに、咲、匂の詞そはでも皆夏になる也。……此外に、だい〳〵・きこく・からたち・きんかん・雲州橘・久年母・蜜柑等、橘の事ながら、花はいはず、其実を指て申せば、夏にもならず、秋か冬かになりて、別くのやうの物なれば、……橘一の外に今一句有べきか。……薬種の名の陳皮・橘皮・枳殻・枳実・青皮等、植物にもならず、季をももたず。薬種の名になりて、別段の物なれば、其沙汰に及まじき義ながら、此内にも橘皮一種は橘の字むつかしければ、右三句の内成べし」（『御傘』）「大和本草曰、橘、たちばなと訓ず。蜜柑也。其花を花橘と古歌によめり。又曰、盧橘を金橘とする説よし。司馬相如ガ上林賦に枇杷をのせ、又盧橘夏熟すと云。然ば別もの也。……私云、……総て九種の柑類を橘と云由、御傘に演られたり。秘説には蜜柑を以て正説とはしけるに、盧橘は金柑なる事明らか也。此盧橘の二字を限て花橘と訓ずる事、万葉集或は順和名にも無レ之」（『滑稽雑談』）「明ぼのはたちばなくらし旅姿　我峯」（『続猿蓑』下）「Tachibana.」（『日葡辞書』）。○**いつの野中の郭公**　「何時の野中の郭公」。「いつ」は記憶の中で何時か定かでない或る時。その時広野の中でほととぎすの声をきいたのである。

「百舌鳥のゐる野中の杭よ十月　嵐蘭」（『猿蓑』巻一）「Nonaca.」（『日葡辞書』）。

大意　橘の花のなつかしい香が漂う中、ほととぎすの声が聞える。何時か何処か野原の真中で、今と全く同じ気分でほととぎすを聞いたものだったが。

考　金沢の北枝の撰した『卯辰集』初出の句である。この集には元禄四年四月の奥書があり、「橘」「郭公」等初夏の季題を持つ句は、三年夏以前に成った可能性が大きいが、ここでは姑く四年四月以前の成立と見てここに配しておく。

「橘」には「さつきまつ花たちばなのかをかげば昔の人の袖のかぞする」（『古今集』巻三、よみ人しらず）、「野中」には「いにしへの野中のし水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ」（『古今集』巻十七、よみ人しらず）という古歌の連想があり、何れも昔の恋を偲ぶ意である。人には同じような体験を何時かしたことがあったと記憶乃至は気分が蘇えって来ることがあるもので、この句の場合恋は余り関わりはあるまいが、橘の花の香の中でほととぎすの音をきいた記憶が、同じ体験によって喚起されたのであろう。過去の体験はほととぎすの声だけとする考え方もあるが、両者が重なってこそ昔の同じような体験が印象強く蘇えって来たのではあるまいか。「いつの」が甚だ巧みで、この句の感傷的な抒情味は、この一語にかかっているといってもよい。

橘も野中も古今集に見えてゐる。筋路は分明で無いがしかも情は感じられる。筋を分けて論理的に解釈する意味よりも直覚で感情が摑める。これが幽玄体である。詩には幽玄と平明との行き方があるが、之れはその幽玄の句である。（『芭蕉俳句研究』）

という幸田露伴の説の通りであるが、この句の場合は体験が基盤としてあったのであろう。それと古典的雰囲気が見事に結合した佳作なのである。

677

五月雨や色帋へぎたる壁の跡（嵯峨日記）

雑談集・蕉翁句集草稿・先手後手・落柿舎日記

落柿舎

五月雨や色紙まくれし壁の跡（笈日記）

喪の名残・泊船集

落俤（ママ）舎に遊ぶ時

五月雨や色紙へ來ル壁の跡（蕉翁句集）

夏季（五月雨）。

語釈 **○色帋へぎたる**「色帋（しきし）」は、歌や句を書く方形の厚紙。表面に五色の文様や金銀箔を散らすなどしてある。大小の別があり、大きさにもそれぞれ決りがある。「帋」は「紙」と同じ。「へぐ」は、貼り合わせたものなどをはがす意の俗語。ここは色紙を壁に貼って飾りとしたものをはがすのである。「苗代の色紙に遊ぶ蛙哉」（蕪村『落日庵句集』）「片風たちて過る白雨　胡及　板へぎて踏所なき庭の内　一井」（『あら野』員外）「Xiqixi.」「Fegui, u, eida.」（『日葡辞書』）。**○壁の跡**「壁（かべ）の跡（あと）」。室内の壁に残る色紙の跡をいう。「紙燭して尋て来たり酒の残　其角　上塗なしに張てをく壁　孤屋」（『炭俵』下）「Cabe.」（『日葡辞書』）。

大意 さみだれが降り続いて何とも湿っぽい。部屋の壁には色紙をはがした跡が、まざまざと残っている。

考 「洒落堂頽破」（『雑談集』）「おなじく」（『泊船集』）「洛の何某去来が別墅は、下嵯峨の藪の中にして嵐山のふもと、大井川の流に近し。此地閑寂の便りありて心すむべき処なり。彼去来物ぐさきおのこにて、窓前の艸高く、数株の柿の木枝さしおほひ、五月雨漏尽して畳障子かびくさく、打臥処もいと不自由なり。日かげこそかへりてあるじのもてなしとぞなれりけれ」（『先手後手』）等の前書がある。『嵯峨日記』五月四日の条に、

　明日は落柿舎を出んと名残をしかりければ、奥口の一間〳〵を見廻りて

としてこの句を出し、大尾としているので、成立の事情は明らかである。其角の『雑談集』(元禄五年刊)の前書は膳所の珍碩亭としているが、其角らしい杜撰とする外ない。『泊船集』の「おなじく」は、「柚の花に」(Ⅳ670)の句に「落柿舎」と題したのを承けたのである。『先手後手』(風陽・兎什撰、明和四年刊)は後年の書ながら、それに序を書いた茂蘭が加賀行脚中に寓目した資料を写したもので、その文の内容は信憑性が高い。恐らく真蹟に拠ったのであろう。『笈日記』の句形は初案の可能性もないではないが、土芳の『蕉翁句集草稿』には、

此句落柿舎に遊る時の□也。自筆に有。笈日記に、色帋まくれしと有。違也。

と明記してあり、誤伝と認められる。元禄八年正月廿九日付許六宛去来書簡に、「五月雨に色紙めくれし壁とむすび」とあるのと同系の誤りらしく、句形に関しては、去来は兎角杜撰な点が目立つのである。『蕉翁句集』の句形は、「へきたる」の仮名に妄りに字を宛てたもので、信じ難い。

『嵯峨日記』によると、五月二日の夕刻から降り出した雨が翌日一杯降り通し、四日昼に至って漸く止んだ。本格的な梅雨に入って、物皆じとじとと湿っていたであろう。この部屋も昔は壁上に色紙や短冊を貼り交ぜにした数奇をこらした趣が偲ばれるにしても、「色帋へぎたる壁の跡」は唯わびしいばかりである。ここでは、凡てを降り腐す梅雨の気分と、嘗ての豪奢も夢と消えた壁の跡のわびしさとが、響き合い匂い合う関係にある。古注には、定家の小倉山の山荘(時雨の亭)に百人一首の色紙を張った故事を引いて、「むかしは時雨の亭、今はさみだれの落柿舎と対した」(『俳諧一串抄』)と見るような説が多いが、それよりも、初五と中七以下とが「微妙に通い合う把握の中に別離の情が匂い出ている」(『芭蕉全句』)とする加藤楸邨氏のような説が共感を誘うのである。昔の華やかさを偲びつつも、今の侘びた気分が中心になっている。

678

粽結ふかた手にはさむ額髪（猿蓑）

蓮の実・陸奥衛・泊船集・三冊子・蕉翁句集

粽巻片手にはさむむかふがみ（五月十三日付浪化宛去来書簡）

夏季（粽）。

語釈 ○**粽結ふ**「粽結ふ」。「粽」は「茅巻」の義で、糯米や粳、或いは米の粉を蒸し、搗いて餅にし、それを茅・笹などで包み、藁や菅でしばって蒸したもの。古代の中国で端午の節に糯米を菰の葉で包み、五色の糸でしばって供え物にした習俗が輸入されたのである。京では有名な道喜の粽のように、近世初期から菓子屋で売られるようになった。包む材料や形によって色々種類があり、粽を作ることを「結ふ」というのである。既出（Ⅰ75）。「浜荻に筆を結せてとしの暮（呂丸）」（『続猿蓑』下）「Voqeuo yú.」（『日葡辞書』）。○**かた手にはさむ**「片手に挟む」。片手で髪を掻き上げて耳に挟む。いそがしく立ち働くさまである。「かりぎぬのくびのかほにかかれば、かたてしておしいれて」（『枕草子』百四十五段）「みゝはさみして、そゝくりつくろひて」（『源氏物語』横笛）「Catate.」「Fasami, u, ôda.」（『日葡辞書』）。○**額髪**「ヒタヒガミ」。王朝時代の女性の髪型。額から左右の頬へ分けて垂らし、肩のあたりで切り揃える。「みづからひたひがみをかきさぐりて」（『源氏物語』帚木）「Fitaigami.」（『日葡辞書』）。

大意 粽を包みながら、片手で垂れて来る髪を掻き上げては耳に挟む女の姿よ。

考 初出の『猿蓑』には元禄四年五月の丈草跋がある。元禄七年五月十三日付浪化宛去来書簡に、

さるみの集撰し候而翁へ内らんに入候処に、古キ草紙・物語の事などおもひよせ候発句少く候とて、

粽巻片手にはさむむかふがみ

此も源氏の内よりおもひよられ候。

とあり、『猿蓑』の編輯が一応終ってから、最終段階で追加されたものと見られるので、元禄四年五月頃の作として此処に配しておく。但し、「粽巻」「むかふがみ」等の句形は、うろおぼえで書いたものらしく、信じ難い。右のよう

な成立事情は『泊船集』にも「物がたりのすがたも一集にはあるべきものとて、去来が猿みのに遺はされしよし給は(ママ)りぬ。前がき今略しぬ」と付記があり、『三冊子』に、

この句、ものがたりの体と也。去来集撰の時、先師の方よりいひ送られしは、物語りの姿も一集にはあるべきものとて贈ると也。（赤雙紙）

とあるのは、『泊船集』の記事に拠ったものであろう。

去来は『源氏』から思い寄った趣向というが、特に『源氏』のどの部分に拠ったとは決め難い。加藤楸邨氏は、帚木の巻の、

まめ〳〵しきすぢをたてゝ、みゝはさみがちに、びさうなきいへとうじの、ひとへにうちとけたるうしろみばかりをして

とあるあたりの俤と見ておられる（『芭蕉全句』）。右の一条は、唯ひたすら家事に奔走する世話女房を非難がましく書いているけれども、この句中の女性は「美相なき家刀自」ではない。端午の粽を作ること自体に優雅な気分があり、家事にいそしむにしても、あいた方の手で顔にかかって来る髪を掻き上げる白い手にも艶な感じが匂う。忙しげに働く「耳挟み」を下敷きにしながら、それを節供の雅びに転じたのであって、その辺に俳諧があるのではなかろうか。

一方、支考は、この句について「画図の体」とし、「菱川が色絵をつくし」（『俳諧古今抄』）と評しており、浮世絵風の現代風俗を看て取っている。結局、

……浮世絵の官女絵にしてもそうだが、平安朝の風俗の写実ではなく、江戸時代の女の所作を物語的に表現したもの。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集』1、井本農一博士）

と解すべきか。王朝の上臈のすることではない「耳挟み」を粽の雅びで包んだことと、それは微妙な兼合いをなしているようである。

この句には格別の切字はなく、初五と中七の終りが「結ふ」「はさむ」と動詞の連体形になるので、調べはやや平板な感じである。しかし「額髪」の印象は際立っており、殊更な切字はなくとも、下五で十分切れているといえよう。

679　日の道や葵傾くさ月あめ　（猿蓑）

泊船集・蕉翁句集・青ひさご

夏季（葵・さ月あめ）。

語釈　○**日の道**　「日の道」。太陽の通る天空の道。黄道。○**葵傾くさ月あめ**　「葵傾く五月雨」。「葵」と総称される植物は種類が多い。「冬葵」は、平安初期から種子を食用薬用にする為に栽培されていた。「二葉葵」は、京の賀茂神社の葵祭の神事に用いられる草で、徳川家の葵の紋もこれである。「心もてひかげにむかふあふひだにあさおく霜をおのれやはけつ」（『源氏物語』藤袴）と詠まれたものは「向日葵」とされる。「立葵」は近世期から盛んに栽培され、この句に詠まれたものはこれであろう。高さ約二メートル、全体に毛が密生し、心臓形の葉の縁に鋸歯があり、花は赤・白・黄・黒などとりどりである。向日性の植物の花が、見えない太陽に向って「傾く」さまをいった。「傾く」は、『芭蕉句選』に「かたぶく」、『青ひさご』（白芹撰、文化八年成）に「かたむく」と仮名書きしているが、普通に「傾く」とよんでよいであろう。「さ月あめ」は「さみだれ」に同じ。梅雨期の雨で、背景としての季節である。既出（Ⅱ290）。「葵（ふた葉のあふひ こあふひ もろはぐさ つるあふひ たち葵）／あふひは。源氏の巻の名によせ。車あらそひ。物のけの沙汰をもいひ。花の日につきてまはるありさま。よくあしもとをまぼるといへる心ばへをもし侍し。又昔夢の告ありて賀茂のみあれの日。人々あふひ桂のかづらをかけし事あるをもろかづらなども云り。賀茂の社司等。しかるべき所々へたてまつりけるあふひを。みす・きちやうなどにかけわたせるけしきをもつらねなす」（『山之井』）「葵は総名にして種類多し。人家往々に賞するは蜀葵也」（『滑稽雑談』）「むぎがらにしかるゝ里の葵かな　鈍可」（『あら野』巻三）「かたむくまつの枝ぞくちぬる　直なるをまぼれる神の道なるに」（「大山祇神社連歌」）「Auoi.」「Catamuqi, u, uita.」（『日葡辞書』）。

大意　降り続くさみだれに、久しく日の目も見ない。葵の花の傾いているあの方角が、太陽の通る道なのだな。

考　『猿蓑』初出の句。それが元禄四年五月に成ったので一応ここに置いたが、「粽結ふ」の句のように、編成る間

際の作ではあるまいから、元禄三年夏までには成っていた可能性が大きい。『青ひさご』には其日庵所蔵の葵の自画賛として収めてある。

この句の葵を「ひまわり」と見る説もあるが、梅雨の頃には、ひまわりはまだ咲かない。立葵を詠んだものとしてよかろう。向日性のある草が、天日を見ない梅雨どきの鬱陶しい空のもとでも、太陽の方へ向って傾いている。そのさまを見据えつつ「日の道や」と打出した表現が、如何にも確かである。山本健吉氏は『芭蕉その鑑賞と批評』に於いて、発想の契機は葵であるが、この句の主題は「日の道」に外ならず、それは幾日も降りこめられた庵住の作者の、願いを籠めた内観的イメージであるとされた。だが、私はこの場合、晴れ間を願う作者の気持はどうあれ、句の中心は飽くまで「葵」にあると思う。その傾く姿に謂わば自然の生成の気を見ているのであって、傾く本源は「日の道」にあるから、それは葵の傾く姿から導かれたものであろう。それを逆置して最初に置くことによって、表現に力を与えているのである。やはり森羅万象の背後に「造化」を見る芭蕉の思想が基底をなしており、目立たないが深みのある句といえよう。古注に見える道学流の余意などは余計なことである。

680　ほたる見や舩頭酔ておぼつかな（猿蓑）

ほたる火や船頭酔ておぼつかな（泊船集）

蕉翁句集

夏季（ほたる見）。

語釈　**○ほたる見**　「蛍見（ほたるみ）」。蛍の名所で舟を仕立て、水辺に乱舞する蛍を観賞すること。夏の季語になる。「蛍見や此宵闇に舟早し　蛾眉」（『平安二十歌仙』）。**○舩頭**　「センドウ」。川に出した舟を棹で操る漕ぎ手。「舩」は「船」の俗字。「雪の日や船頭どの丶顔の色　其角」（『あら野』巻二）「Xendô. Funeno caxira.」（『日葡辞書』）。**○酔ておぼつかな**　「酔（よ）うておぼつかな」。「おぼつかな」

は、漕ぎ方が不確かで危っかしいさま。形容詞の語幹を投げ出して、詠嘆の気持をこめた表現である。「巳のとしやむかしの春のおぼつかな　荷兮」（『あら野』巻二）「Vobotçucanai.」（『日葡辞書』）。

大意　楽しい蛍見は今たけなわ。船頭までが酒に酔って、棹さす手許も危っかしいことよ。

考　初出の『猿蓑』には、前に「闇の夜や子共泣出す蛍ぶね」という凡兆の句があり、「勢田の蛍見　二句」と題してある。二句は恐らく同じ時の吟であろう。芭蕉は貞享五年夏大津に来た時にも瀬田川の蛍を見ている（Ⅱ396参照）が、凡兆を帯同していたとすれば、元禄三、四年頃の夏と見るべきであろう。『猿蓑』の成稿が五月なので四年は余り時間的余裕が無さすぎ、三年作の可能性はかなり高い。『泊船集』の「ほたる火」は「見」と類音でもあり、杜撰な誤伝と思われる。

瀬田川の石山の下にあたる蛍谷辺の急湍に、蛍見の船を浮かべた時の作であろう。ここの蛍は、大きさも他よりすぐれており、北は瀬田の橋、南は供御が瀬まで二十五町にわたって飛びかう。夏至を過ぎると宇治橋あたりへ下って有名な蛍合戦が行われるのである。当時は瀬田川に船をうかべ、一盞傾けながら豪奢な蛍見が行われたらしい。（『芭蕉全句』）

という加藤楸邨氏の解説は、この句の場の理解に恰好である。振舞酒に酔った船頭の、手許足許のふらつく体を冷やかしているので、急流に浮ぶ舟を不安がっているのではない。客一同は勿論酔っており、はずむような調べに、興じた気分があらわれている。

681　風かほる羽織は襟もつくろはず　（芭蕉庵小文庫）

丈山之像謁二句

泊船集・蕉翁句集

夏季（風かほる）。

語釈 **○丈山之像謁** 「丈山之像に謁す」。「丈山」は、石川丈山。江戸時代初期の隠士で、漢詩をよくした人。既出（Ⅱ344頁）。その「像」は、画像であろう。［考］参照。「謁」は、お目にかかること。丈山を尊敬していう。「磐斎老人のうしろむける自画の像に」（『皺筥物語』、芭蕉発句「団扇もて」前書）「別当代会覚阿闍利に謁す」（『おくのほそ道』）「Zŏ.」（『日葡辞書』）。**○二句** 『芭蕉庵小文庫』には、この句の次に「さかさまに扇をかけてまた涼し」という丈草の句があり、それを含めての前書であることを示す。二句は同時の吟なのである。**○風かほる** 「風薫る」。青葉をわたって吹く夏の風の形容。既出（Ⅲ512）。「かほる」は、「かをる」の仮名ちがい。ここで切れる。**○羽織は襟もつくろはず** 「羽織」は、和服の上半身にはおる上着。既出（Ⅰ116）。その「襟」の形も正さずに、無造作な着方をしているのを「つくろはず」といった。「更衣襟もおらずやだゞくさに　傘下」（『あら野』巻三）「心をつくしてつくろひけさうじ、おとらじとしたてたる、女絵のをかしきにいとよう似て」（『紫式部日記』）「Yeri.」「Miuo tçucurô.」（『日葡辞書』）。

大意 羽織は襟の形も正さずに無造作な着方をしているお姿は、薫風の吹きわたるような、さわやかな趣がある。

考 「丈山の像」（『泊船集』）「丈山之像謁」（『蕉翁句集』）等の前書が見える。曾良の『日記』元禄四年六月一日の条に、

昼ヨリ白河ニ趣、一条寺（ママ）丈山之旧庵ヲ見テ、下賀茂ニ遊、帰。去来・丈草・翁也。

とあり、当時上京していた曾良は、前夜京の史邦宅に泊り、この日芭蕉・丈草・去来らと連れ立って、一乗寺下り松の東なる丈山の旧庵詩仙堂（現京都市左京区一乗寺門口町）を訪ねたのである。寛文十二年五月二十三日に九十歳で歿するまで丈山の住んでいた所で、黒川道祐の「東北歴覧之記」に詩仙堂のさまを叙して、

堂中ニハ詩仙ノ図幷ニ六物残レリ。床ニ丈山ノ画像アリ。

とあり、中国の詩仙三十六人の絵額の外、床の間に丈山の画像が掛っていたのである。丁度季節が合い、『小文庫』に同時の吟を載せる丈草も同行しているから、この句の成ったのは六月一日に違いない。『芭蕉句選』は「風薫るはをりや襟もつくろはず」という句形を伝えるが、何に基づくのか明らかでなく、切字を添えようとしたさかしらかと

も疑われる。潁原博士の『新講』の説の如く、この句は上五で切れると見るべきであろう。
容儀を正さない丈山の絵姿に脱俗の高士の風格を感じ、その高風を「風かほる」に象徴したのである。薫風は詩仙堂を訪れた折柄のものでもあろうが、ここでは丈山の風格を仰慕する気持が託されている。しかも単なる譬喩ではなく、季節感と共に丈山の高風の象徴の域にまで達している感が強く、この季語の表現力が最高に発揮された例といってよい。人物賛の至れるものである。「風かほる」を「羽織」にかかるとする説もあるが、そうすると「羽織や」と切字が欲しくなるのではなかろうか。私は「羽織は」に改めて言い起す感じがあるように思う。そういう見地からも、初五で切れるのは必然なのである。

682　みな月はふくべうやみの暑かな　（葛の松原）　――蕉翁句集

　　　晝は猶腹病煩の暑かな　（瓜作）　――百歌仙

夏季（みな月・暑）。

語釈　○**みな月**　「水無月」。陰暦六月をいう。既出（Ⅰ158）。○**ふくべうやみ**　「腹病病み」。「腹病」は、腹水がたまって腹がふくれる病。それをわずらった病人をいう。「病」の字音は「ビヤウ」が正しい。「ふくびやうたゝみにあがらず」（『毛吹草』巻二）「足引の山田の苗や中風やみ　宗牟」（『犬子集』巻三）「Fucubió. Farano yamai.」「Yami.」（『日葡辞書』）。○**暑**　「暑さ」。「夕がほによばれてつらき暑さ哉　羽紅」（『猿蓑』巻二）。

大意　夏の盛りの六月は、腹病をわずらう人も斯くやと思われる暑さだよ。

考　板本の初出は元禄四年六月の序のある其角門の琴風の撰した『瓜作』であって、「昼は猶」の句形が元禄四年夏までに成っていたことは確かである。同五年五月に成稿した支考の『葛の松原』の句形「みな月は」に誤伝の可能

性もなくはないけれども、一応これを後案と見て本位句とした。

『葛の松原』に、

○いづれの年の夏ならむ、みな月はふくべうやみの暑かなといふ句を、人の得しらざりけむは、源氏のまき〳〵に心をとゞめねば、さも有べし。

とあり、『源氏物語』に典拠のあるような言い方をしている。これを帚木の巻の、学問のある女と藤式部丞との話の中で女のいう詞、

月頃ふびやう（風病）おもきにたへかねて、ごくねちのさうやくをぶくして（極熱の草薬を服して）、いとくさきによりなむ、えたいめむ（対面）たまはらぬ。

を踏まえたと見る説が多い。『源氏』の「風病」は風邪のことで、風邪の高熱に悩んでにんにくを服んだので大変臭いというのである。『瓜作』に「腹病（フウ）」と振仮名がある為に、兎角「風病」と混同されやすいけれども、振仮名よりも「腹病」とある漢字の方を重視すべきであろう。さて、「腹病」は下痢などを伴なう胃腸障害一般を指すというのが通説であるが、『日葡辞書』では「フクビヤウ」を解して、腹がふくれて顔色が黄緑色になる病気としている。腹水がたまって腹のふくれる脹満、水腫の病で、この病人の様子は如何にも暑苦しい。この句の「腹病」は恐らくこれであって、『源氏』の「ふびやう」を踏まえたにしても、其処から脱化して作者当代の「腹病」にしたところが俳諧なのであろう。極暑の状況気分をあらわすのに「腹病」を引合に出して来たもので、その病人のイメージを以て極暑の苦しさを表現したのである。「実感を深めてゆくことを途中ではぐらかしたようなところがあり、俳諧の笑いにはもう一歩のうらみがある」（加藤楸邨氏『全句』）という評もあるが、思いつきに過ぎないにせよ、表現力のある句ではある。

683

水無月や鯛はあれども鹽くじら（葛の松原）

夏季（水無月）。

語釈 ○**水無月**　「ミナヅキ」。○**鯛はあれども**　上等な「鯛（たひ）」は兎に角、それは勿論としても。「みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こぐ舟のつなでかなしも」（『古今集』巻二十、東歌）の歌を思わせる。「鯛は花は見ぬ里も有けふの月　西鶴」（『阿蘭陀丸二番船』）「Tai.」（『日葡辞書』）。○**塩くじら**　「塩鯨（しほくぢら）」。皮つきの鯨の脂身を塩漬にし、薄く切って熱湯をかけてから、冷水にさらした食品。酢味噌などで食べる。「さらしくぢら」に同じ。歴史的仮名遣では「くぢら」が正しいが、『日葡辞書』には「Cujira.」とあり、早く仮名の混同を生じた語で、近世初期に「じ」と書いた例が少なくないという。

大意 上等な鯛は勿論結構だが、それはそれとして、酷暑の六月には、見た目に涼しげな塩鯨が一番だ。

考 元禄五年五月十五日に成稿した支考の『葛の松原』に初めて見え、「水無月」の語があるので、元禄四年六月までには成っていた句と推定される。但し、「支考がこの句を『葛の松原』に入集できたのは、元禄五年六月下旬に奥羽旅行を終えて江戸に帰ってきた頃に芭蕉から示されたからであろう」（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』井本農一博士）として、五年の部に入れる見方もある。

鯛の美味は誰しもいう。しかし、夏場の鯛は実際のところ味が落ちるし、そういう豪奢な趣味よりは、いわば庶民的な「塩くじら」のさわやかさに新味を見出したのであって、支考が『葛の松原』で、

みな月のしほ鯨といふものは、清少納言もゐしらざりけむ。いとめづらし。風情の動ざるところは、みづからしり、みづから悟るの道ならむかし。

と評する通り、「みな月のしほ鯨」は酷暑の節の新しい風情として「動ざるところ」なのである。

684 己が火を木々の螢や花の宿　（己が光）

夏季（蛍）。

語釈 **○己が火**　「己が火」。自分のともし火。蛍の放つ光をともし火に見立てた。「火」は下の「宿」と縁を持つ。「色付を田にみちやつゞける　おのがもる野べをすみかと人のきて」（「大山祇神社連歌」第九）「雪げにさむき嶋の北風　史邦　火ともしに暮れば登る峯の寺　去来」（『猿蓑』巻五）「Vonogami.」「Fiuo tobosu, l, tomosu.」（『日葡辞書』）。**○木々の蛍や花の宿**　「木々の蛍や花の宿」。「花の宿」は、桜の木蔭にある家。（Ⅱ*358*）参照。蛍の光を花に見立て、蛍の居る所を「花の宿」といったのである。「や」は疑問の助詞で切字ではない。「花の宿　居所也。花を宿とするは非二居所一」（『御傘』）「女良も客も銘々木々の花心なる座敷に」（『浮世栄花一代男』巻一ノ四）「下々の下の客といはれん花の宿　越人」（『あら野』巻一）。

大意　木々の蛍はまことに目もあやな有様だ。あの蛍たちは自分のともし火を花として、花の宿に泊っているのだろうか。

考　板本初出の『己が光』に見える撰者車庸の元禄五年夏に誌した自序に、

……勢多石山の蛍さかりなりけると魚荷に告しをうれしくも、卯の花のさらに咲ころ槐之道をさそひ、夜ぶねのつなもあけやすふ宇治越にかゝりて、……そこらのけしきをうち興じけるに、膳所の吟友たれかれを先としてきたり、互に人をおどろかさんと方寸をくるしめしに、此宿にも翁の吟行残されしとて持いづるを、おのおの眉をならべ、かしらをつき付て味ひ侍るに、実も深長なることを覚ふ。さるから此句を上に置て、その夜のたはぶれをならべ、己が光とは名付侍りぬ。

と述べている。これによると瀬田石山辺のさる家に芭蕉が書き残した懐紙か短冊にこの句が記されていたわけである

が、元禄五年夏には芭蕉が既に江戸に帰っており、元禄三、四年の夏上方滞在中に成った句と推定されよう。
この句を普通の語序にもどせば、「木々の蛍や己が火を花の宿とする」となるところで、「蛍自身の光りの火を木々の花と見立てゝ、其木々に花のやどかる蛍よ、と云ふたもの」（『芭蕉句集講義』角田竹冷説）という見方が大体よい。支考は『東華集』（元禄十三年刊）で、この句を「錯綜顛倒之法」の例として引いている。蛍火を花に見立てるところから発した逸興に過ぎないが、蛍の華やかな趣はあらわし得ていると思う。

初秋

685 **初秋や疊ながらの蚊屋の夜着** （真蹟懐紙）

西の雲・曠野後集・芭蕉庵小文庫・喪の名残・泊船集・誹諧曾我・夏の月・蕉翁句集

秋季（初秋）。

語釈 ○**初秋** 「ショシウ」。「ハツアキ」と訓んでもよい。陰暦七月。「当夏暑気つよく、諸縁音信を断、初秋ゟ閉関」（霜月八日付曲翠宛芭蕉書簡）「**Xoxû. Aqino fajime.**」（『日葡辞書』）。○**初秋** 句中の語は「ハツアキ」と訓む。既出（Ⅱ*413*）。○**畳ながらの** 「畳みながらの」。畳んだままの。この「ながら」は、「年暮ぬ笠きて草鞋はきながら」（Ⅰ*221*）と同じ用法である。「縫ものをたゝみてあたる火燵哉　落梧」（『あら野』巻五）「**Tatami, u, ôda.**」（『日葡辞書』）。○**蚊屋の夜着** 「蚊屋」は、夏中蚊を防ぐ為に床の上に吊る麻織のとばり。「夜着」は、大型の着物の形に作って夜寝る時に掛ける衾。ここは夜着の代りに蚊屋を掛けることをいった。「蚊屋」（Ⅰ*77*）「夜着」（Ⅰ*164*）共に既出。「蚊屋」は夏、「夜着」は冬の季語に当るが、ここでは「初秋」が季語として立つ。

大意 さすがに初秋だ。蚊屋は畳んでも夜は冷えて、それを畳んだまま夜着の代りに掛けて寝る。

考 句の板本初出は元禄四年十月に成った『西の雲』（ノ松撰）で、底本とした柿衛文庫蔵の真蹟懐紙には、同年中秋名月の句などが記されている。無署名ながら芭蕉の草稿体筆蹟として疑いはなく、四年七月の作を江戸へ下る前に

記したものであろう。

もう蚊もあまり居ないので、蚊屋は畳んだまゝ吊りもしないで寝た。夜中になると流石に初秋の肌寒さが感ぜられる。そこで足許においてあつた蚊屋を、そのまゝ夜着のやうにかけて寝たといふのである。(頴原博士『新講』)

という所説で解は十全である。夏の名残はありながら、夜はさすがに冷気を覚える初秋の季節感と、木曾塚無名庵などの隠士らしい生活の侘びがよくあらわれている。安東次男氏が、

……「蚊屋のなごり」「別れ蚊屋」という季語(初秋)を知っていれば、「畳ながらの蚊屋」が面白く読める。但、これはただちに蚊屋仕舞という意味にはならぬから、季を持たせるちょっとした工夫が、「初秋や」と冠する楽みを二重にしている句だ。作の手順でいえば、最初に出来たのは下十二字だろう。

蚊屋はそろそろ仕舞頃だが、あらたまった夜着の用意もまだ必要でない、明方など急に冷やかさを身に覚えて目がさめる、そういう時節のくらしの気分をよく捉えている。(『芭蕉発句新注』)

と述べておられるのも良い。但し、「ながら」を「……しながら」の意に解しておられるらしいのは、通説の見方とは違っており、私は採らぬ。なお、季節は冬ながら、野ざらしの旅で大垣の如行の家にはじめて宿った時、

霜の宿の旅寐に蚊屋をきせ申　如行

古人かやうの夜のこがらし　蕉(『野ざらし紀行』初稿、酬和の句。『はるの日』には発句の初五が「霜寒き」とある)

という付合があり、蚊屋を衾代りにすることは、折々あったのかも知れない。

686 牛部やに蚊の聲闇き残暑哉(三冊子)

牛部屋に蚊の聲よはし秋の風　（芭蕉庵小文庫）

泊船集・喪の名残・星会集・ばせを盥・桃の白実

秋季（残暑）。

語釈 **○牛部やに蚊の声闇き**　「牛部屋に蚊の声闇き」。「牛部や」は、労役に使う牛をつないでおく小屋。「闇き」は「蚊の声」の直観的把握であるが、牛部屋の闇さをも思わせる。「牛部屋はこえをふまするとて、いくらもあくたを入をく事也」（『類船集』芥の条）「残る蚊に袷着て寄る夜寒哉　雪芝」（『壬生山家』）「Ca.」（『日葡辞書』）。**○残暑**　「ザンショ」。立秋以後の暑さをいう。「残暑秋也」（『御傘』）「かまきりの虚空をにらむ残暑かな　北枝」（『艶賀の松』）「Zanxo. Nocoru atçusa.」（『日葡辞書』）。

大意 むっとする牛小屋の中で、蚊の声が暗く響き、残暑が何とも堪え難いことよ。

考 『蕉翁句集草稿』に「辛未」と元禄四年の干支を頭注してあり、

此自筆物の句也。小文庫には、蚊の声よはし秋の風と有。

と記し、『三冊子』にも、

此句、蚊のこゑよはし秋の風と聞へし也。後直りて、自筆に残暑哉と有。（赤雙紙）

として、『小文庫』の句形を初案としている。輪雪の撰した『星会集』（宝永六年刊）には、朱拙秘蔵の巻として、初案形を発句とした路通・史邦・丈草・去来・野童・正秀らとの歌仙が収められた。その後『ばせを盥』（有隣撰、享保九年刊）『桃の白実』（車蓋撰、天明八年刊）にも同じ歌仙が見えるが、『ばせを盥』で路通が洒堂に変っているのは、その理由を審らかにしない。兎に角初案は、元禄四年の七月頃、京や膳所の連衆の会した席で、発句として詠まれたものと推定される。改案もそれから遠からぬ時であったろう。

両案とも牛部屋の特異な雰囲気を発想の契機にしている。塵芥の類を入れて牛に踏ませて堆肥を作る小屋の中は、窓などもなくて通気が悪く、芥の臭いに加えて牛の体臭も籠って、むっとした悪臭が鼻をつく。小屋の隅に唸る蚊の声も、秋風の吹くこの頃はさすがに弱ったというのが初案の表現である。これも一通りの句ではあるが、潁原博士も

指摘されたように、「弱し」という言葉が「却つて余情を浅くし、句を平凡にして居る」(『新講』)。これでは秋風の印象が強くなり過ぎて、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども」式の句情しか感ぜられないのである。

この句の改案は、「蚊の声聞き」という把握に思い到った時、瞬時に成ったのであろう。「海くれて鴨のこゑほのかに白し」(I *219*)を思わせる、音の色彩的把握であるが、それはそのまま牛部屋の暑苦しい闇さに通じ、残暑の感を真に生かすものとなった。もう「秋の風」は要らないし、「蚊の声」を弱しという必要もないのである。牛部屋と蚊の声が、いわば即物的に生かされ、残暑の季節感に響き合うものとなっている。歌仙の発句として思いつくままに作られた初案が、独立句として内容を充実させた例と見ることも出来よう。蕪村にも「古井戸や蚊に飛ぶ魚の音闇し」(『其雪影』)という句がある。

十五夜

687 米くるゝ友を今宵の月の客(笈日記)

泊船集・蕉翁句集・和漢文操・堅田集・巾秘抄

米くるゝ友を今宵の月の友(七瀬川)

秋季(今宵の月・月の客)。

語釈 ○**十五夜** 「ジフゴヤ」。八月十五夜、中秋名月の夜をいう。「十五夜の月に打出の浜いづこ 之道」(『あめ子』)。○**米くるゝ友** 「米呉るゝ友」。米を恵んで呉れる友。『徒然草』に「よき友三あり。一には物くるゝ友」(百十七段)とあるのを踏まえる。「米」は「ヨネ」と訓む説があり、[考]に引く兼好と頓阿の折句の歌の故事を背景にすれば、それも一理あるけれども、それを頭に置きながら俳諧として日常語の「コメ」を用いることは何等差支えなく、私は「コメ」と訓んでよいと思う。「Cure, uru, eta.」(『日葡辞書』)。○**今宵の月の客** 「今宵の月」は、中秋の名月をいう。「宵」は「霄」の略体。既出(I *81*)。その月見の席に

友を「客（きやく）」として招くのである。「名月／岩はなやこゝにもひとり月の客　去来」（『笈日記』）「Qiacu. Mare bito.」（『日葡辞書』）。

大意　米を恵んでくれる有難い友を、今宵の月見の席に客として、共々に楽しむことだ。

考　「三五夜於無名菴翫月」（『堅田集』）「三五夜於無名庵観月」（『巾秘抄』）等の前書がある。この句の成った前後の事については、『笈日記』湖南部に支考のくわしい記述があるので引用しておこう。

三夜の月

是もむかしの秋なりけるが、今年は月の本すゑを見侍らんとて、待宵は楚江亭にあそび、十五夜は木そ塚にあつまる。いざよひは舩を浮て、さゞ浪やかた田にかへるとよめるその浦の月をなん見侍りける。路通がまつ宵に月をさだむる文あり。支考が名月の泛湖の賦あり。阿叟は十六夜の弁をかきて、竹内氏の所にとゞむ。此三夜を月の本末と名づけて、成秀・楚江が二亭に侍り。文しげゝれば爰にしるさず。

十四夜

うかるなよ跡に月まつ宵の興　路通

まつ宵はまだ（ママ）いそがしき月見哉　支考

十五夜

米くるゝ友を今宵の月の客　翁

五器たらで夜食の内の月見哉　支考

支考が芭蕉に入門したのは、元禄三年の幻住庵滞在の頃と思われ、路通は三年の名月前後は奥州の白河に居た。元禄七年の名月は芭蕉が伊賀にあった時で、路通もまだ出入りを遠慮していた際なので、身辺に居る筈がない。こう見て来ると、『笈日記』に記された三夜の月見は、元禄四年の中秋の事と考えざるを得ないのである。なお、支考の編した『和漢文操』（享保十二年刊）に芭蕉作と称する「月見ノ賦」という文が収められているが、これは右の『笈日記』の

文に見える「支考が名月の泛湖の賦」に聊か手を加えて、芭蕉作と偽称したものらしい。ただその内容に到っては、当夜の情景をくわしく述べていて、参考とするに足るものなので、これまた次に引用する。

ことし琵琶湖の月見むとて、しばらく木曾寺にたび寐して膳所・松本の人〱を催すに、乙州は酒をたづさえて泉川に三日の名をつたへ、正秀は茶をつゝみて信楽(シガラキ)に一夜の夢をさます。今宵は茶といひ酒といひ、かたふの人も二派にわかれて、洒堂は灯にかたぶきて其茶に玉川が歌を詠じ、丈艸は月にうそぶきて其酒に楽天が詩を吟ず。支考は若く、木節は老ひぬ。智月は物のおぼつかなふ、かづきのあまのなま浮びならず。それが中にも惟然法師は酒におどろき茶に感じ、ほむるもそしるもそらに風吹て、爰に三子者の志をためざらんや。まして其外の友とする人も、峨々洋々の心ざしをしれれば、すべては飲中八仙のあそびならん。誠や、つれ〴〵の法師だに心をつくろはぬ友えらびは、かゝる月見の侘なるやと、思ひしまゝの草の庵に浮世の外の風狂をつくせり。

米くるゝ友をこよひの月の客

かくて三盃の興に乗じて、湖水の月に船を浮べんと、物このむ人の風情をそへたるに、杖に瓢箪の唐子はなけれども、扇に茶瓶の若男あれば、赤壁の船のとぼしさにはあらざめり。……さて松本に舟をさしよせて茶店の欄干に心をはなてば、目はよし蓬萊の水をへだてず、身はたゞ芙蓉の露にうるほふ。……猶はたかたぶく月の名残には、辛崎の松もひとりやたてる。古き都の名もゆかしければ、尾花川の明ぼのをこそと、千那・尚白をおどろかしぬれば、夜ははや五更に過ぬべし。

三井寺の門たゝかばやけふの月

誠よ、推敲のむかしながら、船にこよひの遊をおもへば、此坐に韓愈が文章をもあざむき、賈島が詩賦をももどきぬべき詩人文客にとぼしからねば、たとへ赤壁の前後といふとも、その地に此人をはづべきやと、見ぬもろこしを相手にとりて今宵の風流をあらそふほどに、月は長等山の木の間に入りぬ。

右の記事によって、十五夜に本曾塚無名庵に会した人々と、その佳興のさまざまを知ることが出来よう。「米くるゝ」の句は、その夜の吟だったのである。『七瀬川』（撰者未詳、元禄五年刊）は板本の初出ながら、「友」の重なるのは表現として如何にも拙い。恐らくは誤伝か、書写の杜撰と思われる。

「米くるゝ友」は、前述したように『徒然草』の「物くるゝ友」から脱化して興じた表現である。この翌月、閏八月十日付の膳所の正秀に宛てた書簡に、

夜前はどつかりと米弐斗、定家が力の程を見せんとて、石を五つに打わられ候。炭・薪さまぐ被懸御意不浅、

随分打寄賞翫可致候。

と書いており、江戸に於けると同様、上方でも芭蕉の生活は、門人達の好意の寄進によって成り立っていたことが分る。定家が弟の暁月坊に米五斗（一石の半分）を送る際に、「定家が力のほどを見せんとて石を二つに割りてこそやれ」と詠んだという話から、二斗を石を五つに割ったと戯れたわけである。兼好の場合にしてもそうだが、物を呉れる友が良いというのは、何も物欲で言っているのではない。他人の好意に頼って生きる自らの境涯に安んじ、人から贈られた品を素直に悦んでいるのである。普段そういう気の置けない交際をしている友を、月見の席に招いて共に楽しむ気持を句は叙べているのであって、別に衒うこともなく洒落にすらりと言っているところが佳い。俳味の至れるものと評すべきであろう。米については、兼好と頓阿との間に、歌の贈答のあった話柄も伝えられている。兼好が「米たまへ、銭もほし」という詞を沓冠の折句にして、「よもすゞしねざめのかりほたまくらもまそでも秋にへだてなきかぜ」という歌を贈ったところ、頓阿は「米は無し、銭すこし」の意で「よるもうしねたくわがせこはては来ずなほざりにだにしばしとひませ」と答えたという（頓阿『続草庵集』）。

688　三井寺の門敲ばやけふの月（真蹟懐紙）

真蹟自画賛・西の雲・雑談集・其便・泊船集・篇突・今日の昔・のぼり鶴・蕉翁句集・粟津原・ばせを盥・和漢文操

秋季（けふの月）。

語釈　○**名月**　八月十五夜の月をいう。既出（Ⅱ*258*等）。○**三井寺**　「ミヰデラ」。滋賀県大津市園城寺町にある天台宗寺門派の総本山園城寺の通称。琵琶湖西岸の長等山東麓一帯を寺域とし、そこから湧出する泉（御井）から出た名という。天武天皇時代の創建と伝えられ、平安時代に入って智証大師円珍によって天台別院となったが、叡山門徒と対立して、天台宗の中で別派を形成するに至った。「秋の夜すがら月すむ三井寺の鐘ぞさやけき」（謡曲「三井寺」）。○**門敲ばや**　「門敲かばや」。ここの「門」は「カド」よりも「モン」の方が良い。既出（Ⅰ*194*）。「敲」は、手で打つ意である。「ばや」は自己の願望。「盆の月ねたかと門をたゝきけり　野坡」（『炭俵』下）「Monuo tataqu.」（『日葡辞書』）。○**けふの月**　「今日の月」。中秋の名月をいう。既出（Ⅰ*9*等）。

大意　中秋の名月に浮かれ出て、賈島の詩ではないが、三井寺の門を敲きたいものだ。

考　「於大津義仲菴」（『雑談集』）「其便に申送りける／月は幻住庵にて」（『其便』）「義仲寺にて」（『泊船集』）「湖水の月に各棹さして」（『粟津原』）「大津ニテ」（『ばせを盥』）等の前書がある。板本初出の『西の雲』の成った元禄四年十月以前に湖南で名月を見たのは元禄三、四年であったが、このうち三年は芭蕉の健康状態が思わしくなく、この句のような逸興はあるべくもない。且つ、前の「米くるゝ」の句の条に引いた『和漢文操』所収の「月見ノ賦」にこの句が載っており、偽作ながら内容は信じ得るものなので、四年の八月十五夜に門弟達と月見をし、船に乗って大津に至った時の作で、精しくいえば翌十六日早暁に成ったものと推定される。従って幻住庵での作とするのは全く誤り、義仲寺無名庵での作というのも、不正確のそしりを免れない。

謡曲「三井寺」は行方知れずの幼児をさがす狂女の話であるが、名月の夜の三井寺が舞台になっており、近江八景で有名な寺の鐘を狂女がつく一段もある。名月に三井寺を思う背景に、この曲があったことは、諸注の指摘する如くであろう。また、「門敲ばや」には、推敲の故事で有名な賈島の詩句「鳥宿池中樹、僧敲月下門」（鳥は宿す池中の樹、僧は敲く月下の門。「題二李凝幽居一」『三体詩』巻三）を踏まえ、僧ではなくて俗人が敲くという俳意が見える。実際に三井寺の門を敲くわけではなく、「敲ばや」というところに逸興を託していることは言うまでもない。道具立が揃い過ぎたという評もあるが、月下に湖上を漕ぐ清遊の雅懐には、現代では企及し難いなつかしさがある。この句が人口に膾炙した所以でもあろう。

俳林良材・類柑子・巾秘抄

689　十六夜や海老煎る程の宵の闇（笈日記）

いざよひや海老にるほどの宵のやみ（泊船集）

いざよひや海老いる程の宵の闇（蕉翁句集）

かたゞにて

いざよひや海老を煮る間の宵の闇（芋陀稿本）

秋季（十六夜）。

語釈　○**十六夜**　「イザヨヒ」。八月十六日の夜をいう。既出（Ⅱ427）。○**海老煎る程**　「海老煎る程」。海老を料理する間。「海老」は、食用として美味な甲殻類。「煎る」は、炙り焦がす、或いは煮詰めること。「煎」は「煎」の異体字。「灬」は「火」と書いても同じである。楸邨氏の『芭蕉全句』では、「煎」は『饅頭屋本節用集』では「イル」に宛てられ、「ニル」の「烹」・「煮」と区別されているが、『黒本本』には「ニル」

にだけ宛てられ、『増続大広益会玉篇大全』（元禄四年刊）では「ニル」・「イル」二つの訓が与えられている。『笈日記』（中巻・彦根部）には「住持に化た狸煎て喰ふ」という表記もあるので、しばらく「ニル」の訓を採用する。（ただし『笈日記』には「肝煎（キモイリ）」の用字法もある。）

と精しく考証されているが、結局「煎る」を「にる」と訓む確証は出ていない。然るに、中世から近世にかけて「煎り海老」の語があり、小海老を塩茹でにして干したものをいい、

さくら戸ならばじやうさゝばや
いりゑびのあかしの浦に鯛つりて（『竹馬狂吟集』）

殊に煑海老（いりゑび）壱籠浜焼（かごはまやき）二枚御意に掛（かけ）られ、……（『万の文反古』巻二ノ一）

公時がいりゑび色は常是（じやうぜ）がこくゐ同然。（『関八州繋馬』第一）

といった例を挙げることが出来る。「煎り海老色」は茹でた海老の赤い色で、人の赤ら顔などに譬えられるのである。これらの例によれば、「海老煎る」はやはり「煎（い）る」と訓むべく、たとえ「煑る」と表記されていても「煑（い）る」と訓むことが納得されるであろう。琵琶湖でとれるものとして、淡水産の小海老は相応しくもある。「みちのくのけふ関越ん箱の海老　杉風」（『炭俵』上）「重（ヂウ）罪（ザイ）ヲバ釜ニテ煎（イ）ル事、毎日五人六人ニ及ベリ」（『信長記』巻十五ノ上）「Yebi.」「Mameuo iru.」（『日葡辞書』）。〇**宵の闇**　「宵の闇（よひのやみ）」。夜もまだ早いうち、月が空になくて暗いさま。前夜の名月が日没と共に上るのに対して、十六夜はそれより三十分程遅れ、ためらう意味の「いざよひ」の名も、ここから出ている。「宵闇の稲妻消すや月の顔　長虹」（『あら野』巻七）「Yoi.」（『日葡辞書』）。

大意　十六夜の月が待ち遠しい。宵のうちの暗さは、亭主心尽しの海老が煮える少しの間だ。

考　「うち出の浜にて」（『類柑子』）「堅田の浦に草枕して」（『巾秘抄』）等の前書がある。『笈日記』では「やすく〳〵と」（Ⅳ691）「鎖あけて」（Ⅳ690）と同じ時、堅田での作としており、信ずべきである。打出の浜は堅田ではなく粟津の方だから、『類柑子』の前書は誤りであろう。

『泊船集』の「海老にる」（煮る）は、『笈日記』の「煎」を「煑」（煮）と誤読したのではあるまいか。「煎る」を「にる」と訓む説もあり、海老の場合は「にる」も「いる」も似たようなことながら、[語釈] で述べたように、「煎

る」は「いる」と訓む方がよく、『蕉翁句集』の仮名書きは正しいと思う。『宰陀稿本』（享保四年成）の句形は根拠が明らかでなく、信じ難い。

いざよいの月の出を待つ心を「海老煎る程の」と言ったところが、この句の興の中心であって、十五夜よりもかなり遅い月の出が「宵の闇」であらわされている。風狂人達の突然の訪問を受けた成秀は、もてなしに小海老を煎って馳走の支度をしていたのであろう。それを採り上げるのは亭主への挨拶にもなり、これまた巧みな逸興の表現であった。

690　鎖あけて月さし入よ浮御堂　（鷹獅子）

笈日記・芭蕉庵小文庫・泊船集・蕉翁文集・堅田集

秋季（月）。

語釈　○**鎖あけて**　「鎖開けて」。「鎖」は、戸の掛け金。鍵を指すこともある。「この木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角」（『猿蓑』巻二）「**Iōuo aquru.**」（『日葡辞書』）。○**月さし入よ**　「月さし入れよ」。月の光をさし入れよ、の意。○**浮御堂**　「ウキミダウ」。今滋賀県大津市本堅田一丁目にある臨済宗大徳寺派の海門山満月寺。琵琶湖に張出した御堂で知られるが、この寺は平安中期源信（恵心僧都）の創建と伝えられ、彼が成仏出来ない亡魂の為に自刻の阿弥陀像一千体を安置したのに始まるという。近江八景の一「堅田落雁」の景観の中心をなし、湖上往来の船には灯台の役割も果したようである。昭和九年の室戸台風で倒壊し、その後再建された。「此浮御堂は恵心僧都の御作千体仏也」（『一目玉鉾』巻三）「**Midŏ.**」（『日葡辞書』）。

大意　寺僧よ、浮御堂のとざした鎖をあけて戸を開き、月の光をさし入れなさい。湖上の十六夜の景は、この上なく素晴らしい。

考　「その夜浮見堂に吟行して」（『笈日記』）「堅田十六夜の弁二句　今略之。小文庫」（『泊船集』）等の前書があり、史

邦の『芭蕉庵小文庫』に収めた芭蕉の文「堅田十六夜之弁」は左の如くである。

望月の残興なをやまず、二三子いさめて舟を堅田の浦にはす。其日申の時ばかりに何某茂兵衛成秀といふ人の家のうしろにゐ(ママ)たる。酔翁狂客月にうかれて来れりと声〳〵によばふ。主思ひがけずおどろきよろこびて、簾をまき塵を掃ふ。園中に芋あり、さゝげ有。鯉鮒の切目たゞさぬこそいと興なけれと、岸上に莚をのべて宴をもよほす。月はまつほどもなくさし出、湖上花やかにてらす。かねてきく、仲の穐の望の日、月浮御堂にさしむかふを鏡山といふとかや。今宵しも猶そのあたり遠からじと、彼堂上の欄干によつて、三上、水茎の岡南北に別れ、その間にしてみね引はへ、小山巓をまじゆ。とかくいふ程に、月三竿にして黒雲の中にかくる。いづれか鏡山といふ事をわかず。主のいはく、折〳〵雲のかゝるこそと、客をもてなす心いと切なり。やがて月雲外にはなれ出て、金風銀波千体仏のひかりに映ズ。かのかたぶく月のおしきのみかはと京極黄門の歎息のことばをとり、十六夜の空を世の中にかけて、無常の観のたよりとなすも、此堂にあそびてこそ、ふたゝび恵心の僧都の衣もうるほすなれといへば、あるじまた云、興に乗じて来れる客を、など興さめて帰さむやと、もとの岸上に盃を揚て、月は横川にいたらむとす。

この文の後に「鎖明て」の句と「安〳〵と」(Ⅳ691)の句を載せており、『笈日記』も「米くるゝ」(Ⅳ687)の条に引いた「三夜の月」の一連の句文中、「十六夜 三句」の最後に前掲の前書を付して出している。元禄四年八月十六日の夜、堅田の成秀を訪い、浮御堂に遊んでの吟であることは明らかであろう。

十六夜の清光の照らす湖面は、秋風に波立って銀波を散らしている。三夜の月を飽くまで楽しんだ芭蕉の興は頂点に達して、この句が生まれたのであった。月光を浴びて寂然としずまりかえる戸を鎖した浮御堂に月光をさし入れよと興じて、その光に千体仏の輝く幻を描いたのである。この呼び掛けは、寺僧に対してと見るのが自然であろう。兼ねては月に望んでいる気味もないではないが、雲に蔽われた月への呼び掛けと見るのはよくない。「十六夜之弁」に

よれば、月が雲に隠れたのは一時のことであって、「やがて月雲外にはなれ出」でたのである。鎖をあけてもあけなくともよいことは、前の「三井寺の門」を敲く場合と同様で、ただ逸興の情を酌めば足りる。

十六夜　三句

691　やす〱と出ていざよふ月の雲　（笈日記）

芭蕉庵小文庫・泊船集・既望・蕉翁文集・堅田集・奥の枝折

やす〱と出ていざよふ月見かな　（木枯）

秋季（いざよふ月）。

語釈　○**十六夜三句**　「十六夜」は「イザヨヒ」ともよめるが、『笈日記』では元禄四年中秋の事を記した「三夜の月」の中に、「十四夜」「十五夜」と題した句を承けており、「ジフロクヤ」とよむべきものと思われる。「三句」は、「やす〱と」「十六夜や」（Ⅳ *689*）「鎖あけて」（Ⅳ *690*）の句どもを指す。「寺にうつる月は羅漢か十六夜　長吉」（『犬子集』巻五）。○**やす〱と出て**　「やす〱と」は、たやすく、の意。「出でて」は、月の出ること。待つ間程無く月がのぼったのである。前の「海老煎る程の宵の闇」（Ⅳ *689*）の［語釈］参照。支考の『俳諧古今抄』は「出て」で切れると見ており、従うべきである。「いとやす〱と筆を染て、幻住菴の三字を送らる」（「幻住庵記」）「Yasuyasuto.」（『日葡辞書』）。○**いざよふ月の雲**　「山のはにいさよふ月を出でむかと待ちつゝをるに夜ぞふけにける」（『万葉集』巻七）の歌のように、「いざよふ」は停滞して進まないさまをいう。当面の句では、出てからなかなか進まない趣である。「いざよひの月」の呼び名が、名月に比して出がおそいことから出たことは前述した。「いざよふ」は、古くから「いさよふ」の語もあったが、『日葡辞書』に「Izayoino tçuqi.」と濁音になっているので、ここでは動詞もそれに準じて濁ってよむ。「いざよふ月、又月に不限、ひかりいざよふなどゝいふは、聳ものに日のかげへだちたる也」（『三冊子』わすれみづ）。

大意　ためらうかと思いの外に、たやすく月が出て、出てから空にいざようている。その月にかかる雲が気がかりだ。

考　前述の如く『笈日記』は元禄四年八月十六日の作としており、『芭蕉庵小文庫』所収の「堅田十六夜之弁」

（「鎖あけて」（IV 690）の句の条参照）にも見えるので、年代について問題はない。讃岐の吟墨の撰した『既望』（宝永六年刊）には、成秀・路通・丈草・惟然・正秀らの外、堅田の俳人と思われる人々を加えた歌仙が収められ、後年の『堅田集』（歌雄ら撰、寛政十年刊）にも路通草稿によったという同じ歌仙（巻末に「元禄四年辛未仲秋」とある）が見える。『木枯』（壺中・芦角撰、元禄八年刊）の句形は杜撰であろう。

前にも引いた『小文庫』の「十六夜之弁」に、

月はまつほどもなくさし出、湖上花やかにてらす。……とかくいふ程に、月三竿にして黒雲の中にかくる。……主のいはく、折〳〵雲のかゝるこそと、客をもてなす心いと切なり。

とあったのを想起したい。「いざよひの月」という名とはちがって待つ程もなく出た月が、天心に登ってから黒雲に隠れた。物に隔てられて光が見えないことを「いざよふ」というので、成程出てからいざようているから、やはりいざよいの名に背かぬと興じているのである。名辞に倚傍して興じたまでの俳諧であった。

692　名月はふたつ過ても瀬田の月　（西の雲）

名月は二つ有ても瀬田の月　（泊船集）

名月や二有ても瀬田の月　（蕉翁句集）

——西の詞

秋季（月）。

語釈　○**名月はふたつ過ても**　「名月は二つ過ぎても」。中秋の名月が二回過ぎてしまっても、の意。［考］に引く文考の文によって閏八月の吟と知られるが、八月が二回ある年は中秋の名月も二回あるわけで、それに興じてこうした表現が出て来るのである。○**瀬田**　滋賀県大津市瀬田。琵琶湖の南端、瀬田川の流れ込むあたりで、石山も近い。既出（II 395等）。

大意　八月に閏があって名月が二回過ぎた後でも、瀬田の月はなお見飽かぬ趣がある。

考　『西の雲』（元禄四年十一月刊）には、この句の由来を記した野盤子（支考）の文「石山参詣序」が収められているので左に引用する。

元禄のことしは秋も三十日に重りて、名月の興も更なり。哥人詩僧もいとまなく、萩露荻風になやまされて、奇を好み佐を好む。是等は人の世の常成にや。吾輩風羅翁に随て、山色水光の月を見尽して、人〳〵手を助け腰をおして、又石山に詣でぬ。此夕閏八月十八日なり。日は音羽・逢坂の麓より暮そめて、霧よこたはり水鳴、其間幾ばくもあらずして月已に雲衢にたゝずむ。嘆じて立るものは駅路の鈴の音におどろく。木の間〳〵の檐瓦も一入露にきらめき、浅水芦花の風の音も人の肌骨にしみ渡りて、灵感も亦むべに崇し。……しばらく月の台に蹲りて首を傾る者あり、頤を支る者あり。しらず心のうち何事にかあらむ。兎角して川のほとりにやすらひ、摺火などうち並べたれば、壚頭の旧醅も折にふれて面白く、誰いひしらふ者もなけれど、みづから興に乗じ、みづから飲尽して、おの〳〵小船に込のり、膝をかさね手を叉む。其方のしらとり茶店のあるじなど、遥に呼び声〳〵にのゝしりて、後の赤壁を待といふもおかし。

名月はふたつ過ても瀬田の月　翁
船頭は瀬田の子共ぞ水の月　珍碩
瀬田の月又来る筈に定りぬ　盤子
月かげや鯇の飛込瀬田の舟　楚江

八月に閏のあったのは元禄四年であって、右によれば閏八月十八日に石山寺に参詣し、瀬田で舟遊びをした時の吟であった。同行したのは支考の外膳所の珍碩と楚江（これも膳所か大津の人）だったことが知られる。

「二つ有ても」という異形は、その初出たる『泊船集』のよく知られた杜撰さからして、どれだけ根拠のあるもの

か疑わしい。『蕉翁句集』も『泊船集』を承けて更に誤りを重ねたものであろう。「名月は二ツ有ても勢田の橋」（『芭蕉新巻』）「名月のふたつ有ても瀬田の月」（『芭蕉翁句解参考』）等、古注類に見える句形も信じ難いこと同断で、初出の『西の雲』が拠るべき唯一の句形である。

古注では成立事情を知らなかった為に、瀬田の長橋が二つに分れているからとか、水に映る月と二つだとか解しているものがあるが、何れも誤解に過ぎない。二度重なった名月を賞して後も、なお歌枕の瀬田の月は見事だといって、飽くまで月を賞しようとする風流人の雅懐をのべたのである。近江八景の一「石山秋月」を「瀬田の月」に変えたところに俳諧があるのかも知れない。「ふたつ過ても」のユーモアを理解する為には、支考のような周囲の事情を解説した文章が必須であろう。安東次男氏は、

名句とは云えまいが、これは珍しい句である。俳句を読む楽みはこういう吟興に出合うことにもある。（『芭蕉発句新注』）

と評しておられる。

693　草の戸や日暮てくれし菊の酒（笈日記）

おなじ年九月九日、乙州が一樽をたづさへ来りけるに

泊船集・蕉翁句集草稿

旅行

草の戸に日暮てくれし菊の酒（きさらぎ）

草の戸や日暮てもろふ菊の酒（志津屋敷）

草の戸や日くれて闇し菊のさけ（蕉翁句集）

秋季（菊の酒）。

語釈 ○**おなじ年九月九日**　支考の『笈日記』では、元禄四年中秋観月の事を叙した「三夜の月」の句文の次に、この前書と句が載っている。従って「おなじ年」は元禄四年を指すのである。「九月九日」は重陽の節供に当る日。○**乙州**　大津の蕉門俳人。既出（Ⅲ*633*、Ⅳ*649*）。○**一樽をたづさへ来りけるに**　「一樽を携へ来りけるに」。一樽の酒を持って訪ねて来たので、の意。「たゞ生前一樽のたのしみの外に、あすは〳〵といひくらして」（『笈日記』伊勢部、芭蕉発句「さびしさや」前書）「王母にかしづく仙女の数々楽器を手に手に携へて」（謡曲「枕慈童」）「Isson.」「Tazzusaye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**草の戸**　草庵。既出（Ⅰ*250*前書、Ⅲ*452*等）。ここは時期から見て木曾塚の無名庵を指すと見られる。○**日暮てくれし**　「日暮れて呉れし」。乙州が日が暮れてから訪ねて来て酒を贈ったというのである。「くれし」と乙州を主として言ったところに、挨拶の気持が見える。「くれてくれし」という同音の反復は、意識的なものであろう。○**菊の酒**　「菊の酒」。酒に菊の花びらを浮べたもの。中国の菊水の故事（Ⅰ*54*、*110*等参照）から、齢を延べる縁起によって菊が用いられる。朝廷では重陽の日に天皇が紫宸殿に出御あり、群臣に宴を賜わった。宴が行われない時には、宜陽殿で上卿から菊酒を賜わることもあったという。『西京雑記』によると、菊の花や茎葉に黍米を混ぜて醸す酒があり、来年の九月九日に到って始めて熟すとあるが、ここはそれではあるまい。当面の句では普通の酒を貰ったのを、「菊の酒」に見立てて呑むというのである。「重陽宴……おほやけにむかしは……御帳の左右に茱萸の嚢をかけ、御前に菊瓶をかれ、群臣に菊酒を給ふ事などありと也。これを重陽ノ宴とも、菊花の宴ともいへり。公事。けふ菊花の酒を用ひ茱萸のふくろをかくる事は、費長房が汝南の桓景にをしへし故事也。事文にあり。……後光明峰寺殿の御抄に、九月九日は寒温のさかひ、身肉わかるゝ時也。此時酒をのめば病を得ず。さてけふより酒をあたゝめて用るよしあり。世諺問答」（『増山井』）「本朝にては、天暦五年九月九日に始て菊酒の宴をなせりと見えたり」（『滑稽雑談』）「菊の酒蒲萄の殻にしたみけり　其角」（『陸奥鵆』三）。

大意　淋しい我が草の戸だが、日が暮れてから人が訪ねて来て酒を贈って呉れた。先ずはこれを菊の酒として齢を延べるとしよう。

考　『蕉翁句集草稿』には「此句は木曾塚の旧草に乙州が一樽たづさへ来る九月九日の句也と笈日記に云り」、『蕉翁句集』には「此句は木曾塚旧草に一樽を人の送られし九月九日の吟也」と注している。これら土芳のいう「木曾塚

旧草」が、膳所の正秀によって修築される前の草庵を指すとすれば元禄三年の作と見られ、同四年とする『笈日記』と喰い違いを生ずることになる。しかし、「先師がもと居た草庵」という程の意味とすれば、強いて喰い違いを云々する要はなく、それが恐らく正当な態度であろう。『笈日記』にいう年代を信じてよいと思う。同書には乙州の脇「蜘手にのする水桶の月」も収めている。

『ささらぎ』（季範撰、元禄五年刊）は、この句の板本初出ながら、前書が見当ちがいである上に、初五に切字がなくては句調が平板になってしまう。他派の集でもあり、この句形は誤りであろう。『志津屋敷』（箕十撰、元禄十五年刊）の「日暮てもろふ」は芭蕉の立場からの表現であるが、根拠の程は確かでない。『蕉翁句集』の「闇し」は伝写の間に生じた杜撰と思われ、結局『笈日記』の句形が最も信憑性の高いものである。

『延喜式』には「九月九日、平旦供二奉菊酒一如二常儀一」とある由で、そういうことを背景にしてであろう、

此句、九月九日は重陽の佳義なれば、くらき内より人〻此日を祝ふ事なるに、我は隠居なれば、日暮て後に人よりも菊の酒とて貰ひしと也。生涯のありさま思ひ合せて味ふべし。（正月堂『師走嚢』）

という古注の説が今も支持されている。普通の人は早朝からこの日を祝うということを余り強調すると、理に落ちた感じもあって良くないけれども、「草の戸や」と詠嘆して「日暮て」と続く気分は、重陽の佳節にも訪う人のない隠者の境涯の侘しさが強く印象づけられる。其処へ乙州を迎え得た悦びが対照をなして以下に述べられるのである。音調の上では「クサノトヤヒクレテクレシキクノサケ」と「ク」の音が反復されているのが目立つ。これについて安東次男氏が、「重九の興を起した気転の即席吟」（『芭蕉発句新注』）と見ておられるのは面白い。重陽の節を「九日（くにち）」ということも考え合わせれば、「ク」の音の頻用にはそのような動機があったのであろう。「クレ」「クレ」の繰返しもそれに関連することはいうまでもなく、そうした音調上の配慮と共に、乙州を主として「くれし」といい、芭蕉を主とした「もらふ」でないのも客に対する挨拶の心である。また、陶淵明が九月九日に酒がなく、家の辺りの菊を摘んでい

たところ、大守王弘の使が酒をもたらしたという『蒙求』に見える故事は、必ずや作者の脳裏にあったであろう。とくに酒を飲みたかったわけでもない、乙州でなくてもよい。誰を・何をと言うのではないが、待侘びた心にしか見えて来ぬ微妙な華やぎのある句だろう。（安東氏『新注』）という見方は佳い。沈んだ穏やかな調子の中に、悦びの情が生かされているのである。

694　初しもやきくひえそむるこしのわた（九月十二日付羽紅宛書簡）

荒小田

秋季（きく・ひえそむる）。

語釈　○初しも「初霜（はつしも）」。寒冷の季節になって初めて降りる霜。冬の季語であるが、この句では「きく」「ひえそむる」等が秋季として立ち、冬にはならない。「初霜（はつしも）　冬也。露を結ては𡚽也」（『御傘』）「按に、霜は秋よりあれども、初霜と云も冬也。○連歌本意抄云、霜は秋の半より降物也。秋の詞入ては秋也。只霜と計は初霜も冬也。中の春迄は降物也」（『滑稽雑談』）「青天に有明月の朝ぼらけ　去来　湖水の秋の比良のはつ霜　芭蕉」（『猿蓑』巻五）。○きくひえそむる「菊冷（きくひ）え初（そ）むる」。菊の花が咲いて、時候が冷気を帯びて来たことをいう。「冷（ひ）ゆ」は、「菊」と共に秋の季語。「ひえそむる」は、下の「こし」にもかかる。「ひやゝか　初秋の事なり。暮𡚽にはかなはず。／ひゆる、ひやく　などのことば、ひやゝかとおなじ。冷の字也、𡚽なり」（『御傘』）「辛崎へ雀のこもる秋のくれ　其角　北より冷る月の雲行キ　孤屋」（『炭俵』下）「Fiye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○こしのわた「腰（こし）の綿（わた）」。身体を温める為に、腰の部分に当てる綿。［考］に引く羽紅宛書簡に見える「こしあてのわた」である。「Coxi.」「Vata.」（『日葡辞書』）。

大意　初霜が置いて菊の花も冷え初める時候になった。菊の着せ綿ではないが、腰綿を頂いて、私も冷えを防ぐことが出来ます。

考　『荒小田』（舎羅撰、元禄十四年刊）には、「此句、羽紅のもとよりこしわたをつくりてをくられし返事也」と注があ

り、底本とした書簡に、

御文、ことにこしあてのわた、みづから御とゝのへおくり被下、御心ざしと申、かれこれあさからざる御事、忝ぞんじまいらせそろ。菊にこそきせ作る折しもなるにと、

としてこの句を記している文面が裏づけとなっている。羽紅は凡兆の妻とめ女である。この書簡は芭蕉が京近くに居て、「やがてのぼり候而御礼御申まいらせそろ」と上京を約しており、木曾塚無名庵に在った元禄四年九月が時期として最も相応しい。別の羽紅宛書簡との関係で元禄五年晩秋の事と考えられたこともあったが、当面の書簡が出現して、四年秋であることが確実になった。冬季と見る説もあるが、書簡が秋のうちの九月であり、『荒小田』も秋の部に収めているので、秋季とするのが当然であろう。

一見したところ、「きく」と「こしのわた」との関係、「ひえそむる」の上下にはたらく表現等、分りにくいところがある。だから、「菊にこそきせ作る折しもなるに」という書簡の文言は、句解のヒントとして恰好なのである。菊の花に着せ綿をして愛護することと「こしあてのわた」を結び付けたところが俳諧で、全体に老身をいとうしみじみとした調子がある、よい挨拶句であった。

695 橋桁のしのぶは月の名残哉　(己が光)

よるひる・童子教・泊船集・蕉翁句集・巾秘抄

橋桁のしのぶを月の餘波哉　(麥哉)

名月集

秋季（月の名残）。

語釈 ○**橋桁のしのぶ**　「橋桁の荵」。「橋桁」は、橋脚の上に渡して橋板を支える材木。其処に生えまつわっている荵草をいう。「しのぶ」は、山中の樹皮や岩に生える常緑の羊歯類。既出（I 202、213）。「偲ぶ」意を掛けている。ここは石山寺参詣の折なので、

橋は瀬田の長橋と思われる。「さしもの弁慶合はせ兼ねて、橋桁を二三間しさつて」（謡曲「橋弁慶」）「Faxigueta.」（『日葡辞書』）。

○**月の名残**　「名残（なごり）」は、ここでは最後の意。九月十三夜は「後の月」「後の名月」といわれ、その年の最後の月見をする。（Ⅱ433）参照。「月の名残」は後の名月の傍題として『増山井』に見えている。「さし下せ月の名残ぞ桂舟　非石」（『新題林発句集』）。

大意　橋桁にまつわるしのぶ草は、今年最後の月の名残を惜しむよすがであることよ。

考　「十三日」（『よるひる』）「十三夜ある山寺に詣して」（『巾秘抄』）等の前書があり、『己が光』には、

粟稗の粥喰尽す月見かな　仝（注、之道）
心見のあま干おろす月見哉　車庸
橋桁のしのぶは月の名残哉　翁
以上三句は、後の名月石山にまふで〻

と後注して、同時の三句を挙げている。大坂の之道と車庸を伴なって石山寺に参詣した折の作であるが、之道が芭蕉と初めて会ったのは元禄三年六月の在京中であり、芭蕉はこの年の後の月を堅田に赴いて見ているので、『己が光』に見える石山詣では同四年九月と推定される。同じく『己が光』秋部に、

木曾塚無名庵に一夜あかして
木曾殿と背を合す夜寒哉　伊勢又玄
あさ露や木曾義仲の力瘤　之道
同じく庵にして
工たる庭とも見へじ萩の露　車庸

という一連の句も見え、石山寺参詣の前後に、これらの人々が草庵を訪うて一泊したことが知られるのである。但し車庸のみは泊らなかったのかも知れない。『姿哉』（遠舟撰、元禄五年刊）は他派の撰集であり、その異形は信憑性に問題

があろう。「を」は「は」に比して聊かぼんやりした措辞でもある。また何丸の『芭蕉翁句解大成』には、「丸岡と永平寺の間、船橋といふ所、四十八艘をつなぎて往来のものを渡す」と前書して「橋桁をわたるは月をしのぶ哉」という句を収めるけれども、典拠が明らかでなく、誤伝の可能性が大きい。

句意は「忍草の橋桁のあたりに生ふるを見て、月の名残こしかたもしのばるゝたね也」（東海呑吐『句解』）というに尽きる。句の場は、

石山詣の途次、あるひは瀬田川に舟を浮べて、その橋桁を仰いだものであらう。その橋桁に思ひもかけずしのぶが月光に濡れてゐた。これが今年の秋月の名残ぞと感じた訳である。……殊に注意すべきはしのぶの形が、月のさす場合いかにも月の名残の感を深めることとである。見のがしがちなしのぶに、月光がひそかにさしてゐる感じは、名月の夜などには感ぜられぬところで、やはり後の月の感じであらう。……九月十三夜、後の月になると、月の清光は冴えわたりつつも冷たさと寂しさが加はつて来るのである。（『芭蕉講座』発句篇㊦）

という加藤楸邨氏の説が精しい。今年は中秋の名月を三夜にわたって賞した上、閏八月のお負けまであり、石山詣でも二回行った。月に堪能した最後の名残を、「橋桁のしのぶ」を照らす月に見出して、飽くまでこれを味わおうとするのである。

696 稲すゞめ茶木畠や逃処 （真蹟懐紙）

西の雲・笈日記・喪の名残・泊船集・小柑子・蕉翁句集

秋季（稲すゞめ）。

語釈 ○**稲すゞめ** 「稲雀（いなすずめ）」。稲田に群れて熟した稲をついばむ雀たち。稔りの秋をあらわす季語である。ここで句切れ。「むれてくる田中の宿のいな雀我ひくひたにたちさはぐなり」（『堀河百首』源師時）。○**茶木畠や逃処** 「茶木畠（ちゃのきばたけ）や逃げ処（どころ）に」。「茶木畠」は茶の木

を植えた畠で、「茶畠」に同じ。其処が稲田を追われた雀たちの逃げ処なのか、というのである。「迯」は「逃」の俗字。「明月や処は寺の茶の木はら　膳所昌房」(『猿蓑』巻三)「あまりににげ所なくして、こしばがきをやぶりて、たかばひにしてにげにける」(『曽我物語』巻九)「Nigue, uru, eta.」(『日葡辞書』)。

大意　稲田に群れて稲をついばむ雀たちが、追われては茶畠の方へ飛んで行く。雀たちは茶畠を恰好の逃げ場と心得ているのか。

考　底本とした柿衛文庫蔵の真蹟懐紙には、元禄四年中秋名月の句「三井寺の門敲ばや」(Ⅳ688)が書かれており、同じ秋の「初秋や」(Ⅳ685)の句もあって、同じ頃の作であることは確かである。これら凡て板本としては『西の雲』が初出であることも、事情を同じくする。『笈日記』では、「元禄三年の秋ならん、木曾塚の旧草にありて敲戸の人〳〵に対す」と前書した「草の戸をしれや穂蓼に唐がらし」(Ⅲ625)の句の次に出している為に、三年の作と考える説もあるが、元禄三年云々の支考の前書は「稲すゞめ」の句までかかるものとは限らず、真蹟懐紙から推定される事情の方が優先するのは当然であろう。ただ両句とも、義仲寺無名庵に於ける作であることは認めてよい。

無名庵から見渡される田園風景を句にしたものと思われる。

稲雀と歌にも詠るは、則稲穂を吻(ツヒバ)むとて群飛す。稲の熟(アカラ)む比は、誠に千も二千も群て渡る。依て鳴子を引て驚し、或は声を立て物音をして是を追。其逃所は茶樹畠と云出たる也。

茶樹は多く田畑の畔に植て、殊に小枝繁り、小鳥などの迯隠るに宜し。……予稲雀を田野に度〻見たり。誠に夥敷集る物也。田に群て下(オリ)たるは、稲穂は見えず唯一面に雀と成る、目覚し共云べし。(信天翁『笈の底』)

というのは精しい説であって、題材とした情景を髣髴するに足りる。雀の大群が稲田を襲っては、鳴子などにおどされて茶の木畠に逃げて行く。それが何度も繰返されるのを興じて眺めているのである。「茶木畠や迯処」というあたりに、客観描写とはちがった「興」が見え、明るい調子を際立たせている。軽みの句といってよかろう。前にふれた

「元禄三年」云々の支考の文の影響もあってか、「世の人にあきたれば、問ふ人あれば外へ逃んとするとならん」（東海呑吐『句解』）「人の所におはしぬる時、別業などへ転ずること出来ていへりけるや」（杜哉『蒙引』）等、芭蕉の境涯に引きつけた見方が古くからあり、「住つかぬ旅のこゝろや置火燵」（Ⅲ631）の句などを引く向きもあるが、所詮は考え過ぎであろう。「住つかぬ」の句の沈んだ調子は、「稲すゞめ」の句の軽快な明るさとは全く別物である。それを強いて結び付けるのは、当面の句の味を真に生かすものではあるまい。

697 鷹の目も今や暮ぬと鳴うづら　（真蹟懐紙）

芭蕉庵小文庫・泊船集・宇陀法師・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

鷹の目の今やくれぬと啼鶉　（流川集）

秋季（うづら）。

語釈 **○鷹の目も今や暮ぬと**　「鷹の目も今や暮れぬと」。「暮ぬ」は、日が暮れた意と、鷹の目が「昏れぬ」、即ち見えなくなったことを掛けている。「日が暮れ、鷹の目も昏れぬ」と、日が暮れたことを思わせたところに「も」の働きがある。「鷹」は既出（Ⅱ*321*等）。「立さはぐ今や紀の雁いせの鴈伊賀沢雉」（『猿蓑』巻四）「母はめもくれ身もつかれ、わつと計にどうどふし」（『国性爺合戦』第三）「**Namidani mega cururu.**」（『日葡辞書』）。**○鳴うづら**　「鳴く鶉」。「うづら」は、ずんぐりした形の野鳥で、秋の狩猟の獲物である。既出（Ⅲ*624*）。「鷹」は冬の季語であるが、ここでは「うづら」の方が季語として立ち、秋季の句となる。

大意　日が暮れて、あの鋭い鷹の目ももう見えなくなって安心だとでもいうように、鶉が鳴いている。

考　「初秋や」「三井寺の」「稲すゞめ」等の句と共に記した真蹟懐紙があり、『蕉翁句集草稿』にも「辛未」と頭注して「此自筆物の句也」としている。元禄四年秋、東下前の作と見てよかろう。『流川集』（露川撰、元禄六年刊）の異形は板本初出ではあるが、「目の」は「も」程働きがなく、孤立した所伝なので問題にはならない。

鶉の鳴く音といえば、「うづらなくまのゝいりえのはまかぜにをばなゝみよる秋のゆふぐれ」（『金葉集』巻三、源俊頼）「ゆふされば野辺の秋風身にしみてうづらなくなりふか草のさと」（『千載集』巻四、藤原俊成）等の名歌によって、秋の野の身にしむあわれをあらわす恰好の題材であった。その鳴き声を、ここでは「鷹の目も今や暮ぬと」鳴くとしたところが珍しく、俳諧の新境地であろう。

鶉鷹とて秋は鷹にうづらを取らするなり。鳥の目は暮がたには見えぬ故に、夕暮をいはず、鷹の目の暮るゝをいふおもしろき作也。専暮がた朝がた鶉は啼鳥なれば、いまは心よしと鳴ならしといへり。（東海呑吐『句解』）

とある説のように、秋の鷹狩の縁があるとすれば、この句の眼の付け処も納得出来る。何処か童話的雰囲気を持ち、鶉の心になって同感しているところが面白い。

この句には、お伽噺風の味ひといつては少し言ひ過ぎかも知れぬが、どこか幼稚な牧歌的情趣が流れて居る。……この句は単なる理智的産物でないと思ふ。固より芭蕉の作として誇るべきものではないが、俳句の形式を借りねば現はせぬ面白味のあるところが、この句の特徴なのである。（『芭蕉俳句新釈』）

という半田良平氏の見方は適評といえよう。

なお、李由・許六共撰の『宇陀法師』に、この句の切字について、「今や暮ぬ」で切れると見て、

此ぬの字、はねぬと云也。ふのぬ、おはんぬの外にてきるゝ也。珍敷ぬの字也。いく夜ね覚ぬ須广の関守と云ぬ、是也。消えぬ、おもはれぬの類、両方へかよふ也。よくきゝて落着すべし。

と述べているのはおかしい。この句の場合、下に「と」があるのだから、「ぬ」で切れる筈はないのである。この句には特定の切字はなく、最後の「うづら」で締め括って切れるのであろう。

698

秋の色ぬか味噌つぼもなかりけり　（無日付句空宛書簡）

柞原・草庵集・思亭

落葉して糠味噌桶もなかりけり　（芭蕉袖日記）
秋一夜柿三味瓶さへなかりけり　（湯のかたみ）

秋季（秋の色）。

語釈　○**秋の色**　「色」といっても特定の色を指すわけではなく、秋になって色づく草葉の色などをいい、また「秋の気配」といった意味にもなる。「親子ならびて月に物くふ　珍碩　秋の色宮ものぞかせ給ひけり　路通」（『ひさご』）「Iro.」（『日葡辞書』）。○**ぬか味噌つぼ**　「糠味噌壺」。米糠に煮立てざましの塩水を注ぎ、味噌のように練って発酵させた糠味噌を入れておく壺。糠味噌漬の漬床で、勿論漬物も入っている。「Nucamiso.」「Tçubo.」（『日葡辞書』）。

大意　この兼好画像には秋の気配が漂って、身の廻りには糠味噌壺一つすら無い。如何にもこの人らしい簡素さだ。

考　「庵にかけむとて、句空が書せける兼好の絵に」（『柞原』）「画讃／茶毘屋にむら尾花」（『思亭』）等の前書があり、『草庵集』（句空撰、元禄十三年刊）には、

　秋の色ぬかみそつぼもなかりけりといふ句は、兼好の賛とて書たまへるを、常は庵の壁に掛て、対面の心ちし侍り。先年義仲寺にて翁の枕もとにふしたるある夜、うちふけて我を起さる。何事にかと答たれば、あれ聞たまへ、きりぐ〜すの鳴よはりたると。かゝる事まで思ひ出して、しきりに涙のこぼれ侍り。

という文が見える。句空は金沢の俳隠で、彼の木曾塚無名庵訪問を証するのが、外ならぬ句の底本とした書簡であった。その文面には、

　御手翰辱拝見、夜前得閑語、珍妙不少候。明日御立可被成之旨、後刻貴面御相談可仕候。追付御入来、是にて御

ねころび可被成候。像讃之義、発句珍しからず難儀仕候。ヶ様之事にてもかき付可申哉。

庵の秋歟

秋の色ぬか味噌つぼもなかりけり

しづかさやゑかゝる壁のきりぐす

御用捨なく可被仰下候。同じくは御免被下候而、外に白紙におもふ事書、進上申度候。以上

とあって、木曾塚草庵での執筆とおぼしく、「後刻貴面」「追付御入来」等とあるところを見ると、句空は近くに宿を取っていたようである。書簡に日付はないが、秋季の句からして秋であることは動かない。芭蕉が秋に木曾塚に居たのは元禄三、四年であって、そのうち三年は、同じ年の冬に書かれた句空宛書簡に草庵訪問の事が少しも触れられていないので、この年秋の訪問はなかったものと見られよう。従って句空の木曾塚訪問は四年の秋、まだ芭蕉の東下が余り切迫しない頃の事と推定される。句空の依頼による兼好画像の賛句であることは、『柞原（ははそはら）』（句空撰、元禄五年刊）の前書や、『草庵集』の文に見える通りで、書簡の文面から、良い句が浮ばないで難儀している様子が窺える。初五に「庵の秋」という別案を書いているが、以後この案はどの資料にも出て来ない。時代の降る本にあらわれる異形は、どれも信じ難いものばかりである。『思亭（おもいのちん）』（岱阿・松宇撰、宝暦六年刊）の前書によれば、他の絵に流用したこともあったらしいが、潁原博士の『新講』では疑わしいとされている。

兼好に因んで「ぬか味噌つぼ」を持ち出したのは、『一言芳談』の記事を抄録した『徒然草』九十八段の文中、

後世を思はん者は、糂汰瓶一ももつまじきことなり。持経・本尊にいたるまで、よき物をもつ、よしなき事なり。

とあるのに基づく。「糂汰瓶」は即ち「ぬか味噌つぼ」なのである。物に執着を持たず、簡素な生活を心掛けるべきことを示した言葉であることは言うまでもない。それと共に、三夕の歌として有名な「さびしさはその色としもなかりけりま木たつ山の秋のゆふぐれ」（『新古今集』巻四、寂蓮）「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋のゆふぐ

れ」（同上、定家）を踏まえた跡が著しい。
「秋の色」を色その物として感受すれば、秋になって色づく草葉、就中紅葉の燃え立つような華やかな色であろう。それは既に山本健吉氏の『鑑賞と批評』に「とくに「秋の色」と言った場合は、澄明の色よりも、豪奢な色であろう。「野山の色」と言っただけで、古来の季語となるが、それは色づく紅葉・黄葉を言うものである。「野山の錦」とも言う」と指摘されており、

兼好の画讃ということから、「糠味噌壺」を構え出してきたに違いないが、それはそのものとして独立に、「秋の色」を背景とした画像のなかに嵌りこむ。同時に、その物の欠如としての隠者兼好の境涯が、二重映しとなる。静物像として「糠味噌壺」一個が現れ、そして消え、人物像として兼好法師が現れ、そして消える。映画のフェードインの手法であり、そしてそのバックに秋の絢爛たる彩りが、全体を包括するような形で映し出される。冒頭「秋の色」とうち出した断定の的確さが、おそらくこの句の生命であろう。あとは芭蕉の視覚的想像力と、伝統的な詩人の意識とが、「糠味噌壺」を点出し、兼好法師を点出しているのである。そして、芭蕉は何も艶隠者ともいうべき兼好法師を、高潔な隠士と思っているわけではない。自分の境涯との類比において、親愛感を抱いているに過ぎない。「糠味噌壺もなかりけり」はむしろユーモアであり、俳句的アイロニイであって、厳粛な道義的述懐ではないのである。

と見ておられる。中七以下が俳句的アイロニーで、それに相応しい日常的な素材であることは確かであろう。兼好自体は高潔な隠士ではなかったかも知れないが、無一物で唯一人居るこの人物のイメージは、洒落な風情を帯びつつも、やはり仏徒の一理想像で、芭蕉もそうありたいと願い、句空にもそうあれかしと望んでいる姿である。句空に請われて画賛として作ったからには、そういう文学以外の要素をも含めて解したいと思う。

今一つ、初五は華やかさによって中七以下と対照をなしているのかどうか。見方次第ではあるが、私は「秋の色」

という季語は「野山の錦」等とは必ずしも同一視し難いと思う。［語釈］に引いた『ひさご』の付合では、月下の夜景として秋季の自然の背景を大まかにいったもので、色彩感は余り無い。同じ元禄三年の鬼貫の紀行『犬居士』に見える「萡のない迟迦(ママ)に深しや秋の色」の句にしても、飾りのはげた物に深い「秋の色」を見ている。元禄期にこういう例があるところを見ると、秋の草葉の華やかに色づいた趣ばかりが「秋の色」ではないことが知られよう。「ぬか味噌つぼもなかりけり」との照応を考えれば、風に揺れて樹葉の揺落に向う索々たる秋の趣でなければなるまい。華やかさよりは寂しさを含んだ秋の自然が、「秋の色」と把握されているのだと思う。草葉の色のイメージがあるとしても、それは欠落したものとしてではあるまいか。この句の踏まえた古歌として三夕の歌のうち、寂蓮のは「その色としも」とあるから勿論縁が深いけれども、物の欠落に主眼を置けば、「花も紅葉もなかりけり」という定家の歌が、この句では案外強く意識されていたと見られる。「庵の秋」という別案は、草庵生活をイメージさせる働きはあるが、中七以下の表現があればそれは必ずしも必要ではなく、「秋」は具象性に乏しいから、「秋の色」よりはやはり劣るであろう。画賛句としては、かなり面白い句である。

699　淋しさや釘にかけたるきりぐ〱す　（草庵集）

放鳥集

しづかさやゑかゝる壁のきりぐ〱す　（無日付句空宛書簡）

秋季（きりぐ〱す）。

［語釈］　○淋しさ　「淋(さび)しさ」。○釘にかけたるきりぐ〱す　「釘(くぎ)に掛(か)けたる蛬(きりぎりす)」。釘に掛けた画像のあるあたりの壁で鳴くこおろぎ。画像を抜いた為に、聊か舌足らずな表現になっている。［考］参照。「雲雀さえづるころの肌ぬぎ　越人　破れ戸の釘うち付る春の末　同」（『あら野』員外）「本間主馬が宅に、骸骨どもの笛鼓をかまへて能する処を画て、舞台の壁にかけたり」（『続猿蓑』下、芭蕉

発句「稲づまや」前書）「Cugui.」「Caqe, uru, eta.」（『日葡辞書』）。

大意 釘に掛けた画像のあたりの壁でこおろぎが鳴いている。草庵の秋の淋しさが一入（ひとしお）身にしみることだ。

考 『草庵集』の句空自序に「函底に兼好の絵あり。是に故翁の句ふたつあり。義仲寺にての吟也」とあって、巻頭にこの「淋しさや」の句を掲げ、次に前の「秋の色」の句の条に引いた「秋の色ぬかみそつぼもなかりけりといふ句は」云々の文が見える。その裏付けとして、「秋の色」「しづかさや」の二句を記した句空宛書簡があることも前記の通りで、二句は元禄四年秋同時に成ったことが明らかである。この句の場合、書簡と『草庵集』で句形が異なっているのは、書簡に「御用捨なく可被仰下候」とあることと関係があろう。前記の如く、兼好の画賛句の句案について、芭蕉は苦吟していたので、句空にも遠慮なく意見を言って呉れというのだ。その前に、

後刻貴面御相談可仕候。追付御入来、是にて御ねころび可被成候。

ともあるから、文面通りこの書簡を見て直ぐ句空は無名庵を訪れたに違いなく、その席で二人相談の結果、「しづかさやゑかゝる壁の」を「淋しさや釘にかけたる」と改めたのであろう。「淋しさや」の句を書いた真蹟を持っていたからこそ、句空は『草庵集』にこれを掲げたものと思われる。

この句は、「しづかさや」の句の「ゑかゝる壁」（絵掛（えか）る壁）という表現で明らかなように、兼好の画像が壁にかかった句空の草庵の有様を思い遣った作である。両案の関係が不分明である為か、「釘にかけたる」を壁の釘にこおろぎを入れた籠が掛っているとする解もあるが、確かにこれだけで兼好の画像が壁上に掛っているさまと受取るのは無理で、籠を釘に掛けたと取られても仕方がないところがある。加藤楸邨氏のように、「籠」を省略した発想が却って生彩を放つという見方もあるが、所詮無理であろう。且つ又、兼好の画像とは無関係に、句空庵の籠に飼ったこおろぎの音を想像するというのも、顧みて他を言うようで納得し難い。やはりこれは「釘にかけたる絵のほとりのきり〴〵す」と取るべきであろうと思う。

『草庵集』の句形は、句空宛芭蕉書簡の文言からして、その直後の改案と考えざるを得ないが、右の表現不足の点の外に、なお問題とすべきことがある。私にはどうしても「しづかさや」の句案の方が勝れていると見えるのである。「ゑかゝる壁」というあたり、やや道具立が多過ぎてごたつき、調べも暢びやかでない欠点はあるが、これで意は悉されているし、「きりぐ〳〵す」の鳴く音に草庵の夜の静かさが一層際立つ趣には、捨て難い味わいがあろう。それに対して「淋しさや」は言わずもがなであって、「しづかさや」と言えば「淋しさ」はその中に包含されている筈である。恰度山寺に於ける「閑さや岩にしみ入る蝉の声」（Ⅲ*494*）の句の場合、『初蝉』に見える「さびしさや」の句形が問題にならないのと同じなのだ。「釘にかけたる」という表現の欠点と共に、芭蕉がどうしてこういう改案を行ったのか、疑問の残るところである。

700　入麪の下焼立る夜寒かな　（己が光）

葛の松原・泊船集・蕉翁句集

秋季（夜寒）。

語釈　○**入麪**　「ニウメン」。索麺を醬油や垂れ味噌で煮たもの。「煮麪（にめん）」の変化した語と思われ、「入」は宛字である。支考の『葛の松原』では「乳麪」と表記している。「にうめん　まづそうめんをみじかくきり、ゆで候てさらりとあらいあげおき、たれみそにだしをくはへ、ふかせ入候。小な・ねぶか・なすびなど入てよし。うすみそにても仕立候。胡椒・さんせうのこ」（『料理物語』十七）「今世にふめんといふは、索麺を醬油（シタヂ）の塩梅汁（ツユ）にて烹、それに加天（カテ）を加へたる也」（『松屋筆記』九十二）「又ひとりはよく考（かんがへ）て煑麪（にうめん）とおち付ける」（『日本永代蔵』巻二ノ一）。○**下焼立る**　「下焼（したた）き立（た）つる」。入麪を入れた鍋などの下に薪で火を盛んに燃やすさま。「立る」は、盛んにする意をあらわす。「火をたく」（Ⅱ*267*）参照。「Taqitate, tçuru, eta.」（『日葡辞書』）。○**夜寒**　秋が深まって夜の寒さを感ずる時候をあらわす季語。既出（Ⅲ*621*）。

大意　亭主の心づくしで入麪を振舞おうとて、鍋の下の火を盛んに焚き立てる。夜寒の頃となっては、温かいものが

何よりだ。

考　『蕉翁句集』には「曲翠亭夜寒題」と前書があり、

是は曲水亭にて夜寒といへる題の発句也。さるを、大和の国みわの麓に旅ねの比、此句申されしよし、都の方より吾妻路に聞ゆとて、人〳〵のもてはやしける也。

という『葛の松原』の記事がこれを裏付けている。板本の初出は元禄五年の『己が光』であるが、右の文によれば、大和の三輪山の麓での作という誤伝が江戸にもたらされたわけで、この事はとりも直さず句が上方での作であることを示している。芭蕉が膳所の曲水と親しくなったのは元禄二年冬頃からと推定され、それ以後秋の夜寒の頃に膳所辺に居たのは元禄三、四年であった。このうち三年秋には曲水が江戸在番で東下中なので、当面の句は彼が膳所に帰っていた四年秋、芭蕉が九月末に江戸へ発足する前の作と確定するのである。三輪山の麓での作というような誤伝が生じたのは、この辺が所謂三輪索麺の産地だったことと関係があろう。

句は入麺の鍋の下に火を焚き立てるさまを以て夜寒の季感を際立たせようとした趣向で、中七までと下五とが相互に映発して表現効果を高めている。夜寒の句としてこれだけのものはなかなか求め難い秀吟である。井本農一博士は『葛の松原』に「夜寒といへる題の発句也」とあるのを重視して、

曲翠は本多藩の重臣であるから、台所の隣の間で芭蕉と話をしていたわけではなく、みずから、入麺の鍋の下を焚き立てるはずはない。『葛の松原』にいうように、この句は事実を詠んだ嘱目の句ではなく、夜寒を題にした空想の作である。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

と説いておられる。しかし、この句の表現の確かさは、題詠であると否とを超越している。曲水が手ずから火を焚き立てなくてもよいことは勿論としても、当日の夜食に出た入麺を作るところと見て一向構うまい。当夜の事実はどうあれ、句に描かれたところは、親しい何人かが囲炉裏を囲んでいる席で、入麺を入れた鍋が榾を加えて盛んに燃える

火にぐつぐつと煮える光景である。夜寒の時候に此処だけは温かい師弟団欒の空気が、なつかしく言い取られている。どれ一つ取っても抜き差しならない言葉の緊密さがこの句の生命であろう。

701 秋風のふけども青し栗のいが　（木枯）

泊船集・三冊子・浪化日記・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

はつ嵐ふけども青し栗のいが　（芭蕉庵小文庫）

秋季（秋風・栗）。

語釈 ○**ふけども**　「吹けども」。○**青し栗のいが**　「栗の毬」は実の外側にとげの密生した総苞をいう。最初のうち毬は薄く、淡緑色であるが、熟するにつれて褐色に変って堅くなり、やがて裂け目が出来て落ちる。まだ熟さない状態が「青し」である。「栗の花」（Ⅲ478）は夏であるが、実を主とした「栗」は秋になる。既出（Ⅰ119）。「栗毬……和訓義解云、いがはいかりの略也。其外刺おそるべき様也」（『滑稽雑談』）「つゆ萩のすまふ力を撰ばれず　芭蕉　蕎麦さへ青し滋賀楽の坊　野水」（『冬の日』）「かげろふとまる竹の編棚　叩端　侘つゝも栗の毬たく細けぶり　桐葉」（『幽蘭集』）「Auoi.」「Curino iga.」（『日葡辞書』）。

大意 秋風の吹く時節になって、物皆色づき熟れて行く中でも、栗のいがはまだ青いままだ。

考 芭蕉生前の集には見えないが、『蕉翁句集草稿』に「辛未」と頭注があり、「此自筆物の句也」とあるのに従って、元禄四年秋の作と見ておく。『芭蕉庵小文庫』の初五「はつ嵐」も秋の季語で、「青し」との関係が密接な感じの表現であるが、孤立した所伝であって、初案乃至改案形かどうかは断定の限りでない。『句集草稿』でも、「小文庫には、初あらし吹どもと有」とあるだけで、それ以上踏み込んだ説明は見られないのである。

土芳の『三冊子』にはこの句について、

此句、いがの青きをおかしとて句にしたる也。吹け共青しといふ所にて句とはなして置たりと也。（赤雙紙）

という記事があり、動機と共に、俳意の所在を指摘した芭蕉の語を伝えている。「いがの青きをおかし」と見たのは、「竹木皆秋風に靡き折れ臥し色を替へ、或は枯萎み落るに、何とて栗の毛毬のみは移ふ色も見えず難面（ツレナ）き事よ」（信天翁『笈の底』）という意に解してよかろう。物皆秋色に染まる中に、ひとり栗のいがだけが青々としているのは、妙に頑固な感じでおかしみがある。そのニュアンスをあらわそうとして「ふけども青し」といったので、一見他奇のない写生句のようでありながら、実はそうではないところが、中七にあらわれているのである。それをなお委しく言えば、芭蕉には、自然の破壊力にめげず、それに反抗し、生々たる生命力をしめすものを見て、……頼もしく思う心があった。生命のはかなさを実感すればこそ、一層そういう念が強くもなっていたのであろう。……けれども芭蕉とて、そういう大自然のいとなみに抗するようなことは所詮むだであることを知っていた。いくら秋風に抗して栗のいがが青くあろうとしても、ついには赤茶けて落ちなければならないのである。にもかかわらず抗して青々としていようとする。栗のいがばかりではない。自己も同様なのである。芭蕉は、その栗のいがに頼もしさとともに、苦笑せざるをえないおかしさをも感じていたのであろう。（山本唯一博士『芭蕉俳句ノート』）

ということになる。芭蕉はこの句にそのような思いを託したわけであるが、この表現で十全だとは思っていなかった。それが「……といふ所にて句とはなして置たり」という消極的な評価を示す言い方にあらわれていると思う。いまだに句の作意が分りにくいという見方がある所以であろう。

702
秋風や桐に動てつたの霜　（蕉翁句集草稿）
梧うごく穐の終りやつたの霜　（芭蕉庵小文庫）
桐ぅへて秋の終や蔦の霜　（梅主本三冊子）

石馬本三冊子・蕉翁句集
泊船集・石馬本三冊子

秋季（秋風・桐・つた）。

語釈 ○**桐に動て**「桐に動きて」。「桐一葉」といえば勿論秋であるが、『毛吹草』や『増山井』には「桐」だけでも初秋の季語とされている。既出（Ⅲ624）。「動く」主体は秋風である。「動いて」と音便によんでもよい。○**つたの霜**「つた」は、その紅葉を賞美して秋季とされる。既出（Ⅰ193、Ⅱ423）。「霜」は冬季であるが、ここでは秋の季物が主となる。

大意 秋風が立って桐の葉を散らしたばかりなのに、もう紅葉した蔦に霜が置いていることよ。

考 『泊船集』には「暮秋のけしきを」と前書がある。『蕉翁句集草稿』に「辛未」と頭注し、「此自筆物の句也」とあるので、元禄四年秋、東下以前の作と推定される。『三冊子』（石馬本）には「烁風や」の句を挙げた後に、

此句、桐うごく烁の終りやつたの霜とはじめは聞えし。のち直りて此烁風也。（赤雙紙）

と述べて、『芭蕉庵小文庫』や『泊船集』の句形が初案である旨を伝えている。同書の梅主本には、右の初案形が「桐うへて秋の終や蔦の霜」となっているが、これは孤立した所伝だから問題にはなるまい。

定案形の解としては、古くから、

梧は初秋より葉落初めて紅葉をまたず散尽る秋の末に、蔦に霜置て紅葉すを見れば、秋もはや残りすくなしとの心ならん。初秋に目をかけて、また秋の末をいへり。（東海呑吐『句解』）

桐に立にし秋も、いつしかに蔦に霜見る暮秋とはなりしと也。曲節味ふべし。（杜哉『蒙引』）

等、初秋から晩秋へかけての季物の趣を述べたとする見方が多かった。近代に及んで、

「動く」といふのは静かなところから生れ出る感じである。「桐に動いて」で立ちそめる秋を云つてゐる。「蔦の霜」は暮秋である。蔦が真紅になつてゐるのだ。秋風が桐に動いて、今はもう蔦の霜の終りに及んだのである。この句、て文字を味はへば分明である。よい句である。（『続芭蕉俳句研究』幸田露伴）

という説が古来の系統に立って精しく、「て」の働きに注目した点もすぐれている。桐に動く秋風は、「一葉落ちて天

下の秋を知る」初秋の趣であり、「つたの霜」は晩秋の景で一緒にはならぬから、その間をつなぐ「て」に働きが生ずるわけだ。初案の「梧うごく」も、恐らく初五は「穐」のみにかかるのであって、その秋の「終りや」と詠嘆したのであろうが、潁原博士が『新講』で指摘されたように、この形では秋の終りに桐が動いているようにも取れるので、「秋風や」の形に推敲したものと思われる。『泊船集』の前書は、風に動く桐も蔦の霜も共に秋の終りのことと解して付したものとおぼしく、芭蕉自身の手によるものではあるまい。「一句は要するに秋の始終を観じて咏歎したのである。梧葉に秋風が動き初めたのはつい昨日のやうであるが、早くも蔦の紅葉に霜を見るやうになつたといふのである」(潁原博士『新講』)と解するのが標準的である。

加藤楸邨氏はこれらと異なり、動くのは桐にまといついた蔦の葉であると見て、初案からの推敲心理を次のように述べておられる。

……「梧動く」は「梧」そのものが動くのであつて、秋風が桐に動くのでなくてよいのである。梧に纏ひついてゐる蔦が梧動く感を起させてゐるので、そこに「秋の終り」が感ぜられてゐるのである。事実は梧にまとひついた蔦が動くので、そのため、梧がうごくやうに感ぜられるのであるが、目に入るのは「梧うごく」感である。そこに「秋の終り」が把握せられてゐたのである。しかし、この表現は「梧うごく」といふところにどうしても充分でないところがある。そこで、秋風そのものをとり出して来て、その秋風を中心として桐に動く晩秋の蔦を生かさうとしたのである。「梧うごく」は「秋風や桐に動いて」と描写を確実にせられ、「秋の終りや」といふ咏嘆は句の裏にひそめられて、表現面からは咏嘆の色がすつかり払拭せられてしまつたのである。確実にせられた描写によつて印象は鮮明となり、「秋の終りや」は句の裏から返照して来て、句はずつと深味と鮮度とを加へたわけである。(『芭蕉講座』発句篇(下))

右の立場は後の『芭蕉全句』に至っても変っていない。新しい見方ではあるが、そういう内容を表現したにしては、

特に初案の段階に於いて「梧うごく」と「つた」が離れ過ぎていて、所詮無理であろう。私としては、秋の始終を観じたとする見方に賛同したい。句は蕭索とした秋の寂しさを感じさせる佳作であると思う。

辛未の秋洛にあそびて、九條羅生門を過るとて

703　荻の穂や頭をつかむ羅生門　（蕉翁句集草稿）

辛未ノ秋洛に遊びて、九條羅生門を過るに

荻の穂や頭をつかむ羅生門　（蕉翁句集）

蘆の穂やかしらを攫羅生門　（寛政板鹿島紀行）

秋季（荻の穂）。

語釈　○**辛未の秋**　「辛未」は、かのとひつじ、元禄四年の干支である。「元禄四辛未卯月十八日、嵯峨にあそびて去来ガ落柿舎に到」（『嵯峨日記』）。○**洛にあそびて**　「洛に遊びて」。「洛」は、京のみやこをいう。「らくの貞室、須磨のうらの月見にゆきて」（『鹿嶋詣』）「Racuchŭ. Miyacono vchi.」（『日葡辞書』）。○**九条羅生門を過るとて**　「九条」は、都の南端を東西に走る街路。「羅生門」は、都の中央を南北に貫通する朱雀大路の南端にあった羅城門のこと。これが「らいせい」「らいしやう」「らしやう」と転訛して「羅生」の字を宛てるに至ったものらしい。平安京創設の際に建てられた規模の大きいものだったが、大風によって何度か倒壊し、十世紀末頃からは廃址となって礎石だけが残っていた。空海の開基した東寺（教王護国寺）は、この門の東に位置しており、『山州名蹟志』（坂内直頼著、正徳元年刊）に「都下ノ俗以₂東寺南門₁羅城門ナリト覚悟ス。太ダ誤レリ」とあるから、或いは東寺の南門を羅生門と思ったのかも知れない。芭蕉の時代にも九条大路と千本通（旧朱雀大路）の交わるあたりに、門の址があったのであろう。「過る」は、通りかかる意。既出（Ⅲ *646* 前書）。○**荻の穂**　「荻の穂」。水辺に生える荻の花穂。はじめは薄紫色であるが、晩熟すると白くなり、秋風に揺れるさまも風情がある。「荻の焼原、荻の下萠、荻の若葉は春なり。しげるは夏也。かるゝは冬也。

乍レ去、穂(ほ)と云字、色の字そへば妹也」（『御傘』）「秋ごとに野分を船の追風にて、荻の穂かくる露の玉」（謡曲「項羽」）「Foni izzuru, l. Arauaruru.」（『日葡辞書』）。○**頭をつかむ**　「頭(かしら)を把(つか)む」。人の頭部を荻の穂がつかむ。もとより幻想である。「つかむ」は既出（I *140*）。「花守や白きかしらを突あはせ　去来」（『炭俵』上）「Caxira.」（『日葡辞書』）。

大意　鬼が住んだという羅生門の前では、秋風になびく荻の穂も、あの渡辺綱ではないが、頭をつかんで来そうで恐ろしい。

考　『蕉翁句集草稿』に冒頭の前書と句を挙げて、「此句前書、自筆物に出る」とあり、真蹟によったものと認められるので、「辛未の秋」京に於ける作であることは疑いない。この年九月中旬から下旬にかけて木曾塚から上京したことが、九月十二日付羽紅宛、九月廿三日付中尾源左衛門・浜市右衛門連名宛等の書簡によって知られ、句も晩秋の趣と見えるから、或いはこの間の作だったかも知れない。異形のうち、「荻の穂」は語を成さないので、『蕉翁句集』の伝写の誤りに相違なく、「蘆の穂」も時代の下る資料ゆえ、信憑性の高いのは『句集草稿』の句形だけである。

羅生門の址に立って、謡曲「羅生門」で有名な、頼光四天王の一人渡辺綱の鬼の腕斬りを思った趣向である。羅生門に鬼神が住むという噂を確かめようと、綱が門に行ったところ、

……しるしの札を取り出し、段上に立ておき帰らんとするに、後より兜の錏をつかんで引き留めければ、すはや鬼神と太刀抜き持つて斬らんとするに、取りたる兜の緒を引きちぎつて、おぼえず段より飛びおりたり。かくて鬼神は怒をなして、……綱を睨んで立つたりけり。……汝知らずや王地を犯すその天罰は遁るまじとてかゝりければ、鉄杖を振りあげ、えいやと打つを、飛び違ひちやうと斬る。斬られて組みつくを、払ふ剣に腕打ち落され、ひるむと見えしが、……

といった話だ。あたりの荻の穂がそよぐ景色から、それが宛かも、我が頭をつかみそうだと、鬼の恐ろしげな様子に比したのである。即興の言い捨てに過ぎず、言葉続きも整っていない。

湖上堅田の何某木沅醫師のこのかみの亭にまねかれて、みづから茶をたて、酒をもてなされける。野菜八珍の中に、菊花のなます猶かうばしければ

704

蝶もきて酢をすふきくのすあへ哉　（むすび塚）　篇突

粟津に日數ふる間に、茶の湯にすける人有。一濱の菊を摘せてふるまひければ

てふも來て酢をすふ菊のなます哉　（蕉翁句集草稿）　蕉翁句集

秋季（きく）。

語釈 **○湖上堅田**　「湖上」は、ここでは湖のほとりの意。「堅田」は、今の滋賀県大津市の西北部、琵琶湖の西岸の地である。既出（Ⅲ621前書）。「湖上に生れて東野に終りをとる」（芭蕉「東順伝」―『句兄弟』）「Coxǒ. Mizzuvmino vye.」（『日葡辞書』）。**○何某木沅医師**　「何某」は、苗字など分っていても敢えて書かないおぼめかした表現法。既出（Ⅱ267前書等）。「木沅」は恐らく俳号であろう。この人は姓氏生歿等詳らかでないが、堅田の医師で俳諧を嗜んだ人と思われる。「医師」も既出（Ⅰ55）。**○このかみの亭にまねかれて**　「兄の亭に招かれて」。木沅の兄の家に招かれたのである。「このかみ」は「子の上」で、兄の意になる。「甲戌の夏大津に侍しを、このかみのもとより消息せられければ」（『続猿蓑』下、芭蕉発句「家はみな」前書）「Conocami.」（『日葡辞書』）。**○みづから茶をたて**　「自ら茶を点て」。亭主自ら茶を点てるのである。「茶をたてゝ進ぜましよ」（狂言記「煎物売」）「Chauo tatçuru.」（『日葡辞書』）。**○もてなされける**　「もてなす」は、人を接待饗応する意。既出（Ⅲ510前書）。「れ」は、木沅の兄に対する尊敬。**○野菜八珍の中に**　「野菜八珍の中に」。八種のうまい野菜料理の中で。「珍」は、珍味をいう。「大比叡やはこぶ野菜の露しげし　野童」（『猿蓑』巻三）「食には八珍を尽し。酒には五味をたしむ」（汶村「閑居賦」―『本朝文選』巻三）「此中の古木はいづれ柿の花　此筋」（『続猿蓑』下）「Yasai.」「Facchin.」「Vchi.」（『日葡辞書』）。**○菊花のなます**　「菊花の膾」。菊の花びらを茹でて甘酢に漬けた料理。即ち句中の「きくのすあへ」である。「なます」は本来、獣肉・魚肉をこまかに刻んだ料理をいう。既出（Ⅲ587）。「菊花ひらく時則重陽といへるこゝろにより」（『続猿蓑』下、芭蕉発句「菊の香や」前書）「Qicqua. Qicuno fana.」（『日葡辞書』）。**○猶かうばしけれ**

ば　「猶香(なほから)ばしければ」。この「猶」は、一段と、の意。「かうばし」は、菊の香にかけて、風味豊かで味がよいことをいったのである。「寅の日の旦を鍛冶の急起て　芭蕉　雲かうばしき南京の地(ツチ)　羽笠」（『冬の日』）「Cǒbaxij.」（『日葡辞書』）。○蝶もきて　「蝶(てふ)も来(き)て」。「も」は、人ばかりか蝶も、という気持。「蝶」は春の季語であるが、ここでは「きく」（秋）が主となるので、この蝶は秋の蝶である。○酢をすふ　「酢(す)を吸(す)ふ」。菊膾の酢を蝶が吸うのである。井本農一博士は、最近の『新編日本古典文学全集　松尾芭蕉集1』で、「画題「酢吸三聖(すすいのさんせい)」をもじる。「酢吸三聖」は蘇東坡が黄山谷とともに仏印禅師を訪い、桃花醋を吸い、顔をしかめている図柄。「三酸」「三吸」ともいう。俗にこの三者を、孔子、老子、釈迦に作ることもある」と注しておられる。従うべき説であろう。「酢(す)をさすはべにか紅葉の鮒なます　一正」（『毛吹草』巻六）「まがはしや花吸ふ蜂の往還り　園風」（『猿蓑』巻四）「Su.」「Xiruuo sŭ.」（『日葡辞書』）。○きくのすあへ　「菊(きく)の酢和(すあ)へ」。「すあへ」は、酢で和えた料理をいう。「のびるの酢あへをこしらへて持て出」（『世間仲人気質』巻二ノ二）「Su aye.」（『日葡辞書』）。

大意　この菊の酢和えは、風味豊かでまことに結構。蝶も飛んで来て酢を吸っています。

考　『篇突』（李由・許六共著、元禄十一年刊）には「片田何某が亭にて(ママ)」と前書があり、『蕉翁句集』の前書は『句集草稿』と同じである。大津辺に居て堅田を訪れた元禄三、四年何れかの秋の作であろう。『むすび塚』（市山撰、元文五年刊）は、前掲の前書と共に収めて「真筆　丈日堂ニ掛ル」と注があるから、撰者市山所蔵の真蹟に拠ったことが知られる。仮りにこれが写しとしても、内容は芭蕉の文として信じ得るものであり、この句の成立事情を伝える最も委しい文なので、本書ではこれを本位句の底本とした。『蕉翁句集草稿』には、

此句前書、自筆物の趣也。白船(ママ)には、菊花讃、折節は酢に成菊のさかな哉と有。此句の直しか。

とあり、このような前書と句を書いた真蹟もあったらしい。但し、「趣也」という言い方は、伝聞と見る余地もある。「きくのすあへ」にしても「菊のなます」にしても、同じ事で甲乙は付け難く、句案の先後は明らかにし難い。「きくのすあへ」を本位句としたのは、板本初出の『篇突』がこの句形であることと、『むすび塚』の前書が委しいからに過ぎない。なお、土芳は『草稿』で、「折節は」の句と初案かと見ているが、二句は題材が共通するだけで、趣は異

なる。私は別の句と見て、後者は年代不明の条で扱いたい。
恐らくもてなしの席に秋の蝶がひらひら舞い込んで来たのであろう。それをとらえて、もてなしに出た菊の酢和えを賞美した挨拶句である。蝶は荘周夢蝶の寓言もあり、隠逸の花たる菊に配するに相応しい。更に井本博士のいわれる「酢吸三聖」の背景もあるとすれば、亭主の隠逸を賞する用意は十分であった。蝶が実際に酢を吸うのでないことは勿論で、興じた趣向までなのである。

705　朝茶のむ僧しづかさよ菊の霜　（柿表紙）

堅田祥瑞寺にて
朝茶のむ僧静也菊の花　（ばせを盥）

秋季（菊）。

語釈　○**朝茶のむ**　「朝茶飲む」。「朝茶」は、朝に飲む茶で、特に朝食前の茶をいうこともある。発音は『日葡辞書』に「Asagia.」とあるのに従う。「大根のそだゝぬ土にふしくれて　芭蕉　上下ともに朝茶のむ秋　馬莧」（『続猿蓑』上）。○**菊の霜**　菊に霜の置いているさまによって、冬近い趣が見える。季語としては秋の「菊」の方が主となろう。山本健吉氏は、「菊の霜は秋か冬か分らないが、京や近江は寒いから秋のうちに初霜が降ることはしばしばである」（『芭蕉全発句』）と述べておられる。

大意　朝茶を飲む僧の姿の、如何にも静かなことよ。庭には菊の花にもう霜が置いている。

考　『ばせを盥』（朱拙・有隣撰、享保九年刊）の前書にある「祥瑞寺」は、今の滋賀県大津市本堅田一丁目、堅田に行けば芭蕉が滞在したであろう千那住持の本福寺の北隣にあり、近江の臨済禅の中心道場として知られた寺である。この前書は信じてよいものと思われ、堅田での秋の吟とすれば元禄三、四年の作と推定される。寛治の『芭蕉句選拾遺』

も『ばせを盥』と同じ句形を収めているが、「堅田禅瑞寺にて」という前書は誤りである。句形は何れを信ずべきか定め難いが、『柿表紙』（吾仲撰、元禄十四年刊）はこの句の板本初出であるし、下五の表現がなかなか働いているので、この方を本位句とした。

朝の勤行の後、禅寺の方丈で僧が茶を飲んでいる。庭には霜置く菊の花。如何にも静かな禅寺の朝の光景である。「僧静也菊の花」が写生的な感じなのに対して、「僧しづかさよ菊の霜」には挨拶句らしい相手への感情の動きがあり、「霜」には老僧を思わせる象徴味さえ感ぜられる。聊か道具立が揃い過ぎた感じは否定し難いが、禅寺の早朝の静謐なたたずまいは、よく描かれた句である。

706　祖父親其子の庭や柿蜜柑　（蕉翁句集草稿）　――蕉翁句集

　毛亊がちゝの別墅なかしくしつらひて、園中數株の木實にとめるを

　祖父親まごの榮や柿みかむ　（堅田集）　――駒撮・ばせを盥・門鳴子

秋季（柿・蜜柑）。

語釈　○**祖父**　「オホヂ」。字を宛ててあるように、親の父、即ち祖父をいう。「そも〳〵祖父祖母無事にして、その子に娌をとり、又此孫成人して娌をよび、同じ家に夫婦三組」（『日本永代蔵』巻六ノ五）「Vôgi.」（『日葡辞書』）。○**親**　「オヤ」。ここは「祖父」の子で「子」の親に当る人を指す。「その親をしりぬその子は秋の風　支考」（『続猿蓑』下）「Voya.」（『日葡辞書』）。○**其子**　「其の子」。「親」の子、祖父からいえば孫に当る人を指す。○**庭**　「ニハ」。祖父や親、その子と三代の家族が住む家の庭である。「庭に木曽作るこひの薄衣　羽笠　なつふかき山橘にさくら見ん　荷兮」（『冬の日』）「Niua.」（『日葡辞書』）。○**柿**　「カキ」。「大和本草云、柿、其類尤多し。本邦に木練・木淡・椑・渋柿有。京都の木練を上品とす。大和の御所の邑より多出るゆへに御所柿と云。又、木練に非ずして味早く甘きを木淡と云」（『滑稽雑談』）「Caqi.」（『日葡辞書』）。○**蜜柑**　「ミカン」。「ミツカン」ともいった。温州蜜柑・紀

州蜜柑等凡て橘の同類とされ、花は夏、実は秋季になる。「橘」（Ⅳ676）参照。「大和本草云、橘は蜜柑也。其花を花たちばなと云、古歌によめり。俗にたちばなと云物、柑子に似て小也。金橘より微大也。是本草の所謂柚橘歟、未詳。皮薄く味酸、橘類の最下品也。たちばなは橘の本名なるを、此果に名付るは誤り也。△これらの説、たちばなと云物は蜜柑なる事明らか也。総て橘本十四品有と時珍本草に見えたり」（『滑稽雑談』）「山はみな蜜柑の色の黄になりて　翁　日なれてかゝる畑の露霜　支考」（『蜜柑の色』）「Mican.」（『日葡辞書』）。

大意　祖父、親、その子と三代の人々が住むこの家の庭には、柿や蜜柑がたわわに実をつけているよ。如何にも豊かで幸せなお屋敷だ。

考　「さるものゝ別墅に」（『蕉翁句集』）「堅田柳瀬可休亭にて」（『ばせを盥』）「簗瀬可入亭にて」（『門鳴子』）等の前書があり、寛治の『句選拾遺』にも「元四、堅田柳瀬可休亭にてと有。中七、孫のさかへやと有」とあって、中七を「孫のさかへや」とした句形に右の前書を付した真蹟のあったことが知られる。また、『蕉翁句集草稿』に「此自筆物に、さるものゝ墅所にてと有」と注するのによれば、中七を「其子の庭や」とした真蹟もあったわけである。多くの資料が堅田の可休亭での吟であることを伝えている上、『堅田集』（歌雄ら撰、寛政十年刊）の句文は、許六の『泊船集書入』に「かた田に直筆あり」と記す原物とおぼしく、堅田住の兎苓の後裔素苓の所持していた真蹟を紹介したものなので、前書の内容も信憑性が高い。可休は元禄四年の『京羽二重』に「五条御幸町東へ入」と所書があり、『花見車』にも評判されている俳人であるが、その本貫が恐らく堅田であって、兎苓の父だったのであろう。兎苓も元禄四年八月十六日に堅田で催された芭蕉一座の歌仙に出座している。堅田の家には可休の父も健在で三代同堂の家だったのを賞めた挨拶句と思われる。芭蕉が秋に堅田を訪れたのは元禄三、四年であって、『蕉翁句集』や『句選拾遺』が四年とし、他の資料を見てもその可能性は大きいが、四年と断定出来る根拠はない。

句形は『堅田集』の所伝が初案で、後に『句集草稿』等の形に推敲したのであろう。「栄」は挨拶の気持が強く出

た表現であるが、それを柿や蜜柑の木の多い庭のさまをいうだけにとどめて、豊かさを賞める気持は裏の含みとしたのである。『句選拾遺』に「祖父と親その子の庭や柿みかん」という句形を伝えるのは、「祖父」の訓みに迷って「と」を加えたのではあるまいか。この形は問題とするに当らないと思う。句は道具立が多過ぎて少しごたごたした感じはあるが、はずむような調子が芭蕉のくつろいだ気分を伝え、挨拶句としてまとまっている。

柴のいほときけばいやしきなゝれどもよにこのもしきものにぞ有ける

このうたは東山に住ける僧をたづねて、西行上人のよませ玉ふよし、山家集にのせられたり。いかなるあるじにやとこのもしくて、ある草庵の坊につかはしける

707

しばのとの月やそのまゝあみだ坊　（蕉影余韻所収真蹟懐紙）

芭蕉庵小文庫・泊船集・蕉翁句集・あみだ坊・鹿島詣

しばのいほときけばいやしき名なれどもよにこのもしきものにぞ有ける

このうたは東山に住ける僧をたづねて、西上人のよみ侍るとかや。猶そのあるじのこのもしければ

草の戸の月や其まゝあみだ坊　（定本芭蕉大成所収真蹟懐紙）

秋季（月）。

語釈　**○柴のいほと……ものにぞ有ける**　「柴の庵と聞けば賤しき名なれどもよに好もしき物にぞ有りける」。次に見えるように西行の歌であるが、『山家集』には「しばのいほときくはいやしき名なれどもよにこのもしき住ゐ也けり」の形で見える。芭蕉真蹟の歌形は憶えちがいであろう。「粗末な草庵と聞くと卑しい感じの呼び名であるけれど、実際来て見ると、大変好もしい住居であ

ったよ」の意。「柴のいほ」は、「柴の戸」(I 126)と同じく粗末な草庵をいう。「よに」は、世間に比べるものがないことから、大変、非常に、の意になる。「何につけてか又とはれまし　我だにもすまれぬ山の柴の庵　救済」(『菟玖波集』雑二)「みかへれば白壁いやし夕がすみ　越人」(『はるの日』)「さ候へばこそ世にありがたき物には侍りけれ」(『徒然草』八十八段)「同じ着物揃て有し事こゝろもし」(『好色一代男』巻八)「Iuo. i, Iuori.」「Iyaxij.」(『日葡辞書』)。○**このうた**「此の歌」。○**東山に住ける僧をたづねて**「東山に住みける僧を訪ねて」。「東山」は、京都東方の丘陵地帯。其処に住んでいた僧については、右の西行歌の『山家集』詞書に「いにしへごろ東山にあみだ坊と申ける上人の庵室にまかりてみけるに」とあり、この「あみだ坊」は不明ながら、一説に少納言信西の息明遍かという。「蒲団着て寐たる姿や東山　嵐雪」(『枕屛風』)。○**西行上人のよませ玉ふよし**「西行上人の詠ませ玉ふ由」。「西行」は平安末期の歌僧。既出(I 190前書等)。「上人」は、高僧に対する敬称。「玉」は、宛字である。「よし」は、以上のような趣旨・事柄の意。下の「のせられたり」にかかる。「彼西行上人の、骨にて人を作りたてゝ」(『猿蓑』其角序)「Xônin.」(『日葡辞書』)。○**山家集にのせられたり**「山家集に載せられたり」。「山家集」は、西行の歌を集めた私家集。平安末期から鎌倉初期にかけての六家集の一として名高く、芭蕉の愛読書であった。「亡友芭蕉居士、近来山家集の風躰をしたはれければ、追悼に此集を読誦するものならし／あはれさやしぐるゝ比の山家集　素堂」(『陸奥鵆』四)。○**いかなるあるじにやとこのもしくて**「如何なる主にやと好もしくて」。西行の訪ねた柴の庵の主は、どんな人だったろうかと好感を覚えて、の意。「あるじにや」の後に「ありけむ」を補って解する。○**ある草庵の坊につかはしける**「或る草庵の坊に遣はしける」。この「坊」(僧侶)が誰かは分らないが、西行の歌の詞書にある僧のように、東山の草庵に住んでいたのであろう。その人へ句を言い遣ったというのである。「つかはしける」の下に「句」が略されている。「かへりにけるのちに、よみて、はなにさしてつかはしける」(『古今集』巻二、貫之歌「ひとめみし」詞書)「Tçucauaxi, su, aita.」(『日葡辞書』)。○**しばのとの月**「柴の戸の月」。草庵の枝折戸にかかる月。(I 126)参照。○**そのまゝあみだ坊**「阿弥陀坊」は、前記『山家集』の詞書にある、西行の訪ねた東山に住む僧の名。芭蕉が句を遣った僧の境涯が、それとそっくりだというのである。

大意　枝折戸にかかる月が、まことに侘びた風情だ。ここに住む御坊は、あの西行上人の訪ねた阿弥陀坊そのままの方なのだろう。

考　『芭蕉庵小文庫』『蕉翁句集』『鹿島詣』(文化十年刊)には、『蕉影余韻』所収の真蹟懐紙と大同小異の前書があり、

『あみだ坊』（道彦撰、寛政五年刊）に「柴の庵ときけばいやしき名なれどもよにこのもしきものにぞ有けるときこへ侍るは、ひがし山に住ける僧をたづねて西上人のよませたまひけるとなむうけたまはる。そのあるじの僧こそこのもしけれ」とある前書も真蹟に拠るという。『蕉翁句集』に元禄四年作とする根拠は明らかでないが、真蹟は二点とも元禄初頭から三、四年頃までの筆蹟と認められ、芭蕉が上方にあった元禄三、四年の秋が成立年次として有力になる。「元禄四年九月の帰東出発前の揮毫」（岡田利兵衛氏『芭蕉の筆蹟』）という推定もあり、本書ではこれを最下限と見て此処に配しておく。文化板『鹿島詣』に収めるところから、その所蔵者の先祖で芭蕉と交わりのあった医師本間道悦に関わる句ではないかと見る説は、相手を「ある草庵の坊」とする真蹟の前書と矛盾するし、筆蹟の年代からも到底従い得ない。「しばのと」「草の戸」両句形の先後は何れとも定め難く、『小文庫』や『蕉翁句集』と一致する前者を本位句とした。

古注に空也を引合に出したり、即心即仏の境地に関係づけたりしているのは、前書を知らないか無視した上に、句意を誤解したものである。西行の歌文には見えない「月」を出したのは、季節のあしらいとしての役割の外に、仏教の悟境をあらわす「真如の月」の感じがなくはないが、芭蕉の主眼は何といっても西行憧憬の情であろう。但し、前書がないと、句意も句境も分りにくいところがあるのは否定し難い。

708 九たび起ても月の七ツ哉（雑談集）

泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

秋季（月）。

語釈 **○九たび起ても** 「九度起きても」。度々目ざめるさま。「九度は敢て九たびゆびを折て九度起たるにはあらず。唯秋夜の長きをいはむがために、九は数の極りなれば、かくはつくれるものなり」（何丸『芭蕉翁句解大成』）「舞姫に幾たび指を折にけり（荷兮）」

（『あら野』巻六）「Coconotçu.」「Fitotabi.」（『日葡辞書』）。○七ツ　「七ツ」。午前四時。午前と午後の零時を九つとし、以降四つまで一つずつ数を減じて行く昔の時刻の数え方。従って午後四時をいう場合もある。貞門時代の『崑山集』に「九月十三夜深更に／お月さまやいくつ十三七つ時」の句があり、ここの「月の七ツ」には、童唄の「お月さまいくつ、十三七つ」が発想の契機になったかとする説がある（井本博士『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）「七つより花見におこる女中哉　陽和」（『続猿蓑』下）「Nanatçu.」（『日葡辞書』）。

大意　秋の夜長に度々目がさめて、もう夜明けかと起き出しても、月はまだ七つ時分の様子だ。夜明けには間があるなあ。

考　『蕉翁句集』に「旅窓長夜」と前書があり、『蕉翁句集草稿』に「此句自筆物に、旅窓長夜ト題有」とあるのによれば、この前書を持つ真蹟に拠ったのである。但し、『句集』に「九たび超ても」とあるのは、後年の誤写と思われる。其角の『雑談集』初出で、同書が元禄四年年末の成立であるから、同年の秋までには成っていた句と見られよう。四年九月十三夜の石山詣での時かとも考えられるが、なお確定的ではない。

句の基本は秋の夜長を侘びる老情であるが、「九」と「七」の修辞によって、軽く興じた趣になっている。

709　稲こきの姥もめでたし菊の花　（笈日記）

泊船集・蕉翁句集

そのころそのほとりの田家に宿して

服部氏潜□子、おもひかけず道のほとりにて出あひ侍りて、北村何某のもとへ道びかれけるに、松・もみぢすみかをかこみ、菊・鶏頭庭にみだれて、秋のものどもなどとり入ゆゝしく見え侍れば

いねこきの姥もめでたし庭のきく（芭蕉翁真跡展観録）

秋季（稲こき・菊の花）。

語釈 ○**そのころ** 「其の頃」。この前書は『笈日記』彦根部に見える支考の文である。この前に上方から江戸へ向う途次、李由の住持する明照寺に泊った際の芭蕉と李由の発句・脇を録しており、その前書の「元禄五年神な月のはじめつかたならん」を承けて「そのころ」といったのである。「元禄五年」は支考の錯誤で、芭蕉の東下は元禄四年でなければならない。また、句が秋季なので、九月末の吟ということになる。○**そのほとりの田家に宿して** 「その辺りの田家に宿して」。現在の滋賀県彦根市平田町にある明照寺近くの農家に泊ったことをいう。「ほとり」（Ⅰ126前書）「田家」（Ⅱ302前書）は既出。「加賀の全昌寺に宿す」（『猿蓑』巻三、曾良発句「終夜」前書）。○**稲こきの姥** 「稲扱きの姥」。「稲こき」は稲穂から籾米を分離する作業。稲こき機にかけて扱き取るのである。その作業に従事する老女が「姥」（Ⅱ426）。「按、古者扱麦稲穂以二小管通縄繋、握持之挟扱穂也。至秋収時、則近隣賤婦孀婆為之所雇以得飽。而近年製稲扱、其形如狭牀机植竹大釘数十。微似馬歯把。搭穂拖。其捷十倍於扱竹。故孀婆失業。因名後家倒。又近頃以鉄為歯名鉄稲扱」（『和漢三才図会』）「売上は稲こきの歯にくわへさせ」（『柳多留』初篇）「稲扱　いなこき　京・江戸共に、いねこきと云ふ。畿内にて、ごけだをしと異名す」（『物類称呼』巻四）「Ineuo coqu, l, coqi uotosu.」（『日葡辞書』）。○**めでたし** 既出（Ⅰ252）。ここは健康で長生きなのを賞める意である。

大意 農家の庭先に菊の花が咲いている。あたりで稲こきをする老女も、元気でめでたいことだ。

考 『蕉翁句集』には「田家に宿して」と前書がある。前述したように支考は『笈日記』で年次を誤っているが、帰東の途次の作とすれば元禄四年秋、九月二十八日に桃隣を伴なって木曾塚の草庵を出た後、平田の明照寺に入る前、九月中の作と見られる。長い前書のある資料は村田利兵衛氏の所蔵。天保十三（一八四二）年八月伊賀上野の故郷塚で芭蕉百五十回忌追善供養が催されるに当って展観された真蹟類の目録を記した稿本で、摸写された五十点の中に見える。文中の「服部氏」「北村何某」については他に裏付けがないが、内容は略々信ずべきものであろう。「菊の花」「庭のきく」の異同は、現段階では『笈日記』の句形を本位句とするのが当然であるが、若し『展観録』の信憑性を増す資

料が出現すれば、支考の杜撰誤伝の可能性もないではない。

芭蕉の泊った「田家」（『展観録』の前書によれば「北村何某」の家ということになる）の主に対する挨拶句で、菊の花に老女を取合わせて、南陽酈県の菊水の故事（Ⅰ54、110参照）を背景にしている。この連想は言い古されたことであるが、……この句では長寿延齢の縁が一句の裏にひそめられてしまって、菊の花そのものが旧家の庭前の生きた姿としてとらえられている。（『芭蕉全句』）

という加藤楸邨氏の鑑賞が至当と思われる。「菊の花」と「稲こきの姥」の配合は珍しく、「雅俗のおかしみ」（杜哉『蒙引』）になっており、全体としてさわやかな余情を持つ句に仕上った。

710

元祿辛未十月明照寺李由子宿。

當寺此平田に地をうつされてより、已に百歳に及ぶとかや。御堂奉加の辭に曰、竹樹密に土石老たりと。誠に木立ものふりて、殊勝に覺え侍りければ

百歳の景色を庭の落葉哉　（真蹟画賛）

韻塞・泊船集・蕉翁句集・真蹟集覧

冬季（落葉）。

語釈　○**元禄辛未十月**　「ゲンロクシンビジフグワツ」。「元禄辛未」は元禄四年を指す。既出（Ⅳ703前書）。「十月更衣」（『あら野』巻六、荷兮発句「玉しきの」前書）。「Iŭguachi.」「Iŭguat.」（『日葡辞書』）。○**明照寺李由子宿**　「明照寺李由子に宿す」。「明照寺」は、浄土真宗西本願寺派の寺院で、山号を妙法山という。寺伝では、明徳四（一三九三）年祐海の開基。もとは近江国犬上郡多賀の後谷にあり、平田山南麓の山脇村（現彦根市山之脇町）を経て、元禄十四年に彦根市平田町の現在地に移ったというが、天正期の記録に「ヒラタ明照寺」とある由であるから、元禄より遥か前に既に平田に移ったものと思われる。後文参照。土地の人は「メンセウジ」

と呼ぶというが、この直前に認めた九月廿八日付千那宛芭蕉書簡に「平田妙昌寺へも一宿立寄可申候」と書いており、この原簡は知られないながら、この宛字は当時「ミヤウセウ」と呼んだ証左になると思う。「李由」はこの寺の第十四世住持で、蕉門の俳人。既出（Ⅱ*399*前書）。「子」は軽い敬称である。「荷兮子が奴僕をしておくらす」（『更科紀行』）。○**当寺此平田に地をうつされてより**「当寺此の平田に地を移されてより」。「当寺」は明照寺を指す。『韻塞』に「当時」とあるのは誤り。「平田」は前条参照。領主の命令などで山脇村から平田に移転させられてから、の意。「当寺三十二世の昔、真壁の平四郎出家して入唐、帰朝の後開山す」（『おくのほそ道』）「さいつ比田野へ居をうつして」（『あら野』員外、素堂発句「麦をわすれ」前書）「Tôji.」「Iyeuo vtçusu.」（『日葡辞書』）。○**已に百歳に及ぶとかや**　「已に百歳に及ぶとかや」。もう百年にもなるとかいうことだ、の意。「かや」の下に「語り伝ふ」等の語が略されている。元禄四年より百年前は天正末年に当る。「既頽廃空虚の叢と成べきを」（『おくのほそ道』）「幾年経てかかげろふの小野の小町の百年に及ぶや」（謡曲「関寺小町」）「Sudeni.」「Momotoxe. i, Fiacutoxe.」「Voyobi, u, ôda.」（『日葡辞書』）。○**御堂奉加の辞に曰**　「御堂奉加の辞に曰く」。「奉加」は、寄付の意。寺院の本堂など建立の為の寄付を募る趣意書が「辞」である。その中に以下の文がある、との意。「ねざめ〳〵のさても七十　杜国　奉加めす御堂に金うちになひ　重五」（『冬の日』）「焼蚊辞を作りて」（『猿蓑』巻二、嵐蘭発句「子やなかん」前書）「その文にいわく」（『法明童子』）「Midô.」「Fôga.」（『日葡辞書』）。○**竹尌密に**　「竹尌密に」。竹やその他の樹木がびっしり繁っていて。「尌」は「樹」の古体。「昔年僅得求琴韻、何処孤墳竹樹中」（『嵯峨日記』丈艸詩）「Chicu.」「Mit.」（『日葡辞書』）。○**土石老たりと**　「土石老いたりと」。土や石が年代を経て苔など蒸しているさま。「竹尌密に土石老たり」が「御堂奉加の辞」の中の文で、明照寺境内の状態を述べている。「松栢年旧、土石老て苔滑に」（『おくのほそ道』）。○**誠に**　「誠に」「実に」の意で、「御堂奉加の辞にいふ通り」という気持をあらわす。既出（Ⅰ*196*前書）。○**木立ものふりて**　「木立もの古りて」。木々のたたずまいに何処となく古色があって、の意。「もの」は接頭語。「いやしからぬ家の、奥ふかく、木だちものふりて」（『徒然草』四十三段）「Codachi.」「Furi, ita, furite.……i, Furû natta.」（『日葡辞書』）。○**殊勝に覚え侍りければ**　「殊勝に覚え侍りければ」。「殊勝に」は、殊に勝れた意から、有難く神々しい感じをいうに至った語。神仏に関しては多くこの意味に用いられる。有難く感ぜられたので、の意。「奇石さま〴〵に、古松植ならべて、萱ぶきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地也」（『おくのほそ道』）「Xuxô. Cotoni sugururu.」（『日葡辞書』）。○**百歳の景色を**　「百歳の景色を」。百年を経た古色を帯びた景色を。「を」の下に「示す」等の語を補って解したい。この「を」には詠嘆的気分もある。「今将千歳のかたちとゝのほひて、

めでたき松のけしきになん侍し」（『おくのほそ道』）「Yomono qexiqiuo nagamuru.」（『日葡辞書』）。○**落葉**　「オチバ」。冬の季語。『御傘』に「木の葉ちる・おち葉は冬也。乍去色の字をそゆれば炼也」「落葉……木の葉ちるも同事也。……色と云字入れば炼也」とあって、これらの語に古人の感じた季節感が分る。「落葉衣といひては。霜のはかまのしたがさね。苔衣のうはぎなどいひなし。……猶山里の道もわけなく。谷川の流れもひつき。森も林もまばらなるけしき。又木がらしの女のこと葉をよせ。落葉の宮の名をたて。風のちぐさに見ゆるありさま。から紅に水くゞる景気なども」（『山之井』）「あはれなる落葉に焼や島さより　荷兮」（『あら野』巻七）「Vochiba.」（『日葡辞書』）。

大意　庭に落葉が積って、百年の歳月を経たこの御寺の古色を帯びた景色に、まことに相応しいことです。

考　『韻塞』（李由・許六共撰、元禄九年刊）の前書は真蹟と略々同じであるが、冒頭部が「宿明照寺元禄辛未千呂四十有八歳」となっており、『蕉翁句集』では「宿明照寺元禄四年未千呂四十有八才」とある。『泊船集』には「明照寺にて」と前書があり、『真蹟集覧』は、この句を記した霜月五日（元禄四年）付曲水宛芭蕉書簡を摸刻したものである。真蹟冒頭の年記によって年次は明らかで、十月早々李由の住持する明照寺に泊った時の挨拶吟である。

……気色と云詞は花美（ハナヤカ）なる風情の詞なるを、是は寂寞の意に自然と聞ゆ。是則引替て遣たる所、翁の粉骨也。
（信天翁『笈の底』）

という説は蓋し適評であろう。庭の風情を賞めながら、その間おのずから寂び色があらわれていると言いたい。「景色を」については、「……なるを」と取る説、「百年の景色さながら」と見る説、感動の対象を示す間投助詞から転じた格助詞で、詠嘆的気分が強いとする説等、さまざまである。私は逆接には取りたくなく、間投助詞から転じた格助詞というのも、抑々それは助詞「を」の沿革として古代にあったことで、近世期の語法に適用するには疑問があろう。但し、詠嘆的気分のあることは認められる。結局、『芭蕉俳句研究』で小宮豊隆氏の述べられた「さながら」説、「庭の落葉を見るとそれが如何にも百年の景色をよく表はして居る」と解するのが穏当と思う。この「を」は聊か不安定

な措辞であることは否めない。

元祿五年神な月のはじめつかたならん、月の澤ときこえ侍る明照寺に羇旅の心を澄して

711 たふとがる涙やそめてちる紅葉　（笈日記）

泊船集・蕉翁句集・笠の影

冬季（ちる紅葉）。

語釈 **○元禄五年神な月のはじめつかた**　「元禄五年神無月の初めつ方」。以下の前書は『笈日記』彦根部に見える支考の文である。「神な月」は陰暦十月。その初め頃に「たふとがる」の句が成ったというのである。「元禄五年」が支考の錯誤であることは、「稲こきの」（Ⅳ*709*）の句の条で述べた。「神無月の初、空定めなきけしき」（『笈の小文』）「辛未のとし弥生のはじめつかた」（『猿蓑』巻四、嵐蘭発句「夢さつて」前書）「**Caminazzuqi. P. jūguachi.**」「**Fajime.**」（『日葡辞書』）。**○月の沢ときこえ侍る明照寺**　「月の沢と聞え侍る明照寺」。彦根郊外平田にある明照寺。前の句の条に既出。今も彦根の平田町南部に「月沢」という小字が残っている。「きこゆ」は、世に広く伝わって有名な意。「観音房・勢至房ときこえたる大悪僧二人ありけり」（『平家物語』巻一）「**Yoni qicoyeta fito.**」（『日葡辞書』）。**○羇旅の心を澄して**　「羇旅の心を澄まして」。「羇旅」は、旅の意。「羇」は「羈」の俗字である。「心を澄す」は動揺する心を安定させて静かな心境にすること。寺院に泊ったので、仏道の悟境に縁のある表現をしたのである。「羇旅辺土の行脚、捨身無常の観念」（『おくのほそ道』）「ことりすをくいて、こをうみそだてゝやしないけるを御らんじて、御こゝろをすましてあはれにおぼしめしける」（『熊野の御本地のさうし』）「**Cocorouo sumasu.**」（『日葡辞書』）。**○たふとがる涙や**　「尊がる涙や」。明照寺の阿弥陀如来を尊信する善男善女の、有難がってこぼす涙。「か」を濁らずに「たふとかる」とすれば、衆生を済度しようとする阿弥陀仏の慈悲の涙と取ることも出来るが、やや生硬な言い方でもあり、芭蕉を含む善男善女の涙とする方がまさる。また、蓮如の『御一代記聞書』に「法敬申サレ候。タウトム人ヨリ、タウトガル人ゾタウトカリケルト、前前住上人仰ラレ候。面白コトヲイフヨ。タウトム体殊勝ブリスル人ハタウトクモナシ。タダ有難ヤトタウトガル人コソタウトケレ。面白キコトヲ云ヨ。モトモ

ノコトヲ申サレ候トノ仰事ニ候ト云々」とあることが、赤羽学博士の『芭蕉俳句鑑賞』に紹介されている。他力信仰の浄土真宗では「タウトガル」態度をよしとしていたことが分る。「や」は疑問に詠嘆を含む助詞で、下の「そめてちる」にかかって行く。「村人は関のむしろにこゞなりて　土芳　鯖谷門徒を尊がりけり　良品」(『横日記』)「Tôtoi.」(『日葡辞書』)。○**ちる紅葉**「散る紅葉」。冬の季語。「紅葉かつちるは秋也。ちりそむるは冬也」。「紅葉のちりて物を染る新式冬に成也」「川の紅葉……丸が云、紅葉かげの水にうつる躰ならば秌[成]べし。うきてながるゝ躰ならば、落葉の事なれば冬に成べき也。只句躰に随べし」(『御傘』)「行あたる谷のとまりや散もみぢ　許六」(『目団扇』)。

大意　阿弥陀様を尊び有難がる我等善男善女のこぼす涙が、このように紅葉をあかく染めて散っているのだろうかなあ。

考　「おなじく」(『泊船集』)「明照寺に駅(ママ)旅の心を晴して」(『蕉翁句集』)「神無月のはじめ、月の沢と聞へ侍る明照寺に羈旅の心を澄して」(『笠の影』)等の前書があり、『泊船集』はこの句の前に「明照寺にて」と前書した「百年の」の句があるのを承けたのである。元禄四年十月の初め、東下の旅の途次に明照寺に立寄っての吟であることは、異論の余地がない。『笈日記』と『笠の影』(自蹊撰、元文二年成。李由三十三回忌追善集)には、「一夜静るはり笠の霜」という李由の脇も録されている。

「そめて」の主体を「涙」とすれば、善男善女の涙が紅葉を紅く染めるのであるし、「紅葉」を主体とすれば、紅葉の紅い色が人の涙に映ずる趣になる。紅葉が散って物を染めるという発想も例があることで、後者のような解もあるけれども、ここは「涙」が主体と見るべきであろう。「寄紅葉懐旧と云事を宝金剛院にてよみける／いにしへをこふるなみだの色ににてたもとにちるはもみぢなりけり」(『山家集』中)「山里は袖のもみぢの色ぞこきむかしをこふる秋のなみだに」(『夫木抄』巻十五、慈鎮)等の古歌の背景が考えられ、芭蕉自身も細道の旅中、

洞の地蔵にこもる有明　　翠桃

蔦の葉は猿の泪や染つらん　翁（曾良書留）

といった付句を作っている。折柄明照寺の境内に紅葉の散る景色を見て、あの紅葉は善男善女が阿弥陀仏を有難がってこぼす涙が紅く染めたのかと言ったのである。その知的はからいを嫌って、この句を評価する向きは少いけれども、ここでは古い寺院に対する虔しい信仰心と散る紅葉の鮮やかな色彩感とがよく調和して、しんと寂まった「心を澄ます」境地をあらわし得ていると思う。「や」にも纏綿たる情趣を伴ない、調べも落着いて捨て難い味わいがある。挨拶句として佳作と評してよかろう。

庭興即事

712　作りなす庭をいさむるしぐれかな（真蹟懐紙写）

みの丶國垂井の宿矩外（ママ）が許に冬籠して

作り木の庭をいさめるしぐれ哉（蕉翁句集）

冬季（しぐれ）。

語釈　○**庭興即事**　「テイキョウソクジ」。「即事」は、眼前その場の事を詠んだ詩歌の類をいう。既出（I *191* 前書）。庭の面白さをそのまま詠んだ句の意。○**作りなす庭**　「作り為す庭」。「作りなす」は、人工を施して作り上げること。「せんざいの草木まで心のまゝならず作りなせるは、見るめもくるしく、いとわびし」（『徒然草』十段）「Tçucurinaxi, su, ita.」（『日葡辞書』）。○**いさむる**　「勇む（いさむる）」。ここは生き生きさせる意。既出（I *225* 前書）。慰める、鎮めると解するのは非。「いさむ」は「諌」「禁」の意から「勇」の意へ展開して来た語であるが、うたた寝を親が諌める連想から「うたた寝」との縁が古く、更には人の眠りをさます時雨の音から、時雨との縁も深い語であったという（深沢真二氏「連歌の変奏」―『連歌俳諧研究』九十号―参照）。

大意　時雨が一しきり降って、趣深く作り上げた庭を、一際生き生きさせていることだ。

考　『蕉翁句集』の前書にある「矩外」は「規外」の誤りで、垂井（現岐阜県不破郡垂井町垂井）にあった浄土真宗本龍寺の八世住職、享保十九（一七三四）年一月十日、七十歳で歿した人という。『後の旅』（如行撰、元禄八年刊）所収、規外の芭蕉追悼句「今からは雪見にころぶ人は誰」の前書に、「芭蕉翁元禄四年の冬我寺に来給て」云々とあり、また『国の華』（支考ら撰、宝永元年刊）に見える規外と芭蕉との付合の前書には、「芭蕉翁行脚の時、予が草戸を扣きて、作りなす庭に時雨を吟じ」ともあるから、元禄四年十月江戸へ赴く途次、近江から美濃に入って垂井の本龍寺での吟と推定される。

「庭興即事」と題した柿衛文庫蔵の懐紙は、晩年の軽みの書風の代表的なものとして有名であったが、近年印が偽物と認定され、真蹟としては疑念が持たれるに至った。しかし、句形は右の『国の華』に見える規外の句の前書によっても裏付けられるし、何かこの元になる真蹟があったのではあるまいか。『蕉翁句集』には「作り木の」という句形を掲げて、「此句は露川が門人の何がしが集に出たり」と注してあるが、露川の門人の集がどの集を指すか確認出来ず、たとえそれが出て来ても誤伝の可能性を否定し難い。「作りなす」の句形を本位句とした所以である。『真蹟拾遺』によると、「宿本龍寺」と題した真蹟もあったという。

木や石の配置が面白く、念入りに作られた庭に時雨が降って、一層趣を引き立てると賞めた挨拶の句である。「作りなす」或いは「作り木の」を、人工が過ぎたように解するのは、挨拶の意に適わないから良くあるまい。深沢真二氏は、連歌以来の「いさむ」と「しぐれ」の語の関わりを検討され、「時雨は、うたたねをするなという親のいさめを思い出させるように、人を眠りから覚まさせるものですが」という説明を前提にして、この句は「いさむるしぐれ」という言葉を用いながら、連歌での語義をややずらしつつ「作りなす庭」と結び付けて、新しい時雨の情趣を言い留めようとしたという見方を提示しておられる（深沢氏前記論文参照）。

713 ねぶかしろく洗あげたる寒さかな （真蹟自画賛）

葱白く洗ひたてたるさむさ哉 （韻塞）

―泊船集・蕉翁句集

冬季（ねぶか・寒さ）。

語釈 **○ねぶかしろく洗あげたる** 「葱白く洗ひ揚げたる」。「ねぶか」は「根深」の義で、ねぎの異名。冬の季語になる。既出（I 112）。『和漢三才図会』葱の項に、「茎根長白色俗呼曰根葱又名根深。経霜則柔軟堪煮食。味甚甘美、温能除寒気。所謂冬葱是也。……下野州梅沢濃州宮代之葱白、其白処近尺長於葉也」とあり、宮代村（現岐阜県不破郡垂井町宮代）はこの句の成った垂井の規外亭から程近く、ねぎの名産地であった。「洗あげたる」は、畠から取って来たものをすっかり綺麗に洗ったさま。「葱を只きと云。故に俗に葱を呼て一文じと也。△按に、和俗根深と云、葱の類にて此種其根ふかし也。東国に産する物、青き所二分、白き所八分なる物有。京畿にいまだ見ず」（『滑稽雑談』）「霜先は鴨なつかしき根深かな松江維舟」（『桜川』冬一）「チリアクタヲアラヒアゲテ此銭ヲ尋出ス」（多胡辰敬家訓）。

大意 取り立ての葱をすっかり綺麗に洗った、その根が一際白く、寒々と目にしみることだ。

考 前の「作りなす」の句の条にも引いた規外の句「木嵐に」の前書に、「芭蕉翁行脚の時、予が草戸を扣きて、……洗ひ揚たる冬葱の寒さを見侍る折からに」とあるのは、この句のことに違いなく、垂井の規外の許で成った句と知られる。真蹟自画賛は、今は焼失したというが、俎板の上に葱三本を描いたのにこの句を賛してあり、この時規外に与えたものであったろう。『韻塞』の句形は初出板本であるだけに注意しなければならない。「洗あげたる」が洗ってしまった後の感じなのに対して、「洗ひたてたる」は今洗いつつある情況とも見える。しかし、前掲の規外の文にも「洗ひ揚たる」とあり、加えて自画賛があることを考えると、「洗ひたてたる」には誤伝の可能性も否定し難く、本位句は「洗あげたる」の形を採るべきであろう。

この句、以前は川岸などで農婦が畠から抜いて来た葱をざぶざぶと洗って積み上げている情景と取る説が多かった。句としてはそういう鑑賞もよく、読者の受取り方は自由であってよいが、右にいった芭蕉自画に俎板が描かれていたところを見ると、これは規外の本龍寺の庫裡にあった葱を動機としたものらしい。もてなしに出る名産の葱を賞めた挨拶の意を句に読み取るべきであろう。句柄からしても、その新鮮さは印象深いものがある。『韻塞』の句形で解するものが多く、「洗あげたる」の形は、自画賛以外には蝶夢の『芭蕉翁発句集』あたりが古いものなので、こういう傾向も自然の成行であり、「洗あげたる」を初案、「洗ひたてたる」を改案と見る説も出ている。「洗ひたてたる」には強調の意があるので、この方がすぐれていると見られ勝ちであるが、前述したように『韻塞』の句形には誤伝の可能性もあって、これが定案である保証はない。この句は真蹟自画賛の句形で鑑賞するのが穏当であろう。

此句は、寒気の甚しきをいはん迚、此寒さたとへば葱の白根を白〻と洗ひ立たるごとくの寒さ也といへり。（正月堂『師走嚢』）

というように譬喩の意と取っては良くない。これは葱の根の白さに寒さを感じ取っているので、いわば寒さの視覚化ともいうべき感覚の冴えを見せているところが核心なのである。「洗あげたる寒さ」という一気の把握によって、この「ねぶか」は寒さの象徴にまで到達していると思う。

葱を洗い立てたそのきわやかな純白に、「寒さ」の視覚的な等価物を見ているのである。一本の棒のように詠み下し、単純さの極致において、「もの」の中核を摑み出し、そこに「寒さ」の本質を把握した句である。……寒さのくるのが早い関ヶ原の近辺としては、「寒さ」の真髄において句を詠むことも、土地への褒美の意味となったであろう。（『芭蕉全発句』）

という山本健吉氏の所説は、「洗ひたてたる」の形での鑑賞ながら、傾聴すべきものを持っている。挨拶句がそのままで高次の表現を獲得した好例といいえよう。

千川亭に遊て

714 折〳〵に伊吹をみては冬ごもり（後の旅）　――冬かつら

千川亭

折〳〵に伊吹を見てや冬籠（笈日記）　――泊船集・蕉翁句集

冬季（冬ごもり）。

語釈 **○千川亭に遊て**　「千川亭に遊びて」。「千川」は、岡田氏、通称治左衛門。美濃大垣藩士で、父の宮崎荊口、兄の此筋、弟の文鳥と共に俳諧を嗜み、芭蕉の指導を受けた。宝永三（一七〇六）年九月十一日歿、享年三十余と伝えられる。芭蕉が大垣の彼の家に招かれた時の句なのである。**○折〳〵に伊吹をみては**　「折〳〵に伊吹を見ては」。「伊吹」は美濃と近江の境に聳える山。既出（Ⅲ*553*）。大垣からその山容が望まれるので、千川の家から伊吹山を時々眺めてはといって、その眺めを賞めたのである。**○冬ごもり**　「冬籠り」。冬の寒さを厭って家に籠居することをいう季語。既出（Ⅱ*437*等）。

大意　ここの御主人は時折あの伊吹山の姿を眺めては、悠々と冬籠りをしておられる。まことに羨しい御環境だ。

考　『冬かつら』（杉風撰、元禄十三年刊）所収の千川の句「折〳〵の時雨伊吹はぬらせども」の前書に、「ある年の初しぐれを凌ぎ、予が茅舎に笠を脱給ひしところ」としてこの句を引用しており、元禄四年十月東下の途次に大垣に立寄った折の句と推定される。大垣には貞享元年十月にも滞在したことがあるが、この年はまだ千川が十歳前後と若過ぎるので、元禄四年の方が相応しい。『後の旅』では元禄二年の作句と混在していて年代が紛らわしいが、二年の滞在は九月であって、冬の句を詠む筈はないのである。

句形については、『笈日記』の「見てや」も芭蕉らしい措辞ではあるが、『後の旅』が地元大垣の集であり、当事者

の千川自身が『冬かつら』に引いている句形とも一致する「みては」を本位句としたい。

千川亭からの眺望を賞した挨拶句に過ぎないが、落着いた佳句である。陶淵明の詩句「悠然見二南山一」（「飲酒」其五）の趣も見えるが、まだ二十そこそこの千川にとって、隠者に擬せられるのは面映かったかも知れない。加藤楸邨氏は、

　亭主千川の清閑な冬籠りの姿を好もしいものとして見てとることから、千川の心の内側に入ってその冬籠りを詠みとったもの、それがそのまま挨拶の句となっているものである。……「見てや」であると、外側から冬籠りの暮らしぶりを推察し、羨望する心があらわになるが、「見ては」だと、相手の境遇に滲透融合して詠んだ自然さが出て来る。その意味でも、「見ては」の方に惹かれる。（『芭蕉全句』）

と見ておられる。「てや」は千川の境涯を推測している表現であるだけに、挨拶性がより強く出るようである。「ては」であると、それが内側に籠められ、その分千川の境涯そのものが表に出て来ることになるのだ。

　伊吹山は千川亭から西に見え、最も印象的な雄偉な山であった。非常に天候の変化が多く、たびたび雲間に姿を隠すが、「折〳〵に」とはその山の特色を端的につかんでいる。土地の名山を詠むことは、大国へ行った句作者の礼儀でもある。……芭蕉は来訪者だから、冬ごもりをする主体はもちろん主の千川であり、千川の立場に自分を移行させてこの句を発想しているのである。『笈日記』などには中七「伊吹を見てや」とあるが、これだと疑問の意になり、「見ては」だと主の気持になって詠んだことになる。僅かにテニヲハ一字の違いで発想の根本が違い、こもる心の深さに違いが生れてくる。相手の境涯に自分を没入させることで、その結果、その人の境涯と家と土地とを讃えるのだ。（『芭蕉全発句』）

という山本健吉氏の鑑賞も良い。元禄二年の「其まゝよ月もたのまじ伊吹山」（Ⅲ553）の句では、山その物を描くことが亭主への挨拶の意に叶ったのであるが、当面の句では「冬ごもり」の境涯が中心となり、其処からの点景として伊吹山が描かれているのである。

715

ふらずとも竹樹る日は蓑と笠（真蹟自画賛）

笈日記・末若葉・陸奥衛・泊船集・蕉翁句集・水の友

ふらずとも竹植る日やみのと笠（真蹟画賛）

木枯・蓑笠・鉢扣

自畫賛

降らねども竹植る日は蓑と笠（浪化日記）

夏季（竹樹る日）。

語釈 **○ふらずとも**「降らずとも」。雨が降らずとも、の意。**○竹樹る日**「竹樹うる日」。「樹」は動詞に用いた場合、「植える」意になる。ここはワ行下二段の古典的基準に従うが、『鉢扣』（長父・花天撰、正徳二年刊）には素堂の句の前書に「降らずとも竹うゆる日や蓑と笠」として引用されている。この動詞は近世期にはヤ行に活用するのが一般であったから、実際には多く「樹ゆる」と訓まれていたであろう。（Ⅰ52）参照。竹の移植を陰暦の五月十三日に行えば枯れないという中国の俗信があり、この日を竹酔日・竹迷日などというのに基づくが、近世初期の歳時記類には採り上げられていない。「五月十三日……此日、竹を移栽べし。晋書に五月十三日を竹酔日とす。……この日竹をうゆれば、かならず活としるせり」（『日本歳時記』）「魯町曰、竹植る日は古来より季にや。去来曰、不覚語（ママ）。先師句にて初て見侍る。古来の季ならずとも、季に然るべき物あらば、撰び用ゆべし。先師、季節の一つも探り出したらんは、後世によき賜と也」（『去来抄』故実）「五月十三日、古人謂二之竹酔日一、又謂二之竹迷日一、栽レ竹多茂盛。或陰雨則鞭行、明年笋茎交出。△和俗も此日を用ゆ。又竹誕日とて笋を採食ふ事なり。竹養日ともいへり」（『滑稽雑談』）「竹植る其日を泣や村しぐれ　素堂」（『鉢扣』）。**○蓑と笠**「蓑と笠」。雨のための用意である。（Ⅲ634）参照。

大意 蓑笠を着た姿は、竹を植えるのに如何にも相応しい。たとえ雨は降らなくとも、竹を植える日には蓑と笠をつけて作業したいものだ。

考 「竹木因亭」（『笈日記』）「おなじく」（『木枯』）「画レ竹自讃」（『末若葉』）「竹酔日」（『泊船集』）「木因亭」（『蕉翁句集』）等の

前書があり、元禄五、六年の揮毫と思われる信ずべき自画賛が現に三点伝わっている。『木枯』の「おなじく」というのは、その前にある「画賛」を承けたものである。柴田筥浦氏の『谷木因』によれば、『笈日記』にいう木因亭の画賛は、その後裔の谷家に伝来したといわれ、また膳所の正秀追善集『水の友』（松琵撰、享保九年刊）には、芭蕉の上方行脚の際正秀の竹青堂を賀した句とも見える。同じ句をそれぞれの場合に適用したのであって、何れも事実であったろう。木因亭を訪れた時としては、貞享元年、同五年、元禄二年、同四年等が考えられ、画賛は必ずしも当季に限らないこともあって、何れとも定め難い。元禄四年冬に木因亭を訪れた確証はないけれども、その頃までに句が成っていたことは確かなので、姑くここに配しておく。

「日は」と「日や」の異同は、どちらが先か卒かに断じ難い。「日や」とここに切字を入れるのは、表現上やや拙い感じもあり、現存自画賛や『笈日記』の一致する「日は」を本位句とした。「降らねども」は表現として稚拙で、恐らく誤伝と思われる。

竹酔日は五月雨の頃なので、蓑笠姿が相応しく、実際にも竹を植える作業には、そういう姿が多いであろう。そこで「ふらずとも」と打ち出したところに、興じた調子が見える。蓑笠姿を実用としてではなく、風流なものとして愛賞するのである。竹の画の賛として相応しく、蓑笠姿は俳味も十分だから、いろいろの場合に揮毫したのであった。『笈日記』に古注に二十四孝の孟宗が雪中に竹の子を掘ることを云々しているのは、あらずもがなの付会である。『笈日記』に「是は五月の節をいへるにや、いと珍し」、『木枯』に「此句より竹うゆる日の季と成しも、翁の晩作也」と注しており、［語釈］に引いた素堂の句も、芭蕉のこの句から出ているもので、当面の句は「竹樹る日」を季に用いた嚆矢としてよかろう。

……蓑笠は決して雨に備へる為ではない。たゞ折からにふさはしいその姿を愛し、風情をめづるのである。……それは竹酔日が五月十三日だといふ事実に基く事は言ふまでもない。しかしこの場合それよりももつと重要な事

は、竹植うる日に伴ふ五月雨頃の季節感なのである。それを蓑と笠の風情に見出したのが芭蕉の手柄であつた。これは五月十三日といふ暦日から得た新季題ではない。竹を植ゑる情趣の中から探り出された季節感である。だからこそ季節の一つも探り出すといふ事が、後世へのよい賜物とも言はれるのである。支考は『古今抄』にこの句を……画図の体と評し、『説叢大全』はこれを承けて「誠に蓑笠の姿、有声の画とも云べき風流なり」と言つて居る。適評にちがひないが更にその画中から五月雨頃の風情を看取せねばならぬ。（『芭蕉俳句新講』）

という潁原退蔵博士の所説は、確論というべきである。

716 凩に匂ひやつけし帰花　（後の旅）

耕雪子別墅則時

泊船集・蕉翁句集

冬季（凩・帰花）。

語釈 ○**耕雪子別墅** 「耕雪子（かうせつし）」は伝未詳。『後の旅』の初めに、大垣に縁のある芭蕉の句を録した中に見えるので、大垣の人であろう。「子」は、軽い敬称。「別墅（べつしよ）」は、本宅以外の別荘、下屋敷等をいう。「住る方は人に譲り、杉風が別墅に移るに」（『おくのほそ道』）「**Bexxo.**」（『日葡辞書』。但し、「墓所」の意とする）。○**則時** 「ソクジ」。「即時」に通じ、「即興」の意とする説が多いが、詩題としては馴染まない語である。これは恐らく「即事」の意で、眼前その場の事を詠んだ詩歌の類に題する語で、字を誤ったものと思われる。既出（Ｉ*191*、Ⅳ*712*前書）。○**凩** 「コガラシ」と訓む国字。冬の季語。既出（Ｉ*138*等）。○**匂ひやつけし** 「匂（にほ）ひや付（つ）けし」。この「匂ひ」は視覚的なもの。色どりを添えたのか、というのである。「や」は疑問。句は「つけし」で切れる。「かみいとながき女をかき給ひて、はなにべにをつけて見給ふに」（『源氏物語』末摘花）「**Irouo tçuquru.**」（『日葡辞書』）。○**帰花** 「帰（かへ）り花（ばな）」。初冬の小春日和に、草木が時節はずれの花を咲かせること。冬の季語である。既出（Ｉ*34*）。「初冬……かへり花小春ニハ何花も咲事有」（『誹諧初学抄』）「和俗の冬月の頃ほひ、諸木或は草類の花開くをすべてかえり花と称す。中華に云狂花、又褪花の類也。俳道に冬に用ひ、

則正花と用ゆ。一木一草に不レ限故也」（『滑稽雑談』）。

大意　時ならぬ帰り花は、こがらしの吹くこのお庭に色どりを添えているのでしょうか。

考　『泊船集』と『蕉翁句集』には「ミノ耕雪別墅」と前書がある。大垣での初冬の吟とすれば貞享元年か元禄四年の作であり、『蕉翁句集』は元禄四年の部に出すけれども、『後の旅』では年次を明らかにせず、排列も年代順にはなっていない。姑く四年十月以前と見るにとどめておく。『旅寝塚』（撰者未詳、寛延四年刊）なる書には、中七が「匂ひやつけて」となっているというが、この措辞は拙劣で信じ難い。

帰り花の咲く庭の風情を賞めて挨拶としたまでで、「主を花に興（タト）へ、我を風として花の香を佩たる趣意」（信天翁『笈の底』）などとは取らぬ方がよかろう。「木枯の頃なれど御住居は別段である」（『芭蕉句集講義』菱花説）というのである。「匂ひやつけし」が「凩」に相応しくなく、空疎な技巧に終っている。

書　讃

717　西行の草鞋もかゝれ松の露　（笈日記）

泊船集・蕉翁句集

秋季（露）。

語釈　○**画讃**　「グワサン」。画を賞めて記した句であることを示す。画は松の樹を描いたものだったであろう。「画讃」（『猿蓑』巻四、芭蕉発句「山吹や」前書）。○**草鞋もかゝれ**　「草鞋（わらぢ）も懸（か）れ」。「草鞋」は旅の必需品としての趣向。既出（Ｉ221等）。松の枝に草鞋でも懸っていてほしいという願望を、命令形であらわした。「つゝじ咲残り、山藤松に懸て」（「幻住庵記」）「Cuguini cacaru.」（『日葡辞書』）。○**松の露**　「松」は「松」の異体字。松の枝や葉からしたたる露。露が画にかいてあったわけではあるまいが、季節のあしらいとして添えたのである。

大意 しとどの露に濡れたこの松に、西行の用いた草鞋でもかかっていてほしいものだ。そうしたら風情も一入(ひとしお)であろう。

考 『笈日記』大垣部に見え、画賛なので何時の作とも定め難い。『蕉翁句集』に貞享五年とする根拠は不明である。画賛の場合必ず秋の作とも限らないので、姑く最後に大垣に立寄った元禄四年十月までに成ったものと見るにとどめておく。

積翠の『芭蕉句選年考』に「或る行脚の僧の曰、松に草鞋の懸りたる図の讃とぞ」とあるが、「草鞋もかゝれ」というのは、画に無い物を願望として言ったのだから、画に草鞋が描いてあった筈はない。画に無い物を賛句で加えて興とした趣向なのである。「草鞋」を出したところに、西行の旅の境涯を慕う心が見える。西行が讃岐で草庵を結んでいた時の歌として、

いほりのまへに、まつのたてりけるをみて
ひさにへてわが後のよをとへよまつ跡しのぶべき人もなきみぞ
こゝをまたわれすみうくてうかれなばまつはひとりにならんとすらん

等を始め、庵の松の歌が『山家集』下に並んでいる。こうした西行歌の連想があったと見てよかろう。

718 水仙やしろき障子のとも移り(ママ) （鵲巣物語）

笈日記・泊船集・蕉翁句集

冬季（水仙）。

語釈 ○**水仙** 「スヰセン」。ヒガンバナ科の多年草。暖地の海岸に自生し、観賞用に栽培もされる。細長い厚質の葉が地下の鱗茎から出て、葉の間から花茎を直立し、冬から春にかけて清楚な感じの白や黄の花を開く。季語としては冬。「水仙花……霜がれの

草の中に。いさぎよく咲出たるを。菊より末のをとうとゝもてはやし。雪の花に見まがひていかにすいせんとわきかぬる心をもつらね。又葛もて作るすいせんにもそへ。花瓶の口をすいせんくわなどもいへり」（『山之井』）「水仙花……鱻海集には小寒の節の花也」（『増山井』）「水仙や練塀われし日の透間　曲翠」（『続猿蓑』下）「Suixenqua.」（『日葡辞書』）。○**しろき障子のとも移り**　「白き障子の共映り」。水仙の花の白さが白い障子と映り合うさまをいった。当時「映り」に「移」の字を宛てる慣用があったようである。「障子ごし月のなびかす柳かな　素龍」（『炭俵』上）「日あたりや寒紅梅のとも移り　学二」（『千鳥の恩』）「Xôji, andon, tôro, caracasa nadouo faru.」（『日葡辞書』）。

大意　水仙の花が如何にも美しい。小ざっぱりと白い障子が映り合って、まことに好い感じだ。

考　「元禄三年の冬神な月廿日ばかりならん、あつ田梅人亭に宿して、塵裏の閑を思ひよせられけむ、九衢斎といへる名を残して」（『笈日記』）「熱田梅人亭にやどして」（『蕉翁句集』）等の前書がある。『皺筥物語』には句の前に、……程なく幻住庵を見捨、武陵に趣たまふ折、支考、桃林（ママ）の二法師ともなひて梅人子が許へおはしてと述べ、発句以下九句の付合を録している。幻住庵以後の事で支考と桃隣を伴なった東下の旅の途次であるから、元禄四年十月熱田に於ける作にちがいなく、『笈日記』の「元禄三年」は支考が年次を誤ったものと認められる。支考は上方を出発するのが遅れて、熱田で芭蕉と桃隣に追い付いたのであった。梅人は、名古屋の越人が後年に著した『猪の早太』（享保十四年刊）にこの時のことを述べて、「熱田のゑびす屋に翁止宿せられし時」とある宿屋の主人かと思われ、芭蕉の発句に「炭の火ばかり冬の饗応」と脇を付けている。

茶室の床に水仙が生けてあったのであろう。『続芭蕉俳句研究』で小宮豊隆氏は、東側と南側の障子に明るい日光が射して、その角の卓などに水仙が生けてある情景を想定しておられ、諸説が出ているが、その条の露伴説に、水仙も白く、障子も白く、互に映発してゐるのだ。炭の火ばかり（引用者注、梅人の脇を指す）は、茶の炭手前の心入れを謙遜的にただの炭火にして云つたので、茶室であらうと思はれる。水仙が障子の側に在るのでは小宮君の説

の如く解さねばならぬが、水仙は床の間に在ると思ふ、では障子と共うつりと云ふがよいと云はるるか知らぬが、此障子は床の間のそばの小障子で、普通建築の椽近くの出入りの障子では無いと思はれます。小窓に、掛障子といふものがある、それだと思ひます。

とあるのが確説で、近時安東次男氏も、「日当りのよい南向の部屋などでは、この句の面白さはないのだ。坪庭からでも明り窓からでもよいが、紙という絶妙な材質を通して程々に抑えられた光が花生のスイセンに届く、と読んでこそ「とも移り」の工夫になる」(『芭蕉発句新注』)と述べておられる。もとより水仙が中心であって、それに障子の白が映り合うのである。その席の寂かなたたずまいを述べただけで挨拶とした句で、水仙の花のような清楚な品格を持っている。

新城はむかし阿叟の逍遙せし地也。なにがし白雪といふおのこ、風雅の子ふたりもち侍る。二人ながらいとかしこくぞ侍る。阿叟もその少年の才をよみして、是を桃先・桃後と名づけ申されしを、支考も名の説かきてとゞめける也

719 其にほひ桃より白し水仙花　(笈日記)

泊船集・茶の草子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・奥の枝折

冬季(水仙花)。

語釈 ○**新城**　「シンシロ」。今の愛知県新城市。豊川の東北に当る山間の町である。当時は旗本菅沼織部の知行所であった。以下の前書は支考の文。○**むかし阿叟の逍遥せし地也**　「昔阿叟の逍遥せし地也」。「阿叟」の「叟」は「翁」と同じく年寄りの男を意味し、「阿」は「おじいさん」の「お」のように、親しんで呼ぶ場合の接頭辞。支考は芭蕉を指すのによくこの語を用いる。「逍遥」は、ぶらぶら歩くことで、ここは旅の途次その辺に来たことをいう。嘗て芭蕉が旅の途中その辺に来た土地だというのである。

『笈日記』の書かれた元禄七、八年頃から三、四年前の事に過ぎないが、「むかし」という語は比較的近い過去に就いても用いられる。「吾腸を見せけるよとて、阿叟も見つゝわらひ申されし」（『笈日記』）「吾逍遥優遊ノ地也」（『太平記』巻二十四）「Xôyô. Farucani asobu.」（『日葡辞書』）。○**なにがし白雪といふおのこ**　「何某白雪といふ男」。「白雪」は太田氏、名は長孝、通称金左衛門。新城の庄屋で、醸造業をも営み、屋号を升屋といった。白雪は俳号で、芭蕉と会ったのはこの時が最初であるが、尾張鳴海の知足を通じての入門だったらしい。『誹諧曾我』『きれぐ』『三河小町』等の撰著は、芭蕉関係の貴重な資料を含んでいる。享保二十（一七三五）年六月七日歿、享年七十五。「なにがし」は、俗名などをおぼめかした表現である。既出（Ⅱ *267* 前書等）。「おのこ」は「をとこ」と同じ。「お」は「を」の仮名ちがいである。「あるは宮守の翁、里のおのこ共入来りて」（『幻住庵記』）「Vonoco.」（『日葡辞書』）。○**風雅の子ふたりもち侍る**　「風雅の子二人持ち侍る」。白雪が風雅、より精しくは俳諧を嗜む子を二人持っている、の意。○**二人ながら**　「二人ながら」。二人共に。「彼岸過一重の花の咲立て　野坡　三人ながらおもしろき春　執筆」（『炭俵』上）。○**いとかしこくぞ侍る**　「いと賢くぞ侍る」。大変利発である。○**少年の才をよみして**　「少年の才を嘉して」。「よみす」は、賞めること。芭蕉が白雪の子たる二人の少年の風雅の才を賞めて。「悼少年」（『続猿蓑』下、惟然発句「かなしさや」前書）「才身ニタリ、栄分ニアマリテ時ノ花ト匂シカバ」（『海道記』）「Xônen. Vacai toxi.」「Saiaru fito.」（『日葡辞書』）。○**是を桃先・桃後と名づけ申されしを**　「是を桃先・桃後と名づけ申されしを」。少年二人に桃先・桃後という俳号を与えたことをいう。桃先が兄、桃後が弟の号である。桃先は白雪の長男で、名は重英、通称は初め新四郎、後に父の金左衛門の称を襲った。元禄十二年同地の雪丸と共に『茶の草子』を撰した。享保十（一七二五）年歿、享年四十八。桃後は名は孝知、通称半四郎。享保五年歿、享年四十。「申さる」は尊敬法として使われている。「を」は、前後の文をつなぐだけの接続助詞。○**文考**　「シカウ」。各務氏。美濃山県郡北野の産。幼時郷里の寺で出家し、還俗後も僧形だったようである。元禄三年芭蕉の幻住庵滞在前後に入門。翌四年の師翁東下の旅には桃隣と共に随行した。同七年の芭蕉最後の病床に侍し、歿後師の行脚の跡を辿って集めた資料をもとに、翌年『笈日記』を刊行した。その後も諸国を遊歴して蕉風の宣伝と自己の勢力の扶植につとめ、美濃派の祖となった。句風は平俗で見るべきものは少いが、俳論家として多くの著作を残し、俳文にも新生面を拓いている。享保十六年二月七日歿、享年六十七。「此集をつくりたて、猿みのとは名付申されける」（『猿蓑』其角序）「Nazzuqe, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**名の説かきてとゞめける也**　「名の説書きて留めける也」。「説」は「閉関之説」のように、文体の別としては、筋道を説き明かして自らの意見を述べる類のもの。ここは支考が「桃先」「桃

後」の名の由来を述べた文章を書いて白雪の許に残した、というのである。「いはんかたなくすごきことのは、あはれなるうたをよみおき、しのばるべきかたみをとゞめて」（『源氏物語』帚木）「Xet.」「Todome, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**其にほひ**「其のにほひ」。ここの「にほひ」は、「凩に匂ひやつけし」（Ⅳ716）の「匂ひ」と同様に視覚的なものである。○**桃より白し**「桃」は既出（Ⅰ231等）。○**水仙花**「スヰセンクワ」。「水仙」（Ⅳ718）に同じ。

大意 純白な水仙の花。その色あいは、桃などよりもずっと白い。

考 『茶の草子』には「元禄辛未冬」と前書して、芭蕉一行と白雪ら新城の俳人達との歌仙一巻が収められている。即ち元禄四年十月新城に於ける俳席で発句として詠まれたものであった。『蕉翁句集草稿』や『蕉翁句集』も、皆『笈日記』の前書に基づいて、成立事情を注している。

文考は『笈日記』の句の後に「是は水仙の花を桃前梅後といへるより、かくはいへるなるべし」と付記しており、解釈上にも参考になる。芭蕉が白雪の二児に桃先・桃後の名を与えたのは、自らの号「桃青」の一字を採って、兄弟だから「先」「後」としたのであろうが、それと共に「桃前梅後」の語も思い合わせていたのである。中国の詩学書『円機活法』所収の顔潜庵の水仙を詠じた詩に「翠袖黄冠玉作レ神、桃前梅後独迎レ春」（翠袖黄冠玉は神と作り、桃前梅後独り春を迎ふ）に基づいて、水仙を「桃前梅後」というに至ったもので、それを少しずらして「桃先」「桃後」と案じたのであった。水仙を思い合わせたのは、折柄その座に水仙が生けられていたからだと思う。そして「桃より白し」に、桃青と称する自分などより遥かに増しな俳人に成長するようにと、まだ小さい兄弟の将来を祝福したのである。山本健吉氏が、

だからこの句座は翁主従を迎えた喜びの句座であると共に、息子たちが俳諧の名を芭蕉から頂いた祝いの句座でもあったのだ。後世の我々にはいろいろと持って回ったその表現が煩わしいが、座の人たちはいろいろと心を配って一句を作った、その工夫に感じ入ったのであろう。（『芭蕉全発句』）

と述べられた通りである。

菅沼亭

720　京にあきて此木がらしや冬住ゐ　（笈日記）

泊船集・蕉翁句集

冬季（木がらし・冬住ゐ）。

語釈　○**菅沼亭**　「スガヌマテイ」。後年太田白雪がこの句を発句とする半歌仙断片を紹介した『きれぐ〵』（元禄十四年刊）の前書には「菅沼耕月亭にて」となっている。耕月は新城の領主菅沼織部家の筆頭家老菅沼権右衛門定次の俳号で、膳所藩士菅沼曲水の従兄弟に当り、二百三十石を食んだという。享保十一年歿、享年未詳。この人の家で成った句なのである。○**京にあきて**　「京に飽きて」。二年にも及んだ上方滞在を、京の生活にも飽きたといった。○**此木がらしや**　「此の木枯しや」。この三河の山ふところに吹く木枯し。「や」は詠嘆の切字。○**冬住ゐ**　「冬住まひ」。冬の寒さを防ぐ種々の設け、所謂「冬構へ」をした住居。こういう季語はないが、「冬」を冠しており、「冬構へ」「冬籠」に準じた表現と見てよかろう。「住ゐ」は「住居」という宛字から生じた誤りで、「すまひ」と書くのが正しい。「冬構　北窓とづる　△是又寒気を防がん料に風のかよふ所をふさぎ、戸障子のやぶれを修補しなどする也」（『滑稽雑談』）「風にたすかる早稲の穂の月　里圃　台所秋の住居に住かへて　馬莧」（『続猿蓑』上）「Sumaino yoi iye.」（『日葡辞書』）。

大意　京の生活にも飽きて、また旅に出て来ましたが、冬構えを整えたこのお住居で木枯しの音を聞くのは、格別の味わいです。

考　「三州菅沼亭」（『泊船集』）「三州菅沼氏にて」（『蕉翁句集』）等の前書があり、元禄四年十月新城滞在中の作と推定される。前記のように、『きれぐ〵』には白雪の手許に残された半歌仙の懐紙を収めてあるが、蝕損のまま不完全な形で出しており、発句も「京に　此　冬住居」とあるだけなので、出典からは省いた。

「京にあきて」を亭主耕月の事と取るのは良くない。やはりこれは上方に二年を過した芭蕉の心情と見てはじめてぴったりする表現であろう。京の雅びな都会生活と田舎の「冬住ゐ」が対照され、此処で聞く木枯しの音に心を傾けるところが挨拶の意に叶う。「此」と強調して、田舎で聞く木枯しの閑寂の味を愛し、「冬住ゐ」を賞めているのである。最近の『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集Ⅰ』で、井本農一博士は『寛政重修諸家譜』から領主菅沼定実の動静を引き、

すなわち、この頃新城の主菅沼定実は京都二条城の守衛の任にあった。菅沼耕月と定実は、同姓であるところから一族であろうか。主人の二条城警護に従って京に在ったこともあろう。

として、「京にあきて」を耕月の事とする解を強調しておられるが、私はやはり芭蕉の情とする解を採りたい。

耕月亭にて

721 雪をまつ上戸の皃やいなびかり　（茶の草子）　——上戸の雪

雪を待上戸の額稲びかり　（花の市）　——ばせを盥

冬季（雪）。

語釈　○**耕月亭**「カウゲッテイ」。新城領主の家老菅沼定次の家をいう。前の「京にあきて」の句の条参照。○**雪をまつ上戸の皃**「雪を待つ上戸の皃」。「上戸」は酒呑みをいう俗語。既出（Ⅱ*363*）。雪が降り出すのを期待するのは、それを種にして酒が呑めるからである。「皃」は「貌」の略体。○**いなびかり**「稲光り」。空に走る電光。雷が遠い為に雷鳴は聞えない。ここは雪もよいの空にピカリと光るもので、雪が近いことを思わせる。伝統的に「稲妻」は秋、「稲光り」は雑とされる。「いなびかり　雑也。非夜分」（『御傘』）「とぎ立て刈ぬる鎌やいなびかり　光有」（『毛吹草』巻六）「Inabicari.」（『日葡辞書』）。

【大意】稲光りが時々ひらめく。雪を期待する酒好きの人達の顔が照らし出されることだ。

【考】新城の地元の集『茶の草子』（雪丸・桃先撰、元禄十二年刊）の前書は信ずべきもので、元禄四年十月当地を訪れた際、「京にあきて」の句と同じ時に成った句と推定される。『花の市』（寸木撰、正徳二年刊）の「上戸の額」という異形は、『毛吹草』巻二世話に、熱いことの譬えとされる「じやうごのひたい、ぼんのまへ」の諺があり、巻五には「夏の日は下戸（げこ）も上戸（じやうご）の額（ひたい）哉」という句もあるので、一概に疑い難いけれども、本位句としては『茶の草子』の句形を採るべきであろう。このような即興句に推敲があったとは考えにくい。

耕月亭に芭蕉を迎えた一座には酒好きの人が多くて、盃を含んでは賑やかに談笑していたのであろう。雪もよいの空に時折稲光りもひらめいて、やがて雪になりそうな天気具合に、雪見酒とは嬉しいと、一座の興が更に盛り上る。この上戸の顔を特に主とするのは当らない。座には弟子の支考もあり、芭蕉がその家に草鞋を脱いでいる白雪もあって、親しい者が同席しているからこそ、こうした諧謔も口をついて出たのである。それでなければ、主へ酒を所望している卑しい句となろう。すでに酒となっている席での諧謔でその酒宴にひとしお興を添えるであろう雪への期待を詠んでいると見てよい。（『芭蕉全発句』）

という山本健吉氏の鑑賞が的確である。「いなびかり」を酒でてらてらした顔の見立のように取るのは古風過ぎる。ここはやはり実況でなければならない。

おなじ比、鳳來寺に參籠して

722　木枯に岩吹とがる杉間かな　（笈日記）

泊船集・蕉翁句集・三河国名所詩歌連俳目録

冬季（木枯）。

語釈 ○**おなじ比** 「同じ比」。『笈日記』では、元禄四年十月新城訪問の際の「其にほひ」（Ⅳ*719*）「京にあきて」（Ⅳ*720*）の句等の後に、この前書で出し、次の「夜着ひとつ」の句と並んでいる。新城から程近い寺に詣でた時の句なのである。この前書は支考の文。○**鳳来寺** 「ホウライジ」。新城の東北約十五キロ、今の愛知県南設楽郡鳳来町門谷にある真言宗の寺院煙厳山鳳来寺を指す。鳳来寺山の中腹、標高五百二十メートルの所にあり、表参道には千四百二十五段の石段がある。三河第一の巨刹、文武天皇勅願と伝えられる古い寺で、薬師如来を本尊に祀り、天台宗も含む多くの僧坊があった。○**参籠** 「サンロウ」。寺社に参詣して其処に籠り祈願すること。但し次の句でも明らかなように、この時芭蕉は体調が思わしくなくて山麓に泊っており、参籠したわけではない。「われ当社に百日参籠の大願あり」（『平家物語』巻一）「Sanrô. Mairi comoru.」（『日葡辞書』）。○**木枯** 「木枯し」。○**岩吹とがる** 「岩吹き尖る」。吹くのは木枯し、「とがる」のは岩であるが、それを一つに言った。鳳来寺山は岩山で、山頂付近には天狗岩という岩を始め、鋭く切り立った岩壁が露出している。「卓筆峰と云て、筆のさきのやうにとがる峰を云ぞ」（『湯山千句抄』上）「Togari, ru, atta.」（『日葡辞書』）。○**杉間** 「スギマ」。杉木立の間。「杉の木の間」（Ⅲ*630*）に同じ。鳳来寺は全山杉の原生林に覆われ、奥の院近くには六本杉と呼ばれる大樹もある。「ふるさとのみわのやまべをたづぬれどすぎまの月のかげだにもなし」（『後拾遺集』巻十六、素意）。

大意 杉木立の間から、木枯しに吹かれて鋭く切り立った岩が見える。如何にも森厳な感じの境内だ。

考 「鳳来寺に参籠して」（『蕉翁句集』）「鳳来寺阪下の吟」（『三河国名所詩歌連俳目録』）等の前書があり、元禄四年十月新城訪問の折の作であることは疑いない。

句は中七の「岩吹とがる」が表現の要になっている。志田義秀博士が、

これは実は杉の木立中に削られたやうに尖つた嶮しい巌のあるのを見て、それに対する感想を折柄の凩に移入した叙法である事は云ふまでもないが、かう叙写する事によつて巨杉嶮巌の姿態や凩の凄じさが遺憾なく感受されるものになつてゐると云へよう。（『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』）

といわれた通りで、文法的には「吹かれとがる」であるべきだという穎原博士の『新講』の説も尤もではあるが、それでは詩的表現としても句の調べの上からも問題にならない。「枝葉汐風に吹たはめて、屈曲をのづからためたるが

ごとし」（『おくのほそ道』）と同じく、風の吹くことと岩の屹立するさまとを、自他を超越して一気に叙べたのである。だから、表面上木枯しによって岩が削られているような表現になっていても、それは吹き荒ぶ木枯しの中に屹立する岩容の強調表現なのである。自然のきびしい相を緊迫感溢れる表現で把握した秀吟といってよかろう。

みかはの國鳳來寺に詣。道のほどより例の病おこりて、麓の宿に一夜を明すとて

723　夜着ひとつ祈出して旅寝かな　（真蹟懐紙）

白眼・葛の松原・笈日記・陸奥衡・泊船集・茶の草子・蕉翁句集・三河国名所詩歌連俳目録

冬季（夜着）。

語釈　**○みかはの国鳳来寺**　「三河の国鳳来寺」。「みかはの国」は愛知県東部の旧国名。「鳳来寺」は前の「木枯に」の句に既出。**○詣**　「詣づ」。既出（Ⅰ*190*前書）。**○道のほどより**　「道のほど」は、途中。新城から鳳来寺へ赴く途中から。「若き人おほく、道のほど打さはぎて、おぼえず彼梺に到る」（『おくのほそ道』）。**○例の病おこりて**　「例の病起りて」。「例の病」は芭蕉の持病「積聚」（腹部・胸部の激痛）か。「薬のむ」（Ⅱ*328*）の句参照。「たそこい鐘は八ッか七つか　寝苦敷例のつかえに夢覚て」（杉風・桃青両吟歌仙懐紙）「暑湿の労に神をなやまし、病おこりて事をしるさず」（『おくのほそ道』）「Rei. Tamexi.」「Yamaiga vocoru.」（『日葡辞書』）。**○麓の宿**　「麓の宿」。鳳来寺山の麓の旅宿。「梺の坊に宿かり置て、山上の堂にのぼる」（『おくのほそ道』）**○一夜を明す**　「一夜を明かす」。既出（Ⅱ*259*前書）。**○夜着ひとつ**　「夜着一つ」。大型の着物のように仕立てた夜具の一種。既出（Ⅰ*164*）。**○祈出して**　「祈り出だして」。実際には人の心遣いで夜着が出されたのだが、それを宛かも自分が鳳来寺の「峰の薬師」に祈ってその結果出て来たかのように、俳諧に言いなしたのである。「天神のやしろに詣て／身につけと祈るや梅の籬ぎは　遊糸」（『続猿蓑』下）「しをりについて滝の鳴る音　野水　袋より経とり出す草の上　荷兮」（『あら野』員外）「Fotoqeni, l, Fotoqeuo inoru.」「Idaxi, su, aita.」（『日葡辞書』）。

ころだ。

大意 旅中の病に恰度よく夜着が出て来て、これで温かく寝られた。私が峰の薬師に祈って、祈り出したといったところだ。

考 「一とせ芭蕉此山にのぼりて日をくれ、麓の門谷に一宿、白雪心して山に云やり、臥具かりもとめて夜寒を労るあした」（『白眼』）「鳳来寺」（『葛の松原』『陸奥衛』『泊船集』）「みかはの国鳳来寺に詣る道の辺より例のやまひ起りて、ふもとの宿に一夜あかすとて」（『茶の草子』）「麓の門谷に一宿して」（『三河国名所詩歌連俳目録』）等の前書がある。元禄四年十月鳳来寺参詣の折の吟であることは、真蹟懐紙の前書からも明らかであり、芭蕉は恐らく参詣の途上から病が兆して、参詣を済ませてから麓の門谷（今は鳳来町のうち。鳳来寺山南麓の門前町）の宿で一宿したのであろう。なお真蹟懐紙は、その由来書によれば、この時供をした桃鯉（白雪の甥鈴木吉左衛門紀隆）に書き与えたものという。「夜着ひとついのり出したる寒かな」（『芭蕉句選』）「夜着一ツ祈り出したる旅ね哉」（『芭蕉翁発句集』）等、後年の書に見える異形は問題にならない。

「祈出して」とはいっても、自分の法力を自慢したわけではなく、薬師如来の霊験を言って、且つは白雪の配慮を謝したのである。当時の宿屋は寝具を出さなかったというから、腹痛を起している身が着のみ着のまま丸寝をするのはつらい筈だったところ、白雪が気を利かせて寺から夜着を借り出して呉れた。それを喜ぶ気持がウィットとなって現われたもので、病苦を突離して客観視する所に生じたおかしみである。

しぐれいと侘しげに降出侍るまゝ、旅の一夜を求て、爐に焼火してぬれたる袂をあぶり、湯を汲て口をうるほすに、あるじ情有るもてなしに、暫時客愁のおもひ慰に似たり。暮て燈火の下にうちころび、矢立取出て物など書付るをみて、一言の印を残し侍れと、しきりに乞ければ

724

宿かりて名を名乗らするしぐれ哉　（真蹟懐紙）

続猿蓑・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・雪幸集

嶋田の宿にて

宿かして名をなのらする時雨哉　（芭蕉庵小文庫）

泊船集・西の詞

冬季（しぐれ）。

語釈　**○しぐれいと侘しげに降出侍るまゝ**　「時雨いと侘しげに降り出で侍るまゝ」。初冬のばらばら雨が大変侘しい感じで降り出したので。「まゝ」は理由をあらわす語法。「いとかりそめに入し山の、やがて出じとさへおもひそみぬ」（「幻住庵記」）「門を扣ば、侘しげなる女の出て」（『おくのほそ道』）「Ito yasui cotonari.」（『日葡辞書』）。**○旅の一夜を求て**　「旅の一夜を求めて」。旅の一夜の宿を求めて、の意。「常陸の国あしあらひといふ所に行暮て、やどり求んとせしに」（『続猿蓑』下、支考発句「株に寐る」前書）「Motome, uru, eta.」（『日葡辞書』）。**○炉に焼火してぬれたる袂をあぶり**　「炉に焼火して濡れたる袂を炙り」。囲炉裏に火を焼いて、雨に濡れた衣服をあたため乾かし。「あぶる」は既出（Ⅱ*317*）。「炉を出て度〳〵月ぞ面白き　野水」（『あら野』巻五）「夏の夜やたき火に簾見ゆる里　旦藁」（『あら野』巻三）「側濡て袂のおもき儀菜かな　藤羅」（『あら野』巻二）「Taqibi.」「Nure, uru, eta.」「Tamoto.」（『日葡辞書』）。**○湯を汲て口をうるほすに**　「湯を汲みて口を潤ほすに」。湯を茶碗などに汲んで（白湯を呑んで）渇きをいやしたが。「朝めしの湯を片膝や庭の花　孤屋」（『炭俵』上）「塀の外まで桐のひろがる　桃隣　銅壺よりなまぬる汲んでつかふ也　野坡」（『炭俵』下）「唇を打うるほしく〳〵やゝ談じ申されければ」（『笈日記』難波部）「Yuuo vacasu.」「Mizzuuo cumu.」

「Vruuoxi, su, oita.」（『日葡辞書』）。○**あるじ情有るもてなしに**　「主情有るもてなしに」。「もてなし」は、接待の意。「あるじ」の下に「の」を脱したか。「左近の尉情ある者ならば、……母御に思をかけ申す事よもあらじ」（謡曲「鳥追舟」）「あるじは舟木屋の甚介とて、気さくなる翫し」（『好色一代男』巻二）「Fitoni nasaqeuo caquru.」「Motenaxi.」（『日葡辞書』）。○**暫時客愁のおもひ慰に似たり**　「暫時客愁の思ひ慰むに似たり」。「暫時」は音読も出来るが、「暫時千歳の記念とはなれり」を「しばらく」と訓む例にならう。「客愁」は「旅愁」と同じく、旅先で感ずる侘しい気持。但し、「客愁のおもひ」は、聊か重言の嫌いがある。「慰む」は自動詞で、心が晴れる意。既出（Ⅰ*196*）。「似たり」は、「……のようだった」と、露骨な感じを避けた婉曲表現である。「滞雨長安夜、残燈独客愁」（李商隠「滞雨」）「やゝ病身人に倦て、世をいとひし人に似たり」（「幻住庵記」）。○**暮て**　「暮れて」。○**燈火の下にうちころび**　「燈火の下にうち転び」。ともし火の傍に寝ころんで。「うちころび」の「うち」は接頭語。「ひとり灯のもとに文をひろげて」（『徒然草』十三段）「Tomoxibi.」（『日葡辞書』）。○**矢立取出て物など書付るをみて**　「矢立取り出でて物など書き付くるを見て」。「矢立」は、墨壺に筆を入れる筒をつけた携帯用の筆記具で、旅人が帯にはさむようになっていた。芭蕉がそれを取り出して、思いついた句などを帳面に書き付けるのを主が見て、の意。「昼のうち思ひまうけたるけしき、むすび捨たる発句など、矢立取出て灯の下にめをとぢ、頭たゝきてうめき伏せば」（『更科紀行』）「物にも書付、人にもかたらんとおもふぞ、又是旅のひとつなりかし」（『笈の小文』）「Yatate.」「Toriide, zzuru, eta.」「Caqitçuqe, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**一言の印を残し侍れと**　「一言の印を残し侍れと」。句でも文でも短いものでこの家に泊った印（記念）になるものを書き残して下さいと。「若一言ノ下ニ翻レ邪帰レ正事モヤアランズラント思ヒケレバ」（『太平記』巻十八）「引馬野ににほふ榛原入り乱れ衣にほはせ旅のしるしに」（『万葉集』巻一、長忌寸奥麻呂）「Xiruxi.」（『日葡辞書』）。○**しきりに乞ければ**　「頻りに乞ひければ」。度々頼んだので。「しきりに」は既出（Ⅲ*502*前書）。○**宿かりて**　「宿借りて」。「宿」は旅の宿、即ち後述する塚本如舟の家を指す。「こよひ能宿からん、草鞋のわが足によろしきを求んと計は、いさゝかのおもひなり」（『笈の小文』）「Cari, u, atta.」（『日葡辞書』）。○**名を名乗らする**　初対面の主に対して名を名乗らせる。主体は「しぐれ」で、名乗るのは芭蕉である。（Ⅰ*177*）参照。「人間を待ちて名乗らばやと存じ候」（謡曲「賀茂物狂」）。

大意　折柄のしぐれのお蔭で貴方のお宅に宿を借り、名を名乗らされることになりました。ご厄介になります。

考　『続猿蓑』に「元禄三年の冬粟津の草庵より武江におもむくとて、島田の駅塚本が家にいたりて」と文考の文

らしい前書があるが、土芳が『蕉翁句集草稿』で、

此句前書続猿に出る。元禄三年冬は大津にとしくれて、乙州が新宅に、人に家をかはせて我はとし忘れと云句をして、奥に元禄三冬末と自筆に書て卓袋に給ふを所持す。猶四年末の歳旦、大津絵の句有。続猿草稿の書あやまりか。四年末の冬と覚え侍る也。

と考証する通り、元禄三年は四年の誤りで、その十月の東下の途次、駿河の島田での吟とすべきである。後年のものながら島田の地元の集『雪幸集』（阿人・千布撰、寛政三年刊）には、「祖翁芭蕉の翁、此宿塚本なりける如舟が館に、或は行、あるは戻るの折〻、笠をぬぎ杖を休め申されたり。いつの年か」として、如舟・山呼の脇・第三までを掲げており、この時の付合と思われる。「嶋田の宿にて」（『芭蕉庵小文庫』『泊船集』）「粟津より武江に趣とて嶋田の駅塚本が家に至りて」（『蕉翁句集』）等の前書もある。如舟は塚本孫兵衛、大井川を控えた島田の宿の川庄屋であった。

「宿かりて」「宿かして」の両句形、それと「名をなのる」主体、「しぐれ」との関係等をめぐって諸説があり、古注には「宿かして」の形で解するものが多い。

時雨故思はず宿をとり、我名をなのらせたるも時雨ゆへ也との句也。（正月堂『師走嚢』）

情知る主のやさしくも宿かして、名を何と問はるゝには、わりなくうち明して、むかしをも包まず語ると也。宿かして、むかふの人に対していふ。宿かりてとなくとも聞ゆ。（東海呑吐『芭蕉句解』）

亦此吟、諸集に宿貸てと出て、続猿蓑にのみ宿借（カリ）てと書す。今案、是は書写誤る所成べし。宿借てにては句意不二落着一る也。殊に余情もなし。（信天翁『笈の底』）

此句の五文字、宿かしてと諸書に出せり。……一応には聞へ兼たり。わざわざ塚本が家に至りてとはし書のあれば、宿かりての方しかるべきか。此方より塚本が家をさして宿らねば、一句の趣向とは成がたし。先宿をかりて後、塚本が兼ての風流を名乗らするものなり。（何丸『七部集大鏡』）

折ふし時雨が降つてゐた宿をかしてくれて、さうしてお名前は何と仰せられるぞと問ふた、それが一寸面白く思つたより斯く歌つたのである。名をなのらする時雨哉とは名をなのらせた其場合に時雨が降つて居たといふ文義である。（内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈』）

句意は如舟の家に宿を借り、主人に風羅坊芭蕉と名乗らせられた、折柄外面には時雨が降つて居たといふのをかく作為したのである。（『芭蕉句集講義』文屋菱花説）

もし一葉集の通り「宿かして」とすると、如舟が芭蕉に名を言はした事になり、続猿蓑の「宿かりて」とすると孫兵衛たる如舟に名を名乗らせた事になる、前のは如舟がいふ事を芭蕉が作句したので、後のは自分の事を作句したのであるから、此方が順当ではあるが、俳句として趣味のあるのは如舟が芭蕉に名を名乗らせた方がよろしいのである。（同前、角田竹冷説）

宿を借りる場合、こちらから名のるのが普通であるのに、今日はそれと反対に、如舟の家に泊つたところが、あるじが座敷に出て来て、わたしが如舟です、と名のつた、つまりこちらからでなく先方から名のらしめた、時雨なるかな、と詠歎したので、此方が正しいであらうと思ふ。（服部畊石氏『芭蕉句集新講』）

時雨に降られて宿に飛びこみ、名前を名乗らされてしまった。それも言ってみれば時雨の本情である、というほどのこと。「宿かりて」が『芭蕉庵小文庫』などでは「宿かして」となっている。これだと、宿をかすのも名を名乗らすのも、主語は時雨である。「宿かりて」だと、時雨は「名をなのらする」の主語ではあるが、宿をかるのは自分である。主語が移動するが、自分はまた宿をかりて名を名乗らされるのであり、主語の転換はしぜんに無理なく行われる。どちらでも意味は通るが、「宿かりて」の方がすぐれている。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

思いがけず一夜の宿を借りて、とんだ迷惑をおかけしていますが、それというのもこの時雨が、私に名を名乗らせたせいなのです。（今栄蔵氏『芭蕉句集』）

立するが、『大鏡』の説の方が尤もに聞える。ただ『大鏡』のように「かりて」と「名乗らする」の主語を別とする解が出るのは、「かりて」が使役の形を採らないからであるが、これは使役が重なるのが煩わしいから省いたもので、くわしく言えば「宿を借らしめ、名を名乗らする」という文脈なのだと思う。要するに句頭に「我をして」を補って見ればよいのである。主人が芭蕉に名乗らせるのでなく、主人の方から名乗ったとする服部畊石説は加藤楸邨氏が支持して、

前書から見て、亭主塚本如舟に対する挨拶の心がある。宿の主人が旅の人を芭蕉と知って、自分のほうから名のり出たことに興じて発想したもので、そこではじめて「名を名のらする」が生きてくる。（『芭蕉全句』）

と見ておられるが、聊か考え過ぎの嫌いがあろう。今氏の説も、これまた「宿かりて」を使役としないところから出て来たものとおぼしい。しかし、上述したように、「我をして宿を借らしめ、名を名乗らする」と取れば、この句の文脈は極めて明瞭に解けるのであって、初見の事情も含めて挨拶の意も読み取れる。そして全体の主語を「しぐれ」にすることによって、侘しい初冬の季節感が句中に遍満するのである。凡てを「しぐれ」に集約するのは、例えば「さま〴〵の事おもひ出す桜かな」（Ⅱ357）の句が、桜によって自分がさまざまの事を思い出す意であるのを、このように表現しているのと同様で、発句の提示表現の特色を端的に示すものといえよう。これに対して「宿かして名をなのらする」の形は凡て亭主のすることになり、当然過ぎて興味索然とする感があるし、挨拶の意が那辺にあるかも分らない。『小文庫』のミスを『泊船集』等が鵜呑みにしたに過ぎないものと思われる。如舟の家を訪ねたのは予定の行動で、真蹟の前書の書き方を虚構とする見方もあるが、この点は何ともいえない。如舟とは恐らくこの時が初対面であったろうから、芭蕉が客として、「松尾なにがしでござる」と名乗ったことは確かであろう。

725

馬かたはしらじしぐれの大井川（泊船集）

冬季（しぐれ）。

語釈 ○**馬かた** 「馬方」。街道筋で駄馬を引き、客や荷を運ぶのを業とする者。「馬子」（Ⅱ*336*前書）に同じ。「馬士の謂次第なりさつき雨　史邦」（『猿蓑』巻二）「**Vmacata.**」（『日葡辞書』）。○**しらじ** 「知らじ」。時雨の大井川の趣を知るまいというのである。○**大井川** 「オホヰガハ」。今の静岡県中部を流れる川。赤石山脈の間ノ岳に源を発し、遠江と駿河の境をなして南流、金谷・島田間の平野の南西端で駿河湾に注ぐ。鎌倉時代以来軍事上の要として重視され、徳川幕府は架橋も渡船も禁じた為、旅人は川人足の肩車や蓮台渡しによって渡る外なく、雨などで増水二尺に及べば忽ち川止めとなった。東岸の島田、西岸の金谷は、為に却って滞留の旅人で繁昌した程である。

大意 川際の宿場まで私を乗せて戻って行った馬方は、時雨の大井川の趣は知るまい。

考 『泊船集』は「島田塚本氏ニ詠草有」と注し、『苔の花』（巳明撰、天保四年成）も真蹟によって収めている。「しぐれの大井川」という表現からして、元禄四年十月島田の塚本如舟亭に立寄った時の吟と推定されよう。なお、桃鏡の『芭蕉翁真跡集』所収の洞水宛書簡はこの句を含むけれども、京から発信したという内容や宛名人など疑問が多く、信じ難いものである。

この句、「馬かたはしらじ」が表現不足で独り合点な為に、いろいろな解釈が出ている。時雨の趣は馬方などには分るまいとする説、川に関係のない馬方には、大井川の時雨の趣は分るまいとする説が古くから見えるが、馬方を見下して風流がるような態度は、抑々芭蕉のものではないし、樵夫は海を見ずといった教訓は、詩とは無縁のことであろう。

「馬上の旅をしてこの大井川まで来て、時雨に降られながら川を越した。この時雨の大井川の捨てがたい趣は、あの川べりまで自分を送って来た馬方にはわからないだろう」との意。（『芭蕉全句』）

と解し、

出典書の注記や掲出法によれば如舟亭で示された作と見られるので、大井川を時雨に濡れながら越した体験に立って発想した句として味わうべきであろう。……大井川越えのさ中において時雨の趣を味わいえたことを満足感をもって言っているのであって、旅の憂さとして解してはならないとおもう。塚本如舟に語りかけているようなあたたかみも一脈感じられ、そこに川庄屋如舟に対する挨拶の心を読み取ることもできそうである。（同右）

と述べられた加藤楸邨氏の説が穏当に思われるので、ここではそれに従う。他には、

これは向うの大井川のあたりが時雨れてゐるのだ。其時雨の景色の中に馬士がゐるのだ。それをやや離れてこちらからながめてゐての句である。ここから見れば非常によい景色だが、此の景色も馬方は知るまいと云ふのである。画中の景を画中の人が知らないのである。よい句である。（『芭蕉俳句研究』）

という露伴説があり、山本健吉氏の『芭蕉全発句』もこの系統の見方に立つ。やや特殊ながら、これまた一解であろう。

726　一おねはしぐるゝ雲か雪の不二（三冊子）

不　二

一尾根はしぐるゝ雲かふじのゆき（泊船集）　——蕉翁句集

冬季（しぐる・雪）。

語釈 ○一おねはしぐるゝ雲か 「一尾根（ひとをね）は時雨（しぐ）るゝ雲（くも）か」。「尾根」は、山の高処をつなぐ脊梁部。ここは山頂部の峰ではなく、富士の山頂から麓に向ってなだれた稜線部をいうのである。「おね」は「をね」の仮名ちがい。「しぐるゝ」は既出（Ⅰ216等）。○不二 「フジ」。「富士」の宛字。二つと無い山だからである。既出（Ⅰ61、86、185等）。

大意 富士の山はもう雪を頂いている。あの一つの尾根に雲がかかっているのは、其処がしぐれているのかなあ。

考 『蕉翁句集』が貞享四年の部にこの句を収めているのは、『笈の小文』の旅で東海道を上る時と見たのであろう。この時は十月末頃に駿河路を通った筈なので、こういう句があっても不思議はないが、『蕉翁句集』の年代推定は誤りも多く、決して絶対ではない。時雨の頃の富士を眺める機会は芭蕉の生涯にもう一度あった。元禄四年十月の東下の際がそれであるが、何れの年に詠まれたか確かな裏付けはなく、ここでは姑く元禄四年初冬までには出来ていたものと見るにとどめる。

句形については、華雀の『芭蕉句選』に「一屋根（ママ）はしぐるゝ雲か富士の雪」と略々『泊船集』に準じた句形を出したのに対して、寛治の『句選拾遺』は下五を「雨の雪」として、「富士の雪の此句、いづれに決ス哉否不詳。併、名所の句心得てすべしとあれば、此句可也」と述べて、「雨の雪」の形を採るべきことを主張しているが、「雨の雪」では語を成さないから問題にならぬ。これら後年の所伝はさておき、肝腎なのは『泊船集』と『三冊子』と何れの形を採るかである。年代的には『泊船集』が古いが杜撰の聞えの高いものでもあり、且つ後述する『三冊子』の記事に従えば「山」が主であるべきにも拘らず、「ふじのゆき」では「雪」に重点が置かれる嫌いがあろう。このように考えて来ると、私見としては『三冊子』の句形を本位句とするのが良いと思う。

「一おね」について、富士以外の愛鷹山（あしたか）や足柄を指すとする説が多いが、そうではあるまい。富士を遠望すれば分ることであるが、頂上から麓へ走る幾つもの稜線が見える。その一つを「一おね」といったものである。冬に入ってもう雪を被った富士のやや低い尾根の一つに一叢の雲がかかっている。あの辺りは時雨れてでもいることかと思い遣

った趣で、おのずから富士の大きな眺めが浮び上って来る。『三冊子』に「早稲の香や分入る右は有磯海」（Ⅲ518）と共にこの句を引き、「若(もし)大国に入て句をいふ時は、その心得有。みやこがた名有(ある)もの、かゞの国に行て、くんぜ川とかいふ川にて、ごり踏といふ句有。たとへ佳句とても、その位をしらざれば也」という芭蕉の語を引いた後、……不二の句も、山のすがた是程のけしきにもなくては、異山とひとつに成べし。（赤雙紙）
と説いている。大国に於ける句としては、如何に地方色は出るにもせよ、人の知らないような細かいことを採り上げるべきではなく、大国の位にかなうような句にすべき心得を言ったもので、富士の句も、このような大観を叙してこそ、他の山とはちがった趣を出すことが出来るというのである。加藤楸邨氏も、
「一尾根はしぐるる雲か」は、実に大きく富士にふさわしい詠嘆である。この「か」のひびきは作句者としてすこぶる大きな力を示したものである。……時雨が真向から見据えられて充足している。（『芭蕉全句』）
と見ておられる。「か」は基本的に疑問の意であるが、強い詠嘆の情を持つことは言うまでもない。

長月の末都を立て、初冬のみそかちかきほど沼津に至る。旅舘のあるじ所望によりて、風流捨がたく筆を走らす

727　都いでゝ神も旅寐の日數哉　（雨の日数）

霜月十三日付曲水宛書簡・己が光・陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・夏山伏・旅の日数

冬季（神の旅寐）。

語釈　**○長月の末都を立て**　「長月(ながつき)の末都(すゑみやこ)を立(た)ちて」。「長月」は陰暦九月。既出（Ⅱ433後書）。元禄四年九月二十八日に東下の旅に発足したことをいう。この時は木曾塚の草庵から出立したと思われるので、厳密には「都を立」ったわけではない。「卯月の末、庵に帰りて」（『野ざらし紀行』）「羽黒を立て、鶴が岡の城下長山氏重行と云物のふの家にむかへられて」（『おくのほそ道』）「Suye.」

「Qiôuo tatçu.」(『日葡辞書』)。○**初冬のみそかちかきほど** 「初冬の晦日近き程」。初冬、陰暦十月の末日が近い頃に。元禄四年十月は大の月で芭蕉が江戸に着いたのが二十九日だったから、その三、四日前であったろう。「初冬の空のうちしぐるゝ比より雪を重ね霜を経て」(『千鳥掛』所収芭蕉発句「古郷や」前書)「Xotô.」(『日葡辞書』)。○**沼津に至る** 「沼津に至る」。「沼津」は伊豆半島西岸の付け根にある宿場。今の静岡県沼津市である。「至る」は到着したこと。既出(I *210*前書)。○**旅舘のあるじ所望によりて** 「旅舘の主所望に依りて」。泊った旅籠の主人が望んだので、の意。ここは芭蕉に句文を書いて呉れと頼んだのである。「旅舘庭せまく庭草を見ず」(『猿蓑』巻二、曲水発句「若楓」前書)「こがね一両くれて……所望せし事ありといへば」(『炭俵』下、野坡発句「石台を」前書)「人のもとめによりて」(『炭俵』下、素龍発句「鹿のふむ」前書)「Xomô. Nozomu tocoro.」「Yori, u.」(『日葡辞書』)。○**風流捨がたく** 「風流捨て難く」。芭蕉が風流心を捨て難いというのではなく、旅宿の主人の風流を愛する気持が捨て難い意と解した方が良い。黒羽の馬子から短冊を望まれて「やさしき事を望侍るものかな」(『おくのほそ道』)と感じたのと似た気持であろう。「さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其実を顕す」(『おくのほそ道』)「芦の一はの情捨がたき事侍るまゝ」(『鳥の宿』所収芭蕉発句「先たのむ」前書)「Fûriûna coto.」(『日葡辞書』)。○**筆を走らす** 「筆を走らす」。さらさらと一筆したためる。○**いでゝ** 「出でて」。○**神も旅寐の日数** 「神も旅寐の日数」。陰暦十月に諸国の神々が出雲大社に参集するという信仰によって、「神の旅」という季語が生まれた。『徒然草』には、

十月を神無月と云て神事にはゞかるべきよしは、しるしたる物なし。もと文も見えず。但、当月諸社のまつりなき故に、この名あるか。

この月万の神達太神宮へあつまり給ふなど云説あれども、その本説なし。さる事ならば伊勢にはことに祭月とすべきに、その例もなし。十月、諸社の行幸その例もおほし。たゞし、おほくは不吉の例なり。(二百二段)

とあり、南北朝期には神々が伊勢に集まることになっていた。それが何時出雲に切り替ったかは不明ながら、近世期には神々の出雲参集が多くの書に説かれるに至っている。出雲では十月を神在月として祭が行われ、他の地方では、神送りの一箇月後には神迎えの祭があった。ここはその事にかけて、自分が神無月の間を旅に過したことを興じて言ったのである。「十月／神送一日。但、住吉の神送は九月卅日也。」(『毛吹草』巻二)「按に、神送と云事、俗に云ならはしける事にや、本説も未レ聞、大社にもしれがたし。察する所、神なし月と云、出雲へ神の集り給ふと云説の侍れば、附会して神送り・神帰り、或は神の留主など申にや。歌・連歌にて作例有まじけれど、

俳諧にて所ﾚ存也。又詞花集の好忠が神無月の歌など、沙汰なきにもあらずかし」(『滑稽雑談』)「出女に罰があたろぞ神の旅　北枝」(『雪の光』)「心許なき日かず重るまゝに、白川の関にかゝりて旅心定りぬ」(『おくのほそ道』)「Ficazuga casanaru.」(『日葡辞書』)。

大意　都を出て、神も旅寝をなさるという神無月の日々を、旅に過して来たことよ。

考　「翁つゝがなく霜月初の日むさしのゝ旧艸にかへり申さる。めづらしくうれしく朝暮敲戸の面〳〵に対して」(『己が光』)「翁つゝがなく霜月初の日深川の旧艸にかへりたもふて」(『泊船集』)「粟津出て霜月はじめ武江に至ル」(『蕉翁句集』)等の前書がある外、『蕉翁句集草稿』には「此句自筆物に、九月末粟津を出て霜月初武府に至ると有」とも伝え、『陸奥鵆』は本文中に「未の十月下旬東武に趣き、都出て神も旅寐の日数哉と吟行して深川の草扉を閉」として出している。霜月十三日付曲水宛書簡(柿衛文庫蔵)は内容に徴して元禄四年の執筆たることは疑いなく、「暮秋廿八日ゟ三十二日めに武江深川に至り候」と旅の始終について述べているのは貴重であって、『旅の日数』(李喬撰、寛政五年刊)に原簡が摸刻された。やや長い前書を付した『雨の日数』(石矢ら撰、元文二年刊)は、沼津の矢部氏が所蔵する真蹟を紹介したもので、信頼すべき内容である。其処に見える通り、この句は江戸に入る前沼津に於ける作だったのであるが、十月の間を旅に過したことをいったところから、旅を終えた時の感慨としても通用するので、江戸の門人達にも示し、曲水宛にも記したものであろう。それが上方に伝わって、『己が光』の前書のような文も生まれたのである。なお「むさしのゝ旧艸」は細道の旅に出る時人に譲ったので、芭蕉がここに入る筈はなく、しかも前記曲水宛に「深川に至り候」とあるのは、杉風の採茶庵に草鞋を脱いだことを言ったのだと思う。芭蕉の江戸到着は十月二十九日であったが、土芳の伝える真蹟前書に「霜月初武府に至る」とあるのは、凡そに言ったまでであろう。『陸奥鵆』が十月下旬上方出立としたのは全く誤りである。

神々が出雲に集うという神無月の間を、自らも旅に過したことを興じて「神も旅寐の日数」といった俳諧である。

その限りでは軽い即興作であるが、「都いで丶……日数哉」という和歌風の暢びやかな調べの中に、そこはかとない旅愁が漂い、機智的おかしみだけにとどまらない味わいを持っている。芭蕉らしい、なつかしい句といえよう。

よの中定がたくて、此むとせ七とせがほどは旅寝がちに侍れ共、多病くるしむにたえ、とし比ちなみ置ける舊友門人の情わすれがたきまゝに、重てむさし野にかへりし比、ひとゞ日ゝ草扉を音づれ侍るにこたへたる一句

728 兎もかくもならでや雪のかれお花　（雪の尾花）

北の山・枯尾華・陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集

冬季（雪・かれお花）。

語釈 ○**よの中定がたくて**　「世の中定め難くて」。人の世の一寸先が知れないことをいう。これは次の「旅寝がち」に過した漂泊の数年を「定め難き」ものと捉え、それを「よの中」の無常の端的なあらわれと観じたのであろう。「よの中」は既出（Ⅱ *311*）。「げにや世の中は定なきこそ定なれ」（謡曲「雲雀山」）「Sadame, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**此むとせ七とせがほどは旅寝がちに侍れ共**　「此の六年七年が程は旅寝勝ちに侍れ共」。この六、七年ほどの間は旅に日を送ることが多かったのですが、の意。貞享元年の野ざらしの旅以来、処々を漂泊して過して来たことをいう。「わがみかよはく、やまひがちなりければ」（『猿蓑』巻四、羽紅発句「笄も」前書）「**Vazzuraigachini gozaru.**」（『日葡辞書』）。○**多病くるしむにたえ**　「多病苦しむに堪へ」。いろいろの病はありながら、その苦しみに堪えて。「たえ」は「たへ」の仮名ちがいである。「唯老杜にまされる物は、独多病のみ」（芭蕉「櫓声波を打て」等懐紙）「痩骨の肩にかゝれる物先くるしむ」（『おくのほそ道』）「何か無依の鉄肝、鶯鳩の翅にたえむ」（「移芭蕉詞」）「Tabiŏ. Vouoi yamai.」「Curuximi, u, ûda.」「Tayegatai curuximi.」（『日葡辞書』）。○**とし比ちなみ置ける旧友門人の情**　「年比因み置ける旧友門人の情」。何年もの間縁を結んだ旧友や門人の温かい気持。「置ける」は「置ける」とも訓めるが、それならこの時代には「置る」と書くのが一般であろう。「年比さだかならぬ名どころを考置侍ればとて」（『おくのほそ道』）「予とちなむ事十とせあまり九とせにや」（芭蕉「悼松倉嵐蘭」）「旧友親疎門人等、あるは詩哥文章をもて訪ひ」（『笈の小文』）「まことに丹青淡して情こまやか也」

（『蓑虫説跋』）「Toxigoro fete.」「Chinami, u, ǒda.…… Fitoni chinamu.」「Qiǔyǔ. Furuqi tomo.」（『日葡辞書』）。○**わすれがたきまゝに**　「忘れ難きまゝに」。忘れ難いので。「代々の賢き人々も古郷はわすれがたきものにおもほへ侍るよし」（『千鳥掛』所収芭蕉発句「ふるさとや」前書）。○**重てむさし野にかへりし比**　「重ねて武蔵野に帰りし比」。「むさし野」は江戸を指す。芭蕉が江戸に帰ったのは、元禄四年十月二十九日であった。「先師重て曰」（『去来抄』先師評）「今湖南の汀に梅を挙て、武蔵野の遠きさかひまでほの匂はせけるに」（『忘梅』序）「Casanete.」（『日葡辞書』）。○**ひと〴〵日々草扉を音づれ侍るにこたへたる一句**　「人々日々草扉を音づれ侍るに答へたる一句」。「草扉」は「草の戸」（Ⅲ452等）に同じく草庵のこと。「音づれ」は「訪れ」。本来、音を立てる意から、訪問の時戸をたたくので訪問の意が生じたのだから、「音」の字を宛てることはよくある。江戸の知り合いの人々が毎日草庵（芭蕉は当座、杉風の採茶庵に居た）を訪ねて来たのに示した句だというのである。「時々気を転じ、日々に情をあらたむ」（『笈の小文』）「武江の東深川の草扉を開て」（芭蕉「僧専吟餞別之詞」）「黒羽の舘代浄坊寺何がしの方に音信る」（『おくのほそ道』）「藪医者のいさめ申されしに答へ侍る」（『続猿蓑』下、正秀発句「実にもとは」前書）「草の戸さしこめて、ものゝ侘しき折しも、偶蓑虫の一句をいふ」（『蓑虫説跋』）「Fibini.」「Votozzure, ruru, eta.」「Cotaye, uru, eta.」「Renga iccu.」（『日葡辞書』）。○**兎もかくもならでや**　「兎も斯くも成らでや」。「ならで」の下に「恙なかりし」といった語を補って解する。「どうにもならないで無事だったことよ」の意。「兎もかくも」の裏には、死んでしまうような事態を想定しており、そうならないで済んだといっているのである。「兎」は宛字。多く「かく」と連用される副詞である。「や」は詠嘆の切字。「かくながら、ともかくもならむを御らんじはてむと、おぼしめすに」（『源氏物語』桐壺）「Tomocacumo.」（『日葡辞書』）。○**かれお花**　「枯れ尾花」。「尾花」は穂に出た薄のことで、季は秋。それが枯れたものは冬季になる。「お」は「を」の仮名ちがい。「かれ草　植物也、冬也」（『御傘』）「なきがらを笠に隠すや枯尾花　晋子」（『枯尾華』）。

大意　長旅の間どうにもならずに、無事で帰って来たことよ。雪をかぶった枯れすすきのような姿だが。

考　「行脚としをかさね、東武にかへりて」（『北の山』）「三秋を経て草庵に帰れば、旧友門人日々にむらがり来りて、いかにととへばこたへ侍る」（『蕉翁句集』）等の前書があり、『枯尾華』所収、其角の「芭蕉翁終焉記」には冒頭に近く、「ともかくもならでや雪のかれ尾花と無常閑関の折〳〵は、とぶらふ人も便なく立帰て、今年就中老衰なりと歎あへ

り」という文中に引かれている。芭蕉が冬に江戸に帰って来たのは元禄四年以外になく、年次は確定的である。『雪の尾花』（遊五撰、延享元年刊）に見える句文については、同書に「右此真筆の一章は井筒屋重寛が亭にて筑前の遊五写し留侍る」と付記があり、井筒屋所蔵の真蹟に拠ったことが知られる。内容もよくこの時の心境を述べているので、これを本文とした。

「兎もかくもならでや」について、潁原博士は「や」を疑いの辞とし、「ともかくもならずして残つて居るのだらうか」の意と見ておられる（『新講』）が、「残つて居るのだらうか」では他人事のようである。「五月雨の降のこしてや」と同類の句法ながら、「ならでや」は疑問を含まない詠嘆と見るべきで、「死ぬべきところを何とか生き延びて、どうにかなってしまうこともなしに無事で戻って来たことよ」と、自らの老いの姿を見つめているとみるべきであろう。それと共に、訪れた人に答えた句とすれば、「どうやら無事で帰って来ました」という挨拶の気持も酌みとるべく、旅を終えてホッと安堵の吐息をもらすような趣が見える。「雪のかれお花」に関連して、古注が其角の「終焉記」に見える大顚和尚の記事を引いているのは良い。即ち、

その比、円覚寺大巓(ママ)和尚と申が、易にくはしくおはしけるによりてうかゞひ侍るに、或時翁が本卦のやうみんとて、年月時日を古暦に合せて筮考せられけるに、萃といふ卦にあたる也。是は一もとの薄の風に吹れ、雨にしほれて、うき事の数〻しげく成ぬれども、命つれなくからうじて世にあるさまに譬たり。されば、あつまるとよみて、その身は潜ヵならんとすれども、かなたこなたより事つどひて、心ざしをやすんずる事なしとかや。

という一節で、其角と親しかった大顚が芭蕉生涯の運勢を占なったという話である。大顚は貞享二年正月に歿したから、これはかなり前の事であったろうが、芭蕉は自分の運勢を象徴する「一もとの薄の風に吹れ雨にしほれて、……命つれなくからうじて世にあるさま」を印象深く受取っていたに違いない。当面の句で自らの老残の姿を「雪のかれお花」と観じたのは、このような背景があった故と見てよいと思う。これもよく指摘される『枕草子』の文、

秋の野のおしなべたるをかしさは、すすきこそあれ。……秋のはてぞ、いと見どころなき。色〻にみだれ咲きたりし花の、かたちもなくちりたるに、冬の末まで、かしらのいとしろくおほどれたるもしらず、むかし思ひでがほに風になびきてかひろぎたてる、人にこそいみじうにたれ。（六十七段）

とあるのも、芭蕉の想を助けたかも知れない。野ざらしの旅以来、芭蕉は常に旅路の果に死を思っていた。「野晒を心に風のしむ身哉」（Ｉ183）「しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮」（Ｉ205）等の句がこうした心境をよくあらわしており、「兎もかくもならでや」の句もそれらの延長線上にある。『おくのほそ道』の冒頭に、「幻のちまたに離別の泪をそゝぐ」「若生て帰らばと定なき頼の末をかけ」といった表現が出て来るのも、決して文飾ではないのである。如行の『後の旅』には細道の旅を叙して、「千百余里の嶮難、終にからべをしろふして、みのゝ国我さとにうつり給」とも見え、この旅以降芭蕉の僧形の頭は真白になっていたと思われる。雪をかぶった枯尾花のイメージのもとは、自身の白頭にあったのではあるまいか。加藤楸邨氏が、

雪の枯尾花に自分を見ている発想であるが、発想の実際としては、旅中倒れもせずここに辿りついた自分の思いが先にあって、それが雪の枯尾花を呼び起したもののように思われる。現代の発想のように、雪の枯尾花に直接触れることによって想を発するのとは必ずしも同じでないところに芭蕉理解のむずかしさがある。（『芭蕉全句』）

と考察しておられるのは恐らく正しく、又それ故にこそ「雪のかれお花」の持つ象徴性は高いともいえよう。私はよく「あられきくやこの身はもとのふる柏」（Ｉ174）とこの句を一対に連想することがあるが、枯尾花の句の方はさすがに老いの影が深いようである。

死と結びついて、あるいは野ざらしと結びついて、芭蕉には「枯尾花」のイメーヂがよく浮かんで来たらしい。……野ざらしを覚悟して旅に出たとき、野ざらしとなった自分のイメーヂの傍らには、一叢の薄がいつも存在していたのだろう。そういう連想の伴なう「枯尾花」の傍らに、今はどうやら生き延びた自分が在るのだ。死なな

かったことのアイロニーとして、「雪の枯尾花」があるのだ。……自分の死と結びついて連想されたものが、今は生の証しとして提出されるのである。(『芭蕉その鑑賞と批評』)と山本健吉氏は説いておられる。

729 留主のまにあれたる神の落葉哉

(芭蕉庵小文庫)

泊船集・蕉翁句集

冬季(神の留主・落葉)。

語釈 ○**留主のま** 「留主の間」。神が出雲に赴いて留守であることと、自分が旅で江戸を留守にしていたこととを掛けている。「神の旅寐」(Ⅳ727)参照。「留主」は、君主が都をあけている時、代理として政務を見る官の名から出た語で、「留守」と書くのが正しいが、「留主」という表記も慣用として広く行われた。「何人のいひひろげてや神の留主　北枝」(『柞原』)。○**あれたる神の落葉** 「荒れたる神の落葉」。この「神」は、神社の境内、神域といった意に用いられている。「落葉」は冬の季語。「さゝげめし妹が垣ねは荒にけり　心棘」(『あら野』巻七)「上下のさはらぬやうに神の梅　昌碧」(『あら野』巻八)。

大意 神様の留守の間にお社の境内はすっかり荒れて、落葉が積っていることよ。私も長いこと江戸を留守にしてしまった。

考 句は「神の留守」に自分の留守を掛けて興じた趣向に違いない。『蕉翁句集』は貞享五年の部に出しているが、笈の小文の旅を終えて江戸に帰ったのは八月末であって季節ちがいである。元禄四年十月は二十九日江戸着で、丁度神の留守の時季に合うので、この方が相応しい。「都いでゝ神も旅寐の日数哉」(Ⅳ727)の吟があったことも思い合わされよう。当面の句の出来たのは十一月に入ってからのことだったかも知れぬ。

深川あたりの小さな神社を訪れた時の作であろう。単に「神の留守」の語に興じただけならば、貞門風ともいうべ

き浅い興にとどまる。自分が旅に出て長いこと留守にしたことを掛けてこそ、この句は面白くなるのである。新芭蕉庵に入るまで暫く身を寄せていた橘町の仮寓近辺では、芭蕉に余り馴染みのない土地だから、「留主のまに」が働かない。やはり帰江直後、深川の採茶庵辺りを歩いて見た時ではあるまいか。

そういう言葉の興とは別に、この句では荒れさびれた小社のたたずまいが季節感と共に生かされているところが見所である。実際にも神無月の間は参詣する人も少く、寂しくなるのであるが、それが落葉の趣に集約されて、好箇の冬の句となっている。

730 鴈さはぐ鳥羽の田づらや寒の雨（西華集）

冬季（寒の雨）。

語釈 **○鴈さはぐ**「鴈騒ぐ」。雁がしきりに鳴き騒ぐ。「鴈」は「雁」に同じ。雁は秋季であるが、この句では「寒」の方が季語として立つ。歌枕の趣だから、「ガン」ではなく、「カリ」と訓むべきである。「さはぐ」は「さわぐ」と書くのが正しい。「立さはぐ今や紀の雁いせの鴈伊賀沢雉」（『猿蓑』巻四）「**Sauagui, u, aida.**」（『日葡辞書』）。**○鳥羽の田づら**「鳥羽の田面」。「鳥羽」は京の南郊、桂川と鴨川の合流点一帯の低湿地で、今は伏見区に属する。「鳥羽田」は歌枕。「田づら」は、田のあたりの意である。既出（Ⅱ*302*）。**○寒の雨**「寒」は、立春前一月ばかり、寒さの最もきびしい小寒・大寒の節気をいう。既出（Ⅲ*632*）。江戸時代末期になると「寒の雨」が季題として歳時記類に出て来るが、古い物には見当らない。「寒の雨」を題とした珍しい例である。［考］の条に引く『西華集』の記事参照。

大意 冷い寒の雨が降りしきる中、雁の群が鳥羽の田圃に降りて来て鳴き騒いでいるよ。

考 文考の『西華集』（元禄十二年刊）にこの発句を挙げて、

此句は武江にありし冬ならん、寒の雨といふ名の珍しければ、をの〳〵発句案たるに、寒の字のはたらき此句に

及びがたし。

と述べている。支考も同座していた時と見られ、その江戸に在った冬といえば、元禄四年の十二月と推定される。これよりさき、霜月十八日付中尾源左衛門・浜市右門宛芭蕉書簡に、

私は宿は橘町彦右衛門と申ものゝ店に而桃青と御書付可被成候。

とあり、この頃橘町（今の中央区日本橋浜町辺）の彦右衛門という者が所有する借家に入ったことが知られる。翌元禄五年五月七日付の去来宛書簡には、

愚老住所、内々申進じ候通り、橘町と申て、浜丁にて越前殿上り屋敷之跡新地、江戸はづれながら江戸中遠くもあらず候。

云々とあって、何れ小庵を結ぶまでの臨時の居所として入ったことが書かれている。新芭蕉庵に移ったのは五年の五月中旬であるから、この句も恐らく橘町の借家で出来たものであろう。華雀の『芭蕉句選』に中七が「鳥羽の田面の」となっているのは誤伝と思われる。

支考の伝える所に従えば、この句は「寒の雨」という珍しい季題に興じた題詠であった。それに相応しい景を探って、「鴈さはぐ鳥羽の田づら」の景を得たことになるが、それは嘗て鳥羽あたりで見た景色が胸に蘇えったか、古歌などによって情景を構成したのであろう。鳥羽田の鳥類を詠じた古歌は多く、「おほえ山かたぶく月のかげさえてとば田のおもにおつるかりがね」（『新古今集』巻五、慈円）は古注にも引かれており、『類船集』では「鴈」と「田面」「鳥羽田」を付合としている程である。従って鳥羽田の雁は珍しくもないが、それを寒の雨に配した着想は非凡であって、支考のいう通り、「寒の字のはたらき」に於いて類稀なものと言ってよい。体験か想化かを超越した表現力が感ぜられる。雨の降り出しに騒ぐのは鳥の習性でもあった。

731　魚鳥の心はしらず年わすれ（流川集）

芭蕉庵小文庫・浮世の北・蕉翁句集・ばせを盥

魚鳥のこゝろはしらずとしの暮（陸奥衛）

—泊船集

冬季（年わすれ）。

語釈　○魚鳥の心はしらず　「魚鳥の心は知らず」。魚や鳥の自然のままの心情は分らないが、の意。「心はしらず」という表現については（Ⅱ340）参照。○年わすれ　「年忘れ」。年末の忘年会。俳人の場合は句会も兼ねる。既出（Ⅲ633）。

大意　魚や鳥の自然のままの心情は人間には分らないが、人は人でこのように風雅の友と忘年の集いを楽しんでいる。この喜びも自分だけの人知れぬものだ。

考　露川の撰した『流川集』（元禄六年十月成）には、この句の前後が左のようになっている。

神無月六日の夜、武の厖子が文をひらくに、嵐蘭が身まかりけるよし封紙に見あたりぬ。その先深川の素堂亭に会して、おの〳〵年忘れしける事もおもひ出られ、其霜雪の操もなつかしければ、支考がこの志を撰者に申

雪はありて風ふかぬ日や年忘　嵐蘭
魚鳥の心はしらず年わすれ　翁
このわすれながるゝ年の淀ならん　素堂
白髪に我あやからん年わすれ　支考

前書に見える「武の厖子」とは桃隣のことと思われ、元禄六年八月末の嵐蘭卒去を支考に手紙で報じたのである。この句は嵐蘭生前の元禄五年を降ることはなく、一方支考が芭蕉に入門したのは元禄三年夏頃で、江戸の芭蕉の周囲に

居たのは元禄四年であった。芭蕉は五年の年末にも素堂亭の年忘れに顔を出しているが、この時の句を録した洒堂の『深川』によれば、他には嵐蘭・曾良・洒堂が同席しているだけで、支考は見当らない。この年彼は六月下旬に江戸を出て尾張に赴いて以来、江戸には戻らなかったようである。『深川』の句は、凡て『流川集』の句と異なっており、同日の句とは考えられない。こう見て来ると、この句が元禄四年歳末に成ったことは確かといえよう。

句形は『陸奥衛』よりも、初出の『流川集』を尊重すべきである。『ばせを盥』では朱拙の歳暮の句の前書に、「魚鳥の心はしらず年わすれとすさびられし昔なつかしみながら、いね〳〵と人にいはるゝ路通が常ずまひにて世の中を立まふ」と引用されている。

「魚鳥の心はしらず」と「年わすれ」の関係をどのように見るべきか、古来諸説があるが、古注の説は概ね首肯すべきものを見ない。ただ何丸の『句解大成』が『方丈記』の一節を引いているのは注目に値する。即ち、長明の著の終りに近く、

……魚ト鳥トノアリサマヲ見ヨ。魚ハ水ニアカズ。イヲニアラザレバソノ心ヲシラズ。トリハ林ヲネガフ。鳥ニアラザレバ其ノ心ヲシラズ。

とあるあたりの影響が、この句の想に看取されることは誰しも認めるであろう。『方丈記』の右の一節は、『荘子』外篇、秋水第十七に、

荘子曰、儵魚出遊従容、是魚楽也。恵子曰、子非レ魚。安知二魚之楽一。……恵子曰、……子固非レ魚也。子之不レ知二魚之楽一全矣。

（荘子曰く、儵魚出で遊び従容たり。是魚楽しむなりと。恵子曰く、子は魚に非ず。安んぞ魚の楽しむを知らんと。……恵子曰く、……子は固より魚に非ざるなり。子の魚の楽しむを知らざるは全しと。）

とあるのに基づくと見られるが、『荘子』に精しかった芭蕉は恐らく『方丈記』と共に秋水篇の文も思い浮べたこと

であろう。今栄蔵氏は「我々は我々なりに、風雅の友と忘年の集いを楽しんでいる。この喜びも他人には分るまい」（『新潮日本古典集成・芭蕉句集』）と訳しておられ、井本農一博士は「われわれにはその心を知ることはできないが、魚や鳥のようなさらりとした楽しい気持でこの一年のさまざまなことを忘れたいものだ」（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）と解しておられる。「年わすれ」を風雅の友の人知れぬ楽しみと見ていることは確かであるが、「魚鳥の心はしらず」とのつながりには微妙なものがあって、一概の論を許さない。「魚鳥の心」をいった裏には、動物達の無心の気持を羨むような感情が動いていることは確かであろう。加藤楸邨氏は、

人の世の煩わしさから、多少魚鳥を羨む気持を動かしてはいるのだが、それはそれとして、もう一度人の世の営みに心を向けてきているのである。（『芭蕉全句』）

と述べておられる。

732

葛の葉のおもてみせけりけさのしも

（天理図書館蔵真蹟自画賛）

相木氏蔵真蹟自画賛・俳人の書画美術所載真蹟自画賛・蕉影余韻所載真蹟短冊・如月・陸奥鵆・泊船集・篇突・旅寝論・染糸

葛の葉のおもて也けりけさの霜　（雑談集）

蕉翁句集草稿・蕉翁句集

冬季（しも）。

語釈　○**葛の葉**　「葛」は秋の七草の一。マメ科の蔓性多年草で、各地の山野に見られ、茎は十メートル以上もの長さになる。その葉は長い柄を持って互生し三箇の小葉に分れており、葉裏が白みを帯びて風にひるがえると目立つところから、和歌ではこの草を材料にして「裏見」を「恨み」に掛ける修辞技巧がよく行われる。『毛吹草』巻二、連歌四季之詞では、初冬の部に「葛のはかつ枯るも」と見えている。「秋風たてばなく計なり　葛の葉のうらみの文を書くどき」（『毛吹草』巻七）「**Cuzu.**」（『日葡辞書』）。○**おもてみせけり**　「表見せけり」。葉の表を見せたことに、「人が顔を見せた」意を寓した。「元日や夜ぶかき衣のうら表　千川」（『続猿

蓑』下）。○けさのしも　「今朝（けさ）の霜（しも）」。

大意　葉裏を白く見せる葛の葉が、今朝の霜で表を白く見せていることよ。（それではないが、貴方も恨みを忘れて顔を見せて呉れて嬉しい）

考　板本の初出は元禄四年末に成稿した其角の『雑談集』なので、四年冬までに成った句であることは確かである。但し、多くの真蹟の句形に照らして、「おもて也けり」の句形は信じ難く、これを採った土芳の『蕉翁句集草稿』も、「是、雑談の句也。白船（ママ）には、おもて見せけりと有。いづれか」と疑っている。真蹟や多くの蕉門系の書に見える「おもてみせけり」の形に従うべきであろう。

この句の成立に関しては、『許野消息』（天明五年刊）所収の野坡書簡に、「葛の葉の表見せけり、此句は一たび嵐雪が翁にそむきし事の直り侍る時に、幸に書て遣はされ候句也」とあるのに注意しなければならない。荻野清氏は、元禄三、四年頃芭蕉と嵐雪の間に気まずい空気があったと推定され、四年冬に帰東した芭蕉の許に嵐雪が釈明に行った折の吟と見ておられる（「新出の芭蕉書簡並びに俳文考」―『俳句』昭和三十五年六月号―）。こうした事情を窺わせる資料としては、

嵐雪三物、相手も柳糸とやらに究候よし。愚老物やかましく候間、此方へきかせず、いかやう共していたせと申たるにて候。（元禄元年極月五日付其角宛書簡）

嵐雪無事に居候哉。随分無沙汰ものにて、しみぐ〵したる状一通もこし不申候。定而俳諧に取込候而の事と存候。集あみ候由、これにも何事を何にいたし候やら、くわしく承ず候。（元禄三年九月十二日付曾良宛書簡）

嵐雪尤無為なるものに而候故、前々不相替相勤候。（五月七日付去来宛書簡）

等、芭蕉自身の書いたものにも嵐雪への不満を表明した資料が存するのであるが、元禄五年になると、消極的評価ながら機嫌を直しているような雰囲気が看取される。江戸に帰って来た芭蕉に、嵐雪が無沙汰の詫びを入れた結果でもあろう。このような見地からも、この句が元禄四年冬の成立であり、「おもてみせけり」の裏に人

事的な寓意のあることが有力視されると思う。

嵐雪との隔意が修復された寓意があるとすれば、

成程表見せたる句也。葛の葉の枯果てうら見る昔も尽はてたるといふ本情にして、今朝の霜の置渡したるを見れば、誠に表見せけり、うら見る秋をうちわすれて、表のけしきの面白きよと中句也。（『許野消息』）

と野坡の説くように、「恨みを忘れて面を見せた」のを悦ぶ気持を籠めた句と見られる。俳諧らしい機智の挨拶であるが、この句は寓意を抜いて、霜の朝の葛の葉の様子を詠んだ句とだけ見ても、評価出来るものを持っている。『旅寝論』に、

……先師の葛の表を吟じ給ふ句は、古人葛の葉の裏を云たるを返して吟じたるのみにあらず。冬の朝の物静に霜白ヮ置わたし、葛の葉の表打たれて、さすがにもれたる風情の見るべき所を、はいかいの眼に睨み出し給へり。……葛の葉の表みるべき風情なからんには、こゝを吟じ給はじ。

と去来が述べているのは確論であって、多く残る自画賛の類は、純粋の景気の句としてこの句を扱っていることを示すものであろう。

元禄五年

733 人も見ぬ春や鏡のうらの梅　（己が光）

七瀬川・陸奥鵆・続猿蓑・泊船集・蕉翁句集・東山墨なをし

春季（梅）。

語釈 **○人も見ぬ春や**　「も」は、詠嘆の間投助詞。「や」は、詠嘆の切字。**○鏡のうらの梅**　「鏡の裏の梅」。昔の青銅製などの鏡には、裏側に花鳥の文様が鋳付けてある。「梅」はそういう文様の一。「かゞみいさせ侍けるうらに、つるのかたをいつけさせ侍て」（『拾遺集』巻五、伊勢歌「千とせとも」詞書）「Vra.」（『日葡辞書』）。

大意 鏡の裏に梅がひっそりと咲いている。余り人が見もしないこんな春もあるのだなあ。

考 板本としては元禄五年の『己が光』初出であり、元禄十一年の『続猿蓑』では春之部歳旦の条下に収めている。土芳の『蕉翁句集草稿』は、「人も見ぬ春や」というだけの不完全な形ながら「壬申」と元禄五年の干支を頭注する。また、元禄五年と推定される、風雅三等の文として有名な二月十八日付曲水宛芭蕉書簡に、

愚句御感心之よし珍碩ゟ被告候。年ゝは口にまかせ心にうかぶ計に申捨候へ共、もはや是を歳旦之名残にもやなど存候而、少は精を出し候処、御耳に留り候へば甲斐ある心地せられて悦にたへず候。

とあるのは、この発句に関することと思われ、作句の時の心境を窺うことが出来よう。これと同じ日に書かれた書簡

には、

　愚句歳旦各〻御褒美之よし、令満足候。爰元門人いづれも〳〵驚感之旨申候。（珍碩宛）

　愚句歳旦御心に御入候由、珍重。精を出し候。其角も感不少候由申候。（去来宛）

などとあって、その反響を窺うことが出来る。これら凡て元禄五年の歳旦吟であることを証するものである。

『芙蓉文集』所収、芭蕉の「曲水ニ答文」（前掲風雅三等の文）の支考奥書に、この発句を「壬申歳旦」として引いて「坊（注、支考自身をいう）かつてうけ給りぬ。壬申の歳旦には、心に乗桴の歎息ありて、武の深川にあとをかくせしとや。しかれば書面に名残の詞ありて、甲斐ある心地など聞ふ（ママ）。是は決して鏡の梅なるべし」といっており、当時芭蕉と起居を共にしていたと思われる人の言だけに、注意しなければならない。「乗桴の歎息」とは、『論語』公冶長篇に見える孔子の語「道不レ行。乗レ桴浮二于海一」（道行はれず。桴に乗じて海に浮ばん）に基づく語であって、或いは、同じ年五月七日付の去来宛芭蕉書簡に江戸の俳諧の堕落を歎き、

　……さて〳〵浅ましく成下り候。中〳〵新しみなど、かろみの詮儀（ママ）おもひもよらず、……句作一円きかれぬ事にて御座候。愚案此節巻而懐にすべし。

と珍しく激語を放っている心境に通うものが、この句の時にもあったのではあるまいか。曲水宛の文面に、「もはや是を歳旦の名残にもや」と言っているのは、歳旦句を披露するような俳壇づきあいを止めてしまいたい願望を意味していたと思われる。兎に角この句の裏面にある隠逸志向は、風雅三昧の単純なものではなかったろう。

　そのような心境を託したものかどうか、また、「鏡裏梅」といった成語によって発想したものかどうか、この間の消息を確かに裏付けるものはないけれども、「人も見ぬ春や」という詠嘆は、まことに懐かしい響きを持っている。この表現が謂わばこの句の命であって、

　鏡裏の梅に「人も見ぬ春」と感ずる態度には一応つくりものめいたところが感ぜられぬでもない。しかし、どこ

か心ひかれるしみじみとした気持が感ぜられるのは、芭蕉の隠れたものに向いてゆく愛憐の情の深さによるものと思われる。(『芭蕉全句』)

と加藤楸邨氏が言われた通りである。春の実境から詠み出されたものではないが、人知れぬ春色を愛でる静かな落着いた気持には、真実なものが感ぜられるのだ。頴原博士が『新講』で、「世の人の見付ぬ花や軒の栗」(Ⅲ*478*)の句と同じ心の動きを指摘しておられるのも良い。背景にあった事情はそれとしても、この句にあらわれた芭蕉の心境は透徹したものであった。

734 うらやましうき世の北の山櫻 (北の山)

浮世の北・陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・布ゆかた・世中百韻

春季(山桜)。

語釈 ○**うらやまし** 「羨し」。句を贈る相手の境涯を良しとする気持をあらわす。「うらやましおもひ切時猫の恋　越人」(『猿蓑』巻四)「Vrayamaxiy.」(『日葡辞書』)。○**うき世の北の山桜** 「浮世の北の山桜」。加賀金沢の蕉門句空の隠栖する卯辰山(金沢市街地の東方に聳える丘陵。標高百四十一メートル)を、北国にあるところから、俗世間を北に離れた山とし、その山の桜を思い遣ったのである。「山桜」は桜の種類の名ではなく、「山に咲く桜」の意であろう。(Ⅰ*25*)参照。「うき世」は既出(Ⅰ*166*等)。句の出典『北の山』の題名は、この句の表現に基づく。

大意 俗世間を北に離れた山の桜の見事さも思われて、貴方の隠遁の御境涯が何とも羨しい。

考 『浮世の北』(可吟撰、元禄九年刊)には「是はばせを庵の叟武の深川より越のしらねにおくり申されし奉納の句也」と注記があり、それに基づいてか、以後の諸集には「加州白山奉納」(『陸奥鵆』)「奉納」(『泊船集』『世中百韻』)等の前書があり、『蕉翁句集草稿』も右の『浮世の北』の注記を引用している外、『布ゆかた』(文志撰、正徳二年刊)にも、金沢

の句空の草庵の有様を記した中に「まことに、うらやましうき世の北の山桜とは、翁の深川よりの文通なりかし」と見える。句空と芭蕉との関係は奥の細道の旅以来のことで、この句の初出たる句空撰の『北の山』（元禄五年夏成）に巻頭句として収められていることからも、五年の春に江戸から贈られた句である可能性が大きい。これに関連するものと思われる正月十六日付句空（推定）宛書簡は左のような文面である。

一、北海集之事、序之事申被越候。尤とりあへずしたゝめ可申事ながら、遠境心にもまかせず候へば、延引に成候而気の毒に存候間、其元に而いかやう共御書なぐり可被成候。愚句両吟にて御わび申度候。愚作交り過たるもよろしからず候歟。

『北の山』の序文は撰者句空自身が草しており、所収の芭蕉の句が当面の句と「ともかくもならでや雪のかれ尾花」（Ⅳ728）の二句であることも、「愚句両吟」とあるのと一致する。右の書簡が『北の山』編撰に関係した資料であることは疑い無く、題名がこの時点では「北海集」だったことも知られるのである。「うらやまし」の句は元禄五年春、句空の集の為に作られたものとおぼしく、『北の山』では巻頭にこの発句を立句として句空と去来の付合半歌仙が収められている。但し、『浮世の北』以来諸集に伝えられる白山奉納ということについては、潁原博士が『新講』で、若し奉納の句とすれば、句空が『北の山』で何ともいわない筈はないと疑問を提示しておられ、この点は確かにその通りであろう。奉納かどうかは疑わしいと考えざるを得ない。江戸時代の古注に、北枝がこの句を発句とした一巻を白山に奉納したと伝えるものがあるが、その実否を知らず、若し事実としても、句の成立とは直接関係のないことである。それから今一つ、『浮世の北』や『布ゆかた』に、芭蕉が「深川より」申し送ったように言うけれども、当時芭蕉は橘町在住であって、深川の新芭蕉庵はまだ出来ていなかった。この点は撰者の美濃の可吟や金沢の文志が芭蕉の消息にくわしくなく、芭蕉といえば深川からと思い込んでいた為と思われ、元禄五年正月作を否定する材料にはなるまいと思う。現存の正月十六日付書簡は断簡であって、恐らくその失われた部分に、当面の句と「ともかくも」の

句が記されていたのであろう。

『北の山』の句空序に「世をのがれて卯辰山の片ほとりに侍る」とあるように、桑門句空は卯辰山の麓、法住坊金剛寺の傍に隠栖して柳陰軒と号したという。これよりさき、元禄三年春筆の句空宛芭蕉書簡には、

……柳陰菴のかり寐に、北枝・秋之坊風流のあらそひなどおもひ出し、しきりに御ゆかしく、一山の花も最はやひらき候はんとさつし候。

とも見え、細道の旅中金沢で芭蕉は彼の草庵に立寄ったこともあったので、卯辰山の花盛りのさまを思い遣っている。当面の句でも同じ花のイメージを心に思い描いたのであるが、それを「うき世の北の山」としたのがこの句の趣向で、江戸から遥か離れた北国に隠栖する句空の境涯を、市中に在る自身と比べて羨しいといったのである。ここにも前の「鏡のうらの梅」の句と同じ隠逸志向が見られるが、「桜」を材としているだけに、印象は一段と華やかになっている。深沢真二氏は、この句を『竹林抄』所収の専順の連歌付句「尋ねばやうき世の外の山桜」の「本句取り」と見て、「山桜」を詠み込むことによって句空を西行に擬した挨拶と見ておられる（深沢氏「連歌の変奏」―『連歌俳諧研究』九十号―参照）。

735　鶯や餅に糞する縁の先　（二月七日付杉風宛書簡）

二月十八日付去来宛書簡・鶴来酒・葛の松原・陸奥鵆・蕉翁句集草稿・百囀

うぐひすや餅に屎する縁の上　（末若葉）
うぐひすや餅に糞する椽（ママ）の上　（泊船集）

春季（鶯）。

語釈　○鶯「ウグヒス」。既出（Ⅰ165等）。○餅に糞する「餅（もち）に糞（ふん）する」。「餅」は正月に食べ残したもの。（Ⅰ132）参照。それに鶯が

糞を落したというのである。「糞」は、もとより俗語。『日葡辞書』の「Fun.」の項には、鳥の糞を「Cayexi」というとも見える。「蜂とまる木舞の竹や虫の糞　昌房」（『猿蓑』巻四）。○**縁の先**「縁の先」。「縁」は縁側。「荷鞍ふむ春のすゞめや縁の先　士芳」（『猿蓑』巻四）「Yen.」（『日葡辞書』）。

大意　鶯の鳴く音が聞えると思っていたら、縁先に干してあった餅に、ひょいと糞を落して行ったことよ。

考　元禄五年と推定される二通の書簡に披露されているので、その春二月七日以前に成ったことは確かである。杉風宛書簡には「与風所望に逢候而如此申候」としてこの句を書いており、『百囀』（風竹撰、延享三年刊）には、これを発句にした支考との両吟歌仙が収められている。当時芭蕉は橘町で支考と同居しており、歌仙の発句を所望されてこの発句を作ったことが分る。支考の脇は「日も真すぐに昼のあたゝか」であった。其角の『末若葉』（元禄十年刊）の異形「屎する」は「屎」とでも訓む外あるまいが、汚いばかりで良くない。「縁の上」も何に拠ったものか明らかでなく、何れも其角によくある杜撰と思われる。『泊船集』の句形も、恐らくその影響を受けた異伝であろう。『蕉翁句集草稿』も『葛の松原』の句形を採り、「白船には椽の上と有。違也」としている。なお、「椽」は音「テン」、軒のたるきのことであるが、よく「縁」に宛てて用いられる。誤用であるが、これで「エン」とよませるつもりなのである。

杉風宛には「日比工夫之処に而御座候」といい、近時発見された去来宛には「頃日与風存知付候へば、御心付之為にもやと書付申候」としてこの句を披露し、「下、笹伝ひと可有や」とも言っている。土芳は『三冊子』に於いて、

詩歌連俳はともに風雅也。上三のものには余す所も、その余す処迄俳はいたらずと云所なし。花に鳴鶯も、餅に糞する椽の先と、まだ正月もおかしきこの頃を見とめ、……見るに有、聞に有。作者感るや句と成る所は、即俳諧の誠也。（白雙紙）

と、この句に触れて論じており、漢詩や和歌・連歌に扱われなかったものも俳諧では採り上げるし、そのような新境地を拓くことが俳諧の面目であった。正月の祝いも過ぎて日が経つと、餅にも黴が出て来る。それを縁先に出して日

に当てていると、辺りで鳴いていた鶯がひょいと飛んで来て、糞を落して飛び去って行った。その瞬時の動きが句の中心であるが、「鶯や」から「餅に糞する」へ移る切字の働きをよく考えると、その前の暫くの間鶯の音に耳を澄ましている人の姿が浮んで来るようである。

……鶯の無邪気なのと家内の静かであるさまも見え、春の即事として面白い句じや。糞と言へば穢ないものじやが、それも斯様に使用せば却つて美化されるので、殊に小鳥の糞であれば左程穢ないとも感じぬのみか餅へ糞したといふので一寸際立つた興を引く。……頗る繊巧な処もある。（『芭蕉俳句評釈』）

と内藤鳴雪が鑑賞している通りで、土芳の言い方に従えば、花に鳴く鶯の伝統を翻して、餅に糞する鶯を見留めたところが俳諧の新境地なのである。漸く深まろうとする春の長閑さが感ぜられ、醜を美化する手際が冴えている。この辺りの呼吸が「軽み」であって、杉風宛で「日比工夫之処」といっている点に外ならない。また、去来宛で「下、笹伝ひと可有や」という「縁の先」の別案に関する言及も注意を惹く。これは恐らく餅に糞をした後の鶯の動きを表現したものであろう。これは結局捨てられた案ではあるが、これで見ると作者はどうやらこの句の景色を野外の場の中に置いていたらしい。つまり江戸橘町の住居での即景ではなくて、そういう田園の中の一場の景を案じた結果である。勿論或る時そういう情景を見て詩嚢に貯えておいたものではあろうが、これは芭蕉の制作態度について注意すべき事柄と思われる。体験したその場の事を写生的に描くわけではないのである。

736　蝙蝠も出よ浮世の華に鳥　（西華集）　世中百韻

春季（華）。

語釈　○**蝙蝠も出よ**　「蝙蝠（かうもり）も出（い）でよ」。「蝙蝠」は翼手目に属する哺乳動物。全身黒く、頭は二十日鼠に似て、前脚の間の膜をひろ

げて飛ぶ。日中は暗い所に隠れ、黄昏から棲処を出て蚊などを食べる。季語としては夏。「カウモリ」の語は中世末期から見えるが、近世に至っても「カウブリ」「カウムリ」の語が行われ、『日葡辞書』にも「Cǒmuri.」はあるが、「Cǒmori.」は無い。「斧のねや蝙蝠出るあきのくれ　卜枝」（『あら野』巻四）。〇**浮世の華に鳥**　「浮世（うきよ）の華（はな）に鳥（とり）」。「浮世」は、この句を贈ったという僧の出世間の身に対して、俗世間を指す。その世間は今しも花盛りで、それに浮かれて鳥も囀っているというのである。「華」は「花」に同じ。

大意　世間は今や花の盛りで、それに浮かれて鳥も囀っている。普段暗い所に閉じ籠っている、鳥の仲間の蝙蝠も出て来なさい。（貴方も気晴らしに旅に出掛けなさるがよい）

考　支考の『西華集』（元禄十二年刊）に、「此句はある僧の旅立けるに、かくいはゞやと申されしが、餞別なくてよからんとて、いはずなりぬ」と付記がある。この書き振りは、支考が芭蕉の傍近くに居て、句の成立事情を知悉していたことを思わせるに十分であろう。伝聞の可能性を考える向きもあるが、私はそういう風には受取れない。元禄三年晩春頃の支考入門以降、芭蕉の周辺に居た可能性の考えられるのは、元禄四、五の両年である。五年春に支考は江戸橘町で芭蕉に近侍していたが、二月十日頃には奥羽の旅に出立している。ここでは姑くそれまでに成っていた句と見るにとどめたい。この句を贈ろうとした僧が誰であるかも不明である。

支考のいうところに依れば、旅立つ僧への餞別として構想されたものなので、黒衣の僧を蝙蝠にたとえたことになる。且つ、「蝙蝠も鳥のうち」とか「鳥無き里の蝙蝠」等の諺もあり、「鳥」との縁もあるわけで、

……ひとりは僧にもあらず俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうぶりの、とりなきしまにもわたりぬべく、……

という芭蕉自身の姿を描いた『鹿嶋詣』の一節も連想されよう。花に浮かれ出る蝙蝠は俳諧でもあって、この僧の旅は修行よりも風狂の旅といった趣がある。

東行ノ餞別

737 此こゝろ推せよ花に五器一具 （葛の松原）

俳諧問答・泊船集・桜山臥・蕉翁句集草稿・桃の首途・続寒菊

支考東行餞別

此心推せよ花に五器壹ツ （蕉翁句集）

春季（花）。

語釈 ○**東行ノ餞別** 「東行ノ餞別」。「東行」は、東への旅。「行」には「旅」の意がある。（Ⅳ649前書）参照。近世には「東行」の語を以て上方から江戸への旅をいうことが多いが、ここは支考の奥羽地方への旅を指す。江戸からいえば北へ行く旅だから、やや不適切な用語である。「餞別」は、旅立つ人にはなむけとして贈るもの。既出（Ⅱ312前書）。この場合は句を贈ったのである。「道立子之東行を送る」（几董『丙申之句帖』所収発句「むさし野の」前書）。○**此こゝろ推せよ** 「此の心推せよ」。以下の事柄の持つ意味、また、それに含まれた気持を推量してくれ、の意。「さても〳〵難義仕候段、御推し被遊可被下候」（霜月廿七日付半左衛門宛芭蕉書簡）「Suisuru.」（『日葡辞書』）。○**五器一具** 「ゴキイチグ」。修行僧が食を乞う為に持っている椀や蓋などの食器一そろい。既出（Ⅲ579前書）。

大意 風雅の旅には、花を見るにも五器一そろいで済ます心掛けが肝腎だ。この事の意味を推量し、よく考えてくれ。

考 「餞別」（『泊船集』）「餞東華坊東行」（『続寒菊』）等の前書の外、『蕉翁句集草稿』には「此句、自筆物に文有。支考東行餞別」と注している。上方から江戸へ帰る旅以来随侍していた支考が、翌春奥羽へ旅立つことになり、二月十日に催されたその餞別会での吟と推定される（拙著『新修芭蕉伝記考説』行実篇参照）。『句集草稿』の「辛未」という頭注は誤りであろう。『蕉翁句集』の異形も、伝写の間の杜撰に過ぎない。

『桃の首途』（盧元坊撰、享保十三年刊）の蓮二坊序詞に、

むかし我師（注、支考を指す）の東くだりに、祖父翁の旅の具とて碁笥椀といふ物をはなむけにして、〽此こゝろ推せよ花に五器一具　とは、西行上人の心をつたへて、世の中よかれ我乞食せむとよめる風雅のさびをさとせしのみならで、其師のその弟子にをしふる実情なり。

と見え、旅立ちに際して芭蕉は支考に五器を贈って句を添えたのであろう。支考は『葛の松原』（元禄五年五月成）のこの句の後に、

吾聞、以財おくるものは君子の人のしのびざる所なるを、今やわかれむとするとき、わすれず灸せよなどいへる人をさへうれしく覚ゆるものなり。しらず、この別こゝろいかむぞや。たとへ推し得て十成なるも、奈古曽の関の名こそつらからめやは

〽モ、すぢりゆがみてふさむ花の陰　　支考

という句文を自ら記している。

句は贈物とした五器にかけて、芭蕉平生の心掛けとして、花見にも殊更な贅を尽すことなく、「五器一具」で自足すべきことをいい、「此こゝろ推せよ」と支考に諷戒したのである。この時よりやや後、五月七日付の去来宛書簡に於いて、芭蕉は支考の事に触れて、

盤子（注、支考の別号）は二月初に奥州へ下候。いまだ帰不申候。こいつは役に立やつに而無御座候。其角を初連衆皆〱悪立候へば無是非候。尤なげぶし何とやらをどりなどて、酒さへ呑ば馬鹿尽し候へば、愚庵気をつめ候事難成候。定而帰候はゞ上り可申、……

と、辛辣な彼への見方を披露しているが、支考を長く身近に置いて、その性格を見抜いた結果であろう。こういう支考に対して、

五器一具にてこそ事は足れ。此うへを奢るな、淋しみをわするなとの示誡也。花の比は世の人心もうきたちがちに、思ひもよらざる奢もいできて、無益の金銭をもつかふなれ。そこを一具の五器に知足して、生涯をあやまるべからず。俳諧の淋しみに遊べよ。此こゝろしばらくもわすれず、……慎み忘却する事なかれ……（素丸『説叢大全』）

と教えたのであった。純粋の詩的動機に発した作ではないが、

かくいふと全く教訓的になるが、而かもそれを誠に手軽く花と五器とによりて言ったのは流石に詩的趣味を失はぬ。（内藤鳴雪『評釈』）

という見方は適評であろう。後の「四つごきのそろはぬ花見心哉」の句も類想である。

富花月

艸庵に桃櫻あり。門人にキ角嵐雪有

738 兩の手に桃とさくらや草の餅（桃の実）　泊船集・蕉翁句集

春季（桃・さくら・草の餅）。

語釈 **○富花月**　「花月に富む」。「花月」は春の花と秋の月で、風雅な趣のある自然を代表するもの。風流文雅の道の象徴ともなる。（Ⅱ*416*）参照。「花月の句をさのみ取もらさじと、あながちにもとむる人あり。愚意には返〻詮なし」（『連理秘抄』）「Quaguet. Fana, tçuqi.」（『日葡辞書』）。**○艸庵に桃桜あり**　「艸庵に桃桜あり」。我が住む草庵に桃や桜の木があって花を咲かせている、の意。「艸」は「草」の古字。**○門人にキ角嵐雪有**　「門人に其角嵐雪有り」。我が俳諧の弟子には其角と嵐雪という俊才がある、の意。「キ角」は宝井氏。名は侃憲。江戸の人で、延宝期まだ十代半ばで芭蕉の門人となり、天和調の代表撰集『虚栗』を編むなど

早くから才を謳われて、江戸の俳壇に地歩を築いた。晩年は洒落風の傾向が顕著になる。宝永四（一七〇七）年二月二十九日歿、享年四十七。俳号を略字のように「キ角」と書くことが間々ある。「嵐雪」は既出（Ⅲ *454* 前書）。○**両の手**　「両(りやう)の手(て)」。左右二つの手。「両の手にうまい物といふのだ」（『浮世の四時』）「**Riŏ. l, reŏ. Futatçu.** …… **Riŏno te.**」（『日葡辞書』）。○**草の餅**　「草(くさ)の餅(もち)」。三月三日の雛祭に食べる、蓬(よもぎ)を入れて搗いた餅。「草餅」（Ⅰ *170*）に同じ。

大意　今日は草餅を食べる雛祭。折柄草庵の桃と桜も花咲いた。門人の双璧其角と嵐雪を迎え得て、「両の手に桃と桜」といったところだわい。

考　岡山藩士の俳人兀峰の撰した『桃の実』（元禄六年五月跋）に初めて見える句で、六年春までに成っていたことは確かである。荻野清氏は元禄五年の作と見て、六年春には既に其角末流の徒に対する不満の意を洩らした芭蕉の文があること、『桃の実』に芭蕉の句と並記された「菓子盆に芥子人形や桃花」（其角）「桃の日や蜊は美人に笑るゝ」（嵐雪）の二句が許六の稿本『旅館日記』元禄六年春の条に見えるにも拘らず、当面の芭蕉の句は載っていないことの二つを証として挙げられた（「新出の芭蕉書簡並びに俳文考」―『俳句』昭和三十五年六月号―）。また、『蕉翁句集』は、これを元禄二年の部に収めているのであるが、若し二年作ならば、その後間もなく刊行された『其袋』『いつを昔』『雑談集』等其嵐二家の撰集に見えないのを不可解とされた荻野氏の指摘も尤もである。且つ『桃の実』を撰した兀峰は、元禄五年の春江戸に来て初めて芭蕉を始めとする蕉門の人々に親しんだのだから、そう何年も前の句に通じていたとは考えられぬという大谷篤蔵氏の説（『校本芭蕉全集』第二巻）もあり、元禄三、四年の春は芭蕉が上方に在った時なので、結局この句の成立に相応しいのは元禄五年春だけになろう。恐らく桃の節供に当って橘町の仮寓に両門人を迎えた際の吟と思われる。これよりやや後、五月七日付の去来宛書簡に、点取俳諧の流行る江戸俳壇の堕落を歎きつつ、

其中にも其角は不紛(まぎれず)居申候。これも世上を悪み候而、当年はしゐて俳諧発句不致候。愚老へ深切に相勤候。前ゝゟは年も重り候故か、万おとなしく、大悦に存候。嵐雪尤無為なるものに而候故、前ゝ不相替相勤候。

と両人の近況に触れている。其角・嵐雪に対する芭蕉の態度が、この時期には好意的だったことが、右によっても窺えると思う。享保八年の『嵐雪十七回忌集』の百里序には、「或時深川の旧庵にしばらく禁足せられ、朝顔や昼は鎖おろす門の垣、翌年前書は、門に桃桜あり、門人に其角嵐雪をもてりとして此句見えたり」とあるけれども、所謂「禁足」は元禄六年秋人を謝して閉関したこととおぼしく、その翌年とすれば七年になってしまう。これは『桃の実』初出の事実と矛盾するから、信じ難い所伝といわざるを得ない。

句形に関していえば、『泊船集』に初五が「雨の手に」とあるのは明らかな誤筆であって、問題にならない。後年の『未来記』（蓼太撰、明和二年刊）に、この句を発句とした其嵐二家との三吟歌仙が見えるが、元禄五年頃の作としては内容の面からも疑問があり、古集にも所見がないので、存疑とするのが穏当であろう。

「桃とさくら」に其嵐の二家を寓していることは、前書によって明らかである。但し、桃が其角で桜が嵐雪、或いはその逆という風に、一々の物を誰かに対応させたのではなく、桃・桜を引っくるめて二人を寓したものと見たい。もとより背景には「両手に花」「両の手に花と紅葉」といった諺を頭に置いている。その華やかな花の後に「草の餅」を出して、侘びた俳味を添えたのがよく、

両手に桃桜と言ふのみでは平凡陳腐で何等の面白味もないが、草の餅と言つた為めに俳興を添へ得て全面が生命を保つ事になつたのぢや。（内藤鳴雪『評釈』）

という見方は確かなところであろう。古い門人二人を傍に置いて、花の春を楽しんでいる芭蕉の気持が流露しており、譬喩の趣向故に句として上乗のものではないが、二人への情懐が思われる作ではある。

739 猫の戀やむとき閨（ネヤ）の朧月　（己が光）

陸奥衛・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・俳諧古今抄

春季（猫の恋・朧月）。

語釈 ○**猫の恋**　「猫の恋（ねこのこひ）」。発情期の猫が、鳴きながらうろつき廻るさまをいう春の季語。「猫の妻」（Ⅰ*71*、Ⅳ*660*）参照。「猫の恋初手から鳴て哀也　野坡」（『炭俵』上）「Neco.」「Coi.」（『日葡辞書』）。○**やむとき**　「止む時（やむとき）」。鳴き声などがしずまるさまである。「鳥の啼やむ岨の若菜かな　曲翠」（『続猿蓑』下）「Yami, u, yôda.」（『日葡辞書』）。○**閨（ねや）**　「寝屋（ねや）」の義。寝室、或いは居間をいう。「閨（ねや）……夜分也。……屋台（やたい）の一名也」（『御傘』）「誰のぞくならの都の閨の桐　千那」（『猿蓑』巻二）「Neya.」（『日葡辞書』）。○**朧月**　「オボロヅキ」。輪郭のぼんやりした春の夜の月。既出（Ⅰ*18*）。

大意　やかましく鳴き交わす恋猫の声がはたと止み、閨には朧月の淡い光がさしている。

考　元禄五年夏に成った『己が光』初出の句で、『蕉翁句集草稿』には「壬申」と頭注があるから、五年春の作と認めてよい。『泊船集』には中七が「休とき閨の」とあり、『句集草稿』は「違ひ也」とするけれども、「休」は「ヤム」と訓める字だから、これは表記の相違に過ぎぬものであろう。『蕉翁句集』に下五を「瀧月」とするのは明らかな誤字である。

支考の『俳諧古今抄』中の切の条に、

> 中の切といふは、春の夜の憐れも鳴きあかしぬる猫の恋も、やむ時は何ゝとして、月朦朧と来鵬が寒食の詩の閑情をふくむ。

とあって、「来鵬が寒食の詩」とは、『三体詩』所収の詩「蜀魄啼来春寂寞、楚魂吟後月朦朧」（蜀魄啼き来つて春寂寞、楚魂吟ずるの後月朦朧）を指したものである。漢詩の趣は兎も角、「やむとき」で切って、やかましい声の後の静寂感を際立たせ、「閨の朧月」を引立てた技巧は賞すべきであろう。これを、「朧月のあはれは何時なるぞと言んに、二月よりさかりし猫の恋やむ弥生の始つかた……ぞと答たり」（康工『金花伝』）などと解しては良くない。「やむとき」は「何時なるぞ」と問うたのに答えたわけではないからである。

「猫の恋」と配された為に、この「閨の朧月」には、ほのかに閨怨の情が匂う。

きさらぎの天朦朧としていと哀なる夜すがらなるべし。物には恋やむ時しあれど、思ひたへぬ閨怨を言外にふくめられしか。幽玄にして余縁ふかし。（杜哉『蒙引』）

という鑑賞は当っていよう。卑俗な「猫の恋」の俳意を踏まえながら、芭蕉は工夫を凝らしたのであって、「蕪村の世界への一通路をなすもの」（加藤楸邨氏『全句』）と見られるが、構成された自然という感じは否めない。見たままを描くのとは違った態度なのである。

緩歩

740 かぞへ來ぬ屋敷〳〵の梅やなぎ（ママ）（誹林一字幽蘭集）

旅館日記・韻塞・泊船集・蕉翁句集

春季（梅・やなぎ）。

語釈 ○**緩歩** 「クワンポ」。ゆっくり歩くこと。○**かぞへ来ぬ** 「数へ来ぬ」。下の「梅やなぎ」の数を数えて歩いて来たことをいう。ここで句切れ。「朝顔の苔かぞへむ薄月夜　田上尼」（『続猿蓑』下）「Cazoye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**屋敷〳〵** 「ヤシキ〳〵」。「屋敷」は、邸宅の建っている一画の地。勿論庭などを含む。（I *55*）参照。「さぞ砧孫六やしき志津屋敷　其角」（『あら野』巻四）。○**梅やなぎ** 「梅柳」。何れも春の季語。既出（I *153*）。

大意 武家屋敷などの続く町筋の、塀越しに見える梅や柳の樹の数を、数えながら歩いて来たことだ。

考 初出の『誹林一字幽蘭集』（沾徳撰、元禄五年九月刊）には「杜甫問レ柳尋レ花到二野-亭一」と注しており、これは杜甫の詩「厳中丞枉レ駕見レ過」の一節である。前書も後注も、『一字幽蘭集』の撰者が付したものであろう。初出本の刊行時期からして、元禄五年春までには成っていた句と思われる。

江戸の屋敷町でも、或いは京あたりの趣でもよい。閑静な町筋を歩いて来ると、もう梅は花咲き柳は芽ぶいている。塀越しに見える梅の花や柳の青みを帯びた枝を、あそこにもここにもと数えるともなく数えながら行くわけで、春景色にくつろぐ気分がおのずから伝わって来る。古注には色々な漢詩を引いているけれども、『一字幽蘭集』の杜詩も含めて、それらに拠った表現ではなく、自らの体験から自然とまとまった句であったろう。「みわたせば柳さくらをこきまぜて宮こぞ春の錦なりける」（『古今集』巻一、素性）は、春闌わの頃の賑わいを思わせるが、当面の句は早春の、漸く深まろうとする季感であって、閑雅な品格が生命である。

741

花にねぬ此もたぐいか鼠の巣　（有磯海）

藤の実・泊船集・蕉翁句集

櫻をばなどねどころにせぬぞ。
花にねぬはるの鳥のこゝろよ

櫻をわきてねぐらとはせぬ。
花に寐ぬ春の鳥の心歟

花を見る是もたぐひか鼠の巣　（佐郎山）

花に寐（ママ）たぐひか軒の鼠の巣　（早稲の道）

春季（花）。

語釈　○**桜をば……鳥のこゝろよ**　「桜（さくら）をばなど寝処（ねどころ）にせぬぞ。花（はな）に寝（ね）ぬ春（はる）の鳥（とり）の心（こゝろ）よ」。気の多い春の鳥は、どうして桜の木を塒（ねぐら）にしないのか。花の中で寝ない春の鳥の気が知れない、の意。『源氏物語』若菜上の、光源氏が女三宮に冷淡なことを諷した柏木の歌と言葉、「いかなれば花にこづたふうぐひすのさくらをわきてねぐらとはせぬ　はるの鳥の、さくらひとつにとまらぬ心よ」

を踏まえた。「ゐぼし子やなど白菊の玉牡丹　濁子」(『続猿蓑』下)「灯もなければゐろりの火かげに寐所をまうけて臥す」(『おくのほそ道』)「Nado. l, nadoca. i, Najoni.」「Nedocoro.」(『日葡辞書』)。○**花にねぬ此もたぐいか**　「花に寝ぬ此も類か」。この鼠たちも花の中に寝ないものの同類なのか、の意。普通の語順では「此も花に寝ぬ類か」とあるべきところを、五七の調べに合わせる為に倒置した、やや異例の表現である。「たぐい」は「たぐひ」の仮名ちがい。既出(Ⅱ *403*)。○**鼠の巣**　「鼠の巣」。「娌が君」(Ⅰ *133*)参照。「鼠共春の夜あれそ花靫　半残」(『猿蓑』巻四)「Nezumi.」(『日葡辞書』)。

大意　鼠が巣のあたりで暴れて騒がしい。これも折角の花の中で落着いて寝ることのない春の鳥と同類なのか。

考　『泊船集』にも『有磯海』(浪化撰、元禄八年刊)と同じ前書がある。板本としては美作津山の儒者紅雪が元禄五年に京坂の地を行脚して編んだ『佐郎山』(元禄六年頃刊)に載るのが最も早く、この事からして元禄五年春までには成っていた句と見られる。しかし、その「花を見る」という初五の句形は、『源氏』の一節を踏まえた句意と矛盾する嫌いがあり、前書を承けた「花にねぬ」の意味が分りにくいところから出た誤伝と見るべきであろう。一方、芭蕉七十回忌追善集として越中滑川の知十の撰した『早稲の道』(宝暦十三年成)に紹介された真蹟は、「寐」の下に「ぬ」を脱したと見れば初案の可能性が大きいと思う。何れにせよ、定案は『有磯海』『藤の実』(素牛撰、元禄七年刊)等の句形を採るべきである。年代は『藤の実』の方が『有磯海』より古いけれども、これには前書がない。

花の頃、天井裏や台所の壁裏などで鼠が荒れているのを、『源氏』に思い寄せて興じたもので、『源氏』の雅と「鼠」の俗の対照に俳諧がある。「鼠の巣」は別に目にしているわけではなく、鼠を持ち出すことが主眼なのであるが、巣に落着かないところを鳥に比しているのだから、やはり「巣」は不可欠の道具立であろう。なお、杜哉の『蒙引』は「是はわが行脚漂泊に柴門の鎖しがちなるを比興せられし寓言ならん」とも考えているが、これは深読みに過ぎる。『源氏』の一節を踏まえた前書を付して、鼠のさまに興じただけの逸興に過ぎない。

742

不卜一周忌　琴風興行

杜鵑鳴音や古き硯ばこ（陸奥鵆）

泊船集・蕉翁句集

夏季（杜鵑）。

語釈　○不卜一周忌　「不卜」は江戸の俳人、岡村氏。芭蕉とは延宝期から長い交際があった。既出（I 95）。歿したのは元禄四年四月九日なので、「一周忌」は一年後の五年四月九日に当る。「石太良一周忌」（一茶『文政句帖』五年正月十一日条）「Ixxûqi, I, Icqi.」（『日葡辞書』）。○琴風興行　「琴風」は生玉氏、また柳川氏。摂津の人で、江戸に出て不卜の門人となり、後其角に属した。享保十一（一七二六）年二月七日歿、享年六十。この人が不卜の一周忌追善の句会を主催したのである。「興行」は既出（II 332前書等）。○杜鵑鳴音や　「杜鵑鳴く音や」。「杜鵑」は、ほととぎすを指す漢語の一。「や」は詠嘆の切字。○古き硯ばこ　「古き硯箱」。「硯ばこ」は、俳諧など風雅の道に携わる人に相応しいものとして出した。恐らくは不卜遺愛の品であろう。「昼ノ御座ノ上ニハ、御剣御硯箱ヲ被措タリ」（『太平記』巻四十）「Suzuribaco.」（『日葡辞書』）。

大意　故人遺愛の古い硯箱を見て亡き人を偲んでいる折柄、ほととぎすの哀切な一声が聞えて、殊更思慕の情を掻き立てることだ。

考　『泊船集』と『蕉翁句集』には「ある人の一周忌に」と前書がある。沾涼の『綾錦』によると、不卜は元禄四年四月九日に卒したので、『陸奥鵆』の前書によって当面の句の成立年時は明らかである。

俳席に出ていた不卜愛用の硯箱に古人を偲ぶ情を寄せ、それにほととぎすを配した趣向である。この鳥は「死出の田長」などとも呼ばれて死後の世界に縁があるし、「いそのかみふるき宮この郭公こゑ許こそ昔なりけれ」（『古今集』巻三、素性）「ほとゝぎすはなたちばなのかをとめてなくはむかしの人やこひしき」（『新古今集』巻三、よみ人しらず）等、古歌には昔を偲ぶよすがともされた鳥であった。特に右の素性の歌は句の背景として芭蕉の脳裏にあったと思われる。

不卜は石田未得の門人で、芭蕉とは派を異にしていたが、早くから俳交があり、『江戸広小路』『向之岡』等延宝期のこの人の撰著には芭蕉の句が見え、不卜亡母の追悼句（I 95）を作っている程である。蕉風が本格化してからも二人の交わりは続き、貞享五年に不卜の刊した『続の原』所収の四季句合に芭蕉は冬の部の判詞を引受けて、心の籠った跋文を寄せている。このような長いつきあいを背景に、この句はしみじみとした哀悼の意を表した、なつかしい句と評し得よう。

743　鎌倉を生て出けむ初鰹（ガツヲ）（葛の松原）

かまくらは活て出けむはつがつほ（芭蕉翁真跡集）

誹林一字幽蘭集・陸奥鵆・泊船集・青莚・三冊子・蕉翁句集

旅舘日記・類柑子・許野消息・鎌倉海道

夏季（初鰹）。

語釈　○**鎌倉**　「カマクラ」。今の神奈川県鎌倉市。頼朝開幕の地であり、近世には江戸への魚の主な供給地でもあった。既出（I *111* 前書）。○**生て出けむ**　「生きて出でけむ」。魚荷として鎌倉から積み出された時は生きていただろう、の意。新鮮さを強調したのである。「出けむ」で切れる。○**初鰹**　「初鰹（はつガツヲ）」。「鰹」（I *172*）が関東近海に回遊して来る初夏の青葉の頃、この地方の鰹漁が始まる。江戸人は「初鰹」と称して特に賞味した。「初の字に一朝を争ひ、夜の字に百金をかろんじて、まだねぬ人の橋上にたゝずみあかすまゝに、一片の風帆をのぞんで早走リを待て公門に入時、鬼の首とる心地したり。南溟東海の魚龍一番鰹と名のらせ、其威を犯せるものなし」（『類柑子』てりかつを）「所在往々に侍る。殊に相模・土佐・紀州・伊勢に出る。鎌倉に出る事古へ久し。房州辺には殊に多し」（『滑稽雑談』）「大和本草に曰、相州鎌倉或は小田原辺、之を釣て江府に送る。尤其早く出る者、之を初鰹と称して賞味す」（『年浪草』）「かまくらにて／目には青葉山郭公はつ鰹山口来雪」（『江戸新道』）。

大意　鎌倉を出荷された時きっと生きていたのだろう、生きの良いこの初鰹は。

考　文考はこの句について、その著『葛の松原』（元禄五年成）で、

詩哥に名所を用る叓たやすからじ。かまくらの初鰹は、支考が東より帰けるとき、かゝる叓ありとて見せ申されしを、生て出るといふに鎌倉の五文字、又その外あるべくとも承わらずと申たれば、られ敷きゝ侍るとて阿叟もにくみ申されしが、みづからも微幸にいひ明しぬらむ。つらく〳〵おもへば、生死のさかひを以て出入せむに、かまくら・六波羅の外殊に有べからず。しばらく風雅にあそぶ人も、いきて鎌くらを出し鰹の、いまは武江の薄しほとなりけるよと、世の観相にのみ眼をとゞむる叓、此句ばかりにもかぎるまじ。

と述べている。支考の『削りかけの返事』（享保十三年刊）によれば、彼は元禄五年六月初めに奥羽遊歴から帰って深川の新芭蕉庵を尋ねており、四月頃に成っていた初鰹の句をその時示したものと推定される。

「かまくらは」という異形は、許六の稿本『旅舘日記』（元禄五～七年頃）や其角の『類柑子』の外、『末若葉』（元禄十年成）の其角句の前書にも「先師かまくらは生て出けんと聞へし折にふれたるにや」と引用しており、桃鏡の『芭蕉翁真跡集』にも摸刻があるところを見ると、そういう別案があったことは認められる。しかし、本位句としては初出の『葛の松原』や、多くの蕉門諸集の伝える「鎌倉を」を採るべきであろう。

この句、初鰹の新鮮さを賞める意が中心であることは言うまでもない。ただ、それだけならば土芳の『三冊子』に、

鎌倉を生て出けんはつ鰹といふこそ、心の骨折、人のしらぬ所也。（赤雙紙）

と伝えられるような芭蕉の言葉が出て来る筈がない。鎌倉は既に夙く『徒然草』に、「鎌倉の海にかつをと云魚は、かのさかひにはさうなきものにて、この比もてなすものなり」（百十九段）と見え、［語釈］に引いた来雪（素堂）の名句「目には青葉」の句も鎌倉で詠まれているように、鰹と縁が深い上に、『葛の松原』の所説のような因縁もあった。つまり武家の府であった鎌倉は、「いざ鎌倉」の際、武士達が生死を賭けて出入りした処で、その緊張感を持った地名の「響き」が、「鎌倉を生て」という句の表現に関わりがあるというのである。これは鰹の新鮮さをいう句の主意と直接の関係はないので、現代の眼からは余計な事のようにも見えようが、『葛の松原』は芭蕉在世中の刊行であり、

いかな支考でも、そう勝手な事は書けなかったろう。支考の見方に対して芭蕉が「うれ敷きゝ侍る」と答えたのは事実だったと思う。そういう表現の機微が、『三冊子』にいう「心の骨折、人のしらぬ所」なのである。但し、『葛の松原』の末の方で、「いきて鎌くらを出し鰹の、いまは武江の薄しほとなりけるよ」という「世の観相」とするのは如何なものか。これは聊か深読みに過ぎるようである。兎に角、「軽み」を志向する時期にも、一方ではこんな表現の工夫もやってみる芭蕉であった。「かまくらは」の形では、「は」と特に取立てた言い方がわざとらしく聞える。これが初案とすれば、そういう欠点を正して、目立たない「を」で治定したものであろう。

744　ほとゝぎすなくや五尺のあやめ草（真蹟短冊）

葛の松原・陸奥鵆・泊船集・伊達衣・今日の昔・三冊子・蕉翁句集・粟津原・蕉翁全伝附録

夏季（ほとゝぎす・あやめ草）。

語釈　**○なくや**　「鳴くや」。「や」は詠嘆の切字。**○五尺のあやめ草**　「あやめ草」は、端午の節供に軒に葺く菖蒲のこと。既出（Ⅰ*94*、Ⅲ*486*）。「五尺」は、一メートル五十センチ程。「梢の火やあかつき方の五六尺　丈艸」（『炭俵』下）。

大意　空にはほとゝぎすが頻りに鳴く五月になった。地上にはあやめ草が五尺にも伸びて、端午の節供を迎えようとしている。

考　『伊達衣』（等躬撰、元禄十二年刊）には「寄夏艸」と前書がある。支考の『葛の松原』には、この句を「鶯や餅に糞する椽のさき」（Ⅳ*735*）と共に挙げて、「かの僧の和及は、かゝる叓きかずなりぬるぞ、今は恋しき人の数なり」とあり、元禄五年正月十八日に世を去った和及歿後の作としている。支考は六月初めに江戸に帰来して芭蕉を訪うた時この句を知ったのであろうから、同年五月頃の作と推定される。

この句の典拠については夙く『三冊子』に、

此句は、ほとゝぎす鳴くや五月のあやめ草といふ歌の詞を取ての句なるべし。（赤雙紙）

とあって、「ほとゝぎすなくやさ月のあやめ草あやめもしらぬこひもする哉」（『古今集』巻十一、よみ人しらず）を指摘している。この歌は『古今集』で恋歌の巻頭にあって有名なものだけに、芭蕉の脳裏にあったことは疑いないけれども、上の句は「あやめ」を言い出す為の序としているので、景物を描くことが歌の主意ではない。その点では「うちしめりあやめぞかをるほとゝぎすなくやさ月の雨のゆふぐれ」（『新古今集』巻三、良経）の方が、当面の句の境地に近いものであろう。それと連歌の仕立て方についてよくいわれる「五尺のあやめに水をかくるが如く」という言葉も背景にしていると見られる。これは『後鳥羽院御口伝』に「俊恵法師……五尺のあやめ草に水をいかけたるやうに哥はよむべしと申けり」とあるのに発し、心敬の『さゝめごと』には歌の姿について「五しやくのあやめに水をかけたるごとくにといふは、ぬれ〳〵とさしのびたる也」と説かれている。これらを承けて、

連歌の仕立は、五尺の菖蒲に水をかけたらんが如くなるべし。本より菖蒲も清らかなる物に水をかくれば、一点も滞る所もなく流るゝが如し。（宗長『連歌比況集』）

古の人の申されしも、五尺の菖蒲に水をかくるが如く、ぬれ〳〵と爽やかに仕立べきよしに候。（紹巴『連歌至宝抄』）

といった記述が生まれたもので、芭蕉の頭には連歌書の記事があったと思われ、これらの古歌や言い慣わしを契機として、この句は作られたのであった。歌の「五月」を「五尺」に変えただけで俳諧とし、夏も漸く深まろうとする頃の自然を描いたのである。五尺にも伸びたあやめ草とあるから、ほとゝぎすも初音をゆかしがる初夏の趣ではない。また、五月闇の頃稀に晴れた月夜という鑑賞もあるが、際やかな表現の特色からして、「雨後のあけぼの」（素丸『説叢大全』）の景色と見た方がよかろう。幸田露伴はこの句を、

杜鵑の声を聞いて、その直感を、ずかりと云つた句である。爽快な感じです。眼前にあやめがすらりと立つてゐ

る。そこへ杜鵑が鳴いて通つたので、その咄嗟の感を一息に取込んで、一つの天地を打ち開いたのだ。大した句である。古歌などの心も踏まへてゐるが、それなどもずつと飛び越えて脱却して了つてゐる。修飾や意匠などの種種の煩瑣を振ひ落した妙味が此の句にはある。此の句が斯う云ふ表現の形を取る迄には、どれ程の経路を通つて来たものか、それは芭蕉の念念不断の工夫が端なく此の杜鵑を仮りて吐き出されたので、然かもその途中の滓は凡て払拭されてしまつた。貞徳流のぬめりも無く、檀林派のわざとも無く、まことに佳句である。（『芭蕉俳句研究』）

と激賞している。この句には確かに古歌の背景があるけれども、たとえば『古今集』の歌の「鳴くや五月」の「や」は間投助詞であって、ほととぎすの鳴くさまは「五月」の説明に過ぎない。これに対して芭蕉の句の方は、切字という修辞法の効果を最大限に発揮して、天地を代表する鳥と草との境を画している。この謂わば切れ味がこの句の姿を際立たせ、表現の鮮明さを増していると言ってよい。半田良平氏も、

　時鳥と菖蒲とは、固より季節上で密接な関係はあるが、芭蕉はそれよりも、時鳥の鋭い声が耳に訴へる感じと、五尺程にさや〳〵伸び立つた菖蒲の葉が眼に与へる感じとの間に、一種微妙な調和を見出したのである。芭蕉のこの鋭敏な感覚は、『五月（さつき）』を『五尺』と変へたゞけの句のうちに、よく生かされて居る。それ故、この句は、逐語的に古歌を踏まへて居りながら、矢張り作者の吹きこんだ気息（いぶき）によつて、別個の生命を得て来たと言つてよからう。そこに作家としての芭蕉の手腕がある訣である。（『芭蕉俳句新釈』）

と的確に鑑賞しておられる。

745　唐破風の入日や薄き夕涼　（流川集）

納涼の折〻云捨たる和漢、月の前にしてみたしむ

破風口に日影やよはる夕涼み　（芭蕉庵三日月日記）
破風口や日影かげろふ夕すゞみ　（泊船集書入）

夏季（夕涼）。

語釈　○**唐破風**　「カラハフ」。中央が円く、左右が反り上って、冑の鍬形を逆様にしたように造った破風。「破風」は屋根の切棟の山形になった所をいい、流破風・千鳥破風など種々の型がある。唐破風は武家屋敷の玄関や門、神社の屋根に多い。「Fafu.」（『日葡辞書』）。○**入日や薄き**　「入日や薄き」。西に没しようとする太陽の光線が次第に薄れて行くさま。「や」は、疑問と取ってはおかしく、詠嘆の間投助詞と見るべきであろう。「薄き」で切れる。「百舌鳥なくや入日さし込女松原　凡兆」（『猿蓑』巻三）「なくこゑもたかきこずゑのせみのはのうすき日かげに秋ぞちかづく」（『風雅集』巻四、伏見院）「Irifi.」「Vsui.」（『日葡辞書』）。○**夕涼**　「夕涼み」。夏の夕べの納涼。既出（Ⅱ293等）。

大意　お屋敷の唐破風にあたる入日の光も薄れて来たことだなあ。丁度夕涼みには良い頃だ。

考　元禄五年秋の稿本『芭蕉庵三日月日記』所収の素堂との和漢歌仙の発句として「破風口に」の形が見えるので、同年夏の作たることは明らかである。『蕉翁句集』が貞享三年の部に入れているのは誤りとしなければならない。和漢歌仙はその末に「元禄八月八日終」とあるから、夏の内から作りかけていたものを、八月八日に到って満尾したことになる。「唐破風の」の句形の見える初出は、元禄六年十月に成った露川撰の『流川集』で、一年余の間に推敲されたのであろう。逆に「唐破風の」を初案とする見方もあるが、『三日月日記』と『流川集』の年代からして、成り立たないと思う。許六は『泊船集書入』の句形を挙げた後、「……とき〻侍りぬ。此句、後に句作り直たるなるべし」と述べている。許六は五年八月九日に初めて芭蕉に会って以来、翌年にかけて親炙した人なので、その所説は無下に却け難いけれども、この句形は『三日月日記』に比して余り変り栄えがないし、「日影かげろふ」と同音が続くのも

拙い感じがする。彼は『三日月日記』の句形を不正確に記憶していたのではあるまいか。蓼太の『芭蕉句解』附録に「唐破風の入日や」「破風口に日影や」と共に挙げる「唐破風や日影かげろふ夕すゞみ」という句形は、『流川集』と許六の所伝を混淆したもののようで信じ難い。

初案の「破風口」は、民家の屋根の横の三角になった部分をいう。潁原博士の『新講』に、

元禄五年夏新たに成つた芭蕉庵での吟であらう。……暑い夏の日も漸く西に傾いた。どこからともなく涼風が湧いて来る。縁端にでも出て涼を納れようと、ふと見ると屋根の破風口にはまだ夕日が赤く照つて居る。だがその日影はもうすつかり薄れて、弱々しい光が何となく衰へ行くものの淋しさを思はせる。破風口に薄れ行く日影を捉へて、夏の夕の一種の感懐を籠めて居る。

と解しているのが正確で、「夕すゞみに出て家居にあたる西日を見た客観的即興」（内藤鳴雪『評釈』）であった。それが「唐破風」となると普通の民家の趣ではなく、神社仏閣或いは武家屋敷の豪壮なものがイメージされなければなるまい。潁原博士は「立派な邸宅などで、夕涼の席上吟とでもすればふさはしい」（『新講』）といわれたが、私は芭蕉庵からの眺望ではないかと思う。この頃新たに成った三度目の芭蕉庵のたたずまいについては、芭蕉自身、

……三間の茅屋つきぐしう、……南にむかひ池にのぞみて水楼となす。地は富士に対して、柴門景を追てなゝめなり。（「芭蕉を移詞」―『芭蕉庵三日月日記』―）

……三間の茅屋池に臨て立り。南にむかひて納涼をたすけ、月光池に移り畳をてらして、残夜水楼に四更の雲を吐き、やゝ薫風吹ける秋の初風も身に染みそめて、……（「深川の庵再興の記文」―竹人『蕉翁全伝』―）

と書いており、池に臨んで一部二階造りの建物が建っていたようである。この「水楼」に登れば、近くの寺社や武家屋敷の「唐破風」が望めたであろう。その趣を句にしたとすれば、他の邸宅を訪れての挨拶吟のように取る必要はなくなるのである。両案とも破風にさす日の光によって夕暮の涼感をあらわす趣向であるが、「日影やよはる」よりは

「入日や薄き」の方が表現として良くなっているように思われる。「破風口」と「唐破風」と、趣は異なりながら、やはり両案の間に推敲関係は認められよう。

素堂子の壽母七十あまり七としの秋七月七日をことぶくに、萬葉の七種をもて題とす。是につらなる者七人、此縁にふれてをの〳〵又七叟の齢に習はん

萩

746　七株の萩の千本や星の秋　（伝真蹟懐紙）

――翁四哲集

素堂子の壽母七十あまり七としの秋七月七日にとことぶくに、萬葉七種をもて題トす。是につらなるもの七人、この縁にふれてをの〳〵又七叟の齢にならはん

萩

七かぶの萩の手本やほしの秋　（旅舘日記）

七かぶの萩の千もとや星の縁　（通天橋）

――韻塞・泊船集・蕉翁句集

秋季（萩・星の秋）。

語釈　**○素堂子の寿母**　「素堂子の寿母」。「素堂」は芭蕉の親友山口信章。既出（Ⅱ*432*前書）。「子」は軽い敬称である。「寿母」は、長寿の母。「寿」には、命長い意があり、他人の母の敬称でもあった。「称二人母一曰二寿母一」（『書言故事』父母類）「魯侯燕喜、令妻寿母」（『詩経』魯頌、閟宮）。**○七十あまり七としの秋七月七日をことぶくに**　「七十余り七歳の秋七月七日を寿くに」。素堂の母が数えの七十七歳（喜寿）を迎えた年の秋七月七日（七夕）の日を祝うに当って、の意。めでたい数の「七」が並んだ日を祝うのである。「ことし七十歳ふたとせの秋の月を病る枕のうへに詠めて」（芭蕉「東順伝」―『句兄弟』）「予とちなむ事十とせあまり九とせ

にや」（芭蕉「悼松倉嵐蘭」—『笈日記』）「さかへん君の御出世を千代万年とことぶきて」（『烏帽子折』第三、ゐぼし折名づくし）「Xichiguat.」「Xichiguachi.」「Cotobuqi.」（『日葡辞書』）。**○万葉の七種をもて題とす**　「万葉の七種を以て題とす」。『万葉集』巻八に「秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花」「萩の花尾花葛花瞿麦の花をみなへし又藤袴朝顔の花」という山上憶良の歌二首が見え、ここに詠まれた七種の花を題として句を詠むことになったというのである。「題」は既出（Ⅱ *438* 前書）。「一句、付ともに古代にして、そのにほひ万葉などの俤也」（『三冊子』赤雙紙）「Nanacusa.」（『日葡辞書』）。**○是につらなる者七人**　「是に列なる者七人」。この祝いの席に列なった者は、伝真蹟懐紙によれば、芭蕉・嵐蘭・沾徳・曾良・杉風・其角・素堂の七人であった。出席者も七の数を揃えたわけである。［考］参照。「つらなりしむかしにつゆもかはらじとおもひしられし法のには哉」（『山家集』中）「Zani tçuranaru.」。**○此縁にふれて**　「此の縁に触れて」。長寿の祝いに列席した縁にあやかって、の意。「折にふる」（Ⅱ *433* 後書）参照。「彼最後ノ命ニ遇事ハ先世ノ縁ナレバ、坐タリトモ遁ナム、遁トモ来ナン」（『海道記』）「Yen.」（『日葡辞書』）。**○をの〻又七叟の齢に習はん**　「各〻又七叟の齢に習はん」。「七叟」は、白楽天が唐の会昌五年三月二十一日に七十歳以上の老友六人を会して開いた尚歯会の故事を指す。七人合わせると五百七十歳に達したという。この素堂の老母の寿宴に会した人々も、尚歯会に集まった七人の老人（七叟）の高齢に倣って、長生きをしよう、の意。「をの〻」は「おの〻」の仮名ちがい。「又」は「亦」を用いるのが正しい。「習」は「倣」の宛字。「倣ふ」は既出（Ⅰ *147* 前書）。「承安二年三月十九日、前大宮大進清輔朝臣、宝荘厳院にて和歌の尚歯会を行けり。七叟……」（『古今著聞集』巻六）「いま［だ］をしむべき齢の、五十年にだにたらず」（芭蕉「悼松倉嵐蘭」—『笈日記』）「Youai catamuqu.」（『日葡辞書』）。**○萩**　「ハギ」。既出（Ⅰ *12*、Ⅲ *523* 等）。**○七株の萩の千本や**　「七株の萩の千本や」。七株の萩も殖えて千本にもなるように、との願望を述べた。「千」は数が多いさま。「株」も「本」も、植物の根もとをいう。「本」は既出（Ⅱ *349*）。「や」は詠嘆の切字。「一かぶの牡丹は寒き若菜かな　尾頭」（『続猿蓑』下）「Fitocabu.」（『日葡辞書』）。**○星の秋**　「星の秋」。「星」は、七夕の夜に逢う牽牛・織女の二星。既出（Ⅰ *51*・*96*、Ⅲ *610* 等）。「星の秋」といっても、七夕の二星を指すことは同じである。

大意　七夕の今宵、七株の萩が殖え茂って千本にもなるように、行く末かけて星に願いを籠めましょう。私どもも長寿にあやかりたい。

考　『韻塞』（李由・許六撰、元禄九年刊）には、「素堂の母七十あまり七としの秌七月七日にことぶきする。万葉七種を

もて題とす。これにつらなる者七人、此結縁にふれて各また七叟のよはひにならはむ」と前書があり、『泊船集』の前書もこれと大同小異である。伝真蹟懐紙は筆蹟に疑問があるものの、内容は信ずべきものと思われ、標掲の芭蕉の句の後に、

尾花　　嵐蘭
織姫に老の花あるおばな哉
葛花　　沾徳
布に煮てあまりぞ栄ふ葛の花
なでしこ　　曾良
動なき岩撫子や星の床
女郎花　　杉風
けふ星の賀にあふ花やをみなへし
ふぢばかま　　其角
蘭の香にはなひ待らん星の妻
あさがほ　　素堂
めでたさや星の一夜もあさがほも

昔此日家隆卿七そじなゝのと詠じ給ふて、みづからをいはふ成べし。今を母の齢あひにあふ事をことぶきて、猶九そじあまりこゝのつの重陽をもかさねまほしくおもふ事しかり。

壬申歳

とあり、この日の模様を窺うことが出来る。後書は素堂の文である。

許六の稿本『旅館日記』を始め、『韻塞』『泊船集』等が中七を「萩の手本や」と伝えている。これについて『一翁四哲集』（西馬撰、安政三年刊）には、「杉風家蔵七種の巻物に萩の千本とあり。百五十年来萩の手本と誤り来れり」と述べており、萩が茂って数を増すことにかけて、齢のこの上とも長久ならんことを祝した意とすれば、「千本」の方が相応しく、「手本」ではよく分らない。素堂追善集『通天橋』（雁山撰、享保二年刊）の句形も拠る所が明らかでないので、結局懐紙と『一翁四哲集』の句形が、信頼すべきものと考えられよう。

古くは「萩の千本や」の句形が知られなかった為に、「手本」で解しようとして、「手もとはたもと也。只七株の萩の袂は星にかす小袖などの心にて、星にそのまゝ借すとならん」（東海呑吐『芭蕉句解』）等無理な見方が多く、「手本(てほん)」の意とする説まであった。しかし、右にもいったように、「千本」が正しく、「手本」は誤伝である。その立場からすれば、

……前文にあるごとく、「七十あまり七年、七月七日、七種、七人、七叟」と「七」に興ずる気分の流れの上で、「七株」と発想したものである。……「萩の千本」と「星の秋」とは隠微相通い、イメージを喚起する力をもつ。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

というのが確説であろう。七づくめに興じた挨拶の趣向なのである。

747 三日月や地は朧なる蕎麦畠　（芭蕉庵三日月日記）

三日月に地はおぼろ也蕎麦の花　（浮世の北）

三ケ月の地は朧なりそば畠　（泊船集）

秋季（三日月）。

語釈 ○**三日月**　陰暦三日の月。季語としては秋季である。既出（Ⅰ*162*、Ⅱ*410*等）。○**地は朧なる蕎麦畠**「地は朧なる蕎麦畠」。空の三日月に対して、地上の方では蕎麦を作ってある畠が一面に朧に霞んでいるさまをいう。「朧」は本来春の季語であるが、ここでは白い蕎麦の花の咲いているさまの形容とした。「朧」は既出（Ⅰ*232*）。「鳩ふくや渋柿原の蕎麦畠　珍碩」（『猿蓑』巻三）「Soba.」（『日葡辞書』）。

大意 三日月のほのかに照らす空のもと、地上は一面の蕎麦畠が、花で朧に霞んで見える。

考 元禄五年に成った『芭蕉庵三日月日記』真蹟に見えるので、同年八月の作と思われる。『泊船集』には、「此句には三ヶ月の記あり。今畧之」と注があり、これだと「三ヶ月の記」が前書のように聞えるが、実体は自他の句文を集めたものであり、中でこの句は素堂の長文の序と発句の後に書かれている。編者風国は『三日月日記』の内容を知らず、前書と誤解したのであろう。

句形に関しては、『浮世の北』（可吟撰、元禄九年刊）の形を本位句とする見方もあるが、どれだけ根拠のある所伝か疑問であるし、且つ、これでは「蕎麦の花」が主になって三日月の趣が失われるという加藤楸邨氏の説（『芭蕉講座』発句篇）も説得力を持つ。「蕎麦の花」と露わに言わずに、「朧なる」でその趣を思わせたところに、この句の表現の巧みさがあるのではあるまいか。後代の『一葉集』に「三日月の地はおぼろ也蕎麦の花」とある所伝も同様の疑点があり、下五を「蕎麦の花」とする句形には問題があろう。また、「三ヶ月の地は朧なりそば畠」という『泊船集』の句形は、一見姿は良いけれども、「三ヶ月の地は」というあたりが不透明で、見方によっては表現不足の感も否み難い。楸邨氏は、『三日月日記』のように初五を「や」で切ると、余りに対照にとらわれた発想で幽韻に欠けるとされ、『三日月日記』の句形から『泊船集』の句形への推敲を考えておられるが、『泊船集』全体の杜撰な態度からして、こういう見方は問題である。この所伝は『三日月日記』と『浮世の北』の句形を混淆した誤伝の疑いが濃いと思う。結局何も問題のない真蹟の句形を本位句とするのが妥当であろう。なお、楸邨氏は後の『芭蕉全句』では『三日月日記』真蹟

の句形を採っておられる。
どの句形を採るか、人によって見方は区々であるが、
三日月が空の向うにある。地には蕎麦の花が朧にある。その柔らいだ夕べの感じである。三日月と蕎麦と離して見ないでよい。蕎麦の花の色を併せ考へてもらひたい。三日月を観るころは夕ぐれと定まつてゐる。何も月光が明るくはない。(『芭蕉俳句研究』)
という幸田露伴の説は確かなところである。一面の蕎麦畠に白い蕎麦の花が咲き、空には三日月のある景色で、薄月の光と朧な花の色が幽寂な天地を形成している。さきにも言ったように、「花」を出さずに「朧なる」によって花を思わせたところが、老手の技なのである。『三日月日記』に収められたところから、深川の実景と見られているが、如何に昔でも江戸の近郊に、このような一面の蕎麦畠があったであろうか。信濃や伊賀の山村の景の印象がこの句の世界の基盤になっているように思われてならない。

望日

748

名月や門に指くる潮頭 (芭蕉庵三日月日記) ―― 名月集
名月や門へさしくる潮頭 (桃の実) ―― 陸奥衛
名月や門にさし込潮がしら (芭蕉庵小文庫) ―― 泊船集・蕉翁句集

秋季(名月)。

語釈 **○望日** 「バウジツ」。陰暦の十五日。ここは中秋の名月の日、八月十五日をいう。「月は二、三日のほどより現形して、望日に円満して」(『名語記』四)。**○門に指くる潮頭** 「門に指し来る潮頭」。「潮頭」は、満ちて来る海水の、白く目立つ波頭。潮の満

ちて来ることを「潮がさす」という。「指」は宛字。「門」は、芭蕉庵の門で、ここは「カド」と訓むべきではない。［考］参照。
「潮頭とは俗言也。歌に出潮と詠む是也。潮の出来る端(ハナ)を云也」（信天翁『笈の底』）「しほのさす縁の下迄和日なり　珍碩　生鯛あがる浦の春哉　同」（『ひさご』）「真砂路や陽炎を追ふ汐がしら」（『晋明集』巻二）「Xiuoga sasu.」（『日葡辞書』）。

大意　中秋の名月が皎々と照らして、草庵の門のあたりまで満ちて来る波頭が、一際白く見えることだ。

考　元禄五年の『三日月日記』に見えるので、この年八月十五日、名月の夜の作と認められる。真蹟たる本位句の出典が最も信頼度が高く、「門へ」「さし込」等の異形は、杜撰な誤伝に過ぎまい。

この句の「門」は第三次の芭蕉庵の門であるが、「モン」とよむか「カド」とよむか説が分れている。井本農一博士は、

……俳諧ではこの字を両方に読むのであって、たとえば『俳諧類船集』などにも、両方の訓(よ)みを掲げている。しかし、家に付属している門そのものをいうときはモンのほうが俳諧では普通である。……（もっとも「応く〳〵といへどたゝくや雪のかど」（大東急文庫本『去来抄』）などの用例もあり、一概にはいえないが）。ここはしかし、門そのものを目ざして潮頭がさして来るというより、門のあたりに潮頭がさして来るの意であろうから、今日の語感としてカドと読みたくなるのも無理はない。今日の語感としてはモンと読むと門そのものを目ざして潮が寄せるような感がし、カドと読むと門口(かどぐち)あたりに潮の寄せるような感があって、そこで後者に読む説が多いのであろう。（『鑑賞日本古典文学・芭蕉』）

と丁寧に考えておられる。しかし私は、夙く志田義秀博士が『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』で指摘された翌六年秋の吟「朝顔や昼は鎖おろす門の垣」が、この場合基準になるべきものと思う。朝顔の句の「門」は「モン」としか訓みようがなく、同じく第三次芭蕉庵の門を指すのである。門その物か門のあたりかの語感の問題は、人によって受取り方が異なるから、なかなか結論は出せない。その物であろうと「あたり」であろうと、「門」が芭蕉庵のそれであるこ

とに変りはないのである。

芭蕉庵は小名木川が隅田川に流れ込む所謂三股のほとりに在った。芭蕉自身新しい庵のたたずまいを、この年秋に書かれた「芭蕉を移詞」（真蹟『芭蕉庵三日月日記』所収）に次のように描いている。

……旧き庵もやゝちかう、三間の茅屋つきぐしう、杉の柱いと清げに削なし、竹の枝折戸安らかに、葭垣厚くしわたして、南にむかひ池にのぞみて水楼となす。地は富士に対して、柴門景を追てなゝめなり。浙江の潮、三またの淀にたゝへて、月をみる便よろしければ、初月の夕より雲をいとひ雨をくるしむ。

この「竹の枝折戸」「柴門」は恐らく小名木川に近かったので、江戸湾が満潮を迎える名月の夜には、海水が小名木川の流れにまで入り込んで、ひたひたと寄せて来たのである。その潮の大きな動きを「門に指くる潮頭」と的確に表現したのである。幸田露伴は、

名月の夜は秋の最中で、此の時が潮が一番高くさすのである。春の大潮は昼に高く、秋の汐は夜に高い。満月は必らず大潮であるが、此の名月の夜はことにそれが高いのである。その事を胸において此の句を見るといかにもとうなづかれる。ふだんは門に及ばぬ汐が、此の時はまんまんと「門にさしくる」のだ。空には満満たる月があり、門には潮がみなぎつて来る。句に活動がある。堂堂たる佳句である。……東京湾の潮は秋夜には七尺ふくれる。……（『続芭蕉俳句研究』）

と、句に描かれた自然を精しく考え、句を高く評価しているのは、誰しも異論のないところであろう（潮位が実際に最も高くなるのは、名月の夜の一、二日後という）。写生的な趣が近代以降の句作態度に叶うことも手伝って、この句の評価は非常に高い。代表的なものを左に挙げておこう。

「名月や」と打出して、名月の満ちきつた、清澄を以て大景をつかみ、「門にさし来る潮がしら」で眼前潮の膨れくる動きの真実をつかんでゐるのである。まことに名月の夜の潮の真実の相を把握したものであつて、それが句

の勢となつて生きてくるのである。この句は、単なる写実ではなく、単なる描写ではない。一見さう見える句であるが、さう思ふのは芭蕉の句作態度を真に理解してゐない観方である。芭蕉は外から傍観してゐるのではないのであつて、……名月下、潮の膨れてくる実景を観てこの名月と潮との実景の勢に感合してゐるのである。換言すれば、眺めて描写するといふやうな冷い態度ではなくて、……声なき自然の真実相に感合し、その勢とひとつになりきつて、いはば、名月の下、月と共に、潮と共に満ち、且つ動き出でてゐるのである。（『芭蕉講座』発句篇(下)）

門辺にさしてくる潮の穂先を捕えて、満月の夜の自然の大きな動きを描き出している。潮の走ってくるという小さな現象をも、生命感の躍動として表現されるところに、詩の動機の根源的な深さがある。（山本健吉氏『芭蕉その鑑賞と批評』）

先蹤作としては、「ゆふづくよしほみちくらしなにはえのあしのわか葉にこゆるしらなみ」（『新古今集』巻一、藤原秀能）の歌が思い浮ぶが、そういう優美な調べよりも、この句の迫力ある気息には、「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今はこぎいでな」（『万葉集』巻一、額田王）という古調の方が寧ろ相応しい。この句には『万葉』の古歌と対をなす大きさがある。

749　芭蕉葉を柱にかけむ庵の月　（蕉翁文集）

秋季（芭蕉・月）。

語釈　**○芭蕉葉を柱にかけむ**　「芭蕉葉を柱に懸けむ」。月見に興を添える飾りとして、芭蕉の葉を柱に懸けようというのである。「芭蕉」が草庵の庭に植えた樹であることはいうまでもない。「ばせを葉や打かへし行月の影　乙𠮧」（『猿蓑』巻三）「面八句を庵の

柱に懸置」（『おくのほそ道』）「Baxôba.」（『日葡辞書』）。○庵の月　「庵の月」。草庵で眺める秋の月。「蜘の巣の是も散行秋のいほ路通」（『あら野』巻七）。

大意　庭の芭蕉の葉を折り取って、柱に懸けて飾りとしよう。この草庵で眺める月が一際趣を増すだろうから。

考　土芳の『蕉翁文集』（宝永六年成）所収の「移芭蕉詞」の結尾に見える句である。この文は真蹟『芭蕉庵三日月日記』所収の「芭蕉を移詞」の初稿と目されるものであるが、句は『文集』の文案のみにあって、『三日月日記』の方には見えない。元禄五年五月に成った第三次芭蕉庵に芭蕉の樹を移し植えたことを叙した文で、『文集』には「猶明月のよそほひにとて芭蕉五本を植て、其葉七尺余、凡琴をかくしぬべく、琵琶の袋にも縫つべし」とあり、数は五本と分るが、移植の時期は明確でない。竹人の『蕉翁全伝』に「深川の庵再興の記文」として載せる更なる別案には、「既に三五夜近う成行くまゝ、芭蕉を移して又芭蕉庵となす」とあって、これを信ずれば、移植は名月近い頃だったと見られよう。当面の句も八月中旬頃の作と推定される。

芭蕉の葉を柱に懸けるとは、どういう風にすることか。葉に句を書いて柱に懸けるとか、聯のように柱に懸ける、或いは、月光によって葉の影が柱に及ぶさまだとか、さまざまな考え方がある。七尺に余る大きな葉を、花活けに挿して柱に懸けるわけには行かないが、実際に出来なくても、そのようにでもしようと興じている体と見ればよい。句は載せていないが、『三日月日記』の「芭蕉を移詞」には、

一とせみちのく行脚おもひ立て、芭蕉庵既破れむとすれば、かれは籬の隣に地を替て、あたりちかき人々に、霜の覆ひ風のかこひなど、かへすぐ〵頼置て、はかなき筆のすさびにもかき残し、松はひとりになりぬべきにやと、遠き旅寝の胸にたゝまり、人々〵のわかれ、ばせをの名残、ひとかたならぬ侘しさも、終に五とせの春秋を過して、ふたゝび芭蕉になみだをそゝぐ。

とも叙していて、この樹に対する並々ならぬ愛情が窺われる。それと新庵竣功に奔走してくれた杉風・曾良・枳風・

岱水らの江戸の門人達に対する感謝の気持も籠めた逸興なのである。

深川夜遊

750 青くても有べきものを唐辛子　（深川）

陸奥鵆・泊船集・染糸・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

秋季（唐辛子）。

語釈　○**深川夜遊**　「フカガハヤイウ」。「夜遊」は、夜の遊興、遊宴をいう。「大ゐ川の夜遊日興ことぐくいひも尽されね」（月居「遊嵐山序」—『露の古道』）「**Yayū. Yoruno asobi.**」（『日葡辞書』）。○**青くても有べきものを**　「青くても有るべきものを」。青いままで居てもよいのになあ。「ものを」は、現状に対する不満や遺憾の意をあらわす詠嘆の語法である。「青くともとくさは冬の見物哉　文鱗」（『あら野』巻五）「かはづなくゐでの山ぶきちりにけり花のさかりにあはましものを」（『古今集』巻二、よみ人しらず）。○**唐辛子**　実から香辛料を取る草花。既出（Ⅲ*592*）。花が終ると青い実が生り、秋になって熟して赤くなるので、秋の季語とされる。「番椒　時珍食物本草云、番椒、人植二盆中一、以為二玩好一、結レ実如レ鈴、研テ入二食品一、極辛辣辛温、無レ毒。○古杭高濂芸花譜云、番椒、叢二生白花一、子似二禿毫頭一、味辛、色紅甚。○大和本草云、其子有二大小長短尖円之数種一、有二向レ上者一、謂二之天上守一、有二下垂者一、有二聚実者一、種二人家庭際一、食レ之堪レ寒、鄙人最嗜食、自二蕃国一移二種於中華一、日本昔無二此種一、慶長年中秀吉公伐二朝鮮一時、種を採来、故俗云二高麗胡椒一。△これらの説のごとく、当世人家植て賞す。種又一にあらず。天上守に大小二種有、酸醬とて丸き形有、円にして稜あり。青の字入ては夏也」（『滑稽雑談』）。

大意　青いままで居てもよいのになあ。秋になって唐辛子は真赤に色づいているよ。

考　洒堂の撰した『深川』（元禄六年刊）の巻頭に、この句を発句とした洒堂・嵐蘭・岱水らとの歌仙が収められている。膳所の浜田洒堂（珍碩）は、元禄五年九月初め江戸に下着、深川の芭蕉庵で翌年正月まで師翁と起居を共にしたが、当面の発句は秋季であり、且つ巻頭にあることから、集中の俳諧としては時期が最も早く、同集所収の「九月廿

日あまり」に成った「苅かぶや水田の上の秋の雲」の洒堂発句に始まる付合に先立つ頃の作と推定される。洒堂歓迎の席での即興作であろう。

芭蕉庵の庭に植えてあった唐辛子と見る説が多いが、宴席での即興とすれば、鉢植などにした観賞用のものではなかったか。前掲の『滑稽雑談』所引の『時珍食物本草』の記事の外、『炭俵』下巻所収の野坡の発句「石台を終にねこぎや唐がらし」の長い前書にも、

かれが愛をうくるや、石台にのせられて竹椽のはしのかたにあるは、上ゝの仕合なり。ともすれば、すりばちのわれ、そこぬけのつるべに土かはれて、やねのはづれ、二階のつま、物ほしのひかげをたのめるなど、あやうくみへ侍を、……

といった一節が見える。宴席の傍らにある唐辛子を材とした即興であったろう。「青くても有べきものを」といって、赤く色づいた唐辛子を思わせたところは、巧みな表現である。「有べきものを」の語気は、赤くなったのを惜しむような感じと読めるので、「青くても面白いものを、赤くなりてなほ一入であると、其唐辛子の色づいたのを賞美した」(『続々芭蕉俳句研究』幸田露伴)と取っては良くない。赤くなったのを賞美するものについて、青さを言い立てたところに俳諧があるのだ。表面はそれだけながら、何か裏に寓意のありそうな感じがある。昔から、隠閑の観相であるとか、貪って飽くを知らぬ者を戒めたとか、平凡或いは素地のままでよいのに粉飾に走ることへの諷諭であるとか、さまざまに考えられているが、これらは基本的には人それぞれが自由に己の所感に従えばよいことであろう。しかし、この席に洒堂という珍客が居たことは、やはり頭に置いておかなければなるまい。尾形仂氏は、

……「唐辛子」という季語は、「七夕」や「名月」などとは違って、伝統的詩情の負荷を伴わない。そうした伝統的詩情の重みをもたない日常卑近の景物を挨拶の詩材として取りあげているところに、〝かるみ〟期の芭蕉の一つの姿勢がうかがわれよう。(『松尾芭蕉』)

とした上で、寓意については左のように考察しておられる。

近江蕉門の中心人物であった洒堂が東下して深川の客となったのは、上方で専門の俳諧師として立つ上での俳諧修行のためだった。……元禄五年五月七日付で帰東後の消息を報じた長文の去来宛書簡が物語っているように、当時芭蕉は、上方での俳諧生活とはがらりと変わった江戸の俳壇情勢の中で、「なかなか新しみなどかろみの詮議思ひもよらず」と言って、ただ門人たちのするにまかせ、〝かるみ〟への工夫を語ることをじっと抑えていた。そうした中で洒堂の東下を迎えたことは、そのじっと抑えた芭蕉の胸の底の思いに火を点ずるものでなければならなかったはずだ。「青くてもあるべきものを」とは、地方の一数寄者としてとどまっていてよいはずの洒堂が、専門の俳諧師として立たんとして東下の挙に出た志の発露を賞するとともに、一方、胸のうちに秘めておけばよいはずの〝かるみ〟への思いが洒堂との再会によって思わず燃えあがり外へ向かって動き出でんとする、そのやむにやまれぬきざしを吐露して、これから催されんとする俳席への挨拶としたものではなかったか。（『松尾芭蕉』）

この洒堂との関わりを重視する見方は山本健吉氏も同じであって、

この場合は洒堂を喩す意味がなかったか。洒堂は湖南連衆の中でも、芭蕉が目にかけた一人だが、湖南連衆は曲水・乙州・正秀など素人のよさを持ち、芭蕉はその人柄を愛した。この時洒堂は、俳諧師として立つ決意を持っていたのではなかったかと思う。それを危ぶむ心が「青くても有べきものを」と芭蕉に言わせ、さりげない諷戒を垂れたのではなかったか。その後の洒堂の生き方を考えると、芭蕉のその時の気持をそこまで考えてみたくなる。（『芭蕉全発句』）

句はもとより季節の移り変りと共に、青かったものが赤く色づく生ある物のわりなさを述べたまでであるが、その裏に含まれた寓意は、やはり洒堂に対する一味の諷諫の意が多くを占めていたであろう。洒堂は若いだけに、人との融和に配慮を欠くようなところがあったらしく、翌年の田螺の句（Ⅳ807）にも芭蕉の危惧の念はあらわれているが、芭

蕉最後の旅となった大坂行に際して、端なくもこの危惧は的中するのである。

泊船集・裸麦・蕉翁句集・千鳥の恩

女木澤桐奚興行

751　秌に添て行ばや末は小枩川　（陸奥衡）

をなぎ澤洞溪方にて

秋にそふてゆかばや下はこまつがは　（蕉翁句集草稿）

秋季。

語釈　**○女木沢桐奚興行**　「女木沢」は、隅田川と東方の旧中川を結ぶ運河小名木川の別称で、今の東京都江東区の北部を流れており、隅田川に近い西端の北側に芭蕉庵があった。東端の旧中川口は、江東区東砂二丁目と大島九丁目境の番所橋（近世に船舶の検問所があった）である。地名は慶長年中にこの運河を開発した小名木四郎兵衛の名に基づくという。「桐奚」はその川添いに住んでいた俳人であろうが、出自経歴等は未詳。その人の主催で開かれた俳席での吟なのである。**○秌に添て行ばや**　「秌に添うて行かばや」。川辺の秋色を賞でながら流れに添って行こう、の意。「ばや」は自己の願望をあらわす。「心細き長沼にそふて、戸伊广と云所に一宿して平泉に到る」（『おくのほそ道』）「Soi, sô, ôta.」（『日葡辞書』）。**○末は小枩川**　「末は小枩川」。「末」は、川の流れの行き着く所をいう。「小枩川」は旧中川の別称で、東岸に小松川村（現江戸川区小松川）があった。「枩」は「松」の異体字。「末も東の旅衣、日も遥々の心かな」（謡曲「隅田川」）。

大意　川添いの秋色を賞でながら行きましょう、末は小松川までも。

考　「砂村利合をたづぬる」（『裸麦』）「有人の方にて」（『蕉翁句集』）等の前書がある。積翠の『芭蕉句選年考』に、「九月尽の日、女木三野に舟さし下して」と前書したこの発句（『陸奥衡』と同形）以下、「雀の集る岡の稲村　桐蹊」「月曇る靏の首尾に冬待て　珍碩」という三物を紹介している。後年の所出ながら、洒堂（珍碩）の江戸に出て来た

元禄五年秋の作と推定され、その九月は小の月だったので、二十九日（尽の日）に桐奚を二人で訪問した時の吟と思われる。桐奚はこれより後、十月に入ってからの「口切に境の庭ぞなつかしき」（Ⅳ756）を発句とした歌仙にも一座した人であった。『裸麦』（曾米撰、元禄十四年刊）の前書に見える利合という人は、やはり晩年の芭蕉の許に出入りした門人の一人であるが、この前書は孤立した所伝なので大した問題にはなるまいと思う。或いは桐奚の家を訪ねた後、舟で束して砂村の利合を訪うたのかも知れない。

『蕉翁句集草稿』は『泊船集』の句形を参照しつつも、「此自筆物の句也」として「下はこまつがは」の句形を録している。強ち無視は出来ないけれども、『蕉翁句集』も「末は」の形であり、前記『句選年考』の三物も「末は」であるから、板本初出の『陸奥衛』の句形を本位句とすべきであろう。

恐らく芭蕉は舟で桐奚宅まで行ったのだと思う。折柄九月も果ての日、川辺の深い秋色を賞し、行く秋を惜しむ気持を籠めて「𬵢に添て行ばや」と言ったのが面白い。即興的で巧みなこの表現には、しみじみとした秋の思いと共に、行楽にはずむ気持も託されているであろう。「末は小奈川」と更に東を望む表現が続く所以である。「しほらしき名や小松吹萩すゝき」（Ⅲ523）の句と同様に、可憐な地名をいとおしむ情も感ぜられる。安東次男氏の『芭蕉発句新注』には、九月二十九日が乙亥、翌十月一日が月の初子の日に当っていることから、小松を引く古い行事にかけた新説が見えるが、私は採らない。

題野菊畫

752　なでしこの暑さわするゝ野菊かな（旅舘日記）

許野消息

秋季（野菊）。

語釈 ○**題野菊画** 「野菊（のぎく）の画（ゑ）に題（だい）す」。「野菊」は野生の菊。「題」は書きつける意で、ここでは「賛」というのと同じ。「大和本草曰、野菊、秋黄なる小花を開く。是本邦に元トより有。菊は唐より来る。△和産説のごとし。又岩菊或は東菊など云者、野菊に似て秋開二碧花一者は別也」（『滑稽雑談』）「題山家之百合」（『続猿蓑』下、支考発句「しら雲や」前書）「たまつり道ふみあくる野菊哉　卜枝」（『あら野』巻八）「**Noguicu.**」（『日葡辞書』）。○**なでしこの暑さわする丶** なでしこの咲く頃の暑さを忘れる、の意。「なでしこ」は秋の七草の一であるが花期は早く、俳諧では夏に扱われる。既出（Ⅱ*292*）「草の戸や暑を月に取かへす　我峯」（『続猿蓑』下）。

大意 可愛らしい野菊の花を見ていると、なでしこの咲いていた夏の頃の暑さを忘れてしまうことだ。

考 許六の稿本『旅館日記』元禄五年の記事中に見えるから、同年秋の作であろう。

野菊の画賛句として、その可憐清楚な美しさを賛めるのに、暑い頃咲くなでしこを出したまでの句である。『許野消息』（天明五年刊）所収の許六宛書簡で、野坡は次のように述べている。

……此句は翁再来ありとも、拙者において神妙とは申まじく候。是等は格を定たる句也。暑さ忘る丶野菊かなと句作出来候うへは、涼しき物（注、「暑き物」の誤り）を置申さゞればかなはぬ作也。先師の曰、格を定、理を求る人は、俳諧中位に置。格をはなれ、理を忘る丶人は、此道の仙人なりと、常ゝしめし申され候。

要するに、この句は「格を定、理を求」めた「中位」の作ということになる。

753 行穐のなをたのもしや青蜜柑　（浮世の北）

芭蕉庵小文庫・泊船集・蕉翁句集

乙州が首途に

行もまた末たのもしや青密（ママ）柑　（猿丸宮集）

秋季（行穐・青蜜柑）。

語釈 **○行穐のなをたのもしや** 「行く穐のなほ頼もしや」。物さびしい秋の末も、まだ心丈夫な感じがあることだ、の意。「穐」は「秋」の古字（Ⅱ413）。「行穐」（Ⅲ559）「たのもし」（Ⅱ316等）も既出。「なを」は「なほ」の仮名ちがいである。「遁危子曰、猶といふに、猶く弥くのこゝろあり。又俗に、まだなどいふにかよふもあり。世をすてゝ山に入る人山にても猶うき時はいづち行くらん　梅丸曰、今の句この歌と同じく、それでもまだといふ心なり。発句に此猶珍し」（梅丸『茜堀』）。**○青蜜柑** 「アヲミカン」。まだ黄色く色づかない未熟の蜜柑。木の枝にあるうちの蜜柑は、葉の緑と見分けにくい程である。「蜜柑」だけでは冬季になる。「橘」（Ⅳ676）参照。「撰出して淋しき色や青樒柑（ママ）　皷舌」（『五車反古』）「Mican.」（『日葡辞書』）。

大意 物さびしい秋の末でも、蜜柑の青々としているさまを見ると、まだ何か心丈夫な感じがすることだ。

考 初案と思われる「行もまた」の句が元禄六年三月の序のある『猿丸宮集』（友琴撰）に見えるから、元禄五年秋までに成っていたことは確かである。「乙州が首途に」とある前書から、以前は元禄三、四年の作と見られていたが、『校本芭蕉全集』第二巻補注に見える大谷篤蔵氏の考証が確説と思われる。即ち、元禄三年乙州は夏から冬まで金沢に在り、四年九月には湖南で芭蕉との交流が繁く、乙州に右の前書に相応しい動静が見られない。これに対して五年には、乙州は春から江戸に下り、夏には大津に帰ったが、その秋には『猿丸宮集』に、

延ゝて夜寒に成りぬ足の灸　乙州
　帰りては又旅の用意

の句があり、また「乙州にわかるゝ時」と前書する北枝の「語るにも夜ながくなりて別れけり」の句など、乙州の金沢滞在を思わせる作が見える。首途を送るといっても、必ずしも芭蕉が湖南に在る時とは限らず、江戸に在って、乙州が江戸から帰った後間もなく又々旅に出るという消息を得た芭蕉が、文通によって斯かる句を送ったと見るのは無理なことではないというのである。四年九月に乙州が旅に出た様子がないことは大谷氏の指摘の通りであり、三年も可能性がないとすれば、五年九月以外にこの句の成立時期は考え難いことになろう。

初案の「行もまた」は、秋の末の青蜜柑に託して乙州の旅の前途を祝福した挨拶の意と読める。それを「行穐の」と案じ替え、秋も末の季節感に単純化して治定したのであろう。なお、『猿丸宮集』別本には、「乙刕の前途に」と前書して「行もまた末たのもしや青みつかん」とあり、『蕉翁句集』には「行穐の猶たのもしや青みつかん」の句形を録している。この時代、「みかん」「みつかん」の両語が行われたことは用例にも乏しくなく、『日葡辞書』も両語形を存するけれども、この句の場合この部分の異同は内容に関するところがなく、且つ字余りになる「みつかん」の形が、どれだけ意味があるのかも不審であって、問題とするに足りないと思う。

「行もまた」と「行穐の」両案の関係については、

『猿丸宮集』によれば、もと乙州が旅の首途を送った作で、同じく乙州に餞したかの「梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁」と同巧異曲と見るべく、折からの景物によって旅の前途を祝したのである。それを後に挨拶の意から離れて、単に行く秋の句として案じかへたものであらう。（潁原博士『新講』）

と見るのが確説である。また、その内容についても同書に、

晩秋の頃物皆凋落し、果物の類もすべて期を過してしまった中に、ひとり蜜柑がまだ青く葉隠れて居る。これからやがて黄金色も美しく、人々に味はゝれる事だらうと、なほそれのみが頼もしく思はれるのである。

とあるのが肯綮に中っている。治定形は、秋を惜しみ季節の移り変りに感ずる心が青蜜柑を見出したのであって、その辺の作者心中の消息は、

秋も末になると、あらゆるものが殆ど枯れかゝつて、いかにも蕭条たる趣を呈して来る。従つて、眼に映る色彩も、……さびく〱した冷たい感じを誘ふものばかりになる。さういふ風物に接すると、我々の心は、きまって拠りどころのないやうな孤独感に襲はれるものである。芭蕉はさういふ天地の中に於て、まだ青々として居る蜜柑を見出したのである。そしてその蜜柑ひとつが、動ともすればくづをれかゝる自分の気持を支へてくれるやう

な心丈夫さを起さしめたのである。（『芭蕉俳句新釈』）

と、半田良平氏が精しく考察された通りであろう。半田氏は「なをたのもしや」が説明的に過ぎると言われたが、私はそうは感じない。これで十分力ある表現に成り得ており、この句は挨拶吟から脱化して、如何にも芭蕉らしい佳句になったと思う。

754　きりさめの空をふようの天氣かな　（真蹟画賛）

韻塞・泊船集・蕉翁句集

秋季（きりさめ・ふよう）。

語釈　○**きりさめ**　「霧雨（きりさめ）」。霧の深い時、小雨の降るような感じの天候をいう。「霧しぐれ」（Ⅰ*185*）参照。「きり」は本来秋の季語である（Ⅰ*125*等）。「霧雨は尾花がものよ朝ぼらけ」（『五元集』）。○**ふよう**　「芙蓉（ふよう）」。秋に花を開くアオイ科の観賞用落葉灌木。漢名木芙蓉という。既出（Ⅲ*568*）。○**天気**　「テンキ」。よい天気をいう。「木のもとに汁も鱠も桜かな　翁　西日のどかによき天気なり珍碩」（『ひさご』）「**Tenqi. Sorano qi. …… Tenqiga nodoyacana.**」（『日葡辞書』）。

大意　霧雨の中、芙蓉が露を帯びて美しく咲いている。芙蓉はこの霧雨の空模様を良い天気と心得ているのかな。

考　許六の画に賛した晩年の真蹟が伝わっており、許六との交遊の間に認められたものと思われる。江戸に於ける二人の交流は、許六が初めて芭蕉庵を訪れた元禄五年八月九日から、翌六年五月六日に江戸を立って故郷彦根に帰るまでの間なので、芙蓉という素材の季節によって、一応五年秋の作と考えておく。尤も画賛は当季とばかりは限らないから、冬以降の可能性も全くは否定出来ない。板本としては許六の撰した『韻塞』に初出するのも、許六が現存する幅を所蔵していたことを思わせる。

芙蓉の花の趣を賞めた作意であろう。『笈の底』に、

此吟は唯木芙蓉の其性を述たる、名誉の所也。今案に、此物は暑を不レ好。依て霜降る比迄も花追〻開く也。残暑の日影にも萎み安き花也。故に曇り或は霧雨など降る日は、殊に花の勢ひ美也。此趣を以て、小雨の空は木芙蓉の為(タメ)には天気成と云出たる吟也。
快晴の日影には良(ヤヽ)もすれば花萎み、葉迄も塩垂る品なれば、陰雲の覆ひたる日は、誠に此物の天気と云べし。則打曇入たる霧雨を、珍敷天気と云出たるを趣向とす。……

とある解が当っていると思う。強い陽光を嫌い、むしろ陰湿の空模様を好む花の性から、霧雨を逆に天気と言い立てた俳諧なのである。単なる言葉の興に終っていないのは、芙蓉の本性をよく見ているからで、この「かな」には疑いを含んだ意味があろう。古来解釈に諸説があるが、先ずは右のように解したい。「芙蓉の花に晴がトせらるる」(『続芭蕉俳句研究』幸田露伴)という見方もある。

十月三日旅亭をたゝかれける日、初しぐれのふりければ

755　けふ斗人も年よれ初時雨　(旅舘日記)

真蹟自画賛・真蹟短冊・芳里侪・笈日記・韻塞・続猿蓑・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・北国曲

冬季(初時雨)。

語釈　○十月三日　元禄五年。[考]参照。以下の前書は許六の文である。○**旅亭をたゝかれける日**　「旅亭(りよてい)を敲(たゝ)かれける日(ひ)」。芭蕉が許六の旅宿を訪ねられた日、の意。許六は江戸に在る間、麴町喰違橋御門外にあった彦根藩中屋敷の長屋に起居していた。故郷の自分の家ではないので「旅亭」(既出。Ⅰ211前書)といったのである。「たゝく」は「戸をたゝく」ことで、訪問する意。「れ」は、芭蕉に対する敬意をあらわす。「盆の月ねたかと門をたゝきけり　野坡」(『炭俵』下)。○**初しぐれのふりければ**　「初時雨(はつしぐれ)の降(ふ)りければ」。○**けふ斗人も年よれ**　「今日(けふ)斗(ばか)り人(ひと)も年寄(としよ)れ」。今日だけは若い人も年寄りの気持になれ、の意。時雨の気分は老年の心境

に相応しい。「斗」は宛字。限定の意である。「何やら聞ん我国の声　越人　旅衣あたまばかりを蚊やかりて　羽笠」（『はるの日』）「年よれば声はかるゝぞきりぐす大津智月」（『炭俵』下）「Toxiyori, ru, otta.」（『日葡辞書』）。

大意　わびしい初時雨が降り出した。この席に居る若い人も、今日だけは年寄りの気持になって、時雨の情趣をしみじみと味わってほしい。

考　「次の年ならん。神な月三日の夜許六亭にて哥仙あり。爰にしるさず」（『笈日記』）「元禄壬申冬／十月三日許六亭興行」（『韻塞』）等の前書がある。『笈日記』は彦根部の元禄四年秋帰東の旅の句などを録した後に「次の年ならん」云云として出しているので、「次の年」は元禄五年を指すことになるし、『韻塞』の「元禄壬申」も五年の干支である。許六の稿本『旅舘日記』の在府中の記録の中に、標掲の前書を付して見え、『韻塞』にはこの句を発句とした許六・洒堂・岱水・嵐蘭らによる歌仙一巻が収められている。当時芭蕉庵に来ていた膳所の洒堂を伴なって許六を訪問したのであろう。元禄五年十月三日、彦根藩邸内の許六亭で歌仙の発句として詠まれたことは疑いない。

初冬の時雨は侘びた寂しい気分のもので、それを味わうには血気盛んな若い気持では駄目だ。年寄りの気分こそ、しみじみとした時雨の情趣を味わうには相応しいのだから、若い人々も今日だけは年寄りになれよ、と呼び掛けた趣向である。当年四十九歳の芭蕉に対して、許六は十二ちがいの三十七歳、洒堂に至っては、まだ二十代半ばの若さだったと推測されている。「初時雨」は殊にも文人達に賞美されたものだけに、初冬の夜の時雨の侘びを飽くまで賞翫しようとする気持を、強く打出したのがこの呼び掛けであった。若い人々に「年よれ」と言うのは、俳意にも叶うのである。

支梁亭口切

756 口切に境の庭ぞなつかしき（深川）

陸奥鵆・泊船集・類柑子・蕉翁句集草稿、蕉翁句集

冬季（口切）。

語釈 ○**支梁亭** 「シリヤウテイ」。「支梁」は『炭俵』『続猿蓑』に句が見える蕉門俳人。深川近辺の人と思われるが、出自経歴は詳らかでない。○**口切** 「クチキリ」。十月に行われる茶事。陶製の葉茶壺に入れ、目張りをして保存しておいた新茶を、十月初めの炉開きの日に封を切り、抹茶に碾いて客に飲ませる。茶人の正月ともいわれる最も晴れの茶会である。「埋火 炉びらき……又口きりのていたらく。ひらくいろりの火花をめで。しろずみと雪のまがふをあやしみ炭とりを鳥に取なして。羽箒を羽がひといひ。火ばしをはしに用ひなす心ばへ」（『山之井』）「此月良賤各催茶会饗親戚朋友。是謂壺口切。今月資始至臘月。凡膳食称会席。随家豊倹求佳肴美味而調之。至椀折敷一新之。……皿鉢又用新。懸物茶器従分而改之。……挿花於軍持及竹筒置座間或掛壁上。又盛炭於康瓠。是謂炭斗不久部。……凡茶壺函蓋之間以糊緊貼紙。是不令風湿浸茶也。至初冬以小刀截所貼紙之合縫間開蓋取茶。是謂壺口切」（『日次紀事』十月）「宮門跡を始て、摂家清華の諸家、武家町人僧俗をわかたず、貴賤を不言茶を嗜によつて、毎年茶を詰てたくはへ置、此壺の口を開て賞味する事、当月におゐて専ら也。是を茶の口切と称す。冬月に至て茶を賞する事、中華なをしかり。按ずるに水性得全之時なればともいへり。只炉火に幸ありとも云。猶茶道博識に可尋」（『滑稽雑談』）「口切の茶磨やおもき客の為　松江維舟」（『桜川』）「Cuchiqiri.」（『日葡辞書』）。○**境の庭ぞなつかしき** 「境の庭」は、泉州堺（現大阪府堺市）にある、千利休が設計したという有名な茶庭。『古今茶道全書』（元禄七年刊）によると、陸奥松島の雄島の景をかたどったものという。「境」は「堺」の宛字で、振仮名は「サカヒ」とあるべきところ。支梁亭の茶庭を見るにつけ、堺の庭が思われてなつかしいと賞めたのである。「泉州堺に利休居士指図の露地あり。……此露地は蒼海満々と見え渡りたるを悉く植かくし、手水などつかふとき少し見せたり。ある茶伝の書に、海すこし庭に泉の木間かな　宗祇」（蓼太『芭蕉句解』）。

大意　口切の茶会の席にお招きを受けたが、この結構なお庭を拝見すると、利休ゆかりの堺の茶庭が思われて、そぞろなつかしいことです。

考　『泊船集』には「支梁亭」と前書がある。『深川』にはこの句を発句として、支梁・嵐蘭・利合・洒堂・岱水・桐奚・也竹らと一座した歌仙が収められており、洒堂の芭蕉庵滞在中、元禄五年十月初めに支梁亭に招かれた折の挨拶の発句と推定される。

支梁亭が小名木川添いの深川に近い所だったとすれば、その庭も少し海が見えて、利休指図の堺の庭を思わせる風情があったのであろう。それをただ即興に、何の珍しい言葉もなく句にまとめているが、落着いた趣のある句柄である。素丸の『説叢大全』に、

此句のうらへ廻りて例に翁の心骨を捜せば、此支梁亭の露地がゝりをはじめ、器物居所すべて華美を尽して名聞めきたるが、翁の心にはうとましく思はれて、堺の庭こそなつかしけれと、余所に諷諫をせられし成べし。

云々と、支梁の華美な趣味を諷したものと見ているが、潁原博士が『新講』で述べられたように、そのような人であったら始めから招きに応じなかったろうし、既にその席に列して、他にも人の居る前でそのような句を示すのは礼を失することになり、芭蕉の人柄から見てあり得ないことである。素直に支梁の庭を賞めた挨拶の句と見ておけばよい。

757　御影講や油の様な酒五升　（鳶獅子）

芭蕉庵小文庫・泊船集・俳諧問答・蕉翁句集・桃の杖

冬季（御影講）。

語釈　○**御影講**　日蓮の忌日十月十三日に催される法会。「御命講」とも書き、ここでは音数の関係で「オメイコ」と短くよむ。既出（Ⅱ435）。○**油の様な酒五升**　「油（あぶら）の様（やう）な酒五升（さけごしよう）」。油のようにとろりと濃い美酒五升。一升は約一・八リットルに当る。既出（Ⅰ

131)。「あぶらにみづのまじるごとし」(『毛吹草』巻二)「Abura.」(『日葡辞書』)。

大意　今日は御影講の当日。日蓮様のお喜びなさる油のようにとろりとした美酒五升を頂いて、まことに有難い。

考　この句は『薦獅子』(巴水撰、元禄六年冬成)所収の三十六の句「有難の餅ぞ十夜の腹ごゝろ」の前書に「御影講や油の様な酒五升とありし句を思ひやりて」と引かれているのが最も早く、元禄六年冬までには成っていた句と見られる。また、『許野消息』所収、許六の二月六日付野坡宛書簡の中に、

翁の雑談に、日蓮之御書とて、新麦一斗、竹の子三本、油のやうな酒五升、南無妙法蓮華経と回向いたし候と御座候由、物語申され候。我等返答には、御命講の五文字は是にてなされ候や。新麦に竹の子は、季と季のよき取合せものにて候と申候へば、油断して既に汝にとられ候とて、〽新麦や竹の子時の草の庵と作り、われらに給り候。

という一節があり、許六との間に話題に上った句であった。許六と芭蕉の交遊は元禄五年八月から翌年五月初めまでの間に限られるから、当面の句は五年十月までには成っていたことになろう。『蕉翁句集』に貞享五年の部に入れているのは、何に基づく推定か明らかでない。

この句の「油の様な酒五升」という表現が、日蓮の書簡の一節をそのまま用いたものであることは、許六の引く芭蕉の談話によっても明らかであろう。『本朝文選』巻之十、書類にも「日蓮上人報書」として小異ある形で収められているが、恐らく寄進に対する礼状であって、これ自体既にユーモラスな筆致である。芭蕉はこれを恰好な俳意と見て、「御影講や」と冠して一句にまとめたのだが、芭蕉も門人などから酒を貰った折の作に違いない。御影講又の名お会式(えしき)は、法会などが盛んに営まれて供え物も多く、賑やかなものであるが、単に酒五升を御影講に供えようとだけでは詰まらない。自分が酒を貰ったのが折柄御影講の日だったとしてこそ、早速の機転が生きて面白いのだと思う。『一葉集』に「消息」と前書があるのは何処まで信じてよいか分らないが、鑑賞としては芭蕉が酒を貰った場合でな

ければならないのである。『許野消息』の許六宛野坡書簡には、

油のやうな酒五升は、勿論日蓮の御書より出たる作也。酒五升はいづれにも通ひ侍る故に、御命講の五もじに定め給へる也。下十二字より上五文字を断（ママ）侍る句にして、かくのごとく作し、えびす講とも通ひ申まじく候。

とも見える。

758　爐開や左官老行鬢の霜　（韻塞）

陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集

冬季（炉開・霜）。

語釈　**○炉開**　「炉開き」。初冬にはじめて炉や火燵を開き、火を入れ始める行事。京では陰暦十月朔日か中の亥の日に行われた。茶道でもこの頃「口切」の前触れとして炉開きがあるが、ここは茶道に限定しない方がよかろう。「十月　初一日……開炉節　今日中華有司進暖炉炭、民間亦置酒作暖炉会。故本朝亦謂開炉節。或称暖炉節。諸寺院及市中亦各置炉禦寒。至来年三月晦日則止。禁裏　御前之火櫃有置炭之儀。自今日被掲紫宸殿清涼殿之壁代。其儀同于四月更衣之式。諸公家自今日至来年三月晦日各被著冬袍」（『日次紀事』）「今和俗におゐて炉開と称して一日に賞するは茶道によれり。四月朔日より九月晦日迄風炉を用ひ、今日より地炉を開て茶を煮る也。中華の故事におゐておのづから合する歟。又俗間の火達を切るは今日に不限、亥の日に多く明る」（『滑稽雑談』）「炉開キの里初富士おもふあしたかな　才麿」（『空林風葉』）。
○左官老行鬢の霜　「左官老い行く鬢の霜」。「左官」は、壁塗りの作業をする職人。宮中を修理するに当って、この職人を仮に木工寮の佐官（令制四等官最下位の職）として出入りを許したことから出た呼称である。馴染の左官職人が段々年をとって、鬢の白髪が目立って来たことをいった。「鬢」は頭部の左右耳際の髪。早くに白髪の目立つ所である。「霜」は白髪の譬喩。「なんだかと左官ろんごをめつけ出し」（『柳多留』十編）「ありし世の面影に異ならねど、鬢の霜さへ降はえて、掻乱したる後髪は銀の針のごとく」（『椿説弓張月』二十五回）「Bin.」（『日葡辞書』）。

大意　冬の初めの炉開きの日、馴染の左官も段々年をとって、鬢の白髪が目立って来たことだ。

考 芭蕉生前の集には見えない句であるが、土芳の『蕉翁句集草稿』に下五を欠いた形で載り、「元禄五申」と頭注がある。年代はこれに従ってよいであろう。

「老行」とあるのによって、この「左官」が初めてではなく、前から使っていた馴染の職人と分る。炉開きに当って漆喰炉の内塗りなどさせる為であろう。元禄元年の冬越し以来、久しぶりに新芭蕉庵に呼んだのである。黙々と仕事をしている左官の横顔を眺めているうちに、鬢の白髪が増えたのに心づいて、ああこの人も老いたと、歳月の流れに感ずるので、それは直ちに自らの老いにも跳ね返って来ることである。冬を迎える心細い季節感と老いの思いが重なって、しみじみとした調べを作りあげている。

759 **鹽鯛の歯ぐきも寒し魚の店**　（薦獅子）

流川集・句兄弟・伊丹古蔵・陸奥鵆・泊船集・砂川・染糸・蕉翁句集

鹽鯛の歯ぐきは寒し魚の店　（蕉翁句集草稿）

三冊子石馬本

鹽鯛の歯ぐきや寒し魚の棚　（三冊子芭蕉翁記念館本）

冬季（寒し）。

語釈 ○**塩鯛の歯ぐき**　「塩鯛の歯茎」。「塩鯛」は、塩漬にした鯛。尾頭つきの鯛の歯を剝いた顔を、「歯ぐき」で印象づけた。「角樽一荷に塩鯛一掛銀壱枚、云入の祝義おくると見せけるに」（『日本永代蔵』巻六ノ一）「竹の子や児の歯ぐきのうつくしき　嵐雪」（『炭俵』上）「Faguqi.」（『日葡辞書』）。○**魚の店**　「魚の店」。「店」は「棚」と同じで、商品を陳列する台の意から、その店先、商家自体を指すに至った語。ここは魚を小売する店としても通ずるが、陳列棚、店先という原意を生かした表現である。「いきりたる鐺一筋に挟箱　及肩　水汲かゆる鯉棚の秋　野径」（『ひさご』）「Tana.」（『日葡辞書』）。

大意 魚屋の店先に塩漬の鯛が並んでいる。その剝き出した歯茎が寒々としていることよ。街にも冬がやって来た。

考　この句は板本としては元禄六年冬に成った『薦獅子』に出るのが最も早いが、元禄五年筆と推定される極月三日付意専（伊賀の蕉門猿雖の法名）宛書簡（『芭蕉翁真蹟拾遺』所収）に見えるので、五年冬の作と決定出来る。この書簡には、其角の「声かれて猿の歯白し峰の月」、珍碩（洒堂）の「鶏や榾焚く夜の火のあかり」等の句も認められている。土芳は『蕉翁句集草稿』に「歯ぐきは寒し」という句形を記して、「此句、句兄弟に出る。白船（ママ）には、歯ぐきもと有」と注する。宛かも「歯ぐきは」が『句兄弟』（其角撰、元禄七年八月成）所出の句形であるように聞えるが、同書の中七は「歯茎も寒し」とあるから、土芳の錯覚と考えざるを得ない。「歯ぐきや寒し」も孤立した所伝であり、後世の『一葉集』に「寒し」を「さぶし」と仮名書きしているのも問題にならない。『薦獅子』の句形が最も信頼し得るものである。

『句兄弟』では三十九番に晋子（其角）の「声かれて猿の歯白し岑の月」の句を兄とし、「塩鯛」の句を弟に配して、次のような其角の評語が見える。

是こそ冬の月といふべきに、山猿叫（ンデ）山月落と作りなせる物すごき巴-峡の猿によせて、岑の月とは申たるなり。沾（ホス）衣（ヲ）声と作りし詩の余-情ともいふべくや。此句感心のよしにて、塩鯛の歯のむき出たるも冷じくやおもひよせられけん。衰-零の形にたとへなして、〽老の果〽年のくれとも置れぬべき五文字を、〽魚の店と置れたるに、活-語の妙をしれり。其幽深玄-遠に達せる所、余はなぞらへてしるべし。此句は猿の歯と申せしに合せられたるにはあらず。只かたはらに侍る人、海士の歯の白きはいかに、猫の歯の冷じくてなど丶、似て似ぬ思ひよりの発句には成まじき事どもに作意をかすめ侍るゆへ、予が句先にして師の句弟と分ヶ、其換-骨をさとし侍る。師説もさのごとく聞え侍るゆへ、自-評を用ひずして句法をのぶ。この後反-転して〽猫の歯白し〽蚤の歯いやしなど丶侍るとも、発句の一体備へたらん人には、等類の難ゆめ〳〵あるべからず。一句の骨を得て甘き味を好まず。意味風雅ともに皆をのれが煉磨なれば、発句一ツのぬしにならん人は、尤兄弟のわかちをしるべし。

また、『三冊子』にも「塩鯛」の句を挙げて、

此句、師の曰、思ひ出すと句に成るもの、自賛にたらずと也。……またいはく、猿の歯白し峯の月といふは其角也。塩鯛の歯ぐきは我老吟也。下を、魚の棚とたゞ言たるも自句也といへり。（赤雙紙）

と芭蕉自身の語を録している。

其角が『句兄弟』で「此句感心のよしにて」と言っているところを見ると、「塩鯛」の句は其角の「声かれて猿の歯白し」の句に触発されて作られたものらしい。其角の句が巴峡の猿声などの漢詩的情趣を背景にして、この人らしい鋭い感覚を際立たせた表現だったのに対して、芭蕉の句は「思ひ出すと句に成るもの」（『三冊子』）、つまり、その情景をイメージすればそのまま手間をかけずにまとまるものだから「自賛にたらず」と自ら言ったのであろう。江戸の街で見懸けた魚屋の店頭風景を材にして句にまとめたまでなのである。その内容について、支考は『十論為弁抄』（享保十年刊）で更にくわしく左のように鑑賞する。

されば、其角が猿の歯は、例の詩をたづね哥をさがして、枯てといふ字に断腸の情をつくし、峯の月に寂寞の姿を写し、何やらかやらあつめぬれば、人をおどろかす発句となれり。祖翁の塩鯛は塩鯛のみにして、俳諧する人もせぬ人も、女子も童子もいふべけれど、たとひ十知の上手とても及ばぬ所は、下の五文字なり。爰に初心と名人との、口にいふ所はおなじけれど、意にしる所の千里なるを信ずべし。今いふ其角も我輩も、たとへ塩鯛の歯ぐきを案ずるとも、魚の棚は行過て、塩鯛のさびに木具の香をよせ、梅の花の風情をむすびて、甚深微妙の嫁入をたくむべし。祖翁は、其日其時に神〲の荒の吹つくして、さゞゐも見えず干あがりたる魚の棚のさびしさをいへり。誠に其比の作者達の手づまに金玉をならす中より、童部もすべき魚の棚をいひて、夏炉冬扇のさびをたのしめるは、優游自然の道人にして、一道建立の元祖ならざらんや。

新鮮な魚ではなくて「塩鯛」が寒々と店先に置かれているさまは、右にもいう通り海が荒れた為に漁獲が皆無に成っ

て寥れた魚屋の体を思わせる。「塩鯛の歯ぐき」を案じ得れば、それに「木具の香」や「梅の花」を組合わせ、或いは「老の果、年のくれ」（『句兄弟』）といった言葉を置いて、衰零の情を託そうとするのが普通である。ところが芭蕉は、そういうあり来りに一顧も与えずに唯「魚の店」とした。漢詩を踏まえた其角の「猿の歯白し」の奇想に対して、もっと日常的な「塩鯛の歯ぐき」を案じ、何の奇もない下五を置いたのである。『三冊子』に伝える「我老吟」「自句」という言い方は、そういう行き方に作者が強い自信を持っていたことを窺わせる。「詠まれた素材は日常生活の一相に過ぎぬのであるが、これを支へてゐるものは、荒寥たる冬の世界なのである」（加藤楸邨氏『芭蕉講座』発句篇(下)）。

山本健吉氏は、

「寒し」と切れ、読者の期待を軽く外して「魚の店」と置いた言葉つづきの呼吸が微妙なのである。「塩鯛」を点出させただけで、冬のしけ模様で、閑散としている魚屋の店頭の様を現したのだ。……しかもその「歯ぐき」に集中的に寒さを見出だしたところ、感覚的にも鋭いのである。其角の句も非常に鋭い感覚の句であるが、言わば「玉振金声の作」（十論為弁抄）を求めて、読者を驚かそうとしたもので、芭蕉の句とは感性の質が全く相違している。蕪村の感覚の鋭さも、多分に其角から出発している。其角の場合はその感覚の鋭さを誇張的に表現した点があり、芭蕉の句はその鋭鋒を底に潜めて、表面はいぶしをかけたような落着いた表現になっている。そしてそのような効果は、この句では「魚の店」の五文字によって生じていることは疑いない。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

と見ておられる。嘗て「蛙飛こむ」の句の初五を案じた時、「山吹や」という其角の提案をしりぞけて、ただ「古池や」と置いた両者の感覚の相違が、ここでもまた再演されたのであった（Ⅱ257参照）。

今日の感覚から言えば「歯ぐきも寒し魚の店」は、それほど斬新な表現ではないかもしれないが、当時としては、新鮮な、独創的な印象を与えたに相違ない。しかもそれが日常性の中に、生活的に、具象的に把握されているところに、その頃、芭蕉の指向していた軽みへの工夫が見られよう。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

という井本農一博士の見方も、確かなところである。

760

壬申十二月廿日即興

打よりて花入探れんめつばき（句兄弟）

打寄りて花生探れ梅つばき（芭蕉翁同光忌）

錦繡緞・泊船集・亦深川・蕉翁句集・粟津原・花入塚

冬季（探梅）。

語釈 **○壬申十二月廿日即興**　「ジンシンジフニグワツハツカソクキョウ」。「壬申」は、みずのえさる。元禄五年の干支である。「即興」は、その場の興で作った句の意。既出（Ⅱ*254*前書）。「**Fatçuca.**」（『日葡辞書』）。**○打よりて**　「打ち寄りて」。連衆が同じ席に相寄って。「打」は接頭語である。「どうも合点参らず、皆打よつて詮議いたせば」（『国性爺合戦』第三）「**Vchiyori, ru, otta.**」（『日葡辞書』）。**○花入探れ**　「花入探れ」。「花入」は、花を活ける器。陶製竹製等いろいろある。活けられた花々の中から（梅や椿を）探して観賞せよ、というのである。「花入の口よりはくや玉つばき　貞徳」（『犬子集』巻二）「**Fanaire.**」（『日葡辞書』）。**○んめつばき**　「梅椿」。これらの花は季題としては春であるが、ここでは早咲きのものとして冬季の扱いになる。既出（Ⅱ*319*）。また、「んめ」は上の「探れ」と呼応して、冬季の「探梅」の季語を構成する。既出（Ⅱ*333*）。「んめ」は発音に忠実に、語頭の唇音を「ん」と表記した例で、「むめ」（梅）「むま」（馬）等と同類の表記法である。

大意　さあ皆な集まって、花活けの梅や椿を観賞しなさい。折柄探梅の時節、ここでは花活けの花を探すのだ。

考　句の成立年時は『句兄弟』の前書によって明らかで、『句兄弟』『錦繡緞』（其角撰、元禄十年刊）『花入塚』（青梔撰、安永五年刊）には、この句を発句とした彫棠・晋子（其角）・黄山・桃隣・銀杏らとの歌仙を収めている。この日のことについては、桃隣の芭蕉十七回忌追善集『粟津原』（宝永七年刊）に、

遥過にし年の寒比、青地氏周東のもとへ芭蕉・其角・桃隣見え来り、即興催されけるに、翁、○打よりて花入探

れ梅椿　予も其席に交りてし。此句の季を尋ね侍れば、探梅の句なるよし申されけるも、早廿とせ余の夢うつゝ、此回忌におどろかされて、一種換骨を題向しつ。

打寄て献立書ん帰花　松山銀杏

という句文が見え、その模様を知ることが出来る。青地周東は、この巻の脇「降こむまゝのはつ雪の宿」を賦した彫棠その人であって、元禄十一、二年頃改号したのだそうである。異形として『芭蕉翁同光忌』（柳居撰、寛保三年成）に「花入」が「花生」となっており、同じことではあるが、後者の根拠は明らかでないので、古集の所伝に従うべきであろう。

この句が探梅の句であることは、右の『粟津原』の記事の外、『花入塚』にも「冬季しかるべし」「すべて探梅を冬季に用る事、詩家の格なり」という芭蕉の語が伝えられており、疑いのないことである。『円機活法』冬日即時、冬日書懐の条に「尋梅」の語があり、連歌の『漢和法式』（明応七年刊）冬の部に「探梅」が見える。元来詩家の語だったことは明らかであろう。芭蕉が俳諧の世界でこの語の新たな用い方を摸索していたことは、さきの「香を探る」（Ⅱ333）の句の条でも触れたが、当面の句にも新味の工夫は明らかである。探梅の句であることを知らずにか、或いは等閑に看過した為に、古注では正確な解釈が少いが、中では、

探梅は冬季成るを以て、花入探れと云替たる作意也。……饗応の座席などに寒梅に山茶花等取合たるを、膝行して打寄尊称したる風情、眼前体と云べし。（信天翁『笈の底』）

という説など、珍しく正鵠を得た解であった。これは野外の探梅を屋内に取做したと見るのであるが、

大勢皆々打集つて花入が何処にあるか探して来よ、此通り梅や椿があるから、といつたので、即ち梅椿を一緒に生けて、皆々で愛でようぢやないかといふ意である。（内藤鳴雪『評釈』）

というのは、野外の探梅の趣として、「花入探れ」を「花入を探して来い」と取ったものである。しかし、そういう

意味で「探れ」といふのは表現として妥当でなく、探梅の本意からも外れることになって面白くない。頴原博士の『新講』に、

……「花入探れ」は「花入を探れ」の意でなく、「花入に就いて梅椿を探れ」の意たる事は明かである。……床の間には、折から早咲の梅椿が花瓶に生けてあつたのであらう。芭蕉は客としてそれを賞美したのである。探梅といへば野外に杖を曳いて、春信の早きを尋ねるのであるが、これは思はずも眼前の花入にこれを探り得た。その思ひもかけぬ喜びを、「打寄りて」と、一座の人々への命令的な呼びかけで現はした所が面白い。「さあ〳〵みんな寄つてこの花を賞し給へ」といふのである。

とある説に至って、この句は漸く定解を得た観がある。野外を屋内に転じて即興の趣向とし、探梅の気分を生かしつつ、眼前の花を賞して亭主への挨拶としたのであった。探梅の語を面白く用いたことを認めながら、幸田露伴の見方は又別途に出ている。即ち、

梅椿を入るゝにふさはしい好い花入れを探れといふのです。然し道具屋を痴漢が覗くやうに、実際の花器を評論するのではなく、何様な花入が最も此の美はしい梅椿にうつりあふだらうか、探り考へて見よ、といふので、梅椿に対する賞美を現前させてゐるのです。探索とは少しちがふ、探撰の方です。もどかしい句ではありません、端的の句です。花入れは花に応じて定めるのがほんとです。(『続々芭蕉俳句研究』)

と述べているけれども、これについては頴原博士が、探梅の意に即せず、句の表では花入が主となって、梅椿は従になってしまうと批判されたような難点があろう。近来では、安東次男氏の新説があり、私の採るところではないが左に掲げておく。

句は「梅さぐる」を季とした冬の句だが、当歌仙は右の発句を初の花の座に当てて興行している。「花入」を雑の正花と見立てたものだろう。芭蕉(当座の正客である)の作意は、その辺から見えてくる。この花入は単なる

花器のことではない。一座、一巻そのものが花器だ。それを「探れ」と云っているのだ。「探れうめつばき」にうまく引掛けて、軽快な俳の起情としている。

評釈いずれも、早咲の梅と椿を床の花入に生けて探梅に代るもてなしとした亭主の志を賞めた句、と解している。そうではない。この「うめつばき」は実際には庭前の眺であってよい。探梅は今の歳時記では早梅を尋ねて冬の山野を逍遥する意味に解しているが、ウメはもともと中国渡来で、ヤマザクラのように本邦自生種ではない。白梅の香をさぐるのに、出歩くことを必しも要しないだろう。(『芭蕉発句新注』)

761

埋火や壁には客の影ぼうし (続猿蓑)

泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

冬季(埋火)。

語釈 ○**埋火** 「埋み火」。炉や火鉢の火に灰をかけて、ぬくもりを長持ちさせること。既出(Ⅱ*439*)。○**壁には客の影ぼうし** 「壁には客の影法師」。ともし火の光で部屋の壁には客の影が映るさま。「影ぼうし」の「ぼうし」は、「法師」の仮名書きならば「ぼふし」が正しい仮名遣になるが、「すべて何々坊といふは人に擬して言ふ辞なり、しわきをしわん坊、けちなるをけちん坊、……などいふが如し。法はあて字にして坊に同じ。……今影法師といふ師文字は添はりて生じたるにて、孤独の「独り坊」を「ひとりぼつち」と云ふ「ち」文字の如し」(露伴『評釈冬の日』)と見れば、「影坊」に「し」が添わったとも考えられる。既出(Ⅱ*318*)。

大意 火鉢の埋み火を囲んで主と語り合う冬の夜更け、壁にはともし火の光で客の影法師が黒々と映っている。

考 『蕉翁句集』には「曲翠旅館にて」と前書があり、『蕉翁句集草稿』には「元禄申」と頭注して、「此句自筆に、曲翠旅館に□有」と見える。これによれば、元禄五年冬江戸在府中の菅沼曲翠(元禄六年初めの『深川』あたりから「曲水」を改号)を、南八丁堀の膳所藩邸に訪うた時の吟であろう。翌六年筆と推定される霜月八日付曲翠宛書簡

に、「此ほどの御なつかしさ筆端難尽事共に而、壁の影法師、練塀の水仙、申さば千年を過たるに同じかるべく候」とあるのは、一年前の思い出に触れた文言と見られる。「練塀の水仙」は『鷹獅子』所収の曲翠の発句「練塀やわれて日のもる水仙花」（『続猿蓑』には「水仙や練塀われし日の透間」）を指し、やはり同じ頃の吟だったのであろう。『蕉翁句集』は元禄六年の部に入れているが、この曲翠宛書簡がある以上、錯誤と考えざるを得ず、積翠の『芭蕉句選年考』に「杉風家蔵真蹟に、素堂が妹の身まかりける時と前書あり」とあるのも誤伝に過ぎない。

曲翠の江戸での滞在先を訪ねた時の句だから、句中の「客」が芭蕉自身ということになる。「芭蕉はこの時の客でありながら、主の立場になって「壁には客の影法師」と言っている」（山本健吉氏『芭蕉全発句』）という見方もあるが、作者が「客」といってもおかしくはなく、要は主客対座の場がこの語によって読者に印象づけられればよいのである。寒い冬の夜に火鉢を囲んで、言葉少なにしみじみとした対話が交わされる寂びた気分が全体に漂い、沈んだ落着いた調べもなかなか佳い。古く杜哉の『蒙引』に、「おのれが影を客として曲翠ひとり閑坐せし旅館の寂寞をいへり」とある解は、誤解と考えざるを得ないが、加藤楸邨氏も、

埋火のかすかな火の色、黙しがちな主と客、しずかにゆらぐ燈火、そして壁に凍てついたように動かぬくろぐろとした影法師、寒夜の身に沁みるような寂寥とともに、温い心の触れあいが感じられ、そこに挨拶の心を読みとることができる。（『芭蕉全句』）

と鑑賞した後、

しかし、芭蕉の校閲を経たはずの『続猿蓑』に前書を付さずに収められているところから察すると、あるいは、この句に独立性を与え、草庵独座の句として位置づけようとしたものかとも考えられる。その場合は己が影を「客」といったことになろう。（同右）

と付け加えておられる。「客である我が影法師」と解するのは、独立句としても無理を免れないが、一つの見方とし

て挙げておきたい。

762　中〻に心おかしき臘月哉　（ふぐるま）

冬季（臘月）。

語釈　○中〻に心おかしき　「中〻に」は、かえって、の意。「おかしき」は、趣のあること。「をかしき」の仮名ちがいである。かえって趣のある気分を持っている、の意。「をかし」は既出（Ⅱ433後書）。「よもぎ、しのぶこゝろのまゝに生たるぞ、中〱にめでたきよりも心とゞまりける」（『野ざらし紀行』）「Nacanacani xindaga maxigia.」（『日葡辞書』）。○臘月　「シハス」。陰暦十二月をいう。既出（Ⅰ217等）。「臘月」も十二月の異称であるが、ここは三音に訓むべきところである。

大意　俗事に追い立てられて忙しい師走ながら、かえって其処に趣のある気分も感じられますね。

考　梅左撰の『ふぐるま』（天保十一年刊）に紹介された馬指堂主人（曲翠）宛の芭蕉書簡に見える。書簡は日付を欠くが、歳暮に酒一樽を贈られた礼状で、洒堂が芭蕉庵に滞在していたことも窺われるので、元禄五年十二月に書かれたものと認められる。句はこの外に所見がない。

一年の締めくくりにいそがしい十二月という観念を踏まえて、その逆に「心おかしき」といったところが俳諧である。ただ実感として捉えられた「をかし」ではなく、句も形を成しているに過ぎない。

忘年書懐　素堂亭

節季候

763 節季候を雀のわらふ出立かな （深川）

冬季（節季候）。

語釈 ○**忘年書懐**　「バウネンショクワイ」。「懐」は、思いの意。年忘れに際して所感を書くのである。「年忘れ」（Ⅲ633等）参照。「五十年の頑夫自書、自禁戒となす」（「閉関之説」）「Xoxi, suru, ita. i, Caqu.」（『日葡辞書』）○**素堂亭**　葛飾阿武（あたけ）にあった素堂の家。（Ⅱ305）参照。○**節季候**　年末に各戸を廻って米銭を貰う乞食。既出（Ⅲ629）。○**雀のわらふ出立**　「雀（すずめ）の笑（わら）ふ出立（でたち）」。「出立」は「いでたち」と同じで、身なり・よそおいの意。節季候のおかしな身なりを、雀が笑っているというのである。「出立（でたち）はさはやかにかろく、二重帯（ふたへおび）し、ぬり笠菅笠（がさすげがさ）などを着（ちゃく）す」（『色道大鏡』巻十四）「Bibixij detachi.」（『日葡辞書』）。

大意 節季候のおかしな身なりを、雀が笑っているよ。

考 『蕉翁句集』には「素堂亭忘年」と前書がある。『深川』にはこの句を始めとして、

餅．春

餅つきやあがりかねたる鶏の泊屋（トヤ）　嵐蘭

衣　配

文箱の先模（モ）様（ヤウ）見る衣くばり　曾良

仏　名

仏名や饅頭は香の薄けぶり　洒堂

歳暮

腹中の反古見わけん年のくれ　素堂

余興

としわすれ盃に桃の花書ゝ　洒堂

膝にのせたる琵琶のこがらし　素堂

宵の月よく寝る客に宿かして　芭蕉

という この席での句作が載っている。洒堂の江戸滞在中に関わった句を録した『深川』にあるから、元禄五年十二月素堂亭忘年の集いで成った句たることは確かである。

節季候は笠の上に羊歯の葉を挿し、赤い布で顔を隠して眼だけ出している。その異様な風体で胸をたたいて祝言を述べながら物乞いするのを、雀が笑っていると言ったまでであろう。それでは余り曲が無さ過ぎるとして、いろいろ解が出ているが、私は採らない。年忘れの席で他愛ない句を詠むのも一興である。諸説の中では、

今案、窮陰候を雀に笑せたる意は、則鴞に見立たる妙計也。破編笠に弓絃葉歯朶を結つけ、赤き紙を前に垂れ、袋を肩に懸て、割竹敲き立たるは、異やうの姿にして、鴞鴟鵂の昼中に追ひ出されたる共云んか。然ば小鳥を捕に、鴞木兎等を囮として枝に乗せ、其辺りに黐梜を指し置に、雀等見て、形異にして眼の不レ見を笑ふ。其声を聞て、近き辺の小鳥追ゝ集り来て是を笑とて、梜に附く。此趣の笑味成べし。一興有て、雀の笑と云詞、滑稽也。（信天翁『笈の底』）

想ふに雀躍りの風体が編笠などを着て、恰も節季候に似てゐる所から連想して此の趣向を立てたのであらうか。尚ほ実際忘年会席上に於て種々の余興もありて、其趣のをかしかつた事を節季候に事寄せて打興じたものとも思

はれる。（内藤鳴雪『評釈』）
等を挙げておく。「出立」を出発する意にとって、その頃は雀も起出す時分であるし、さわがしいさまが共通しているなどという説は良くあるまい。

764　はまぐりのいけるかひあれとしのくれ　（真蹟自画賛）
　　蛤もいける甲斐あれとしの暮　（陸奥鵆）

蕉獅子・芭蕉庵小文庫・泊船集・東華集・千句塚・蕉翁句集

冬季（としのくれ）。

語釈　○**はまぐりのいけるかひあれ**　「蛤の生ける甲斐あれ」。蛤が生きて来た甲斐があるというものだ、の意。「はまぐり」（Ⅲ559）の縁で「甲斐」に「貝」を言い掛けた。『続江戸砂子』（菊岡沾涼著、享保二十年刊）に江戸の名産として「深川蛤　佃沖・弁天沖、秋の末より冬に至る」と見える。「あれ」は、命令形と取ったのでは通じない。「いけるかひこそあれ」の「こそ」を省略したもので、「あれ」は已然形と見られる。「御耳に留り候へば甲斐ある心地せられて悦にたへず候」（二月十八日付曲水宛芭蕉書簡）「Iqite caimo nai.」（『日葡辞書』）。○**としのくれ**　「年の暮」。

大意　年の暮とて、町では蛤がよく売れている。蛤もこれまで生きて来た甲斐があるというものだ。（私にとっても生き甲斐のある新年であってほしい）

考　元禄六年冬に成った『蕉獅子』初出の句であり、『蕉翁句集草稿』には「蛤の生るかひあれ」と下五を欠いた形で出して「壬申」と頭注している。土芳の所伝を信じて元禄五年歳暮の作と認めてよかろう。『陸奥鵆』の「蛤も」という異形は孤立した所伝で、自画賛の裏付けのある「はまぐりの」の句形を採るべきことは論が無い。出光美術館蔵の真蹟自画賛は、藻の上に蛤三つが描かれ、右端に句が賛してある。『句選年考』によれば、曾良の甥の所持して

いた真蹟自画賛は、楪の上に蛤二つを描いて句を書いたものだったという。現存の物とは別と見られるが、画賛句としては恰好だったのであろう。

この句意については、夙く杜哉の『蒙引』に、

兎にも角にもながらひたればこそ、又もや長閑なる春をも迎ふるとの老懐ならん。蛤はいけるとも見へず、久敷死なぬものなれば、比興に詮あり。

と見え、露伴も、

蛤といふものは冬はことに生のよいもので、可なりの日数を水からあげて置いても死なぬものである。そこをもつて来て生ける甲斐あれと云つたのです。「なさけなう蛤かわく余寒かな」といふ句もある位である。（『続々芭蕉俳句研究』）

と言っている。正月の吸物などに入れるために、年末には蛤の売れ行きが良い。深川名産の蛤の生きの良さを背景に、自らの身の上にかけて興じた句と思われる。

蛤が生きたかいがあって、年の暮に正月の料として珍重される、というのが、表面の意味で、裏には新しい年を迎える自分も生きがいのある生を送りたいものだという願いをこめた。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

という見方が穏当なところであろう。加藤楸邨氏のように、「はまぐりの」を「の如くに」と譬喩に取ることも出来る（『芭蕉全句』）。何れにせよ、理の勝った句柄である。『源氏』須磨の巻、源氏がその辺りの漁夫を召して話をした後、「御ぞどもなど、かづけさせ給ふを、いけるかひありと思へり」と漁夫達の心情を描いている一節を踏まえたかとする見方が古くからあり、芭蕉の意識にこれがあったことは否定し難いであろう。楸邨氏はまた、

そもそもは、画賛としておかしみを志向した発想であったであろう。……しかし、『蕉獅子集』以下の出典が何らの前書を付していないことは、芭蕉自身に、画賛の句を、いわば述懐の句として独立させようとする気持が

あったためだと思われる。そこでは、俳諧師としての自分の侘びしい生活のありかたに、蛤が蓋にこもって生きているのと陰微相通ずるものを感じて、境涯を詠じた作となっているのである。（『芭蕉全句』）

とも述べておられる。

元禄六年

元旦

765　年〳〵や猿に着せたる猿の面　（薦獅子）

元日や狙にきせたる狙の面　（類柑子）

真蹟懐紙・旅館日記・翁草・芭蕉庵小文庫・陸奥鵆・猿舞師・泊船集・俳諧問答・旅寝論・去来抄・三冊子・本朝文選・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・俳諧古今抄・蕉門録・糸切歯

春季。

語釈　○**元旦**「グワンタン」。正月元日の朝。句が歳旦吟であることを示す。「元日」（I 175、III 448等）参照。○**年〳〵や**「年々や」。毎年年が改まって、齢を重ねることへの詠嘆である。「Toxidoxi.」（『日葡辞書』）。○**猿に着せたる猿の面**「猿に着せたる猿の面」。「面」は、仮面の意。何の変り栄えもないことの譬えである。「猿に小蓑を着せて誹諧の神を入たまひければ」（『猿蓑』其角序）「おはれてや脇にはづるゝ鬼の面　荷兮」（『あら野』巻六）「Qixe, suru.」「Menuo caquru.」（『日葡辞書』）。

大意　毎年毎年年が改まっても、人はちっとも変ることなく、同じようなあやまちを繰返している。猿に猿の仮面を着せたところで、一向変り栄えしないようなものだ。

考　『翁草』（里圃撰、元禄九年刊）に「鶏旦」と前書がある。『俳諧問答』所収、許六の「俳諧自讃之論」の文中、元禄六年四月の初めに芭蕉が許六亭に滞在した時の記事に、この句を「当歳旦」として引いてあり、元禄六年の歳旦吟と

推定される。やや時代は降るが、『糸切歯』（石橋著、宝暦十二年成）にも、「元禄六年の歳旦集に此句あり」と見えるのも信じてよい。『類柑子』の異形は、例の其角の杜撰な誤りであろう。なお、其処に見える「狙」の字は、「猿」と同じで「さる」を意味する。

この句の作意については、直門の信ずべき記述が多い。即ち、

此歳旦、師のいはく、人同じ所に止て、同じ処にとしぐ落入る事を悔ていひ給ひたると也。（『三冊子』赤雙紙）

此、直に聞句也。世上人同じ所にたゝずむを、打やぶり云たると也。（『蕉翁句集草稿』）

といった土芳の所伝によれば、年を経ても自身を含む世上の人間に一向進歩がなく、同じような愚を繰返していることを反省し、また諷喩した句なのであった。「猿に着せたる猿の面」は、変り栄えしないことの譬喩であるが、これについては芭蕉自身、

全ク仕損の句也。ふと歳旦に猿の面よかるべしとおもふ心一ツにして取合たれば、仕損の句也。（「俳諧自讃之論」）

と語ったことを許六が伝えている。また、句中に季語のないことについては、去来の『旅寝論』（元禄十二年三月成）に、左のような記事が見える。

一とせ先師歳旦に、年〴〵や猿にきせたるさるの面と侍ルを、季はいかゞ仕べきと窺けるに、としぐはいかにとの給ふ。いしくも承る物哉と退ぬ。年ゝは季の詞にあらず。かくの給ふ所しらるべし。表に季見えずして季になる句、近年付句等にも粗見ゑ侍る也。

この句の季語に関する去来の質問に対して、芭蕉は「としぐはいかに」と答えた。「年〴〵」は季語ではないが、其処に歳旦句らしい心情があらわれているわけで、取立てて季語はなくとも、全体の内容から季節は明らかだとしたのである。『去来抄』に「詞に季なしといへども、一句に季と見る所有て、或は歳旦とも、名月とも定るあり」（故実）としてこの句を引いているのも同じ意味である。

句意は『三冊子』に述べてあるような趣旨でよいと思う。芭蕉が「歳旦に猿の面よかるべし」と思いついたのは、猿廻しの猿などを見たのが動機であったろうが、猿廻しの猿が猿の仮面をつけるという事はないようだ。猿に他の仮面を着せるとか、或いは人が猿の仮面をつけるとか、色々な場合が考えられるけれども、要するに変り栄えのしない譬えとして案じられたものだから、実際とは関わりが薄いものとすべきであろう。古注に、六窓一獼猴の意だとか、慈恵大師七猿の和歌を引くのも、ここには関わりのないことである。芭蕉が自ら仕損じの句といったのは、趣向は趣向としても、観念の露出したところに不満を感じた為と思われる。「軽み」には聊か遠い句柄でもあった。

766　こんにやくにけふはうりかつ若菜哉　（正月廿七日付小川のあま君宛書簡）

鳶獅子・芭蕉一周忌・泊船集・三冊子・新片相手

七種

はまぐりにけふは賣勝ッわかなかな　（真蹟懐紙）

こんにやくに今朝はうりかつ若な哉　（蕉翁句集草稿）

蒟蒻にけふは賣かつ薺かな　（泊船集書入）

蕉翁句集

春季（若菜）。

語釈　○**こんにやく**　「蒟蒻（こんにやく）」。年中売行の良いものとして出した。「蒟蒻の名物とはんやま桜　李里」（『続猿蓑』下）「Connhacu.」（『日葡辞書』）。○**けふはうりかつ若菜**　「今日（けふ）は売（う）り勝（か）つ若菜（わかな）」。「若菜」は、正月七日の七種粥（ななくさがゆ）に入れる春の七草の類をいう。既出（Ⅳ649）。普段は蒟蒻がよく売れるが、七種の今日に限っては、若菜の方が沢山売れることを、「うりかつ」といったのである。「瞞（だま）してなりとも人より売勝つを商人の手柄とする事ぞかし」（『諸商人世帯気質』巻三ノ一）「Cachi, tçu, atta.」（『日葡辞書』）。

大意　普段よく売れる蒟蒻より、七種の今日に限っては、若菜の方が沢山売れることだ。

考　この句の成立年次について、嘗ては土芳の『新講』の主張する同六年説とが、頴原博士の『新講』の主張する同六年説とがあった。しかしその後、六年筆と推定される小川の尼君（凡兆の妻羽紅尼）宛正月廿七日付芭蕉書簡に、次の「春もや〻」の句と共に挙げて、「この比の句かき付申候。てほんに可被成候」とあるのが知られるに及んで、六年の正月七種頃の作たることは疑い無くなったと言ってよい。『蕉翁句集草稿』に「壬申」と頭注し、『蕉翁句集』が元禄五年の部に入れているのは誤伝と見られ、頴原博士が真蹟懐紙に「年〻や」の句と共に併記されていることを以て六年正月と推定されたのが正しかったわけである。

真蹟懐紙に初五が「はまぐりに」とあるが、「こんにやくに」との異同については『三冊子』に、

此句はじめは、蛤になど〻五文字在。再吟して後、こんにやくに成り侍ると也。（赤雙紙）

とあり、『蕉翁句集草稿』には、

此句五文字いろ〱有。初は、蛤にとも出たるを、こんにやくに定る。

とも見える。蛤も正月の食膳に供されるものではあるが、伝統的な「若菜」との対照を際立たせる庶民的な味わいは「こんにやく」の方がまさるであろう。恐らくそのような考慮から、正月二十七日までの間に「はまぐり」から「こんにやく」への推敲がなされたものと思われる。『句集草稿』の「今朝は」、『泊船集書入』の「薺」は、何れも裏付けがないので、誤りとしか考えられない。

『芭蕉一周忌』（嵐雪撰、元禄八年刊）と『新片相手』（永我撰、宝暦五年刊）には、この句を発句として、嵐雪との三十四句の付合が収められている。何故か歌仙に二句足りない形であって、末尾に二句を付加している『芭蕉翁俳諧集』の形は信じ難い。

句は蒟蒻と若菜を競わせて、七種の日には若菜の方が売り勝つと興じた趣向にしている。蛤を蒟蒻に変えたことによって俳味が一層際立ち、如何にも軽みの時代らしい句になった。「こにやく」（蒟蒻）の語を詠み込んだ物名歌に

「野を見れば春めきにけりあをつゞらこにやくまゝしわかなつむべく」（『拾遺集』巻七）というのがあり、蓼太の『芭蕉句解』はこの古歌取りと見ているが、これはただ蒟蒻と若菜が一首の中にあるのが似ているだけで、特に古歌を意識したものとは思えない。また、許六宛の野坡書簡写しに、この時嵐雪が芭蕉に対して「蛤にとしたほうが勝り候はん」と言ったところ、芭蕉は「我等は昨日今日の事を述べて老情を慰むなり」云々と答えたことが見えるが、この話はどうも後から造られた感じがする。芭蕉が初案として蛤を案じたことは疑い難いからである。

767　春もやゝけしきとゝのふ月と梅
（正月廿日付木因宛書簡）

正月廿七日付小川のあま君宛書簡・真蹟画賛・真蹟自画賛・旅館日記・薦獅子・陸奥鵆・染川・続猿蓑・泊船集・旅寝論・千句塚・夏の月・蕉翁句集・淡雪・古渡集・宗祇戻・枇杷園随筆・白雄夜話

春季（梅）。

語釈　○**春もやゝけしきとゝのふ**　「春も漸気色整ふ」。春も漸くそれらしい気配が具わって来た、の意。「やゝ」は既出（Ⅱ336前書、341）。支考の『俳諧古今抄』に、「三節の間に切るべき所も見えず」とあるが、この句は「とゝのふ」で切れるのであろう。「人がらもあるべきかぎりとゝのひて、何事もあらまほしく、たらひてぞ物し給ひける」（『源氏物語』紅葉賀）「Totonoi, ô, ôta.」（『日葡辞書』）。

大意　朧に霞む月と綻んだ梅の花。春も漸くそれらしい気配が具わって来た。

考　『旅館日記』には「梅月」と前書があり、元禄六年正月十一日の御城御連歌の次に記されている。正月廿日付の木因宛にこの句を書いて「頃日申候」とあり、同廿七日付の小川のあま君（羽紅）宛には、前の「こんにやくに」の句と共に挙げて、「この比の句かき付申候」云々とあることは前記の通りである。元禄六年正月と推定される十二日付許六宛書簡に、十五、六日頃許六亭を訪問する心積りが述べられており、『俳諧問答』所収、許六の「自得発明弁」にこの月の事として「予が宅に四五日逗留」とも見える。即ち正月半ばの許六亭訪問が実現したのであって、現

在伝存する満月と梅の花の許六の画に当面の句を賛したものは、この時二人相談の上で制作されたものと推定されている（『芭蕉全図譜』解説編参照）。これらによって句の成立時期は明らかであろう。自画賛の方は夙く『浪化日記』所載の北枝の句文にその存在について触れてあり、後代の『枇杷園随筆』に「かつて芭蕉翁の自画賛を見る。紅のつけたてにて薄紅梅なり」、『白雄夜話』に「紅梅の画賛也。信州松本何がし真蹟所持す」等と見える。

画賛として発想された句ではあるが、季節感の本質的なものが捉えられ、温雅な表現を得たものとして高く評価出来ると思う。月次の句として評価しない説は、表面的な鑑賞に失したものであろう。

春のほのかな充実への推移が、たしかな観照の眼で把へられてゐる句だ。冬の気分から、実に丹念に見据ゑられてゐた季節の呼吸が感ぜられてくる。これは自然へ感合し滲透しうる眼を充分具へた作家でなくては敢てなしえないものと思ふ。「幽玄にして長高し」といふ評を加へてゐる古人もあるが、それはこの季の推移に伴ふ人間の心のうごきを、悠容せまらぬ「位」のある態度と、高雅な口調とでとらへたところをさしてゐるものと解してよからう。（『芭蕉講座』発句篇(下)）

という加藤楸邨氏の見方に同感を禁じ得ない。古注の『笈の底』が、定家の歌「おほぞらはむめのにほひにかすみつゝくもりもはてぬ春のよの月」（『新古今集』巻一）を引いているのはよいが、本歌として踏まえたわけではなく、句と同じ趣というまでである。元禄五年の歳旦吟「人も見ぬ春や鏡のうらの梅」（Ⅳ733）の句にしてもそうであるが、句の背後にある作者の透徹した心境を見落すと、月次のつまらない句と見られ兼ねないところがある。

蜆子の畫賛

768 白魚や黒き目を明ヶ法の網　（韻塞）

旅舘日記・泊船集・宇陀法師・蕉翁句集

蜆子

白うをや黒きめをあけ法の網　（宰陀稿本）

春季（白魚）。

語釈　**○蜆子の画賛**　「蜆子の画賛」。「蜆子」は中国五代の頃の禅僧。定住の所なく、冬夏を通じて一衲をまとい、毎日江岸で蝦や蜆をとっていたという。その姿を描いた画に賛した句なのである。**○白魚**　シラウオ科の小魚。既出（I *135*等）。**○黒き目を明ク**　「黒き目を明ク」。白魚が白い体色と対照的な黒い目をぱっちりと開いているさま。「目を明ク」に開悟の寓意がある。**○法の網**　「法の網」。「法」は、仏法を指す。魚を掬う（救う）ものとして「網」を出した。蜆子は常に網を携えていたといわれ、その画像は、網を持って蝦を握った姿が描かれる慣わしである。（III *502*）参照。「華厳経曰、張二仏経網一、亘ル二法界海一、漉二人天魚一、置二涅槃岸一」（積翠『句選年考』）「ゆふやみの唐網にいる蛙かな　一井」（『あら野』巻二）「Ami.」（『日葡辞書』）。

大意　蜆子和尚の法の網にすくわれて、白魚が黒い目をぱっちりとあけていることよ。

考　「題蜆子像」（『旅舘日記』）「蜆子の賛」（『泊船集』）「蜆子図賛」（『蕉翁句集』）等の前書がある。許六の稿本『旅舘日記』には、「春もやゝ」の句と並記されており、同時の作と思われる。『宰陀稿本』（享保四年成）は「めをあけ」と命令形になっているが、根拠が明らかでなく、標掲の『韻塞』の外、『宇陀法師』（元禄十五年刊）にも「目を明く」とある方が信頼出来よう。

白魚は白き中に目斗黒くして、ことにめだつ魚也。蜆子和尚はゑびをすくひ喰ひたれども、白魚に取かへて作り、いづれか心の通ふ所、差別有べからず。非情の魚も蜆子の網に掛りては、仏眼を開くべしとならん。（東海呑吐『句解』）

という説で、この句の解は尽きている。蜆子の持っている手網を「法の網」に見立て、魚を掬うことから「救う」を思わせて、掬われた白魚が無明の闇を離れて開悟したと趣向した。理窟といえば理窟であるが、蝦を白魚にした俳諧

化が成功しており、全体に軽やかな興が見える。「法の網」は、蜆子の持っている蝦蜆掬いの網をかく観じたものであって、その限りでは、かつての談林頃の見立(みたて)の手法とさして択ぶところはない。ところが、法の眼をあくところのものが、白魚という清楚なものであり、みずみずしい生動感があるために、一句があざやかな効果を発揮していること不思議なものがあって、対象の本質に滲透する芭蕉の偉大な素質をここに見ることができる。……元来蜆子の画賛でありながら、「白魚」が鮮かに生きているのは、「黒き目を明く」という白魚の本質的把握に達しているためで、注目すべき一作というべきであろう。(『芭蕉全句』)

という懇切を極めた加藤楸邨氏の鑑賞は、この句の佳処を道破した至言であった。

769

二月吉日とて是橘が剃髪、入醫門を賀す

はつむまに狐のそりし頭哉　(末若葉)

泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・十二月箱

春季(はつむま)。

語釈　〇**二月吉日**　「ニグワツキチニチ」。陰暦二月の縁起のよい日。即ち句中の「はつむま」の日をいう。「吉日」は、「キチジツ」というよみも考えられるが、『日葡辞書』には「Qichinichi.」の語があるだけなので、それを採っておく。「元禄十一寅五月吉日」(『続猿蓑』井筒屋跋)。〇**是橘**　「ゼキッ」。鵜沢氏、名は是吉。其角の下僕であったが、その父東順に入門して医を学び、長庵と称して外科医になったという。俳号は本名を音読して別の字を宛てたものであろう。生歿年未詳。〇**剃髪**　「テイハッ」。髪を剃って頭を丸めること。当時の医者は僧形であった。ここは下の「入医門」に合わせて「髪を剃(かみそ)り」と訓むことも出来る。「弟子にすれば、一時も早ふてい髪させずば成升まい」(『雷神不動北山桜』四ノ切)「**Teifat. Cami soru.**」(『日葡辞書』)。〇**入医門を賀す**　「医門(いもん)に入(い)るを賀(が)す」。是橘が医者に入門して医道を学ぶようになったことを祝う意。前記のように、彼は其角の父東順に入門した。『荘

子』人間世篇に「医門多疾」（医者の門前には病人が多く集まること）の語がある。「賀す」は既出（Ⅱ *411* 前書）。**○はつむま**「初午」。二月最初の午の日に行われる祭。代表的なのは稲荷の縁日で、京都伏見の稲荷神社の祭礼を始め、各地の稲荷社で盛大に行われる。その由来は、稲荷社の祭神が稲荷山の三ヶ峯に降臨したのが和銅四（七一一）年二月の初午の日であったからという。江戸には稲荷の社が多く、初午には市中到る処で太鼓の音が響き、赤い幟が立ち並び、夜は燈籠・行燈を懸け連ねて、雑踏する群衆で賑わった。「むま」は、「むめ」「んめ」等と同じく、語頭の唇音を「む」であらわした表記法である。「初午　二月上ノ午日也。稲荷へ詣也」（『誹諧初学抄』）「武江にても此日王子 妻恋 三囲 真崎等の社を始とし、武家市中とも鎮守の稲荷を祀り、灯燭をかゝげ、鼓吹して舞ふ。近くては雲間の霹靂の如く、遠くては蒼海の波濤に似たり。江戸の賑ひ耳目を驚かすに堪たり」（『俳諧歳事記栞草』）「ひらふた金で表がへする　野坡　はつ午に女房のおやこ振舞て　芭蕉」（『炭俵』上）。**○狐のそりし頭哉**「狐の剃りし頭哉」。稲荷の祭神は仏教の荼枳尼天に習合されたが、玄狐に乗った荼枳尼天の姿から、狐をお稲荷様のお使わしめとする俗信が生じた。ここに狐を出したのも「はつむま」の縁で、狐が剃ってくれたのかも知れないと興じたのである。「頭」は「カシラ」よりも「アタマ」の方が砕けた感じが出て良い。「哉」には軽い疑問の気持が含まれる。「菊ある垣によい子見てをく　旦藁　表町ゆづりて二人髪剃ん　越人」（『はるの日』）「笹の葉に小路埋ておもしろき　沾圃　あたまうつなと門の書つけ　芭蕉」（『続猿蓑』上）「**Camiuo soru.**」「**Atamauo marumuru.**」（『日葡辞書』）。

大意　縁起をかついで初午の日に頭を剃るとあって、その頭は稲荷のお使わしめの狐が剃ってくれたのかな。

考　『泊船集』『蕉翁句集草稿』『蕉翁句集』等の前書も『末若葉』と同じで、『十二月箱』（仙鶴撰、宝永七年刊）には、氷花の句の前書中に引かれている。『蕉翁句集』は元禄六年の部に出しているが、成立年次は確かでなく、ただ是橘の医道の師東順は元禄六年八月に歿しているので、六年二月以前と考えられるだけである。実際はもう少し早かった可能性が高い。但し、元禄三年の『いつを昔』には「其角奴是吉」として句が見え、『花摘』にも下僕の境涯を思わせる句文があるから、医道入門は細道の旅以前とは考えにくく、芭蕉が江戸へ帰って来た元禄五、六年の間の作ではあろう。『蕉翁句集草稿』には、

是橘はキ角が僕にして常学の志アリト聞。終に医門に入の時ありて此句有か。

とも見える。

『末若葉』のこの句の後に其角は、

浄土経のあらましにも、狸‐奴白狐放ッ二後光ヲ一と候へば、まことのひかりかゝやかして、人にもばかされな、人をも妖すなと、巫医の心をせめられし也。

と書き添えている。これは是橘自身を狐に見立てたような取り方であるが、「狐のそりし頭哉」と「頭そりたる狐哉」とは一緒にはなるまい。狐は「はつむま」の日の縁で出したので、稲荷のお使わしめの狐が剃ったのかと興じたところに祝意があらわれているのだ。兼ねては、狐に化かされて丸坊主にされたというような話の連想もあって、ふざけているのである。其角に使われていた人だから、心安立てにこんな句を作ったのであろう。

770 鶴の毛の黒き衣や花の雲 （芭蕉句選拾遺）

つるの毛のくろき衣や花の雪 （のぼり鶴）

春季（花の雲）。

語釈 **○鶴の毛の黒き衣** 「鶴の毛の黒き衣」。「黒き衣」は、僧の着る墨染の衣。「黒衣」ともいう。それを鶴の黒い羽毛に譬えた表現である。「衣の上の御情に大慈のめぐみをたれて結縁せさせ玉へ」（『おくのほそ道』）「Coromo.」（『日葡辞書』）。**○花の雲** 桜の花盛りの眺めを雲にたとえていう。既出（Ⅱ256等）。

大意 鶴が黒い毛の羽をひろげて大空を飛び翔るように、貴方は墨染の衣の袖をひるがえして、雲のような花盛りの中を旅することだろう。

考 この句は『のぼり鶴』（沾洲・序令撰、宝永元年刊）序に、「むかし専吟房独歩して三よしのゝおく山上伊勢熊野をか

けし時のはなむけに」として見えるのが最も早く、『芭蕉句選拾遺』は「湖東辻村太田氏梅契家珍」として「僧専吟餞別之詞」と題した文中の句として収めている。この題は『句選拾遺』の編者寛治が私に付したものであろうが、この文の存在は『のぼり鶴』の序に徴しても信ずべく、内容にも疑いはない。即ち、

杖頭に草鞋をかけて、笠の内に名をあらはす。元禄六とせ弥生の初、僧専吟武江の東深川の艸扉を開て、既一歩をはじむと書く。此僧常に風情を好み、市を避て年〳〵斗藪行脚の身となる。ことし又伊勢・熊野に詣むとす。身は雲外の鶴にひとしく流に觜をすゝぎ、千尋の岡に翅をふるふて野に伏、雲に泊らん。胸中の塵いさぎよし。予葎の交をなす事久し。今此別にのぞみて、ともに岸上に立て、箱根山はるかに見やる。彼白雲のたはめる処こそ、旅愁の嶮難さがしきちまたなるべけれ。君かならず首をめぐらせて見よ。われ又此岸上に立んといひて袂をわかちぬ。

として発句を記している。文中にあるように、元禄六年三月初めの事であった。専吟は深川住の山伏で、俳諧は似春門、其角の撰集にも句が見える。

『のぼり鶴』の「花の雪」という形では落花の趣になるが、遠望の句としては「花の雲」の方が相応しい。「雪」は「雲」の誤伝であろう。

専吟を鶴に比した趣向であることは、「餞別之詞」に「身は雲外の鶴にひとしく」云々といっているのによっても明らかである。「黒き衣」は墨染の衣であるが、これに「鶴の毛の」と冠したのは、「鶴の翼の端の黒いのを云つた」(『続芭蕉俳句研究』安倍能成氏)ものと見たい。「白衣の上に墨染の衣を纏(まと)った専吟の姿を、丹頂鶴の気高さに譬(たと)え、胸中塵(ちり)なき人柄を讃(たた)える」(今栄蔵氏『芭蕉句集』)と見れば十分であろう。露伴は「鶴氅旅塵に黦み、道人花雲に入る」という詩句を引いている。要するに、花盛りの山野を行く専吟の旅姿を思い遣って挨拶としたのである。内藤鳴雪は、鶴は尻の処に黒い毛がある、彼の赤壁賦などにも玄裳と言つてゐる、此の句は黒い毛衣を着た鶴が花の雲のあた

りに飛びかふてゐると言ったので、鶴と花とを配合して一の景色を叙したのぢや。而して裏面には墨染の衣を着た坊主殿が此の春の花に浮かれて旅をして行くわいと言ったのぢや。或いは鶴の毛の黒き衣といふのを直ちに専吟の衣を形容したと解する者があるかも知れぬが、それよりも表面は実際の鶴と花との配合と見る方が詩趣が深いと思ふ。(『評釈』)

と見ている。仮想の鶴と花の景色を表とするか裏と見るか、一概の論は出来ないけれども、挨拶の意を重視すれば、黒衣の専吟が花盛りの旅路を行くさまが表であろう。それを鶴に比したのはよいが、鶴の羽には黒いところがあるにもせよ、全体の印象は白いものである。それを黒衣の人になぞらえた為に、どうしてもイメージに混乱が生じて、渾一した味わいに遠くなっているのは、この句の欠点といわなければならない。

771 当皈よりあはれは塚のすみれ草 (笈日記)

泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

春季(すみれ草)。

語釈 ○**当皈**「タウキ」。セリ科の多年草。漢方で根が薬用に供され、強壮、鎮静、婦人病に効がある。同じ名でも、中国と日本では近縁種ながら、同種ではないという。ここでは「当皈」が「当に皈るべし」(「皈」は「帰」と同じ)と訓むことを利かせている。「当帰　山州長池の辺に多くつくる。江州胆吹山の自然生は根の形小なれども、乾して香気甚しく、油色の如し」(『大和本草』巻六)「奈良道や当帰畠の花一木」(『蕪村自筆句帳』)。○**あはれ**　人に悲傷憐愍の情を催させるものの意。既出(Ⅱ *264*)。○**塚**　人の墳墓。既出(Ⅲ *522*)。ここは呂丸のそれを思い遣ったのである。○**すみれ草**　既出(Ⅰ *236*)。古注に「住む」を掛けるとするものがあるが、余計な詮索であろう。

大意「当に帰るべし」と訓んで望郷の念を思わせる当帰よりも、もっと悲しみを催させるのは、亡き人の塚のほと

りに咲いたすみれ草だ。

考　「悼呂丸」（『泊船集』）「出羽之図司呂丸ヲ悼」（『蕉翁句集』）等の前書があり、『蕉翁句集草稿』にも「此句自筆に、出羽の図司呂丸を悼と前書有」と記されている。細道の旅中、羽黒山で芭蕉の世話をした図司呂丸（近藤左吉）が京の去来宅で歿した報を得て作った悼句であるが、この間の事情は『笈日記』下巻に見える左の句文によって委しく知ることが出来る。

祭図司

出羽の国羽黒の麓なる図司なにがし呂丸、四とせの先ならん、宮古の方をゆかしがりて、古さとは葉月中比にうかれたちて、野店の月山橋の霜、かねておもひぬるまゝにわびけると也。かくて武のばせを庵に旅ねして、しばしの秋をおしみ、洛の桃花坊にかりゐして、春のやがてきたらんといふ事をまつ。その春の花も半ならんほどは、支考にくみして大和路の行脚もすべきなど、さゝめかしおもひゐけるに、む月の中比よりやみつき侍りて、何のすべきやうもあらで、春も二月の二日なるに身まかりける也。されば此郎は、門にまたるべき子さへありて、妻はいとわかくて侍り。その夢にあえぬつまこに、此便きかせ侍らば、まづ(ママ)人をなむうらみぬべし。それ雲水漂泊のものは、おもふ方もつまじきゆへなりと、誰〳〵もおもふかは。その比是をきゝつたへ侍る人は、いとあはれとて手むけしける人もおほかりしが、かつて浪子となりて、ひとへに客をあはれむといへる、まして此時の手向なるべし。

しにゝ来てその二月の花の時　　支考
鳫一羽いなで(ママ)みやこの土の下　　洒堂
土たかき所あはれや春の草　　団友
当皈よりあはれは塚のすみれ草　　ばせを

支考の文によれば、呂丸は元禄八年より足掛け四年前の五年八月半ばに羽黒を立ち、秋のうちに江戸の芭蕉庵に着いた。芭蕉から自撰自書の『芭蕉庵三日月日記』を与えられたのはこの時の事である。それから上京して桃花坊なる去来宅に滞在していたが、翌年正月中旬から病みついて二月二日に歿したのであった。芭蕉は江戸で膳所の洒堂からの書状によって呂丸の死を知り（書状には『笈日記』所収の洒堂の悼句「鳫一羽」の句も記されている）、彼と同郷で江戸詰中の鶴岡藩士岸本八郎兵衛（俳号公羽）に急報して、以後数通の同人宛書簡が残されている。最初は三月五日付で、

昨夜膳所より書状参候。呂丸追前（ママ）之句とて告こし申候。定而段〻中越候と相見え候へ共、道にて滞候而、いまだ先書不下と相聞候。兎角必定仕たる事と奉存候。左様に御意得（こゝろえ）被成、若御屋敷之内、縁類之御方なども御座候はゞ、御しらせ被成可被下候。……則膳所より申来候一段、切抜候而懸御目候。

とあり、「兎角必定仕たる事」というのは、呂丸の死去が間違いないという芭蕉の確信を示した文言である。以下数通の書簡にも、呂丸の死を愍れむ芭蕉の気持がよくあらわれているので、左に抄出しておこう。

……左吉被果候月日、未不定に候間、追〻可申参候間、御知らせ可申上候。羽黒にて初而逢申刻、此人生死之論、拙者兎角に可及とは、夢聊不存事に御座候に、誠無定世中、又是程不便成事も近年覚不申候。（三月初旬筆）

返〳〵左吉事難忘、打寄〳〵申出候。昨夜京去来より又申越候。是正月晦日之状にて、呂丸生前之内之事に而御座候間、切抜候而懸御目申候。御縁類之御方へ御語可被成候。死後之状未去来より不参候。定而此上別条御座有まじく候。和合院状、随分具に候。（三月十二日付）

終りの方の「和合院」は、『おくのほそ道』に見える羽黒山別当代会覚阿闍梨で、その後美濃谷汲の華厳寺に転じていた。恐らくこの頃上京していて、呂丸死去前後の模様を知り、書状で委しく芭蕉に報じたらしい。

「当皈より」の句は、呂丸の死を知った三月五日頃か、おそくとも三月中には成ったものであろう。「当皈」は、妻

子を故郷に残して遠境に旅した呂丸の境涯から、望郷の念を連想させる草の名として案じたものだし、「塚のすみれ草」も、芭蕉は呂丸の墓を知らないのだから想像上のものである。句の中心をなす二つの草の名が凡て眼前のものでないこのような場合、普通なら趣向倒れのそらぞらしい句になりそうなところなのに、異境に客死した呂丸の運命を恐れむ気持が、実に素直に流露しているのは驚くべきことであろう。句材や、それに籠められた作者の気持、それを表現しようとする心力の卓抜さを思わざるを得ない。

城主の君日光御代参勤させ給ふに扈従ス岡田氏某によす

772　篠の露袴にかけしげり哉　（後の旅）

泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

夏季（しげり）。

語釈　○**城主の君**　「城主の君」。城持大名の当主をいう。「君」は尊称。（Ⅰ*90*）参照。ここは美濃大垣藩主戸田采女正氏定を指す。「摂州伊丹の城主荒木村重につかへて神崎式部といへる人、横目役を勤めて」（『武家義理物語』巻一ノ五）「Iôxu. Xirono nuxi.」（『日葡辞書』）。○**日光御代参勤させ給ふ**　「日光御代参勤めさせ給ふ」。「日光」は、徳川幕府初代将軍家康を祀った日光東照宮。（Ⅲ*462*）参照。ここは戸田氏定が五代将軍綱吉に代って東照宮に参詣する役を命ぜられたことをいう。「させ給ふ」は「城主の君」氏定に対する敬語。「お小せう達のしゆつとうおぐり八弥、馬上に上下御代参のかちわかたう」（『女殺油地獄』上）。○**扈従ス**　「扈従」は、身分ある人につき従い供奉すること。戸田氏定のお供をするのである。下の「岡田氏某」にかかる言い方だから、「ス」は「スル」でなければならない。サ変動詞を四段と混同する意識が、この時代からあったか。「同七日、悦中あり。当家の公卿十二人扈従せらる」（『平家物語』巻六）。○**岡田氏某によす**　「岡田氏某に寄す」。「岡田氏某」は、大垣藩士岡田治左衛門（俳号千川）を指す。蕉門俳人宮崎荊口の次男で、岡田氏を継いだ人。（Ⅳ*714*）参照。「よす」は、句や歌を贈ること。既出（Ⅱ*306*前書）。○**篠の露**　「篠」は、「シノ」「サヽ」「スゞ」等いろいろに訓めるが、［考］に引く西行歌の「をざゝのつゆ」を踏まえるとすれば、「サヽ」と訓む

べきであろう。小型の竹をいう。既出（Ⅰ53）。○**袴にかけし**「袴（はかま）」は、供奉の道中に千川の着ける袴。「露を旅袴にかける」（露で旅袴が濡れる）のである。「袴」は既出（Ⅱ284）。○**しげり**「茂（しげ）り」。樹木の枝葉の生い茂ったさまをいう夏の季語。既出（Ⅰ61）。

大意 貴方はこれから日光御代参の御供で旅立たれる。道中はきっと野山に笹が生い茂り、その葉の露で旅袴が濡れることだろう。恙なくお役目を果たされるように。

考 大垣藩主戸田氏定が日光御代参を勤めた年次を、将軍綱吉時代の記録『常憲院殿御実紀』によって検するに、元禄六年四月九日に御代参を拝命、同二十四日に復命している。これに従えば、積翠の『句選年考』に「元禄六年四月七日、日光二十日御名代勤めらる」とあるのは誤りと見られよう。この発句は恐らく四月初旬に、藩侯に扈従して日光へ赴くことになった岡田千川への餞別吟として作られたものと思われる。後年の『金蘭集』『俳諧録』『芭蕉袖草紙』等には、この句を発句とする千川・涼葉・左柳・青山・此筋・遊糸・大舟らと一座した歌仙が収められており、芭蕉の他は皆大垣藩の連衆であった。脇以下を千川帰府後の興行とする見方もあるが、歌仙を巻くほどの時間的余裕がなかったとも思えない。出発前の成立としてよかろう。

『句選年考』はこの句の典拠として、

をざゝのとまりと中所にて、つゆのしげかりければ
分きつるをざゝのつゆにそぼちつゝほしぞわづらふすみぞめの袖

という『山家集』中に所載の歌を挙げている。西行歌の表現を踏襲しながら、「すみぞめの袖」を「袴」に変えて俳諧にしたものとおぼしく、「袴」は千川が仕官の身であることを寓した表現であろう。千川の旅路の体を思い遣った句と見えるが、その場合「かけし」と過去表現になっている点が問題になる。この時間的な矛盾から、

郊外の酒店に藪竹の覆ふる風情ながら、さゝの露とは酒のことにて、送別の宴をいへり。趣意は、此たびの扈従のおぼろげならぬ官袴にかゝる光栄ぞと、茂りの一字に祝し給ふならん。精工みつべし。（杜哉『蒙引』）

という旧説になお拘泥する考え方もあるが、「篠の露」を酒のこととするような発想は時代おくれであって、晩年の芭蕉には相応しくない。また、加藤楸邨氏が『芭蕉講座』や『全句』で、千川が主君の供をして大垣から江戸へ来て、更に引続き日光へ出発する一連の旅と見ようとするのも、千川がこの前年から既に江戸詰とあっては、所詮無理であろう。かれこれ考えると、「御代参の道中を思いやり、その時点に立って、『袴にかけし』と過去形で詠んだ」（山本健吉氏『全発句』）とするのが最も無難に思われる。既定の事実として「し」を用いたのである。なお、「露」でもって先払いの姿をあらわすという今栄蔵氏の見方もある（『芭蕉句集』）。

773　郭公聲横たふや水の上（藤の実）　——笈日記・泊船集・俳諧問答・篇突・旅寝論・今日の昔・千句塚・三冊子

ほとゝぎす聲や横ふ水の上（卯月廿九日付荊口宛書簡）　——陸奥鵆

一聲の江に横ふやほとゝぎす（卯月廿九日付荊口宛書簡）　——芳里侢・笈日記・俳諧問答・篇突・旅寝論

ほとゝぎす横たふ聲や水の上（翁草）

夏季（郭公）。

語釈　○**郭公**　「ホト、ギス」。○**声横たふや水の上**　「水」は、深川の芭蕉庵に近い小名木川や隅田川の流れをいう。その流れの上にほととぎすの声が横たわっているよ、の意。「横たふ」は本来他動詞であるが、ここは自動詞「横たはる」と同様に用いられている。「佐渡によこたふ天河」（Ⅲ*515*）と同じ場合である。ここの表現が蘇東坡の「赤壁賦」の一節を踏まえることは［考］参照。「吹ちりて水のうへゆく蓮かな岐阜秀正」（『あら野』巻三）。

大意　ほととぎすが大川の上を鳴きながら飛び過ぎて行く。その声の余韻が暫くは流れの上にただよって、声が水の上に横たわった感じだ。

考 『陸奥衛』には「深川」と前書がある。元禄六年と推定される卯月廿九日付荊口（大垣の蕉門俳人）宛書簡は、この句の成立過程について委しく述べているので、先ず左に引用しよう。

頃日は郭公盛に啼わたりて、人ゝ吟詠草扉に音信侍しも、蜀君の何某も旅にて無常をとげたるとこそ申伝えたれば、猶亡人が旅懐、草庵にしてうせたる事も一入悲しみの便りとなれば、ほとゝぎすの句も工案すまじき覚悟に候処、愁情なぐさめばやと杉風・曾良、水辺之ほとゝぎすとて更にすゝむるにまかせて、与風（ふと）存寄候句、

ほとゝぎす声横ふや水の上（声横ふや歟）

と申候に、又同じ心にて、

一声の江に横ふやほとゝぎす

水光接天白露横江の字、横、句眼なるべしや。ふたつの作いづれにやと推稿（ママ）難定処、水沼氏沾徳と云もの弔来れるに、かれ物定のはかせとなれと、両句評を乞。沾曰、横江の句、文に対シテ考之時は、句量尤いみじかるべければ、江の字抜て、水の上とくつろげたる句の、にほひよろしき方におもひ付べきの条申出候。兎角する内、山口素堂・原安適など詩哥のすきもの共入来りて、水上の究よろしきに定りて事やみぬ。させる事なき句ながら、白露横江と云奇文を味合て御覧可被下候。……

これよりさき、この年の三月に芭蕉は幼時から面倒を見て来た甥の桃印を、長煩いの果てに失い、悲しみに打ちのめされていた。桃印が故郷の伊賀を離れて二十年近くも帰郷することなく、深川の芭蕉庵で終ったことから、ほとゝぎすに縁の深い蜀君杜宇が、やはり故郷を恋いつつ旅中に死んだことも思い合わせて、ほととぎすの句も作るまいと決心していたというのが、「蜀君の何某も」から「ほとゝぎすの句も工案すまじき覚悟に候処」までの大意である。ところが杉風や曾良が芭蕉の気持を引立てようとして、水辺のほととぎすの題で句を作るように勧めたので、ふと思いついたのが、「ほとゝぎす声や横ふ（「声横ふや」とも）」と「一声の江に横ふや」の両案であった。「横ふ」という語

は、『文章軌範』などに収められて有名な蘇東坡の「前赤壁賦」の一節「白露横レ江、水光接レ天」（白露江に横たはり、水光天に接す）に基づき、「横ふ」が一句の眼目であるという。従って別案の「一声の江に横ふや」は、「一声の江に横ふや」という訓み方も考えられるけれども、そう訓んでは天和時代の風調になって、芭蕉晩年の時期には相応しくなく、やはり「一声の江に横ふや」とすべきであろう。原拠の「白露」を「ほとゝぎすの声」に変えた俳諧なのである。この両案のうち何れを採るべきか迷っていたところへ来合わせた水間沾徳（「水沼」は誤り。露沾門の俳人）に判定を乞うた。沾徳のいうには、「一声の江に横ふや」の句の方は、「赤壁賦」の本文に照らして考えると、表現が重きに過ぎる（「句量尤いみじ」は、そのような意味と思われる。『去来抄』にも見えるように、「重み」は蕉門では非難されるべきことであった）。だから、原拠の文を思わせる「江」の字は抜いて、「水の上」と俳諧らしくした案の方が勝るということであった。この意見は誰が見ても穏当公正な判断であって、後から訪ねて来た素堂・安適らの友人達も同意見だったという。「させる事なき句ながら、白露横江と云奇文を味合て御覧可被下候」（大した句ではないが、「赤壁賦」の一節を味わいつつ句を御覧下さい）というのが、作者自身の総まとめである。元禄七年の『藤の実』（素牛撰）に見えるのが板本として最も早く、これは信ずべき集であるから、最終的には「郭公声横たふや」（荊口宛に傍書された句案）に治定したものと見られよう。この句の推敲過程については、書簡の記述を踏まえて、『三冊子』にも触れられており、許六の「自得発明弁」（『俳諧問答』所収）や『篇突』にも論が見える。『翁草』（里圃撰、元禄九年刊）の「横たふ声や」は誤伝に過ぎない。

一句はほととぎすの鋭い声が余韻を引いて暫くは消えずに、川の流れの上にただよっているさまを言い取ろうとしたものである。荊口宛によれば、「水辺のほとゝぎす」という題詠として案ぜられたわけであるが、深川に住む芭蕉には十分に体験の裏付けがあり、それと共に「赤壁賦」の文章が思い浮んだのであろう。志田義秀博士が『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』で指摘されたように、ほととぎすは多く夜鳴くものであるし、典拠となった「赤壁賦」も夜なので、

夜景として鑑賞すべきものと思われる。この句の成った時、芭蕉が沾徳の判によって「水の上」に治定した由を述べて句の色紙を許六に贈ったが、それに対して許六は「江に横たふ」が勝るとして返事を出したという。そして、「自得発明弁」に次のように論じている。

　案ずるに、水の上の句幽玄にはきこえ侍れ共、水の上、入(いら)ぬ詞なり。声横たふや水の上と、一言も残さずいひつめて、しかも水の上といろへたる事を沾徳はよろこべり。これ俗のよろこぶ所也。江に横たふやといふ処ニ、いろ〳〵の心をふくめたる事をしらず。中〳〵俗の耳には落がたし。……両句の甲乙いづれ共わきがたかる(ママ)けれ共、すき不数寄を論ずる時は、予は江に横たふの方すぐれたりとおぼえ侍る。いひつめずして心のあらはれ侍る事をこのめる故也。

許六の「すき不数寄」は兎も角、「水の上」を要らぬ詞というのは暴論である。この言葉なくして、どうしてほととぎすの声が余韻を引いてひろがる場が分るというのであろう。江上の大景も「水の上」とあればこそ読者の眼前に展開するのではあるまいか。さきにも述べた如く、「江」が余りに原拠の文を意識させ過ぎるから、この字は抜いて、代りに「水の上」とくつろげた表現にする方が勝るとする沾徳の判断は穏当なものであって、素堂らも同意見だったのである。この時期、芭蕉は典拠を露わに示したり、天和調まがいの際立ち過ぎた表現を好む傾向はとうに卒業していて、何の奇もない言葉の中に深い詩心を籠めようとしていたから、沾徳の意見には芭蕉も同感だったに違いない。

水の上に漂うほととぎすの声の余韻に、作者は亡き桃印の幻影を追い求めていたと見て、一句を非常に主情的な心象風景とする説がある（富山奏博士『俳句に見る芭蕉の芸境』）。荊口宛書簡には確かに桃印の死のことに触れてあり、蜀君の悲運を思わせるほととぎすを材にした句を作るまいと考えていたことが述べられている。しかし折柄の時節につけて、代表的な季物であるほととぎすの句を作るようにと杉風や曾良に勧められて「与風存寄候句」という書き振りから見ると、制作動機は桃印への思いとは区別して考えるべきではあるまいか。富山説と同系の考え方は尾形仂氏の『松尾

芭蕉』にも見えるが、私は「水辺のほとゝぎす」という題詠として、大川に近い深川辺の初夏の気分を盛った叙景句とするのが穏やかだと思う。

山本健吉氏は、「ほととぎす。声横ふや水の上」と訓んで、この句は初五で切れると見ておられる（『芭蕉全発句』）。しかし荊口宛によれば、芭蕉は中七を初め「声や横ふ」として「声横ふや歟」とも案じ、終に後者を採った。これは「声や横ふ」とすると「や」が疑問の助詞と紛らわしくなって、切れがはっきりしなくなる点を考慮したからであろう。彼が「声横ふや」に切字の働きを意図したことは、この点からも明らかだと思われる。「ほととぎす声」と続くあたり、聊か不束かな感じがなくもないが、それも表現の欠点となる程のものではない。「水の上」に鳥の声の余韻がひろがって行くさまは、中七で切れることによって一際強く印象づけられるのである。

774

許六が木曾路におもむく時

旅人のこゝろにも似よ椎の花　（続猿蓑）

泊船集

木曾路を經て舊里にかへる人は、森川氏許六と云ふ。古しへより風雅に情ある人々は、後に笈をかけ、草鞋に足をいため、破笠に霜露をいとふて、をのれが心をせめて、物の實をしる事をよろこべり。今仕官おほやけの爲には、長劍を腰にはさみ、乗かけの後に鑓をもたせ、歩行若黨の黒き羽織のもすそは風にひるがへしたるありさま、此人の本意にはあるべからず。

椎の花の心にも似よ木曾の旅　（韻塞）

―癸酉紀行

椎の花の心をしりて木曾路哉　（橋南）

夏季（椎の花）。

語釈 ○**許六**「キョリク」。森川氏、名は百仲、通称五介、字は羽官、五老井等の別号がある。三百石取りの彦根藩士。俳諧の外、画技にも長じた。俳諧は初め季吟流を学び、次いで談林派の常矩門に遊んだという。後、大津の尚白を介して其角・嵐雪の批点を受けるようになったが、元禄五年八月参勤出府の折に深川の芭蕉庵を訪い、直門となった。芭蕉は彼に絵を学び、江戸に在る間親交を重ねたことは、これまでの「けふ斗」（Ⅳ *755*）「年〳〵や」（Ⅳ *765*）「春もやゝ」（Ⅳ *767*）「白魚や」（Ⅳ *768*）等の句に関連して述べた通りである。芭蕉歿後は彦根蕉門の中心として、血脈説や取合わせ論を主張し、京の去来との間で『俳諧問答』の論戦を交わしたりした。正徳五（一七一五）年八月二十六日歿、享年六十。○**木曾路におもむく時**　元禄六年五月四日付許六宛芭蕉書簡に、「御手紙辱、六日御立被成候由、誠に急成事共に而御残多、千万難尽候」と見える。藩公の帰国に随って、江戸から中山道を経て彦根に帰ったのである。「木曾路」は既出（Ⅱ *396* 前書）。○**旅人のこゝろにも似よ**　「旅人」は許六を指す。『韻塞』の前書にある「風雅に情ある人」として、その心事を賞し、「椎の花」に呼び掛けたのである。○**椎の花**　「椎」は、ブナ科の常緑喬木。既出（Ⅲ *603*）。その花は陰暦五月頃咲き、特殊な強い香りを持つ。近世の歳時記類には見えないが、芭蕉はここで明らかにこの語を季語として用いている。「述懐／椎の花人もすさめぬにほひ哉」（『蕪村句集』）。

大意 風雅の精神を体得した旅人の心にふさわしく、侘びた趣の花を咲かせよ、椎の花よ。

考 『泊船集』には「許六木曾路におもむくに」と前書がある。五月四日付許六宛書簡には、「拙者も餞別と存候へ共いまだ出不申、若今日出申候はゞ、明日之便りに可進之候」とあるから、「椎の花の」の句は恐らく五月四日に成り、翌五日に深川の庵に同居していた次郎兵衛に持たせて許六の許に届けられたものと思われる。許六自筆の『癸酉紀行』には、「送行」と題して、『韻塞』の原拠となった句文が収められており、なお、『韻塞』には次の「うき人の」の句も並べ掲げられて、「両句一句に決定すべきよし申されけれど、今滅後の形見に、ふたつながらならべ侍る」と許六の添書が見える。

同じく「椎の花」を詠み込みながら、『韻塞』と『続猿蓑』とでは呼び掛けの対象が逆になっており、後者が後の

改案であるかどうかは、議論のあるべき所であろう。潁原博士の『新講』では、「椎の花の心にも似よ」を、「折から木曾路には椎の花が盛りであらうが、あの淋しげな目立たぬ花のさまこそさびの情である。その花の心にも似て旅せよとの意」とし、それに対して「旅人のこゝろにも似よ」では「椎の花に対して許六の心に似よといふ意に聞えて、この場合妥当ではない」と考えて、『続猿蓑』の句形は杜撰、『泊船集』はその誤りを襲ったものとされた。これも一つの見方ではあるが、許六は『泊船集』書入に於いては、「自筆ニハ椎の花の心にも似よ木曾の旅トアリ。後さるニハ此句也」と述べて、後出の句形を否定してはいない。して見れば『続猿蓑』を疑う理由は薄弱であって、「大意」のように解すれば十分通ずると思う。本書で『続猿蓑』の句形を本位句とした所以である。「椎の花の心にも似よ」を再案とする説も古くからあるが、これが六年五月当時の句形たることは明らかだから、そういう考え方は採れない。『橋南』（沾洲撰、宝永二年刊）の句形は誤伝であろう。

句意は初案の「椎の花の心にも似よ」の方が遥かに解しやすい。前書にあるように、「風雅に情ある」古人が侘しい旅の中に「をのれが心をせめて物の実をしる事を」喜んださまを示し、仕官の身の許六の物々しい旅姿は身分柄仕方がないが、本意は別の所にある筈だといって、貴方のこれからの木曾路の旅は、あの地味な椎の花の心にも似たものであって欲しいという教誡の気持を籠めたのである。路通への餞別句「くさまくらまことの華見しても来よ」（Ⅲ599）や、支考への餞別句「此こゝろ推せよ花に五器一具」（Ⅳ737）と同じ型の発想といえよう。それが再案形では椎の花への呼び掛けに変る。この句案は古くから問題になっていて、素丸の『説叢大全』の如きは口を極めてこれを難じ、後人の誤りとするけれども、前述したように、『続猿蓑』を誤りとする根拠は薄弱と言わざるを得ない。これは、

……ものの実を知ることを喜ぶ旅人許六の心に似て、椎の木も目立たぬ花を咲かせて許六を喜ばせてくれという、椎の花への呼び掛けの形となる。だが実際は許六への呼び掛けである。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

と解するのが至当である。芭蕉は最初、「椎の花の心にも似よ木曾の旅」と「うき人の旅にも習へ木曾の蠅」（次条）

とを並べて、どちらか一句に決めるつもりだったようで、後に「椎の花の」の句の方を改案して、『続猿蓑』に入れたものとおぼしく、「うき人の」は結局捨てられたのであろう。許六は自信過剰なところが玉に瑕だったが、相応の見識を持っていた。それはこの句と殆んど同時期の四月末に成った「許六離別詞」によっても明らかである。即ち許六のことを、

……其器画を好、風雅を愛す。予こゝろみにとふ事有。画は何の為好や。風雅の為好といへり。風雅は何の為愛すや。画の為愛すといへり。其まなぶ事二にして、用をなす事一なり。まことや君子は多能を恥と云れば、品ふたつにして用一なる事可感にや。画はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が画は精神徹に入、筆端妙をふるふ。其幽遠なる所、予が見る所にあらず。……（『芭蕉全図譜』所収真蹟写真による）

と口を極めて褒めている。芭蕉が彼を画の師としたのも、技術ばかりでなく、その精神に同感するところがあったからであろう。心術に卑小なところのあった路通や支考に対するのとは、芭蕉の心構えが違っていたのも当然である。こういう許六に対しては、徒らな教訓調を避けようとしたのではあるまいか。この句の改案の過程にそうした心理が作用したことは認めてよいと思う。

775　うき人の旅にも習へ木曾の蝿　（韻塞）　泊船集

夏季（蝿）。

語釈　○**うき人**　「憂き人」。この語は、「情無い人」の意になることもあるが、ここは「世を憂しとする人」で、出家、世捨人、隠遁者を指す。「侘び人」に同じ。「うき我」（Ⅲ *560*）参照。○**習へ**　この「習ふ」は、模倣する意。「倣」の字を宛てる方が良い。既出（Ⅰ *147*、Ⅱ *438* 前書）。○**木曾の蝿**　「木曾」は、広義には中山道の通る信州地方、狭義にはその西部、馬籠峠から鳥居峠にかけての

上）。

十一宿辺を指す。既出（Ⅰ244、Ⅱ419等）。「蠅（はへ）」は、俳諧で用いられる夏の季語。「浦風やむらがる蠅のはなれぎは　岱水」（『炭俵』

大意　夏の木曾路では、むさくるしい宿で蠅も多いことだろうが、労苦をいとわずに風雅を求めた昔の侘び人に倣って旅をするように心掛けなさい。

考　『韻塞』には前の「旅人の」の句の初案「椎の花の」と並べてこの句を掲げ、「両句一句に決定すべきよし申されけれど、今滅後の形見にふたつながらならべ侍る」という許六の添書を付している。

句意は、その前書に「古しへより風雅に情ある人ゝは、後に笈をかけ、草鞋に足をいため、破笠に霜露をいとふて、をのれが心をせめて、物の実をしる事をよろこべり」といったのを承けて、「風雅に情ある」古人を「うき人」とし、その旅に倣って許六も旅をするように勧めたのであって、「木曾の蠅」は、辺土を旅する労苦の象徴として、俳諧的素材を配合したのである。教訓調が露わに過ぎる感じはあるが、餞別句としては普通の出来であろう。許六が『癸酉紀行』にこの句を書いていないのは、「椎の花の」の句の方を良しとした為と思われる。ただ、前掲の句文と共に、芭蕉の風雅観を考える上では逸し難い句といえよう。

776　庭はきて雪を忘るゝ箒哉　（真蹟自画賛）

篇突

冬季（雪）。

語釈　○**庭はきて雪を忘るゝ**　「庭掃（にはは）きて雪（ゆき）を忘（わす）るゝ」。庭に積った雪を掃う折に、その対象たる雪のことを忘れてしまう。即ち禅的忘我の境地を、このようにあらわしたのである。掃除は禅の修行としても大切なもので、更には一宿一飯の恩を報ずるために、掃除をすることもあった。（Ⅲ532）参照。○**箒**　「ハ、キ」。『篇突』には「はゝき」と表記している。掃除道具の「ほうき」。『日葡

辞書』には「Fauaqigui.」(帚木)「Tamabauaqi.」(玉帚)等の語があり、箒で掃く意味の動詞として「Fauaqi, u, aita.」も見える。ここは「ハワキ」と発音されたものと見ておく。「ぽつきりと折ておかしき雪の竹　友五　はかま着ながらはゝきたばねる　夕菊」(『かしま紀行』)。

大意　庭に積った雪を箒で掃きながら、この人は雪のことをすっかり忘れているよ。

考　『篇突』(李由・許六共撰、元禄十一年刊)には「寒山自画自讃　在許六家蔵」と前書がある。菊本直次郎氏の所蔵品を収めた『蕉影余韻』の幅物写真の品がこれに当ると思われ、許六の旧蔵とすれば、江戸での芭蕉との交遊中に、画と共に作られた句と推定される。許六を師として画を学んでいた間の所産なのである。画賛句は必ずしも当季と限らない点を考慮して、ここでは許六が江戸を去る元禄六年五月初め以前の成立と見ておく。なお『篇突』や、この幅に付いた支考の添状には、画の人物を寒山としているが、箒を持っているところからすれば、拾得の画像とするのが正しいであろう。

寒山と拾得は、唐代の成立とされる『寒山詩』で有名な伝説的人物で、中世以降禅画の好材料としてよく描かれた。普通は寒山が経文を持ち、拾得が箒を持つ図柄が多い。芭蕉の画は、後向きの男が箒を長く引きずっている図で、寒山のつもりか拾得のつもりかは良く分らない。ただ、句と相俟って、融通無碍の禅の自在境をあらわそうとしたことは確かである。杜哉の『蒙引』に、

此句、理外にして説くべからず。是非共に忘れたる向上体をいへるか。寒山忘却来時の道などいへる禅語あり。

とあるように見て置く外あるまい。幸田露伴も、

箒を手にしてゐるところに、是れ庭を掃ふか、是れ落葉を掃ふか、といふ禅の問があります。是れ庭を掃ふか、是れ雪を掃ふか、獅子一吼し来つて此句あり。但是れ雪の句であり、画賛の句である。模稜の公案、芭蕉狠毒。

(『続々芭蕉俳句研究』)

と述べている。芭蕉は仏頂の会下に参禅した経験があった。「模稜の公案」かも知れないが、微妙な禅機について、相応の理解はあった筈である。

777　夕顔や酔てかほ出す窓の穴　（続猿蓑）

泊船集・蕉翁句集

夕顔に酔て顔出ス窓の穴　（八月廿日付白雪宛書簡写）

夕顔や酔て顔出す竹すだれ　（五月十四日付芭蕉宛去来書簡）

夏季（夕顔）。

語釈　**○夕顔**「ユフガホ」。ウリ科の蔓草。夏に咲く白い花が夕方開いて翌朝までに凋むのでこの名がある。既出（I *31*等）。**○酔てかほ出す**「酔うて顔出す」。**○窓の穴**「窓の穴」。座の傍に壁を丸く穿って設けた小窓をいう。障子の破れなどを言うのではない。「なは手を下りて青麦の出来　野坡　どの家も東の方に窓をあけ　野坡」（『炭俵』上）「やみのよに出て、あなをくじり、かいばみまどひあへり」（『竹取物語』）「Mado.」「Caguino ana cara tenuo nozoqu.」（『日葡辞書』）。

大意　ほろ酔い機嫌で傍の小窓からひょいと顔を出すと、垣根に白く夕顔の咲いているのが目についた。

考　元禄六年と推定される八月廿日付白雪宛書簡の写しに「此夏ノ句」と前書して見えるので、「夕顔に」の句案が六年夏の作たることは確かである。それを『続猿蓑』に収めるに当って改案したのであろう。芭蕉宛の去来書簡は元禄七年のものであるが、「竹すだれ」は去来の覚えちがいらしい。但し、井本博士は、「ただ『有磯海』入集の候補として書き出した中にあるのだから、芭蕉が「竹すだれ」の形に直して去来に知らせた可能性も残る」（『松尾芭蕉集1』）と考えておられる。後年の『蕉句後拾遺』（康工編、安永三年成）に初五が「昼顔や」とあるのも誤伝と考えられる。『続猿蓑』には「ばせを庵の即興」と前書した沾圃の句「昼がほや日はくもれども花盛」の次にこの句が並んでお

り、右の前書は芭蕉の句にもかかると見てよい。芭蕉は酒を嗜まぬ人ではなかったから、晩酌に微醺を帯びて小窓から顔を出すようなこともして見たのである。晩酌の気分は「夕顔」でなければならず、「昼顔」では日中から飲んでいたことになって相応しくない。酔興な仕草におかしみがあり、「窓の穴」という言い方もそれを助けている。「夕顔に」では単なる配合にとどまるが、「夕顔や」とすると、遠くもない垣に咲く白い花と面と向った感じが強調されるわけで、そういう考慮からの改案だったろうと思う。一寸した酔興に庶民的な花を配した軽みの句である。加藤楸邨氏は、

「酔うて顔出す窓の穴」という語調には、興じている呼吸とともに、自己を客観視しているまなざしが感ぜられるように思う。窓から首を出している姿は、どこかおかしみがあるが、そのおかしみは夕顔の黄昏(たそがれ)の色調によって深々とつつみこまれているのである。……『源氏物語』夕顔の巻の「寄りてこそそれかとも見めたそがれにほのぼの見つる花の夕顔」などを意識しているところがあるかもしれないが、そんな感じが気にならないまことにかろやかな発想である。(『芭蕉全句』)

と丁寧に鑑賞しておられる。

778　子ども等よ晝白咲(キ)ぬ瓜むかん　(藤の実)

いざ子共晝顔咲かば瓜むかん　(八月廿日付白雪宛書簡写)

いざ子共ひるがほ咲ぬ瓜むかん　(真蹟短冊)

陸奥衛・泊船集・宇陀法師・蕉翁句集

夏季(昼白・瓜)。

語釈　**○子ども等よ**　「子供等(こどもら)よ」。「子ども」の「ども」が複数の意識をなくしてから、更に「等」を付けるに至った言い方。「子

ども」は既出（Ⅲ569）。「子共等も自然の哀催すに　つばなと暮て覆盆子苅原　才丸」（五月十五日付高山伝右衛門宛芭蕉書簡）。○**昼皃咲キぬ**　「昼皃咲キぬ」。「昼皃」はヒルガオ科の蔓性多年草。その花は真夏の日中に咲き、夕方には凋むのでこの名がある。既出（Ⅰ156等）。「皃」は「貌」の略体。○**瓜むかん**　「瓜剝かん」。瓜の皮を剝いて食べさせて上げよう、の意。瓜類は夏の季語になる。既出（Ⅱ293、Ⅲ521等）。

大意　昼顔が咲いて暑い日盛りになった。さあ子供たちよ、寄っておいで。瓜を剝いて食べさせて上げよう。

考　白雪宛の書簡に、前の「夕顔に」の句と共に「此夏ノ句」として出ているので、「昼顔咲かば」の形が元禄六年夏に成ったことは確かである。その後出光美術館蔵の短冊にある「ひるがほ咲ぬ」に推敲され、『藤の実』（素牛撰、元禄七年五月成）に収めるに当って、更に初五を「子ども等よ」と変えて治定したのである。最後に初五を変えたのは、前に同じ表現の句「いざ子ども走ありかむ玉霰」（Ⅲ569）があった為と思われるが、山本健吉氏はそれと共に、「いざ子ども」の言葉の気負いは「玉霰」にこそふさわしく、「瓜」や「昼顔」では強すぎると考えたのであろう（『芭蕉全発句』）とも見ておられる。

芭蕉庵界隈の子供達に呼び掛けた体で、こうした童心の発露には良寛の俤があると言いたい。

瓜・昼貌の季文字はあれども、題とすべきは老心の子孫を愛するのみ。（麦水『蕉門一夜口授』）

という説は、この句境をよく見ている。但し、ただ無邪気に言い放った句ではない。

よき時分ぞといふ事を昼顔咲ぬといへる、雅にしてかつ童部似あへり。あどなきものを愛して楽み給ふ温和みるべし。（杜哉『蒙引』）

とある通り、「昼皃咲キぬ」に時分を示す心遣いが見えるのであって、これが「咲かば」という初案の未然態では弱くなってしまう。ここは当然の推敲であろう。三段切れの形であるが、うるさい感じがしないのも取柄である。「子ども等よ……瓜むかん」という文脈の中に「昼皃咲キぬ」が嵌め込まれた形で、弾んだ調子をかもし出している。

元禄六文月七日の夜、風雲天に満、白浪銀河の岸をひたして、烏鵲も橋杭を流し、一葉梶を吹折けしき、二星も屋形をうしなふべし。こよひ猶たゞに過さむも残多しと、一燈かゝげそふる折節、遍昭・小町が哥を吟ずる人有。これによつて此二首を探て、雨星の心をなぐさめむとす

小まちがうた

779 高水に星も旅寝や岩の上　（真蹟懐紙）

笈日記・芭蕉庵小文庫・陸奥衛・泊船集・三冊子・蕉翁文集

秋季（星合）。

語釈 **○文月七日の夜**　「文月七日の夜」。七月七日の七夕の夜。「文月」は既出（Ⅲ513）。**○風雲天に満**　「風雲天に満ち」。風が吹き渡り、雲が空を覆ったさま。「月落烏啼霜満レ天」（月落ち烏啼いて霜天に満つ。張継「楓橋夜泊」）の詩句を思わせる表現である。「風雲の中に旅寐するこそあやしきまで妙なる心地はせらるれ」（『おくのほそ道』）「Fŭ vn. Caje, cumo.」「Ten.」（『日葡辞書』）。**○白浪銀河の岸をひたして**　「白浪銀河の岸を浸して」。「銀河」は、天の河。それを河に見立てて、大雨が降った為に水嵩がまさり、白浪が岸をひたしているといった。「海上に夜を明せば、松風白浪心をいたましむ」（『源平盛衰記』巻十）「銀河中天にかゝりて、星きら〳〵とさえたるに」（芭蕉発句「荒海や」真蹟前書）「南薫峰よりおろし、北風海を浸して涼し」（「幻住庵記」）「Facurǒ. Xiranami.」「Guinga. i, Amanogaua.」「Vmi, cumouo fitasu.」（『日葡辞書』）。**○烏鵲も橋杭を流し**　「烏鵲も橋杭を流し」。「烏鵲」は、かささぎ。カラス科の、からすより小さい鳥。腹と肩羽は白く、他は黒い。伝説では、七夕の夜牽牛・織女の二星が逢う時、この鳥が翼を並べて天の河に橋を架けるという。「橋杭」は、川の中に立てる橋脚。ここは要するに、雨の為にかささぎの橋が出来ないというのである。蘇東坡の「前赤壁賦」に「月明星稀、烏鵲南飛、此非二曹孟徳之詩一乎」（月明らかに星稀に、烏鵲南に飛ぶとは、此れ曹孟徳の詩に非ずや）という一節もある。「七夕の夢の浮はしは烏鵲かな　宗鑑」（『源氏鬢鏡』夢浮橋）「此木を伐て名取川の橋杭にせられたる事などあればにや」（『おくのほそ道』）「破扇一度にながす御祓哉　未学」（『あら野』巻八）「VXacu.

Carasu, carasu.」「Nagaxi, su, aita.」（『日葡辞書』）。○**一葉梶を吹折けしき**　「一葉梶を吹き折る気色」。「一葉」は、一隻の小舟を葉にたとえた語。（Ⅰ*123*）参照。ここは牽牛星が乗って天の河を渡る舟である。「梶」は、舟の方向を定める舵にクワ科の落葉喬木「梶」を掛けた表現。七夕には梶の葉に詩歌を書いて祭る習慣がある。「けしき」は、様子。「吹折」は受身になっていないが、ここは牽牛星の乗った舟が風浪の為に舵を吹き折られてしまった模様だというのである。底本の真蹟では「一葉を梶を」と書いて、上の「を」を見せ消ちにしている。「一葉の船に棹さして、万里の蒼海にうかび給ふ」（『平家物語』巻十）「ゆらのとをわたるふな人かぢをたえゆくへもしらぬ恋のみちかも」（『新古今集』巻十一、曾禰好忠）「Ichiyô. Fitofa.」「Cagiga qicanu.」（『日葡辞書』）。○**二星も屋形をうしなふべし**　「二星も屋形を失ふべし」。牽牛・織女の二星も、その閨とする住居を水に流されて失うことであろう、の意。七夕に花や供物を供える棚を「二星の屋形」ということが背景にあり、また、前の舟の縁で船上の舟屋形を匂わせている。「天にありてひよくとちぎる二星哉」（『山之井』年中日〻之発句）「雨はれぬ旅の屋形に日数へて都恋しき浮雲の空」（広本『拾玉集』巻二）「Yacata.」（『日葡辞書』）。○**こよひ猶たゞに過さむも残多し**　「今宵猶徒に過さむも残り多し」。それでも今宵を何もせずに過すのも心残りが多い、の意。「四五日月を見たる蜑の屋　栗斎　徒にのみかひなき里のむら艳　等雲」（『伊達衣』）「イカヾ要ナキタノシミヲノベテ、アタラ時ヲスグサム」（『方丈記』）「一生しらずして果たるも残多し」（『宇陀法師』巻頭并俳諧一巻沙汰）「Nocori.」「Vouoi.」（『日葡辞書』）。○**一燈かゝげそふる折節**　「一燈掲げ添ふる折節」。「かゝぐ」は、ともし火を掻き立てて明るくすること。油皿の上の燈心を高くするのである。そうやって席を明るくした時に、の意。底本の真蹟では、はじめ「孤燈」と書き、「孤」を見せ消ちにして右傍に「一」と書いている。「孤燈」では寂しい感じで、座を賑わそうとする場合に相応しくないからであろう。「疎影横斜春不稀、就窓挑尽一燈微」（『宜竹残稿』）「天台止観の月明らかに、円頓融通の法の灯かゝげそひて」（『おくのほそ道』）「Ittô. Fitotçuno tomoxibi.」「Tomoxibiuo cacaguru.」「Soye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**遍昭・小町が哥**　「遍昭・小町が哥」。僧正遍昭と小野小町が大和の石上寺に参り合わせた時の贈答歌「いはのうへに旅ねをすればいとさむし苔の衣を我にかさなん」（小町）「世をそむく苔の衣はたゞひとへかさねばうとしいざふたりねん」（遍昭）を指す（『後撰集』巻十七所収。Ⅱ*292*参照）。遍昭（Ⅱ*256*）「小町」（Ⅲ*615*）は何れも平安朝初期の歌人で、六歌仙の一人である。「哥」は「歌」の略体。○**吟ずる人有**　「吟ずる人有り」。詠吟する人があった。「たゞありあけの月ぞのこれると吟じられしに」（『あら野』巻一、智月発句「哥がるた」前書）「Guinji, zuru, ita.」（『日葡辞書』）。○**此二首を探て**　「此の二首を探りて」。「此二首」は前掲の小町と遍昭の贈答歌を指す。「探る」は句の題を探

り取る意。右の二首を鬮で撰び取って、それぞれの句の題とするのである。既出（Ⅱ438前書）。「此一首にて数景尽たり」（『おくのほそ道』）「Ixxu.」（『日葡辞書』）。○**雨星の心をなぐさめむとす**　「雨星の心を慰めむとす」。「雨星」は、雨によって逢瀬を妨げられた牽牛・織女の二星。その満たされない気持を、句によって慰めようとするのだ、の意。○**小まちがうた**　「小町が歌」。小町が遍昭に贈った「いはのうへに」の歌を指す。芭蕉がこの歌を題に採り得たのである。○**高水**　「タカミヅ」。川などの水嵩が増すこと。増水。「寂上川の高水の咄し、往来のわたし舟浪にうちこまれ、人馬荷物大ぶんにそこねたるよし」（『万の文反古』巻四ノ一）。○**岩の上**　小町の歌の「いはのうへ」を踏まえる。

大意　この雨では天の河の増水で星も逢瀬を楽しめまい。小町ではないが、織女星も河原の岩の上で、独りさびしく旅寝していることだろうよ。

考　『芭蕉庵小文庫』には真蹟懐紙と同じ前書に「吊初秋七日雨星」と題しており、この題は撰者史邦が付けたものであろう。土芳の『蕉翁文集』も同じ文を収めている。前書にあるように、「元禄六文月七日の夜」に成った句で、真蹟懐紙には芭蕉の句の後に、

　　遍昭うた　　　　　　杉風
たなばたにかさねばうとしきぬ合羽

の句も記されてある。

『笈日記』には「たなばたや穐をさだむる夜のはじめ」の次に並出して、
　後の句の心は、なにがし女の岩の上にひとりしぬればとよみけむ旅ねなるべし。
と、小町の歌を典拠とすることを注し、『三冊子』にも小町の歌の心を取ったことが見える。

恐らく芭蕉庵に杉風を迎えた七夕の夜の雅興であったろう。小町・遍昭の贈答歌はもとより七夕に関係はないけれども、天界のロマンスに相応しいものとして採り上げ、「古歌の艶情をはいかいにくづして」（蚕臥『芭蕉新巻』）興じた

のであった。織女星を擬人化して小町に見立て、その歌の「旅寝」や「岩の上」の詞を採って仕立てている。『山之井』に、

　こよひは。みつぶにても雨だにふれば。あまの河水みぎはまさりて。星のあふせむなしとかや世俗いひならはせり。誠らしき証拠は見侍らねど。雲うちおほひて。ほしあひの空見えざらんには。俳諧の思ひ出に。さいひたりともつみなかるべし。

とあり、若い頃の芭蕉には、「七夕のあはぬこゝろや雨中天」（I *8*）といった句もあった。当面の句の前書に「白浪銀河の岸をひたして」云々とある発想も、このような伝統の上に立ったもので、「星も旅寝や」のあたりにしんみりとした情味は感ぜられるものの、所詮は軽い逸興に過ぎない。

780　**初茸やまだ日數へぬ秋の露**　（芭蕉庵小文庫）

泊船集・猿舞師・既望・蕉翁句集

秋季（初茸・秋の露）。

語釈　○**初茸**　「ハツタケ」。松林に生えるハツタケ科の小さい茸。淡白な味で食用にされる。「初茸、秋山野松樹ある地に生ず。味美、脆鬆にして無レ毒。其裏如緑生色。△今按に、此菌蕈に先達て生ず。故名レ之。一切菌蕈の魁なり」（『滑稽雑談』）「はつ茸や塩にも漬ず一盛　沾圃」（『続猿蓑』下）。○**まだ日数へぬ**　「まだ日数経ぬ」。下の「秋」にかかる。秋に入ってからまだ幾らも日が経たないというのである。「日数」は既出（IV *727*）。初茸を採ってから間のないことも響かせている。

大意　秋になってまだ幾日も経たない頃の、露しとどな初茸のみずみずしさよ。

考　『猿舞師』（種文撰、元禄十一年成）には、この句を発句にした岱水・史邦・半落・嵐蘭らとの歌仙を収めている。史邦は仙洞御所に与力として仕えていた京住の門人で、『猿蓑』に発句や付合が収められているが、俳諧づきあいが崇

ったか元禄四年秋に退身し、六年秋には江戸に下って宗匠となった。この歌仙は東下した史邦を迎えた岱水亭の歓迎の席での興行と思われ、『猿舞師』の撰者種文も史邦の弟子である。連衆の一人嵐蘭はこの年八月二十七日に歿しており、発句の内容からして七月初めに成ったと見てよかろう。華雀の『芭蕉句選』に中七が「すたりかぞへぬ」とあるのは誤伝と考えられる。

「初茸」の名から、秋早くに生えるみずみずしさを言い立てて趣向としたのであろう。「露」は態々ことわらなくても秋の物であるが、ここでは「まだ日数へぬ秋」を言いたいので、必要な言葉なのである。野外の景色と見る説が多いが、山本健吉氏のように、

その席の御馳走に、いちはやく初物の初茸が出されたのである。その初茸に置いた露もまださほど秋の日数を経ていない、と初物を賞美し、併せて主の心のこもった持てなしに挨拶した句。(『芭蕉全発句』)

とした方が俳席の発句に相応しい。古い歳時記類では初茸を八、九月の物とするけれども、『滑稽雑談』には「一切菌蕈の魁」ともあり、この句の場合初物の賞美であることは動かぬと思う。考えられた跡のあることを指摘する説もあるが、軽妙な即興句というべきであろう。

781 しら露もこぼさぬ萩のうねり哉 (俳人の書画美術所収真蹟自画賛)

芭蕉翁遺芳所収真蹟自画賛・芭蕉全図譜所収真蹟自画賛・芭蕉庵小文庫・三上吟・類柑子・蕉翁句集

白露をこぼさぬ萩のうねりかな (木枯)

予間居採茶庵、それが垣根に秌萩をうつし植て、初秋の風ほのかに露置わたしたる夕べ

白露もこぼれぬ萩のうねり哉 (枽集)

浪化日記・翁草・泊船集

秋季（しら露・萩）。

語釈 ○**しら露もこぼさぬ**　「白露も零さぬ」。萩を主体として、こぼれやすいきらきらした露さえもこぼさない、と言ったのである。「解てやをかん枝むすぶ松　冬文　咲わけの菊にはおしき白露ぞ　越人」（『はるの日』）「Xiratçuyu.」（『日葡辞書』）。○**萩のうねり**　花をつけた萩の枝が、風に吹かれて揺れるさまを「うねり」と言った。「萩も桔梗も刈萱も、荻のうはかぜふきそひて、おなじうねりにをくつゆを」（『浄瑠璃』十二段、長生殿）。

大意　花をつけた萩の枝が風にうねりながら、こぼれやすいきらきらした露さえもこぼさないことよ。

考　「自画賛」（『類柑子』）「画讃」（『蕉翁句集』）等の前書がある。標掲した『芣集』（成蹊編、文化九年刊）の前書は採茶庵什物たる杉風の文で、「白露もこぼれぬ」とした句形には疑問もあるが、前書の方は句の成立事情を語っているものと思われる。即ち句は或る年の初秋に深川なる杉風の別墅採茶庵で成ったのであって、秋に江戸に居なかった元禄七年や四年以前は除かれて然るべく、芭蕉生前の板本類に見えないところから、元禄五、六年の七月に成ったものであろう。『三上吟』（其角撰、元禄十三年刊）には、専吟の発句「画心のしはめるさまや比巴の花」の前書に「しら露もこぼさぬ萩のうねり哉と、からびたる有ましをゑさんしてたうびける七とせ先のいき貞を、見ぬ世の友におもひなして」と引いており、また竹人の『全伝』元禄七年の条に、「其とし伊賀にて名残の画賛は」として「白露も」の句を収めていることからして、元禄七年に江戸と伊賀で画賛にこの句を書いたことが知られる。句形は、『芣集』が前述のように、疑問もあるものの、初案の可能性もあり、真蹟自画賛が三点も伝わる「しら露もこぼさぬ」を本位句とすべきことは論の無いところである。積翠の『句選年考』には、『鳩の水』なる逸書に初五が「月かげを」とある由を伝えるが信じ難い。

花をつけたしなやかな萩の枝に露の置いているさまを、繊麗に言い取っている。萩を主体として、それが露をこぼさぬように擬人化した為に、艶やかな女性的気分も添うており、これまた「萩」の本情というべきものであろう。

「をりて見ばおちぞしぬべき秋はぎの枝もたわゝにおける白露」（『古今集』巻四、よみ人しらず）「はぎのつゆたまにぬかむととればけぬよし見む人は枝ながらみよ」（同上）「あはれいかに草葉のつゆのこぼるらん秋風たちぬみやぎのゝはら」（『新古今集』巻四、西行）等の歌が芭蕉の脳裏には必ずやあったろうと思う。「白露も」と「白露を」の異同について、嘗て穎原博士は「もは理を含んで句品を卑しくする」（『新講』）と言われたけれども、「を」の形を載せる『木枯』『翁草』『泊船集』等は今一つ信頼度に問題のある集で、「も」に理を感ずるのも、近代的感覚が却って事の真を見えなくしている憾みがなくもない。寧ろ「も」があってこそ、萩の枝のたたずまいとその柔媚な余情が生きるのではあるまいか。加藤楸邨氏も、

「白露をこぼさぬ」の形では白露に目が凝らされている感じであり、「白露もこぼさぬ」であると、萩のうねりに焦点が合されている感じである。「白露も」だと理に傾くとする説は必ずしも当らないと思う。（『芭蕉全句』）

と述べておられる。

782　なまぐさし小なぎ（ママ）が上の鮠の腸　（笈日記）

泊船集・三冊子・蕉翁句集

秋季（小なぎ）。

語釈　○**なまぐさし**　「生臭し」。「よひのほど其漁家に入てやすらふ。よるのやどなまぐさし」（『鹿嶋詣』）「Namagusai.」（『日葡辞書』）。○**小なぎ**　「小葱」。水葱の異名。水田などに生える一年生草本植物。形は水葵に似て小さく、夏秋の交に碧紫色の花を開く。秋の季語。『滑稽雑談』沢桔梗の条には、

　按に、毛吹草八月部にこなぎと記せるは沢桔梗なるべし。こなぎは本草云水葱、一名薢菜、世俗に是を沢桔梗ともいへども、花は夏月に咲く也。又、浮薔をなぎと云、俗是も沢桔梗と云。以上三種也。皆花の形色相似たる故、沢吉更と云。今爰に記す

る者真の沢桔梗なり。此者にこなぎの異名あるべからず。水葱・浮薔の二物に沢吉更の俗名ありとも、真の沢吉更をこなぎとは可レ謂理なし。

と、沢桔梗との別を論じている。「苗代のこなぎが花を衣に摺り馴るるまにまに何か愛しけ」(『万葉集』巻十四)。○鮠の腸「鮠の腸」。「鮠」は魚の名であるが、うぐい・おいかわ等種々の説があって、何を指すか確かでない。『滑稽雑談』は鮠を柳葉魚とし、春の季語としている。『続猿蓑』下、雑夏に収められた「川狩にいでゝ／じか焼や麦からくべて柳鮠」という文鳥の句の魚は、芭蕉の句の「鮠」と同じかどうか分らない。「腸」は「腸」の異体字で「ワタ」と訓む。即ち「はらわた」である。「清水ながるゝ油ながるゝ　相坂の関もて行は魚のわた　望一」(『犬子集』巻十五)「Faye.」「Vata.」(『日葡辞書』)。

大意　子供でも釣り捨てて行ったのか、水際に生えた小葱に腸をさらした鮠が引掛って、生臭い臭いを放っている。

考　支考は『笈日記』雲水部に元禄七年春の「梅が香にのっと日の出る山路かな」の句と共にこの句を引いて、最後の旅で同年の夏京の去来宅に居た芭蕉との会話を左のように記している。

去年の夏阿叟の桃花坊におはす時、人〻よりいて物語し侍るに、支考が集つくらば、なにがしの桐火桶に似せて侍らん。たとへば、……小なぎの鮠のわたは残暑なるべし。是を一躰の趣意と註し候半と申たれば、阿叟もいとよしとは申されし也。

残暑の頃の趣といい、句中に「小なぎ」の語があるところからしても、句が秋季であることは明らかで、句の成ったのは七年ではないが、梅が香の句と並べられているからには元禄五、六年の作と推定される。

「小なぎ」で思われるのは、やはり深川のような水路の縦横に走った水郷であろう。その小葱の上に腸をさらけ出した鮠が引掛って残暑の強い日ざしに蒸され、腐臭を放っている。腸だけでは何の魚とも分るまいから、これは腹の裂けた小魚のさまでなければなるまい。ふと野外で見かけたものによって、残暑の気分をあらわそうとしたもので、まざまざとした実感がある。素丸の『説叢大全』に、

予壮年より魚釣を好み、今に四十年、東西の葛西は残る所なく歩行せしに、小なぎの七八月比まで咲しを見る。

その道のはたに、村の童などの釣捨し鯰の踏くだかれてわたの出たる、殊に腥臊(ナマグサ)かりし。誠に残暑の時候少しもたがはず。

と述べられたような景色である。山本健吉氏も、

水辺の小なぎの葉に小さな鯰が腸(はらわた)を出したまま引っかかっている。……その生臭さがいわば水辺の残暑の情なのである。腸のはみ出た鯰とは、村の悪童たちが釣り捨ててどこかへ行ってしまったのである。鯰はそれほど脆い淡水の小魚であり、村童たちも食用に釣ったり掬ったりしたわけではない。残暑の頃の川遊びで、飽きればそのまま放擲してどこかへ行ってしまう。そのような子供たちの散ってしまった、ささやかな狼藉の跡の景色である。(『芭蕉全発句』)

と見ておられる。

残暑

783 夏かけて名月あつきすゞみ哉 (荻の露)

八月廿日付白雪宛書簡写・芭蕉庵小文庫・陸奥鵆・泊船集・木曾の谿・蕉翁句集・寛政板更科紀行

秋季(名月)。

語釈 ○**夏かけて** 夏からずっと、の意。「こしかた行末かけて、まめやかなる御物がたりに」(『徒然草』百四段)。○**名月あつきすゞみ哉** 「名月暑(めいげつあつ)き涼(すゞ)み哉(かな)」。中秋の名月の日まで暑さが続いて、まるで涼みをしているようだ、の意。「いそがしき中をぬけたる涼かな 游刀」(『続猿蓑』下)「Suzumi, u, unda.」(『日葡辞書』)。

大意 夏からずっと名月の今日まで暑さが続いて、月見もまるで涼みをしているようだ。

考 「名月」(八月廿日付白雪宛書簡写)「前書されてみへず」(『芭蕉庵小文庫』)「前書有り。切て不見」(『蕉翁句集』)等の前書

がある。元禄六年と推定される白雪宛書簡に見えるので、その年中秋の名月の夜の吟であることは疑いない。また、其角が同年に歿した亡父東順追善の為に刊行した『萩の露』には、八月十八日に其角が浅草寺で人々と月見をした時の歌仙一巻の次に、「良夜吟　引付」として句々を録した最初にこの句があることも、成立年次を証している。『木曾の谿』『更科紀行』等には、杉風の句「風さそふ音は紙子の立居哉」の前書の中に引用されている。

この年の夏が暑くて芭蕉の体力が弱っていたことは、「当夏暑気つよく、諸縁音信を断、初秋ゟ閉関、……夏中は筆をもとらず、書にむかはず、昼も打捨寝くらしたる計に御座候」（霜月八日付曲翠宛）「残生夏中甚暑に痛候而、頃日まで絶諸縁、初秋ゟ閉関、病閑保養にかゝづらひ、筆をもとらず候」（霜月八日付荊口宛）等、書簡の文言を見ても明らかで、保養は冬にまでも及んでいたのであった。「元禄六年八月十五日は、新暦に直せば九月十五日である。まだ彼岸前だから、当然残暑の季節」（山本健吉氏『全発句』）ではあるが、名月の時まで続く残暑に弱りながら、納涼を兼ねた趣にふと興を発した軽みの句というべきであろう。

784　**十六夜はわづかに闇の初哉**（続猿蓑）　――泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

十六夜はとり分闇のはじめ哉（韻塞）　――泊船集

十六夜とり分闇のはじめかな（桃の白実）

秋季（十六夜）。

語釈　○**十六夜**　「イザヨヒ」。中秋の名月の翌晩、八月十六日の夜をいう。既出（Ⅱ *427* 等）。○**わづかに闇の初**　「僅（わづ）かに闇（やみ）の初（はじ）め」。これから月が日一日と欠けて闇夜になって行く、その緒に就いたことをあらわす。（Ⅰ *141*）参照。

大意　十六夜の今宵、月のたたずまいは昨日とさして変らないが、僅かながら闇夜に向う兆しが現われ始めていること

とだ。

考　『桃の白実』（車蓋撰、天明八年刊）『芭蕉袖草紙』（奇淵編、文化八年刊）等に、この句を発句とした濁子・岱水・依々・馬莧・曾良・涼葉らとの歌仙一巻が収められている。この巻は史邦を加えて元禄六年九月十三夜に興行された歌仙（発句は濁子の「十三夜暁闇のはじめかな」）と略々同じ連衆なので、芭蕉の晩年に成ったものと推定され、元禄五、六年、特に後者の可能性が大きい。歌仙の発句として伝えられるものは、中七が凡て「とり分闇の」であるから、俳席での初案を『続猿蓑』に入れる際に推敲したのであろう。『泊船集』は「わづかに」と「とり分」の両句形を共に収めている。『桃の白実』の初五は、このままでは「ジフロクヤ」とよむことになるが、恐らく下に「は」を脱したものと思われる。

十六夜の月は、形の上では前の十五夜と殆んど変らない。しかし、月の出が前夜より約三十分も遅れるから、その間の闇が特に印象深く、「いざよひ」の名の由来にもなっている。この句も恐らくその辺が動機になっているのであろう。

十六日の月は、月の出る迄に少し時間があつて闇がある、其の暫しの闇はこれより闇になりゆく其の初めであるといふので、是れも理窟を深く見ずにいさゝか闇であつた其瞬間を打興じたと見る可きぢや。（内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈』）

という説が穏当である。初案の「とり分」は際立ち過ぎて態とらしい。「わづかに」の方が遥かに素直である。満つれば欠くる道理を寓したという古注の説は余計なことであるが、

師或方に客に行て食の後、蠟燭をはや取べしといへり。夜の更る事目に見へて世話しきと也。かくものゝ見ゆる所、その目、心の趣、俳諧也。つゞいていはく、命もまたかくの如しと也。無常の観、猶亡師のこゝろ也。（『三冊子』わすれみづ）

というエピソードが何となく思い浮べられる。芭蕉はそういう風に心の動く人であった。

薦獅子・八月廿日付白雪宛書簡写・藤の実・炭俵・芭蕉庵小文庫・泊船集・今日の昔・宇陀法師・四山集・三冊子・本朝文選・蕉翁文集

元祿癸酉の秋、人に倦て閉關ス

785　朝顔や昼は鎖おろす門の垣　（真蹟自画賛）

秋季（朝顔）。

語釈　**○元禄癸酉**　「ゲンロクキイウ」。「癸酉」は、みずのととり。元禄六年の干支である。**○人に倦て閉関ス**　「人に倦みて閉関ス」。「人に倦む」は、人とのつきあいに飽きる意。「閉関」は、門を閉めて来客をことわることをいう。世俗の交際を絶つのである。王維の詩に「終年無₂客長閉₁関、終日無₂心長自開₁」（終日客無くして長く関を閉ぢ、終日心無くして長く自ら開なり。「答₂張五弟₁」『唐詩選』巻二）とある一節は、ここの芭蕉の境涯によく似ており、「閉関」は禅語でもある。「やゝ病身人に倦て、世をいとひし人に似たり」（「幻住庵記」）「折〳〵指出候而迷惑致候に付、盆後閉関致候」（八月廿日付白雪宛芭蕉書簡）。**○朝顔**　ヒルガオ科の一年生蔓草。季は秋である。既出（I *160*等）。**○昼は鎖おろす**　「昼は鎖下す」。「鎖」は、掛け金。既出（IV *690*）。日中は鎖をおろして閉めておくのである。「おろす」は、下の「門」にかかる。「大事ノモノハジヤウヲオロシ、ソノジヤウニ封ヲツクルナリ」（本福寺跡書）「**Iŏuo vorosu.**」（『日葡辞書』）。**○門の垣**　「門の垣」。「門」は「カド」よりも「モン」とよんだ方が良い。芭蕉庵の門である。（IV *748*）参照。「垣」は、朝顔の咲いている場所を示す。「山吹や垣に干たる蓑一重　闇指」（『続猿蓑』下）「**Caqi, cabe abarani xitte ame, caje tamaranu.**」（『日葡辞書』）。

大意　日中は鎖をおろして閉じている門の垣根に朝顔が咲いている。人に会わずに居る間の、これが唯一の友といったところだ。

考　「深川いづれの菴主とかや、此句を得て他にかたくあはずと、旅僧の語り捨て通る」（『薦獅子』）「閉関之比」（『藤の実』）「閉関」（『炭俵』『泊船集』）等の前書があり、『芭蕉庵小文庫』『今日の昔』『本朝文選』『蕉翁文集』等には、「閉関

之説」と題した文章中にこの句を収めている。芭蕉が閉関して客を謝した年次は、標掲の真蹟に「元禄癸酉」とある外、「語釈」に引いた白雪宛書簡に「盆後閉関」とあり、「当夏暑気つよく、諸縁音信を断、初秋ゟ閉関」（霜月八日付曲翠宛）「残生夏中甚暑に痛候而、頃日まで絶諸縁、初秋ゟ閉関、病閑保養にかゝづらひ、筆をもとらず候」（霜月八日付荊口宛）等、以後の書簡にも触れられている。この年が夏から秋八月半ばまでも暑かったことは、「夏かけて」（Ⅳ *783*）の句によっても明らかであって、暑気の為に体力を消耗して、盆過ぎの七月半ばから閉関して保養に努めたことは確かである。句は白雪宛書簡に見えているから、八月二十日までには成っていたと見られよう。『芭蕉庵小文庫』所収の文を左に引いておく。

閉関之説

色は君子の悪む所にして、仏も五戒のはじめに置りといへども、さすがに捨がたき情のあやにくに、哀なるかた〲もおほかるべし。人しれぬくらぶ山の梅の下ぶしに、おもひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人目の関ももる人なくば、いかなるあやまちをか仕出でむ。あまの子の浪の枕に袖しほれて、家をうり身をうしなふためしも多かれど、老の身の行末をむさぼり、米銭の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、はるかにまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身を盛なる事はわづかに二十余年也。はじめの老の来れる事、一夜の夢のごとし。五十年六十年のよはひかたぶくより、あさましうくづをれて、宵寐がちに朝をきしたるね覚の分別、なに事をかむさぼる。おろかなる者は思ふことおほし。煩悩増長して一芸すぐるゝものは、是非の勝る物なり。是をもて世のいとなみに当て、貪欲の魔界に心を怒し、溝洫におぼれて生かす事あたはずと、南華老仙の唯利害を破布（却）し、老若をわすれて閑にならむこそ老の楽とは云べけれ。人来れば無用の弁有。出ては他の家業をさまたぐるもうし。尊（孫）敬が戸を閉て、杜五郎が門を鎖むには。友なきを友とし、貧を富りとして、五十年の頑夫自書自禁戒となす。

この後に「あさがほや」の句が置かれている。書簡では夏中の暑気が閉関の原因のように書いてあるけれども、右の「人来れば無用の弁有。出ては他の家業をさまたぐるもうし」というのは、紛れもない厭人症である。芭蕉は人間嫌いの発作が時々起ることがあった。「日比は人のとひ来るもうるさく、人にもまみえじ、人をもまねかじと、あまたゝび心にちかふなれど」という「閑居ノ箴」の一節（Ⅱ371頁）にその片鱗を見ることが出来るが、元禄六年秋には、その動因となるべき錯雑した人事が背景に想定されるのである。この年三月に芭蕉は甥の桃印の死に遭い、悲嘆のどん底に沈んでいたし、許六の江戸滞在中から寿貞尼の子次郎兵衛という少年が芭蕉庵に同居して走り使いなどをしていた。次郎兵衛の背後には当然親の寿貞尼の存在が思われ、芭蕉旧縁の人といわれるこの女性の影が草庵生活に濃くさしているのを感ぜざるを得ない。これら私生活の事に加えて、名古屋では荷兮・越人ら古参の門人が、軽みの新風に対する無理解と、師翁が彼等を余り相手にしないことから発した僻み根性から、離反の動きを急にしていた。六年に出た『俳風弓』（壺中撰）『曠野後集』（荷兮撰）は反芭蕉の撰集として有名であるが、こうした動きはこの年秋冬の頃に至って爆発する以前から芭蕉の耳に入っており、六年初頭の書簡に「なごやのやつばら共、いよ〳〵不通に成候と相見え候。のこり多候」（正月廿七日付小川のあま君宛）とある文言に憤懣の情が窺われる。このような内外の紛紜が芭蕉の厭人症の背景としてあったことは確かであろう。

この文の内容には際立った特色がある。書き出しから過半が、若者の色欲と老人の物欲金銭欲を比較して前者を勝れりとする論で、それが何時の間にか最後の隠閑礼賛に流れ込むという特殊な運びになっているのである。嘗て志田義秀博士は、この色欲肯定論の背景に芭蕉と寿貞との関係を考えられ、近来はまた桃印と寿貞を夫婦と見る立場から、この文にその臭いをかぎ取ろうとする論もあるが、これらは確かな根拠が乏しくて、定論とするには距離があると言わざるを得ない。現段階では、この文の特殊な運び方や内容に留意して、読者がそれぞれに芭蕉の執筆心理を考えて見る外ないと思う。

句はただ閉関した草庵の垣に咲く朝顔の花を描いたに過ぎないが、「昼は」と分説の助詞を用いた意図については昔から説が多い。

句の心は、昼は鎖おろす門の垣なれ共、朝がほは咲たりと也。是隠者の門といはずしての作也。（正月堂『師走嚢』）

夜は誰も戸ざすものなれば昼の字を入る。（東海呑吐『芭蕉句解』）

末世の情捨難くして、朝の花には柴の細戸も開きて友を待との卑下也。……然共世を遁れたる心よりは、昼は戸を閉ると云出たる志し哀深し。……朝は花に着して戸を開き人待と云共、其萎むに至ては、閉関の心思ひ返して、昼は鎖をおろすと也。（信天翁『笈の底』）

昼であるに戸を閉ぢた門がある、其の門の垣根に朝顔が咲いてゐるといふのを言葉を顚倒して斯様に叙したのである。……こゝに昼はと言つたのは、元来門は夜鎖すのであるのを、昼も鎖すといふたのである。其の昼もといふを特に昼はとした為めに世に遠かる為め夜よりも寧ろ昼を主として閉すといふ心持になり愈々以つて佗人の境界がよく現れるやうになつた。（内藤鳴雪『評釈』）

句意は昼は門を鎖ざして世を厭ひ遠ざかつて居る身も、暁は朝顔の為に門を開くといふので、つまり朝顔を称美したもので、昼はの「ハ」は「モ」といふのではなく、昼を重くする為めの用意である。（『芭蕉句集講義』小峰大羽説）

句意は、朝顔の美しく咲く朝には、その美しさをめでて門外に逍遥する折もあるが、昼間は門を閉ぢてひたすらに独居し、閑寂無為の生を味はつてゐることだといふ意。（能勢朝次博士『三冊子評釈』）

これらのうち、普通は夜鎖すものだから「昼は」と特に取立てて言ったとするのは、それならば「昼も」で足りるわけで、その代りに「は」として「夜よりも寧ろ昼を主として閉すといふ心持」（鳴雪説）をあらわすと見るのは無理であろう。朝顔は朝花を開くのだから、その朝景色に対照して「昼は」云々と言ったものと見たい。但し、「門外に出

て逍遥する折もある」（能勢説）というのは余計ではあるまいか。結局、「昼間は鎖をおろして門を閉じ、交わりを断って、ひたすら孤独に徹した日々を送っているが、その門に続く垣根には朝顔が咲き出て、朝のうちはその花を友として僅かに心を慰めていることだ」の意。（『芭蕉全句』）と解する加藤楸邨氏の見方が最も穏当と思う。「昼は鎖おろす」という強い言い方が、人との交わりを断つ決意の固さをあらわしている。『三冊子』では字余りの句の例として引かれ、「なくて成りがたき所を工夫して味ふべし」という芭蕉の語を伝えているが、そうした固い決意をあらわす字余りと見れば、「なくて成りがたき所」の意味はおのずから明らかであろう。朝顔の花のたたずまいに愛憐の情が見えると共に、隠閑生活の象徴ともなっているようである。

深川閉關の比

786　蕣や是も又我が友ならず　（今日の昔）

梅の嵯峨・蕉翁句集・百歌仙

秋季（蕣）。

語釈　○**深川閉関の比**　「深川閉関の比」。「深川」は、同地の第三次芭蕉庵を指す。「唐破風の」（Ⅳ *745*）「名月や」（Ⅳ *748*）等の句参照。「閉関」は前条に記した通り、元禄六年秋のことである。「比」は、「頃」と同じく時期の意。○**蕣**　「アサガホ」。この植物にこの字を宛てるのは我が国の俗用である。既出（Ⅲ *454*）。○**是も又**　「是も又」。「も」を承ける場合は、「亦」を用いるべきである。

大意　草庵の垣に咲く朝顔も、閑居の身の友とするには足りないことだ。

考　『蕉翁句集』にも「閉関の頃」と前書があり、『梅の嵯峨』（三惟撰、元禄十二年刊）には、「此句ふるき反古にあり。故翁の手跡なり」と付記している。前の句の条に記したように、芭蕉の閉関謝客は元禄六年秋のことであった。「是も又我が友ならず」とずばりと言っている理由については古来諸説があるが、或いは見当ちがいであったり、

隔靴掻痒の感がするのは、この句だけ見て考えているからである。同じ閉関の際の「昼は鎖おろす」の句と一連のものとして見れば、我が友ならずとした意味も、よく分って来る。つまり前の句には、客を謝して垣の朝顔を友とする気分があったが、それさえもよくよく案じて見れば、友とするには足りない物だというのであろう。「是も又」が「昼は鎖おろす」の句とのつながりを示しているのだと思う。孤独感の深さを言ったものであるが、近頃の注によくある悲傷の極みの心境ではなく、孤独に徹しようとする気持をあらわしたのではあるまいか。「是も又我が友ならず」の勁い調子は、「徹底した孤独への希い」(山本健吉氏『全発句』)と取るのが最も的確な理解であろう。ただ、詩的表現としてはなお不熟なもので、作者として公表する意志はなかったものと思われる。

787 秋風に折て悲しき桑の杖 (笈日記)

末若葉・泊船集・本朝文選・蕉翁文集

秋季(秋風)。

語釈 **○秋風に** 「ここに小休止があり、句全体をつつみこんでいる。単純に「折れて」に続くのではない」(加藤楸邨氏『芭蕉全句』)。**○折て** 「折れて」。**○桑の杖** 「桑の杖」。桑の木で作った杖。『芭蕉庵小文庫』所収の史邦の発句「折そふる梅のからびや粥はつを」の前書に、「また一とせ洛のぼりに、いざさらば雪見にころぶ所までと興じ申されける木曾の檜笠、越の菅蓑に桑の杖つきたる自画の像、此しなぐ〳〵は、さぬる年花洛の我五雨亭に幽居し玉ふ時、一所不住のかた見とて予に下し玉りぬ」とあり、これは元禄四年頃のことと思われるが、桑の杖は芭蕉自身用いていたことが知られる。「**Cuua. I, cuuano qi.**」(『日葡辞書』)。

大意 秋風が寂しく吹く折しも、頼りにしていた桑の杖がぽっきり折れてしまった思いだ。嵐蘭に死なれて何とも悲しいことよ。

考 古参の門人松倉嵐蘭の死去に際して作られた悼句である。嵐蘭の病死は元禄六年と推定される霜月八日付荊口

宛書簡に見えるので、年次は明らかであるが、『笈日記』には「悼松倉嵐蘭」と題した芭蕉の文を収めてあり、前後の事情を詳らかにすることが出来る。即ち、

金革を衽にして、あへてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて君子のいさおしとす。松倉嵐蘭は義を骨にして実を腸にし、老荘を魂にかけて、風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ事十とせあまり九とせにや。この三とせ斗官を辞して、岩洞に先賢の跡をしとふ（ママ）といへども、老母を荷ひ稚子をほだしとして、いまだ世波にたゞよふ。されども栄辱の間に居らず、日々風雲に座して、今年仲秋中の三日、由井・金沢の波の枕に月をそふとて鎌倉に杖を曳、其帰るさより心地なやましうして、終にいきたえぬ。おなじき廿七日の夜の事にや。七十年の母に先立、七才の稚におもひを残す。いまだをしむべき齢の、五十年にだにたらず。公の為には腹をし切ても悔まじきうつはものゝ、はかなき秌風に吹しほたれたる草のたもと、いかに露けくも口をしくもあるべき。今はの時の心さへしられて悲しきに、母の恨、はらからのなげき、したしきかぎりは聞伝えて、偏に親ぞくの別にひとし。過つる睦月斗に稚子が手をとりて予が草庵に来たり、かれに号得さすべきよしを乞。王戎五才の眼ざしうるはしと、戎の一字を摘て嵐戎と名付。其よろこべる色、今目のあたりをさらず。いける時むつましからぬをだに、なくてぞ人はとしのばるゝ習、まして父のごとく子のごとく、手のごとく足のごとく、年比云なれむつびたる俤の、愁の袂にむすぼゝれて、枕もうきぬべきばかり也。筆をとりておもひをのべんとすれば才つたなく、いはむとすれば胸ふさがりて、たゞをしまづきにかゝりて、夕の雲にむかふのみ。

右の文の後に「秋風に」の句があり、続いて「九月三日詣墓」の句が載せられている。また、其角の『末若葉』にも「悼嵐蘭詞」と題した、『笈日記』とは異同のある文が収められた。当面の句は、嵐蘭の死を知った八月二十八日から九月三日までの間に出来たものであろう。

嵐蘭名は盛教、通称を又五郎といい、板倉侯に仕えて三百石を食んだが、元禄四年に致仕して浅草に住んでいた。

右の追悼文によれば、芭蕉に入門したのは延宝三年のことで、最古参の門人の一人である。同八年の『桃青門弟独吟廿歌仙』に入集、元禄五年には『罌粟合』を撰して上梓した。六年八月十三日に鎌倉へ月見に出掛け、帰途に病を発して二十七日の夜に歿したことが芭蕉の文から知られ、享年は四十七であったという。芭蕉はこの人の古武士然とした風骨を愛し、晩年軽みの風を弘布するについても、この人の句作に嘱望していた。その弟の文左衛門も俳諧を嗜んで嵐竹と号したが、嵐蘭の訃報に接して直ちに認めた八月廿八日付の文左衛門宛芭蕉書簡には、

さて〳〵驚入たる事を被仰下、いまだ夢現わかち不申候。頃日さて〳〵残念、愁傷兎角不被申候。貴面可承候。明日御見舞、墓へ成共参可申候。以上

御老母様御介抱専一に候。

とあって、痛ましいばかりの動顚ぶりが文面からも窺われる。「悼松倉嵐蘭」は、恐らく死後の雑事が収まってから認められたものであろうが、これ位真情の溢れた追悼文も珍しく、芭蕉のこの人に寄せる思いの並々でなかったあらわれと言えよう。その後の書簡にも、

嵐蘭病死之事は庄兵へ殿へ申参候由、御聞及可被成候。……拙者力落、御推量可被成候。風雅一方被打破候。

（霜月八日付荊口宛）

という文言が見える程である。

普通の句作りでは「秋風や」であろうが、芭蕉は採らなかった。「秋風に」は、「や」のようにはっきり切れない代り、秋風にじっくり心を留め、それを反芻するような表現効果がある。ここを「秋風に折れる」と解しては悪いと思う。表面上切字はないけれども、それだけ重い感情が「桑の杖」にかかって、哀悼の衷情が強くあらわれることになった。「桑の杖」は芭蕉の用いていたことのあるもので、この句の時も現に用いていたかも知れないが、それ以外にも寓意がありそうである。男子出生の祝いに用いる「桑弧（桑の弓）蓬矢」に関係づけたり、四十八歳を桑年という

ので、それに足らずして逝った嵐蘭の追悼に用いた等諸説があるが、この点はよく分らない。最後に楸邨氏の評を引いておく。

嵐蘭を悼む心が折からの秋風に誘われて発想されたものである。桑の杖のぽっくり折れ去った感じは、頼みとする人を失った悲痛な感じに通うのである。しかも、秋風という季の感じがこの作の世界を蕭条たる天地とし、芭蕉の、門人をうしなった悲しみとが自然に感合して、悲しみに沈む芭蕉その人の姿を見るような悼句をなしているのである。「秋風に」と沈んだ調子で詠み出で、「折れて悲しき」と急転し、「桑の杖」と抑え込んだあたり、全体として重く湛えられた調子が生れている。前文も有名であるが、この句はさらにすぐれた作品であると思う。「塚も動け我が泣く声は秋の風」……が外に放たれた号泣であるとすれば、この句は内にひそみ入る慟哭といえよう。(『芭蕉全句』)

九月三日詣墓

788

みしやその七日は墓の三日の月　(笈日記)

末若葉・泊船集・蕉翁文集

秋季（三日の月）。

語釈　**○九月三日**　八月二十七日夜に歿した嵐蘭の初七日に当る。元禄六年八月は大の月であった。**○詣墓**　「墓に詣づ」。八月廿八日付の松倉文左衛門宛書簡で「墓へ成共参可申候」と述べたことが実現したのである。「Faca.」(『日葡辞書』)。**○みしや**　「見しや」。「や」は、疑問に詠嘆を含む。疑問なら「見きや」とあるべしとする考え方もあるが、採らない。嵐蘭の霊が三日月を見ただろうか、の意。ここで切れる。**○その七日は墓の三日の月**　「其の七日は墓の三日の月」。「その七日」は、嵐蘭の初七日をいう。「三日の月」は既出（Ⅱ*410*等）。「は」に感情が籠る。「最早七日の弔に水せがきした川中へ、そなたの姿がしょんぼりと」（『けいせい

手管三味線』巻三ノ三)。

大意 初七日に詣でて見ると、墓には三日月が空にかかっていた。嵐蘭の霊は、あの三日月を見ただろうかなあ。

考 「初七、墓にまふでゝ」(『末若葉』)「初七日詣墓」(『泊船集』)等の前書がある。『笈日記』の「悼松倉嵐蘭」の文に、前の「秋風に」の句に続けて標掲の前書を付して見えるので、元禄六年九月三日、嵐蘭の初七日に墓参した時の述懐の句と知られる。

ここでは最早「秋風や」の句のような痛切な悲傷の情ではなく、はかない夕月の影に哀悼の情を託し、呟くような静かな調べを成している。「みしや」は嵐蘭の霊への呼び掛けであって、冒頭に斯く短く打出して、却って故人への思いの強さを表わし得ていると思う。嵐蘭の歿したのが月末に近い二十七日夜であり、「あけゆくや二十七夜も三かの月」(Ⅱ259)の句を併せ考えると、上弦と下弦のちがいだけで形は同じ三日月ということと関係づけて解したくなるが、所詮それは余計な詮索であろう。特に月末の場合は有明月で、その暁には嵐蘭はもう死んでいた筈なのである。

前句「秋風に折れて悲しき桑の杖」がありえぬことのような慟哭を示しているのに対し、これは嵐蘭の死をようやく肯い、沈んだ調子で地下の門人と心通わせている趣がある。複雑な感情がよく統一されて、地下の嵐蘭につながる思いが、「見しや」から「三日の月」に流れる曲節を通じて感得せられる。「見しや」・「七日」・「墓」・「三日」の間には、ミとカと、韻がひびきあい、悲しみの心の深さを高い調べの中に統一したところには、芭蕉の非凡さがうかがわれる。……「初七日」を迎えての沈んだ寂しさが、「三日の月」のかぼそい在り方と通いあった発想になっている。(『芭蕉全句』)

という加藤楸邨氏の鑑賞は、周密を極めて余蘊がない。

保生佐太夫三吟に

789　老の名の有共しらで四十から（十月九日付許六宛書簡）

木枯・初蟬・続猿蓑・泊船集・浪化日記・入日記・蕉翁句集・寝ころび草

秋季（四十から）。

語釈　○保生佐太夫　「ホウシヤウサダイフ」。「宝生左太夫」の誤り。名は重世。宝生流の能役者で、八世古将監重友の三男。俳諧を嗜んで沾圃と号した。岩城平藩に仕え、内藤露沾の家臣として俳諧・和歌・能楽の相手を勤めた。晩年の芭蕉の指導を受け、『続猿蓑』の発企者とされる。延享二（一七四五）年歿、享年八十三。○三吟　「サンギン」。三人の連衆による連句の付合をいう。恐らく歌仙一巻であったろうが、この沾圃亭に於ける巻は今伝わらず、芭蕉・沾圃の外に誰が加わっていたかも分らない。「三吟に御発句、此歌仙に第三出候へばよろしく奉存候」（五月十三日付浪化宛去来書簡）。○老の名の有共しらで　「老いの名の有り共知らで」。自分の呼び名が老いと関わりがあるとも知らないで、の意。四十歳が初老といわれるところから、鳥の名にかけて興じたのである。「共」は宛字。「はじめの老の来れる事一夜の夢のごとし」（「閉関之説」）。○四十から　「四十雀」。燕雀目シジュウカラ科の小鳥、雀より小さい。動作は極めて活潑で、よく囀る。『毛吹草』『山之井』等に八月の季語として所出。『日葡辞書』では「Xijŭgara.」と「か」を濁っている。「大和本草云、四十雀、頭縁黒也。背は淡緑也。頬白く、咽下及腹黒也。よく囀る也」（『滑稽雑談』）「木曽の酢茎に春もくれつゝ　凡兆　かへるやら山陰伝ふ四十から　野水」（『猿蓑』巻五）。

大意　自分の呼び名が老いと関わりがあるとも知らないで、四十雀は元気に飛びまわり、よく囀っているよ。

考　桃鏡の『芭蕉翁真跡集』に摸刻された元禄六年と推定される許六宛書簡に見えるので、同年秋の作と知られる。句はただ作者の目に入った四十雀の動きに興を発して、初老といわれる四十に掛けた名辞的発想の軽い句と見える。許六宛書簡には「少将の尼の哥の余情に候」と書き添えてあり、「おのがねにつらきわかれはありとだに思ひもしらでとりやなくらむ」（『新勅撰集』巻十三、中宮少将）の歌を思い寄せていることは確かである（Ⅲ580参照）。少将の尼の歌は、

後朝の別れを促す鶏の音を恨んだ作意であるが、それをひるがえじて軽快機敏な四十雀を出したところに俳諧らしい逸興を求めたのであろう。「万事も修行の志も、四十比までその心得なき輩、夫よりおもひ立て事の成るは稀也。油断するなとの教へ也」（東海呑吐『句解』）といった古注の説は論外である。

加藤楸邨氏は沾圃への挨拶の意を重視して、

「あなたの能を拝見していると実に力に充ちて若々しく、すでに初老に達しようとしているとは思えないほどである。あの四十雀が『四十』という名を負うことなどにかかわりなくきびきびしているように、年を忘れて芸道一途にいそしんでおられることよ」の意。／前書からみて、宝生佐太夫に対する挨拶の吟と見なければならない。（『芭蕉全句』）

と解し、「鶏へのうらみを通して後朝のつらさを歌ったその本歌に対して、四十雀の軽快さをもって挨拶に転じたところに、芭蕉の手柄は存したというべきであろう」とした上で、更に、

許六宛書簡に、報じた三句について「猶広く他見成さるまじく候。」と書き加えたことは、その三句になお推敲の必要を感じていたことを思わせるが、他の二句がこの直後の別書簡に再出することなどを考え合せると、芭蕉は連句をふくめ、この四十雀の句は捨てる気持に傾いていたかもしれないし、沾圃が関係したといわれる『続猿蓑』に前書を削って載せることからすれば、挨拶吟であることをやめ、単独の述懐の句として位置づけるというかたちでの推敲が行われたものかもしれない。単独の述懐とすれば老いの名を負うていながら軽快に動きまわる四十雀を通して、自己の老いをみつめていることになる。（『芭蕉全句』）

と考察しておられる。このうち、沾圃が初老に達しようとしているというのは、元禄六年当時の彼の年齢が数えの三十一なので、問題にならず、全体に彼の芸の若々しさをこの句の含意に見ようとするのは無理が多いと思う。また、書簡所収の三句については、「菊の香や庭にきれたる沓の底」が、「老の名の」の句と同じく『続猿蓑』に見えるのに

対して、「金屏の松の古さよ冬籠」は、『炭俵』の序に引かれる以外、芭蕉逝去の年の前後の古集に収められていないから、書簡に採り上げられないことを以て、直ちに取捨を云々するのは早計であろう。私は、句の「四十から」は属目の物を材にしたまでで、極く軽いものと見る説に左袒する。ただ、前書無しでこの句に対した場合、芭蕉の老情が或る種の哀感を伴なって感ぜられることもまた事実で、それだけ感味にひろがりのある句なのである。

790 入月の跡は机の四隅哉　（句兄弟）

錦繡緞・泊船集・本朝文選・蕉翁文集

秋季（月）。

語釈 ○**入月の跡**　「入る月の跡」。東順の亡くなったことを月が西に沈んだことに比した。［考］参照。「跡」は「後」の宛字。「ノチ」でなく「アト」と訓ませようとする場合に用いられる。「露おきて月入あとや塀のやね　馬莧」（『続猿蓑』下）。○**机の四隅**　「机の四隅」。「机」は、読書や執筆に用いる文机。生前東順の使っていた「机」が、主を失ってなお残っている。その形と空虚感を「四隅」で強調した。字間左傍の線は訓読のしるし。「学の窓に気を屈て古文をよみ、烏几の上に筆を曲て篆隷を書を」（『根無草』後編跋）「使等宣旨奉テ四方四角山尋ルニ」（『今昔物語集』巻十ノ三十四）「Tçucuye.」「Sumi.」（『日葡辞書』）。

大意　月が沈んでしまった後は、ただ明け方のほの明りが、遺愛の机の四隅を浮び上らせているばかりだ。もはやその主はこの世に居ない。

考　元禄六年八月二十九日に歿した其角の父東順を追悼した芭蕉の文「東順伝」（『句兄弟』所収）の末尾に見える句で、歿後間もなく成ったものと思われる。芭蕉の文は左の如し。

老人東順は榎氏にして、その祖父江州堅田の農士竹氏と称ス。榎氏といふものは、晋子が母かたによるものならし。ことし七十歳ふたとせの秋の月を、病る枕のうへに詠めて、花鳥の情、露を悲しめる思ひ、限りの床のほと

りまで神みだれず。終にさらしなの句をかたみとして、大乗妙典のうてなに隠る。若かりし時、医を学んで常の産とし、本多何某のかうより俸銭を得て、釜魚甑塵の愁すくなし。されども世路をいとひて名聞の衣をやぶり(ママ)、杖を折て業を捨ッ。既に六十年のはじめなり。市店を山居にかへて、楽むところ筆をはなたず、机をさらぬ事十とせあまり、其筆のすさみ車にこぼるゝがごとし。湖上に生れて東野に終りをとる。是必大隠朝市の人なるべし。

この後に「入月の」の句がある。文は東順の略歴を叙し、仕官を辞した晩年の十年余は文筆に親しんだことを言って、この人を「大隠朝市の人」と賛した趣である。『泊船集』には、「東順身まかりける比、伝かきて此句添遣し申されし。句兄弟集ニ見ゆ」と注している。

文にも句にも、東順の死を知って芭蕉の感じた悲傷の情とか追悼の意とかいうものは一切表現されていない。文にはその人の略歴と死の前後のさま、それに晩年の文雅の嗜好が述べられているだけで、「伝」と題した所以も分る。句の方は月の没したことと、後に遺された机の形のみがあらわされており、正に「人亡び物存すの風情」(『続芭蕉俳句研究』幸田露伴)が「寂し」「悲し」などと言わずして味わわれるのである。その辺の感じを、小宮豊隆氏は漱石歿後も生前と同じ位置に机が置かれていたその書斎のさまを引合に出しながら、この句について次のように述べておられる。

> ……此句の「入る月の」といふ五文字からが、随分深い実感を持つて私に迫つて来る。さうして其五文字に続く言葉が「あとは」である。「机の四隅」に至つては、まつたく驚嘆に値ひする。「入る月のあとは」で準備された、つれない、淋しい、薄暗い、うそ寒い感じは、「四隅かな」に至つて一層具体化され且拡充される。あつけない様な、がらんとした様な、ただつぴろい様な——何と云つて見ても充分云ひ悉す事の出来ない一種特別な感情が、此「四隅かな」に至つて、存分に滲み出て来る。何気なく云ひ放つてゐる様ではあるが、さうして割合に他所事を云つてゐる様な外貌を呈してはゐるが、是は恐ろしく味の深い、名句であると思ふ。(『続芭蕉俳句研究』)

これはまことに周密な鑑賞であり、物をして情を語らしめる発句表現の一究極を示したこの句の特色をよく把えた至

言である。こうした表現力の支えがある為に、「入月」は東順の死の単なる譬喩にとどまらず、その象徴としての高さを獲得していると言いたい。加藤楸邨氏が、

故人を悼む心をあらわに言い切らないで、入る月と机とによってあらわしている。こういう場合、作意が裏にあると二元的になりやすいものであるが、この句にはそういう分裂がない。月光が薄らいでゆく中に、何も置かれていない故人の机の四隅がおもむろに浮き出してくる。あの空虚なよりどころのない感じを、確かな具体感として出しえており、その中におのずと悼意が息づいているのである。……「入る月」の感じが確かにつかまれ、そこに逝きし人への思いが寄せられている発想で、悼句としては異色のものである。（『芭蕉全句』）

と言われたのも、悼意を裏に秘めた「物」の表現力に注目されたからである。山本健吉氏も、

……物が存することによって人の不在がいっそう明ら［か］に表現される。しかもその物は「四隅」の語で表現されるような幾何学的図形で、円形の月の不在と対照され、それによって東順その人の不在感をいっそう強調する。東順が生前、その前を去らなかった机が人を離れることで、その無機物的性格をあらわにする。その空虚から来る寂寥感が「四隅」という言葉で遺憾なく把えられている。（『芭蕉全発句』）

と見ておられる。

791　行秌のけしにせまりてかくれけり（五月十四日付芭蕉宛去来書簡）

幾穐のせまりて芥子に隠レけり（翁草）

秋季（行秌）。

語釈 ○**行秌**　「行く秌」。秋の末の季語。「行く春」と同じく、去り行く季節を惜しむ気持がある。○**けしにせまりてかくれけり**

「芥子に迫りて隠れけり」。「けし」（Ⅰ 242、Ⅱ 389）は、陰暦八月半ばに種を蒔き、冬中は間引いて菜とし、初夏に開花した後、実を採って料理用にする。ここは「行秋」を擬人化して、それが種蒔きを迫って促し立て、待ち切れずに芥子粒（種）の中に隠れてしまったとユーモラスに表現し、併せて「芥子に須弥山を隠す」という諺（極めて小さい物の中に極めて大きい物を入れる譬え）を利かせた。「せまりて」は、底本に片仮名を混用してある。「人はたゞ無常の身にせまりぬる事を心にひしとかけて、つかのまもわするまじきなり」（『徒然草』四十九段）「Xemari, ru, atta.」（『日葡辞書』）。

大意 去り行く秋が芥子の種蒔きを促し立てて、待ち切れずに芥子粒の中に隠れてしまったよ。

考 本位句の底本とした去来書簡は、浪化の『有磯海』『となみ山』や、芭蕉の手許で既に編輯が進行していた『続猿蓑』に関わるものとおぼしく、元禄七年と推定される。それに「御発句去年より被仰下候内」として見える句中にあるので、句は元禄六年九月の成立と推定されよう。『翁草』（里圃撰、元禄九年刊）の異形は、恐らく「行秋」を「イクアキ」と訓んだところから出たものであろうから、去来書簡の句形の方が信憑性は高いと思う。

「幾穐の」の形で解している注が多く、左に目ぼしいものを挙げておく。

秋も末になり今しも秋が過ぎ行くといふ景を言つたので、秋も次第次第にせまり其秋は遂に芥子粒のやうな小さいものに隠れてしまつたと理想的に叙し、尚一層誇張して啻に此秋のみならんや毎年々々数へ尽せぬ幾度の秋も皆な此芥子に隠れてしまふと云つたのである。蓋し仏説に須弥山が芥子の中に入るといふ事などがあるから、それ等を思ひよせた趣向であらう。（内藤鳴雪『評釈』）

一句の意は、木の葉は紅葉になり、また木の実はみのり、稲の収穫などいろいろに多彩多事であった秋も、いよいよおしせまって、もうごくわずかの時となった。もう芥子粒にかくれるほどのわずかの間となってしまったというのであろう。幾秋を毎年毎年の秋とする説もあるが、意がわかりにくい。（岩田九郎博士『諸註評釈芭蕉俳句大成』）

「秋が迫ってきて芥子の種を蒔くときになった。芥子の種のこの小さな粒を手にとってみると、この小さな芥子の種の中に来し方の幾秋がかくれてしまっているような感じがしたことだ」の意。

「年ごとにもみぢ葉流す龍田川湊や秋の泊りなるらん」（古今集・秋下・貫之）などに通うおもいを、俳諧として詠じたものであろう。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

これらを見ると「幾穐」の解に無理が目立ち、この異形自体の信憑性への疑問が際立って来るように思われる。中では楸邨氏の解が比較的にまとまったものと言えよう。「芥子に須弥山を隠す」という諺への言及は、大抵のものに見られる。

これに対して「行秌の」の句形を本位句としたのは『校本芭蕉全集』発句篇(下)（荻野清・大谷篤蔵両氏校注）あたりからである。即ちその解は、『滑稽雑談』に「月令広義曰、仲秋夜種二罌粟一則花盛下子必満」とあるのに基づき、「秋のうちに罌粟を蒔こうと思いながら果さず、日が押迫って秋も行ってしまったの意」となっている。これを承けて山本健吉氏は、

秋のうちに芥子の種を蒔こうと思っていたのに早やもう秋が過ぎて行こうとしている、ということを、蒔こうと思う自分でなく芥子の実の立場から詠んだもの。芥子の実に「行秋」が促し迫るのである。「かくれけり」とはその秋がとうとう終ってしまった、すなわち種をまく時期を失してしまったということである。（『芭蕉全発句』）

とまとめられた。私もこの山本説が最も拠るべきものと考える。行く秋の季節感と、それを背景にした軽い興は、それなりに分るけれども、秋が過ぎたことを、芥子と須弥山の諺に掛けたところは余り素直とは言えず、鑑賞の曇りとなっている。

792

菊の花咲や石屋の石の間　（藤の実）

秋季（菊の花）。

語釈 **○菊の花咲や**「菊の花咲くや」。**○石屋の石の間**「石屋の石の間」。「石屋」は、石材を加工する職人の店。その店先にごろごろしている石材の間に、菊が咲いているのである。「間」は、「あひだ」に同じ。「斯有んと思ひしゆへ、いしやめを詮義に事寄窺ふ所」（『一谷嫩軍記』第三）「冬川や木の葉は黒き岩の間　惟然」（『続猿蓑』下）「Ai. Auai. l, ma.」（『日葡辞書』）。

大意 石屋の店先の石がごろごろした間に、菊の花が咲いている。こんな所にも咲くのだなあ。

考 「八町堀にて」（『翁草』）「八町堀に行て」（『蕉翁句集』）等の前書があり、『蕉翁句集草稿』には「此句自筆物に、八町堀に行とてと有」と注している。「八町堀」は「八丁堀」とも書き、現東京都中央区、京橋川下流の白魚橋から東側の川筋をいう。江戸時代には町奉行配下に属する与力・同心の組屋敷があった。この堀割はもともと慶長年間に舟入場として造られたもので、石材を舟で運ぶのに便であったところから、石屋が多かったのである。恐らくは深川から其処へ赴く途中、街上の所見を句にしたものであろう。元禄七年五月に成った素牛（惟然）の『藤の実』初出であるから、元禄六年秋までには成っていた句と推定される。

石屋は道路に面した前庭に石材を置いておく。そういう石のごろごろした間に、野菊が咲いているのに目を留めたのである。古注に、「石燈籠など切りて立置たる間に、痩たるきくの花を見ての吟なるべし。かゝる所にも時をたがへずして咲くは、やさしき事と也」（東海呑吐『句解』）「唯眼前の風情を出たる所にして、亦奇妙と云べし」（信天翁『笈の底』）などとある通りであって、ただ眼前の景を写生的に描いたのではなく、潤いのない周囲にも拘らず、生命のしるしをあらわしている微物への感動が見える。

一見何の奇もないように思われるが、その淡々たる中に芭蕉のしずかな驚きが見られ、それが「菊の花咲くや」という呼吸に感ぜられる。後代こうした表現があり余るほど無反省につくられているので、現代人は見逃しがちであるが、「咲くや」というあたりに、呼吸を乱さぬ驚きがあり、この驚きは、以前のように驚きを外に放出するのではなく、静かな心の波立ちをたのしむ老境のすがたが見られると思う。「石屋の石の間」も写実・格調ともに成功している。この句には軽みへの志向もうかがわれる。（『芭蕉全句』）

という加藤楸邨氏の鑑賞は周密といわなければならない。

793

ものいはでたゞ花をみる友もがなといふは、何がし鶴亀が句なり。わが草庵の坐右にかきつけゝることをおもひいでゝ

ものいへば唇寒し秋の風

（続蕉影余韻所収真蹟懐紙）

清海泰堂氏旧蔵真蹟懐紙・松山市立子規記念博物館蔵真蹟大短冊・某氏蔵真蹟大短冊・芭蕉翁遺墨集所収真蹟大短冊・芭蕉庵小文庫・泊船集・草庵集・本朝文選・蕉翁句集・和漢文操・つのもじ・霜の葉・蕉門録・巾秘抄

秋季（秋の風）。

語釈 ○**ものいはでたゞ花をみる友もがな**　「物言はで唯花を見る友もがな」。話をすることもなく黙って唯花を見るような友が欲しい、という意の発句。共に居るだけで風雅の心が通い合う友を願うのである。「物いはで石にゐる間や夏の勤（曾良）」（『曾良書留』）「雛ならで名乗を名乗ル人もがな（沾圃夢想）」（『翁草』）。○**何がし鶴亀**　「何某鶴亀」。「鶴亀」は俳人の名であるが、未詳の人物。「曾良何某」（Ⅱ267前書）と同じく、おぼめかした言い方である。○**わが草庵の坐右にかきつけゝること**　「我が草庵の坐右に書き付けゝる事」。「坐右」は、身のまわり。身近に書き付けて飾って置き、常に見られるようにしたというのである。「座右にすとは、側に置といふこと」（『譬喩尽』六）「料足つゝみたる紙のはしに書つけ侍る」（『猿蓑』巻二、去来発句「つゞくりも」前書）「Caqitçuqe, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**おもひいでゝ**　「思ひ出でゝ」。○**ものいへば**　「物言へば」。○**唇寒し**　「唇寒し」。「寒し」は

冬の季語であるが、ここでは「秋の風」が季語として立つ。「唇に墨つく児のすゞみかな　千那」（『猿蓑』巻二）「Cuchibiru.」（『日葡辞書』）。

大意　余計なことを口にした後では、秋風がそぞろ身にしみて、唇がうそ寒いような感じがするものだ。

考　「ものいはでたゞ花をみる友も哉と何某鶴亀が云けむ、我草庵の坐右に書付ける事をおもひ出て」（清海泰堂氏旧蔵真蹟懐紙）「三緘」（松山市立子規記念博物館蔵真蹟大短冊）「坐右銘」（某氏蔵真蹟大短冊）「座右」（芭蕉翁遺墨集所収真蹟大短冊）「座右之銘／人の短をいふ事なかれ／己が長をとく事なかれ」（『芭蕉庵小文庫』『泊船集』『本朝文選』『蕉翁句集』）等の前書があり、支考の『和漢文操』には「関口ノ聯」と題して句のみを収め、「評に云、此発句のはじめは、唐紙の三半なる物に書きて芭蕉庵の柱かくしなるを、洛の去来子が物数奇より、落柿舎の聯となせるよし。祖翁の一行物といひて、其類は世にまれなるべし」と付記している。

句の成立時期について確かなことは分らないが、「武陵芭蕉翁」（続蕉影余韻所収真蹟懐紙）「武陵江上散人芭蕉翁」（清海泰堂氏旧蔵真蹟懐紙）「東野ばせを」（松山市立子規記念博物館蔵真蹟大短冊）等の落款によれば、これらの真蹟が江戸で書かれたことは明らかである。それに、支考が「芭蕉庵の柱かくし」と言っているのは、実見していたことに違いないが、芭蕉と彼との関係からして、この「芭蕉庵」が細道の旅以前のそれだった筈はなく、元禄五年五月以降の第三次草庵でなければならない。鶴亀なる人の句を書いて座右に置いたというのは、『蕉翁句集』が元禄四年の部に入れているように、上方滞在中の可能性もあり、岡田利兵衛氏も真蹟懐紙の揮毫年次を、筆蹟の特徴から元禄三、四年とも推定しておられる（『芭蕉の筆蹟』）。支考の「芭蕉庵の柱かくし」云々は、年代の降るものでもあり、なお不確かな憾みはあるが、それによって句が元禄五、六年の秋までに成っていたことは略々推定出来よう。『後の旅』（如行撰、元禄八年刊）所収、尾張の鼠弾の芭蕉追悼句に、「物いへば唇さむしと云坐右の銘、今は記念となり侍／唇はなみだに氷る寒さかな」とあるのによれば、鼠弾は元禄七年夏最後の旅で名古屋に立寄った芭蕉にこの句を書いて貰ったようである。また、

播磨姫路の千山七回忌追善集『霜の葉』（享保十七年成）の元貫の序に、

月のあかゝりける夜両吟して侍けるに、京よりと云文を見れば、去来が手して、翁の句に、ものいへば脣寒し秋の風ときこえ侍ければ、誠や脣うすふして歯寒しと人の嗜べきことにぞあめる。この一句にしほれ侍て、去来がもとへ……まうしつかはしける。去来がかへりに、翁にかたり侍ければ、冬ごもりはなにはの人〻とゞめなむ。二見の浦はあけてこそ見めときこえ侍ければ、厚風が茶を好ける寂なる所に春をまちけるに、之白がもとより夢は枯野の一句を送けるにぞ、こしはぬけしを、……

とあって、ここにいう去来の文通が元禄七年の事だったのは、文の内容から見て明らかであろう。去来もこの頃はじめて「ものいへば」の句を知ったらしく、元禄五、六年の秋という句の成立年次を裏付ける参考資料となるのである。「人の短をいふ事なかれ。己が長をとく事なかれ」とは、『文選』巻二十八に見える崔瑗の「座右銘」をそのまま引用したもので、鶴亀の句よりはこの方が「ものいへば」の句の内容には相応しい。『小文庫』等の前書も恐らく真蹟に拠ったものであろうし、これが後案と思われる。幕末期の『一葉集』は、中七を「唇さぶし」と表記しているが、この異同は大した問題ではない。

この句は純粋な文学的動機によって成った句でない為に、評価は人によって区々である。鶴亀の「ものいはで」の句を前書にしていた段階から、人前での言説を慎む意味は含まれていたものであろう。ただそれは真向からの教訓として発想されたことではなく、芭蕉自身の苦い経験が裏付としてあったと思われる。それ程この句には、身にしみる秋風の季感が滲透しているのである。このことは夙く和辻哲郎博士が、

何かおしやべりをした後の気持がよく出てゐると思ひます。句の内容は芭蕉自身の痛切な経験から出たのでせう。前書は恐らく芭蕉が句に合せて後からつけたんぢやないかと思ひます。人の悪口をいつたり、人前で演説したりした後ではよくこんな気持になりますね。……

「さむし」はどうしても魂のさむさですね。しかしそれを魂のさむさなどといふ能のない言葉で云はないで「唇さむし」と云ひ現はすところに、ふつくらとした味が出てくるのだと思ひます。「秋の風」もその意味で同じやうに「魂のうすら寒さ」を表はしてゐると思ひます。つまり、秋の風に吹かれて物云ふ唇が寒い、といふやうな感覚的な経験をかりて比喩的に心持を現はしてゐるのでなく、「唇さむし」、「秋の風」といふ別々の、離れ離れの感覚的経験をかりて、その一つ一つで精神的な寒さを表現してゐるのでせう。従つてこの秋の風は、唇に感じられる点だけを取り出したのでなく、全身に滲み亙つてくる点を捕へてゐるのです。（『続々芭蕉俳句研究』）

と精しく考えておられ、志田義秀博士も、

俳句に諷誡の意を寓する事は俳句の本道でない事は云ふまでもないが、諷誡の意を寓しながら猶文芸的性格を保持するものであつたら、そこに文芸的価値が認められねばならないであらうし、又寓意は文芸を通じて許さるべき事でなければならないと思はれる。……今この句を見ると、……秋風の季感が十分感ぜられる上に諷誡の意が汲まれるので、決して諷誡の意のみを叙したものではなく、諷誡の意は実に裏に潜むものなのである。されば斯る手法に於てのこの句は、斯る句として文芸的価値が認められてよく、而もこの種の句としては傑出したものと見られねばならないであらう。（『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』）

と、かなり高く評価しておられる。

文学として純粋なものではないが、一方どこかに芭蕉らしいところがあることも、否定できない。芭蕉は人に教訓のつもりでこの句を作ったのではあるまい。おそらく、あんなことを言うのではなかったというような、苦い反省の中で、自分へのつぶやきとして詠んだものであろう。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

という井本農一博士の見方も心に留めておきたい。座右の銘としての意味は後からつけたにもせよ、これまた芭蕉の意志であった。多くの真蹟が残っているのは、その面からの需要に応えたものだったのであろう。

794

琴箱や古物棚の背戸の菊（住吉物語）

泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

秋季（菊）。

語釈 ○**琴箱**　「コトバコ」。琴を入れておく箱。大きくて普段は持ち運びしない。また、琴の胴を指すこともある。「琴箱の行き所を見りや質屋也」（『柳多留』四編）。○**古物棚**　「フルモノダナ」。古着や古道具を商なう店。「棚」は「店（たな）」と同じ。「魚の店」（Ⅳ759）参照。○**背戸**　「セド」。家の裏門。既出（Ⅱ411）。

大意 古物屋に大きな琴箱が置かれてあり、裏門の方には菊の花の咲いているのが見える。

考 『蕉翁句集』には「大門通るに」と前書があり、『泊船集』には「此句は去来の物がたりにて聞侍りぬ」、『蕉翁句集草稿』には「此自筆物に、大門通過るにと前書有」とそれぞれ注している。「大門通」は江戸の元吉原（現東京都中央区日本橋人形町）の大門に通ずる道路で、現在の日本橋大伝馬町付近、古道具屋が多かったという。『蕉翁句集』は元禄四年の部に出しているが、江戸での晩年の作とすれば、成立時期は元禄五、六年の秋でなければならない。板本としては青流（祇空）の『住吉物語』（元禄九年刊か）が初出である。

繁華な江戸の街筋を歩いていて、古物屋の店先に古雅な琴箱のあるのが目に入った。琴が入っているのか或いは箱だけか、それは何れでもよいが、ふと覗き込むと背戸まで見通しになっていて、裏口に菊の花が咲いているのが見える。琴箱と菊と、陶淵明が無絃の琴を弾じ、菊を愛したことも偲ばれて、店主の丹精もゆかしい。句はそれをスケッチした趣で、雅懐は余情としておのずから味わわれるように仕上げられている。「菊の花咲や石屋の石の間」（792）の句と似ているが、それには菊の生命に対する驚きの情があった。当面の句はそれとちがって、街頭の所見を句の形にまとめたに過ぎない。ただ琴と菊という風雅な取合わせが、こんな街頭風景にもあるのだと、さり気なくいっている

ようなところが「軽み」なのであろう。

深川の末五本松といふ所に舩をさして

795 川上とこの川しもや月の友 (続猿蓑)

深川の五本松といふ處に舟をさして

川上とこの川下と月の友 (泊船集)

秋季(月)。

語釈 **○深川の末五本松といふ所** 「五本松(ごほんまつ)」は、今の東京都江東区猿江二丁目の内の小名木川添いの俗称地名。古松が五本あったところからの名であるが、後年には一本のみ残り、明治四十二(一九〇九)年頃、廃滅した。「末(すゑ)」は、はずれという程の意。深川の東に当る。(Ⅳ*751*)参照。**○舩をさして** 「舩(ふね)をさす」は、棹で船を動かすこと。「舩」は「船」と同じ。「川風に一むら柳春見えて 宗長 舟さす音もしるきあけがた 宗祇」(『水無瀬三吟』)「**Funeni sauouo sasu.**」(『日葡辞書』)。**○川上** 「カハカミ」。川の上流。「すゐやみな川かみすめる春の水」(『宗長手記』上)「**Cauacami.**」(『日葡辞書』)。**○この川しもや** 「此(こ)の川下(かはしも)や」。「川しも」は、川の下流。作者の位置は「川しも」に在り、それを「この」と強調した。「や」は、詠嘆の切字。「此川下、岩落と申す所を通り候ひしに」(謡曲『鵜飼』)。**○月の友** 月見の仲間。既出(Ⅱ*426*)。

大意 船に棹さして船上の月見と洒落ているのだが、我々の居るこの川下同様に、川上の方でも月を見る風雅の仲間が居るのだなあ。

考 『続猿蓑』の前書によれば、江戸での作であり、元禄七年秋には上方に在ったので、元禄五、六年の秋の作と推定される。『泊船集』の句形は切字がなくなるし、孤立した所伝ゆえ信じ難く、『蕉翁句集草稿』にも「違也」とある。

小名木川の上流葛飾の阿武には親友山口素堂の庵があった。この句の「川上」は恐らく素堂を思っての言葉で、良夜に風雅の友を求める気持を託しているのである。川下には杉風の庵があると、両者を思ったとする解もあるが、「この川しも」は、芭蕉の現在居る五本松あたりと見るべく、上下両方に思いを馳せるという説は採らない。「月を友とする」と解するのは誤りであろう。『御傘』に「月の友　人倫也。……月を友、人倫にあらず」とあるように、「月の友」と「月を友」を混同してはならない。「月の友」とあれば「月見を共にする風雅の仲間」即ち人倫とするのが基本である。一筋の川の流れの上と下で、風雅の隠士が月見をする興が、はずんだ調子に流露した「軽み」の句である。

岱水亭にて

796　影待や菊の香のする豆腐串　（杉丸太）

蕉翁句集

秋季（菊）。

語釈　○**岱水亭**　「岱水（たいすい）」は、姓氏俗名、歿享年等未詳。芭蕉庵の近隣に住んでいた蕉門俳人である。初号苔翠。句は貞享四年の『続虚栗』（其角撰）に初めて見える。「深川八貧」（Ⅱ*357*頁）の一人で、元禄五年の第三次芭蕉庵建設にも尽力した。宝永元（一七〇四）年、芭蕉の『更科紀行』を含む『木曾の谿』を撰した。○**影待**　「カゲマチ」。正月、五月、九月の吉日に人々が集まり、徹夜して日の出を拝する行事。ここは下に「菊の香」とあるから九月の場合である。「月待」（Ⅳ*651*）参照。「五月十四日の夜はさだまって影（かげ）待（まち）あそばしける」（『好色五人女』巻三ノ二）。○**菊の香のする豆腐串**　「菊（きく）の香（か）のする豆腐（とうふ）串（ぐし）」。「豆腐串」は、田楽豆腐などを青竹の串にさしたのをいう。それにも菊の香がするといって季節を利かせたのである。「Cuxini sasu.」（『日葡辞書』）。

大意　菊咲く頃の影待では、おもてなしの豆腐に刺した串までも、菊の香りがすることです。

考　初出の『杉丸太』（佐越撰、宝永二年成）は筑後久留米の撰集で、野坡の指導下に成立した俳書である。江戸に於ける秋の句なので、元禄六年の秋までには成っていたものと思われる。
「月待」と「影待」を混同した解が多いが、月を拝むのと日を拝むのと、両者は別の事である。しかし、何れも信仰行事から発して遊楽化したものである点は変りがない。岱水亭の影待に招かれて一夜を過すもてなしに田楽豆腐などが出たのであろう。「籬の竹を取敢ず串に削」（杜哉『蒙引』）ったものかどうかは知らず、その竹串までも菊の香がするといって、挨拶の意を表したのである。もてなしの料理と傍らの菊の鉢を両つながら賞した巧みな即興で、「菊の香」の雅に「豆腐串」の俗を配した軽みの工夫も見える。

塔山(ママ)産業の爲に江府に居る事三月、予はかれが朝寐をおどろかせば、かれは予が宵寐をたゝきて方寸をくみしり、寐(ママ)食をともにしたる人に似たり。けふや故郷へ帰るを見おくらんと、杖を曳てよろぼひ出たるに、秋の名残もともにおしまれて

797　むさし野やさはるもののなき君が笠（続寒菊）

枯野集

雑。

語釈　○塔山　「嗒山(たふざん)」と書くのが正しい。美濃大垣の蕉門俳人。既出（Ⅲ*449*前書）。○産業　この語を中世・近世期に於いては、現代通用の生産業という意味とはちがって、生きて行く為の「生業」の意に用いた。音読すれば「サンゲフ」、訓読すれば「スギハヒ」「ナリハヒ」であって、ここは「スギハヒ」と訓まれることが多いが、よみ方は確定し難い。○**江府に居る事三月**　「江府(かうふ)に居(を)る事(ことみ)三月(つき)」。「江府」は、江戸のこと。嗒山が生業（恐らくは商用）の為に江戸に三箇月滞在していたのである。文の末尾に「秋の

名残もともにおしまれて」とあるから、嗒山は七、八、九月の秋の間江戸に居たものと思われる。「必人にさたすべからずと、江府より書贈り給ふ」（『去来抄』同門評）「餅つきや内にもおらず酒くらひ　李下」（『あら野』巻五）「Cunxi manza sureba, xôjin vorazu.」（『日葡辞書』）。○**予はかれが朝寐をおどろかせば**　「予は彼が朝寐を驚かせば」。私は彼（嗒山）の朝寝をしているところを訪ねて目を覚まさせると、の意。前にも「嗒山旅店」（Ⅲ*449*前書）とあったように、嗒山は深川近くの宿屋に泊っていたのであろう。芭蕉庵の近くでないと、ここに見えるような頻繁な親交は出来なかったと思われる。「かれが」の「が」は所有格。「あるじとする物は久米之助とて、いまだ小童也。かれが父俳諧を好み」（『おくのほそ道』）「朝寐する人のさはりや鉢鼓　文潤」（『あら野』巻八）「をやまだのいほちかくなく鹿の音におどろかされておどろかす哉」（『山家集』上）「Care.」「Asane.」「Vodorocaxi, su, aita.」（『日葡辞書』）。○**かれは予が霄寐をたゝきて**　「彼は予が霄寐を敲きて」。「霄寐」は、早くから寝ること。「霄」は「霄」の略字で、「宵」に同じ。「たゝく」は、戸を敲く、訪ねて来る意。彼（嗒山）の方は夜芭蕉が早寝をしているところへ訪ねて来て。前の「予は……おどろかせば」と対句になっている。「霄寐がちに朝をきしたるね覚の分別なに事をかむさぼる」（「閉関之説」）「応〱〵といへどたゝくや雪のかど」（『去来抄』同門評）。○**方寸をくみしり**　「方寸を酌み知り」。「方寸」は、人の心中の考え。「方寸」は元来「一寸四方」の意で、心が胸中方寸の間にあるところから、「心」「考え」の意を生じた。ここの「方寸」は両者お互いの考えとしても通ずるが、主として俳諧に対する芭蕉の考えを意味すると見たい。それを嗒山が酌み取って領知したというのである。「江山水陸の風光数を尽して、今象潟に方寸を責」（『おくのほそ道』）「常に芭蕉の軒に行かよひ、瓦の窓をひらき、心の泉をくみしりて」（『炭俵』素龍序）「Fôsun.」（『日葡辞書』）。○**寐食をともにしたる人に似たり**　「寝食を共にす」は、寝所と食事を共にして共同生活をすること。二人は同居していたわけではないが、宛かも共同生活をしているようだった、という意。「寐」は音「ビ」。「寝」と意味は同じでも別字であって、「寐食」という漢語はない。「寐」を「寝」の略字のように扱っているのである。ここは「幻住庵記」の「やゝ病身人に倦て、世をいとひし人に似たり」と言い方が似ている。「御在唐七箇年ノ間寝食ヲ忘テ顕密ノ奥義ヲ究メ給ヒテ」（『太平記』巻十五）「Xocu.」（『日葡辞書』）。○**けふや**　「今日や」。「や」は間投助詞。○**故郷へ帰るを見おくらんと**　「故郷へ帰るを見送らんと」。嗒山が故郷の大垣へ帰るのを芭蕉が見送ろうと。「故郷」は既出（Ⅰ*184*）。「フルサト」とも訓める。なお、（Ⅱ*418*）参照。○**杖を曳てよろぼひ出たるに**　「杖を曳きてよろぼひ出でたるに」。杖を曳きずってよろよろと芭蕉庵の門口を出たところ。「杖を曳く」は、逍遥散策することをもいうが、ここは文字通り杖を曳きずるようにして出掛けるさまを描いた表現

で、「よろぼひ」の語にも、足許のおぼつかない老身の様子が出ている。「つゑをひく事僅に十歩」（『冬の日』杜国発句「つゝみかねて」前書）「聟共孫共縁きれたか情なやとよろぼひ出」（『鑓の権三重帷子』下）「Yoroboi, ô, ôta.」（『日葡辞書』）。○**秋の名残もともにおしまれて**「秋の名残も共に惜しまれて」。嗒山の名残と共に、あたりの景色から、去り行く秋との名残も惜しまれる、というのである。「おしまれて」は自発。「お」は「を」の仮名ちがいである。「名残惜しむ」は既出（Ⅱ *338* 前書）。「さすがに春の名残も遠からず」（『幻住庵記』）。○**むさし野**「武蔵野」。今の東京都と埼玉県にまたがる平野。広くは関東平野をいう。既出（Ⅰ *145*）。○**さはるものなき君が笠**「障る物無き君が笠」。「君」は嗒山を指す。笠を着た貴方の旅姿を見送る我が目に、見る妨げになるものは何もない、の意。名残を惜しんで何時までも見送る作者の眼ざしが思われる。「さはるものなき」には、嗒山が障りなく無事に故郷への旅を終えられるように、という意味も籠められている。「月かげばかりぞ、やへむぐらにもさはらず、さし入たる」（『源氏物語』桐壺）「Sauariuo suru.」（『日葡辞書』）。

大意　秋も末の武蔵野は見渡す限りうら淋しい。笠を着た貴方の旅姿を見送る我が目に、見る妨げになる物は何もなく、何時までも姿が見えることだ。

考　芭蕉在世当時の古集には見えず、遥かに時代の降る『続寒菊』（杏廬撰、安永九年刊）初出の句であって、『枯野集』（屋烏撰、文政二年刊）には、伊予大洲藩浮舟所蔵の真蹟によって収められている。文章には紛れもない芭蕉その人の特色が現われており、信憑性の高いものである。雑の句なので、季節の面から年代を知る手掛りに乏しいが、前書に「秋の名残もともにおしまれて」とあり、それと「塔山産業の為に江府に居る事三月」と冒頭にあるのを参照すれば、嗒山は七、八、九の三箇月にわたって江戸に滞在していたと見られ、その間芭蕉もずっと深川に在庵していた時でなければならない。更に「杖を曳てよろぼひ出たるに」という老身を思わせる表現は、貞享期の芭蕉ではあり得ないとすれば、どうしても元禄五、六年の頃に絞られて来るであろう。姑くこの両年のうち何れかの九月末の吟と見ておく。

広々と果てしなくひろがる武蔵野は、「むさし野は草のは山もしもがれて出づるも入るも月ぞさはらぬ」（家隆『壬二集』）と詠まれ、「むさし野は月の入るべき山もなし草より出でて草にこそ入れ」（『扇の草子』）といった著名な俗歌もあ

る。折から秋も末とて草木は末枯れて、原野には遮る物もなく、旅人の笠が何時までも視界から消えないのを「さはるものなき」と表現して名残を惜しむ情を託し、また恙ない旅路を祈る意を兼ねさせたのである。「さはる」に「触る」を掛けて末枯れの季節を暗示したという見方もあるが、「障る」に病気や故障を掛けたとするだけでよいのではあるまいか。句の季語について『校本芭蕉全集』第二巻では、右の俗歌によって「月を隠して秋季の心をもたせたものか」としているが、必然の論ではないようである。

野馬と云もの四吟に

798　金屏の松の古さよ冬籠り　（十月九日付許六宛書簡）

霜月八日付荊口宛書簡・炭俵・続五論・泊船集書入・入日記

金屏に松のふるびや冬籠り　（笈日記）

金屏の松もふるさよ冬籠　（芭蕉庵小文庫）

金屏の松のふるびや冬籠　（陸奥衛）

金屏風の松のふるびや冬籠　（蕉翁句集草稿）

泊船集・三冊子・蕉翁句集

冬季（冬籠り）。

語釈　**○野馬と云もの**　「野馬（やば）と云ふ者（もの）」。「野馬」は、志太氏、後には竹田氏。名は弥助。越前福井の出身で、江戸に出て越後屋に奉公し、両替店の手代を勤めた。俳諧は初め其角の指導を受け、貞享四年の『続虚栗』に発句十句が見えるが、数年の空白期の後、元禄六年秋頃から芭蕉に就いて再出発した。翌七年には孤屋・利牛と共に『炭俵』を撰し、俳壇に名を馳せた。「野坡」と改号したのもこの頃である。宝永元（一七〇四）年大坂に移り、西国筋に屢々行脚して一門の勢力を扶植した。蕉門十哲の一人に数えられるが、句風は平俗である。元文五（一七四〇）年正月三日歿、享年七十九。**○四吟**　「シギン」。四人の連衆による俳諧の付合をいう。

「三吟」（Ⅳ789前書）参照。この四吟の俳諧は今伝わらない。○**金屏**　「キンビヤウ」。地紙に金箔を置いた屏風。「金屏のかくやくとしてぼたんかな（蕪村）」（『新花摘』）「Qinbiŏ.」（『日葡辞書』）。○**松の古さよ**　「松」は「金屏」に描かれてあるもの。それが年代を経て古びを帯び、雅味が感ぜられるのが「古さ」である。○**冬籠り**　寒さを避けて籠居する冬の生活をいう季語。既出（Ⅱ325等）。

大意　冬籠りする一間には松を描いた金屏風が立ててある。その松の蒼古な趣がゆかしいことだ。

考　底本とした十月九日付の許六宛書簡は元禄六年と推定されるもので、句はその十月上旬に成ったと推定される。翌七年刊の『炭俵』の素龍序には、

此集を撰める孤屋・野坡・利牛らは常に芭蕉の軒に行かよひ、瓦の窓をひらき心の泉をくみしりて、十あまりなゝの文字の野風をはげみあへる輩也。霜凍り冬どのゝあれませる夜、この二三子庵に侍て火桶にけし炭をおこす。菴主これに口をほどけ、宋人の手亀らずといへる薬是ならんと、しのゝ折箸に煻のさゝやかなるを、竪にをき横になをしつゝ、金屏の松の古さよ冬籠と舌よりまろびいづる声の、みたりが耳に入、さとくもうつるうのめ鷹のめども、是に魂のすはりたるけにや、……

と、句の成った際の模様が述べられている。恐らく野坡の発企で右の三人が芭蕉庵に会し、庵主と共に付合をしたのであろうが、その発句として詠まれたのが当面の句である。土芳の『三冊子』には、「この句、はじめは、山を画て冬籠り也。後直し也」（赤雙紙）とあり、『蕉翁句集草稿』には、「屏風には山を画て冬籠」（Ⅲ572）の句と並べ掲げて、

是金屏の松は炭表（ママ）の句也。山を絵書は、いがの平仲が宅にての吟也。炭表（ママ）は後の事なれば、画の句を直して松とは成るか。猶二句の筈か、覚束なし。先、金屏の松一句にして置侍る也。（笈日記の句也。小文庫には松のふるさよと有。）

と考証している。元禄二年冬伊賀での「屏風には」の句を直して「金屏の松」の句としたかという土芳の推測は恐らく正しく、前作の趣向を踏襲しつつ、新たな句に仕立て直したのであろう。ただ、土芳が『笈日記』の句形を本位句としたのは、『炭俵』が序の中での引用なので、その他の板本初出として『笈日記』に拠ったものかと思われる（「金

屏風の」は衍字)。『陸奥鵆』も基本的には『笈日記』系で、当面の句の異同を考える場合には、『笈日記』の句形が一番の問題である。しかし、これに確たる根拠があったとは思えず、うろ憶えなどによる杜撰の疑いが強い。二通の真蹟書簡と『炭俵』が一致する句形が唯一信頼すべきものであろう。「屏風には」の前案と別の扱いにするかどうか、土芳は迷っているけれども、「山」と「松」と異なる上、表現もかなり異なるので、本書ではそれぞれ一句の扱いとした。

支考の『続五論』(元禄十二年刊)にこの句を引いて、

金屏はあたゝかに、銀屏は涼し。是おのづから金銀屏の本情なり。……金屏銀屏のうち出たる本情は、貴品高家の千畳敷とおもひよるべし。それを松の古さよといはれたれば、蝶つがひもはなれぐ\に兀かゝりて、ばせを庵六畳敷のふゆごもりと見え侍るか。是風雅の淋しき実なるべし。金屏のあたゝかなるは物の本情にして、松の古さよといふ所は、二十年骨折たる風雅のさびといふべし。

と述べてある。支考はこの「金屏」を芭蕉庵中の趣と見ているが、如何にこわれかけた物にもせよ、金屏風は芭蕉庵に相応しくあるまい。思うに、元禄二年冬「屏風には」の句が成った伊賀の平仲という人の家が富裕だったのであって、四年後にふとその趣が脳裏に浮び、「金屏の松の古さよ」の句案となったのではあるまいか。それを訪れて来た野坡らに示したところ、これを発句に付合をすることになった。そう考えれば、この句に挨拶の意がないのも納得が行く。兎に角この句の「金屏」は、けばけばしい趣のものではない。古注に「誠に古法眼が墨絵の松、年ふるにしたがひ、松風の声音信るゝかと、木かげに冬籠りの人ゆかし」(東海呑吐『句解』)とあるような、蒼古な絵の趣がこの句の眼目である。その金屏を部屋に置いて冬籠りする人までがゆかしく偲ばれる「寂び色」の世界といえよう。

十月九日付許六宛書簡・芭蕉庵小文庫・続猿蓑・篇突・泊船集・入日記・蕉翁句集・青ひさご

素堂菊園ニ遊びて

799 菊の香や庭にきれたる沓の底（真蹟扇面）

素堂菊宴

菊の香や庭に切たれ沓の底（霜月八日付荊口宛書簡）

菊の香や庭にきれたる沓の尻（五月十四日付芭蕉宛去来書簡）

秋季（菊）。

語釈 **○素堂菊園**「ソダウキクヱン」。葛飾阿武にあった素堂の隠宅の菊を植えた庭。［考］に引用する馬莧の発句に見えるように、菊畠があったのである。貞享五年九月にも、素堂は知友を会して菊の宴を開いたことがあった。（Ⅱ432）参照。**○きれたる沓の底**「切れたる沓の底」。この「沓」は履物という程の意。『続猿蓑』に「履」となっているのは、やや唐めいた字を宛てたまでで、「クツ」と訓むことに変りはない。その「底」といったのは、裏返しになっているさまをあらわしたのである。「鞋底魚　うしのした一名くつぞこ……江戸にて舌びらめと呼」（『物類称呼』二）「Soco.」（『日葡辞書』）。

大意 菊の香の漂う庭先に、すり切れた履物が底を見せて裏返しになっているよ。

考 「前書きれてみへず」（『芭蕉庵小文庫』）「元禄辛酉之初冬九日素堂菊園之遊／重陽の宴を神無月のけふにまうけ侍る支は、その比は花いまだめぐみもやらず、菊花ひらく時則重陽といへるこゝろにより、かつは展重陽のためしなきにしもあらねば、なを秋菊を詠じて人〳〵をすゝめられける支になりぬ」（『続猿蓑』）等の前書があり、許六宛書簡にも真蹟扇面と同じ前書が見える。『続猿蓑』の「元禄辛酉」は「癸酉」の誤りで、即ち元禄六年十月九日の吟と知られる。九月九日の重陽の節には菊の莟がまだ開かなかったので、蘇東坡の文（『蘇東坡詩集』巻六「江月五首」の引）に「菊

花開時乃重陽」とあり、また「展重陽」（国忌等によって宮中の重陽の宴が繰り延べになること。村上天皇の天暦期に例があったという）の例もないわけではないので、一月おくれの雅遊を催し、暦の上ではもう冬ながら、秋菊を句に詠ずることにしたのであった。『続猿蓑』には芭蕉の句の後に、

柚の色や起あがりたる菊の露　其角
菊の気味ふかき境や藪の中　桃隣
八専の雨やあつまる菊の露　沾圃
何魚のかざしに置ん菊の枝　曾良
菊畠客も円座をにじりけり　馬莧

柴桑の隠士無絃の琴を翫しをおもふに、菊も輪の大ならん事をむさぼり、造化もうばふに及ばじ。今その菊をまなびてをのづからなるを愛すといへ共、家に菊ありて琴なし、かけたるにあらずやとて、人見竹洞老人素琴を送られしより、是を夕にし是を朝にして、あるは声なきに聴き、あるは風にしらべあはせて、自ほこりぬ

うるしせぬ琴や作らぬ菊の友　素堂

という句文があり、これらの人々が会したことが知られる。句の異形のうち、荊口宛書簡の「切たれ」は芭蕉自身の誤筆、去来書簡の「沓の尻」も杜撰であって、真蹟扇面の句形に疑いはない。

風雅な「菊の香」と、「きれたる沓の底」の対照が俳諧で、一見無造作な句作りながら、不図庭を見ると切れたる草履の底が打捨てゝある、菊を愛する為に常に園を往来してかく草履を切ったのであらうが、其れを無頓着にもかく取片付けもせぬのは、風流人の面目が表はれてよいと、素堂の性格を称へたのである、……（『芭蕉句集講義』角田竹冷説）

と見れば、主人への挨拶の意も籠めたことになる。「沓」「履」等の字を用いてはいるが、実際は市井常用の草履か庭下駄であろう。その辺に雅中に俗を生かす晩年の工夫が見える。

800

古將監の古實をかたりて
月やその鉢木の日のした面　（翁草）

冬季（冬の月）。

語釈 **○古将監の古実**　「古将監(こしやうげん)」は、能楽シテ方宝生流八世の家元重友のこと。服部氏で、将監と称した。蕉門俳人沾圃はその三男である。貞享二年八月十三日歿、享年未詳（Ⅳ*789*前書参照）。「古実(こじつ)」は「故実」に同じ。後世の典例となるべき仕きたりのことである。重友は従来宝生流になかった獅子舞や乱拍子を案出して、世に古将監と称されたというが、ここの「古実」が具体的にどういうことを指すかは、なお詳らかでない。「古実」の語は『日葡辞書』に「Coxit.…… Coxitno jin.」とあって「Cojit.」はないが、『下学集』は「古実(コジツ)」と濁っている。「凡いまの条々くふうは、初心の人よりは、猶上手にをきてこじつくふうなり」（『風姿花伝』第五）。**○かたりて**　「語(かた)りて」。芭蕉の発句に脇を付けた沾圃との間で話題になったことをいう。**○月や**　「月」は本来秋季であるが、この句は十月の作で、且つ下の「鉢木」の謡曲が十二月の演目であるところから、冬の月と見られる。だからこそ以下の付合に冬の句が続いているのであろう。「や」は詠嘆の切字。こういう切れ方は珍しい。**○その鉢木の日のした面**　「その」は、古将監の「じた面」であることを強調した表現である。「鉢木(はちのき)」は、最明寺時頼が廻国の途次、上州佐野の零落した武士佐野源左衛門尉常世の家で雪の一夜を過し、愛蔵の鉢木を焚いてもてなされた話を脚色した謡曲。それを古将監が演じた日が「鉢木の日(ひ)」である。「した面(おもて)」は「直面(ひたおもて)」の訛転といわれ、シテが面をつけない素顔で演能すること。江戸訛りでは「ヒ」が「シ」に変ることがあるが、伊賀出身の芭蕉の言い方とは思えない。『翁草』板下の誤りであろう。現在物の男ジテである「鉢木」の能は、直面で演ぜられる。

大意　月が如何にも美しい。古将監在世の頃、「鉢木」を演じた日の、素顔をあらわした俤が偲ばれることだ。

考

『翁草』（里圃撰、元禄九年刊）には、芭蕉のこの句を発句として、

旅人なればおりからの冬　　沾圃
水鳥等廻文のむらに来て　　其角

という三物が収められている。沾圃との関係からして、元禄五、六年江戸で詠まれたことは確かであるが、成立時期については、『校本芭蕉全集』第五巻（中村俊定氏校注）の説が注目される。元禄六年十月九日素堂の菊園の雅会で詠まれたものと見るのであって、前の句の条で記したように、この催しは九月九日の重陽の節供を一月繰り延べた会であった。沾圃・其角両人はこの席に顔を出しているし、当面の付合で発句が月の句でありながら、脇・第三が冬の句であるのも、重陽を冬にまで延ばしたことへの配慮だったかと推測される。これについては、

脇句は必ず発句の季に合せる規則であるから、沾圃が冬の句を付けたのは、発句を冬と見なしたのであろう。「月」だけでは秋だが、謡曲『鉢の木』に雪景色が籠められているから、「鉢木の日」で冬季となる。ただし冬の句は二句続きまで許されるのだが、第三も「水鳥」で冬の句になっているのは、発句の冬季が句の表面に季語として現れていないので、冬季の三句続きにはならぬとしたものか。この発句の季如何、第二第三に冬の句を用いることの可否については、芭蕉もいろいろ考えた末、このように裁断したものと思う。（『芭蕉全発句』）

という山本健吉氏の説もあり、私見としては、［語釈］で述べたように、「鉢木」の曲との関係で冬の月になると考えている。冬季発句の場合、第三まで冬が続くことはその例に乏しくない。発句を秋とすれば、秋を一句で捨てて冬を付けるというのは異例のことであるから、連衆がこの場合どう考えていたかが問題になるけれども、これらについての確たる資料はないから、推測するとすれば、前記した十月に重陽を祝うということと関連づけるのが、可能性の高い事となろう。何れにせよ、この場合に限った特殊の処置と思われる。

句意は、

「かつて古将監が『鉢の木』を演じた日、その直面（ひためん）に冬の月がさしていた能舞台のさまが、いまその日のようにあざやかに思いだされる」という意。

「その鉢の木の日の」というところに、かつて古将監が鉢の木を演じた日のことが思いだされて、それを今、さしている月から思いやっているものであろう。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

と解される。重友の生前に、芭蕉は彼の舞台を見たことになるが、全体が想化に成る句とすれば、見たかどうかは問題にならぬ。沾圃らとの話題につけて古将監の舞台を賞めた挨拶の句で、シテの直面の際立った印象と共に、この「月」には幽玄の趣があると言いたい。

神無月廿日ふか川にて即興

801 振賣の鴈あはれ也ゑびす講　（炭俵）

霜月八日付曲翠宛書簡・藤の実・五月十四日付芭蕉宛去来書簡・陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集

冬季（ゑびす講）。

語釈 ○**神無月廿日**　「カミナヅキハツカ」。陰暦十月二十日。「重陽の宴を神無月のけふにまうけ侍る叓は」（『続猿蓑』下、芭蕉発句「菊の香や」前書）「**Caminazzuqi. P. jŭguachi.**」（『日葡辞書』）。○**ふか川**　「深川（ふかがは）」。深川の第三次芭蕉庵を指す。○**振売の鴈**　「振売（ふりうり）」は、売物を手に下げたり担ったりして、その物の名を触れながら売り歩くこと。「鴈」は「雁」に同じ。霜月八日付曲翠宛書簡に「鴈（ガン）」、『藤の実』には「雁ン」と表記してあり、「ガン」と音読すべきである。「カリ」では「振売」に相応しくない。既出（Ⅲ*621*）。「鈴菜かも持ふりうりの初若菜　長好」（『毛吹草』巻六）。○**あはれ也**　「哀（あは）れ也（なり）」。○**ゑびす講**　「夷講（えびすこう）」。十月二十日に商家で家業の繁昌を祈って福の神の夷（Ⅰ*4*参照）を祀った行事。酒肴を設けて親類や取引先を招き、神前で戯れの売買をして高値をつけて縁起を祝った。「ゑびす」の仮名遣は「えびす」でよい。「恵美酒講（ゑびすかう）廿日。商人祝之」（『毛吹草』巻二、誹諧四季之詞十月条）「……和俗の商賈の輩殊に此神を市に崇め祭る也。就ㇾ中毎年今日夷講と称して商家に悉祭り、酒飯魚肉を調て客を饗す。摂州大坂には正月

十日夷を専一として、十月廿日略レ之。京都には今日を専一にし、十日夷の沙汰なし。総て此神を十月廿日に祭る事、是いにしへの市の日取なりといへり。又別に神縁のある事にや、可レ考」（『滑稽雑談』）「恵比須講鶩も鴫に成にけり　利合」（『続猿蓑』下）。

大意　今日は夷講とて町は賑わっている。呼び売りして行く商人の棒先に吊された雁の姿が何とも哀れだ。

考　元禄六年と推定される霜月八日付曲翠宛書簡（真蹟の写しが伝存）にも、「頃日漸寒に至り候而、少し云捨など申ちらし候」として「鞍つぼに」（Ⅳ*805*）の句と共に書かれているので、六年十月の作と確認される。『炭俵』にはこの句を発句として、野坡・孤屋・利牛ら一座の歌仙が収められており、夷講の日に撰者三人を会した席での即興吟なのであった。

「雁や雁」などと街中を売って歩く物売りの声が耳に入って、ふと成った即興であろう。

恵比寿講の時には多くの商人が宴席を張るので、雁なども店で売るのみならず、町々をあちこちとふり売をして歩行く、其処を見て振売をしてゐる雁は如何にも哀れげに見ゆる、此の恵比寿講の頃には、と言ったので、雁が首うなだれて行商人に提げられてゐる様ぢや。又一歩すゝめて夫れをあてもなくふり売してゐる商人もあはれ尚又た周囲の寒げな景色もあはれに見えるとしても好い。（内藤鳴雪『評釈』）

という解は、よく委曲を尽している。和歌などで普通とり上げられる来る雁帰る雁の旅のあわれではなく、捕えられて振売りされる雁は、俳諧眼の新たな発見であり、市井の日常の中に詩趣を探る「軽み」の志向にも適っている。「あはれ也」は、打ち見たところ雁のみのあわれではあるが、それを売り歩くしがない「振売」にも勿論「あはれ」はあって、それにおのずから思い及ばせるような句柄なのである。加藤楸邨氏は、

『白氏文集』には、旅雁が捕えられ、市で売られているのを「江童持レ網捕将去、手携入レ市生売レ之」とうたっているが、これが遠く芭蕉の胸にひびいていたものかもしれない。（『芭蕉全句』）

と推測しておられる。

平生は悠々（ゆうゆう）と空を飛んでいるのに、死んで振り売りの男に売物にされている雁があわれげであるというのだが、雁はかなり大きな鳥であるから、死んでだらりとしたさまが、見る人に痛ましい感じを与えるのである。また、空飛ぶさまを平生なつかしい気持で仰ぎ見、詩文でも読んでおり、自分でも句に作っている鳥が、売物にされていることにも、あわれを催したのであろう。しかも、にぎやかな夷講の日であるだけに、一層あわれである。だから「あはれ也」は、直接には「鳫」であるが、寒空の下の振り売りの男のあわれさにも、おのずから響いている。そうしてまた、周囲がにぎやかな、お祭気分であるのに、そのにぎやかさに浸りきれない芭蕉の目が「あはれ」をとらえたのである。だから「あはれ」はまた芭蕉の心情でもあろう。……ただし、この句は日常的な素材をさらっと受けとめている句で、深刻ぶったところはない。それがこの頃の芭蕉の軽みの作風である。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

という井本農一博士の説も、行き届いた見方である。

泊船集

802 ゐびす講酢賣に袴着せにけり（続猿蓑）

ゑびす講酢賣にはかまきせにける（芭蕉庵小文庫）

恵比須講酢うりに袴着せてけり（蕉翁句集）

冬季（ゐびす講）。

語釈 **○ゐびす講** 前の句に既出。「ゐ」は「え」の仮名ちがいである。**○酢売** 「スウリ」。酢を売り歩く行商人。「罷出たる者は、都にかくれもなきすうりにて候」（狂言「酢薑」）。**○袴着せにけり** 「袴（はかま）着せにけり」。袴をつけさせたことだ。「着せにけり」の主語は「ゐびす講」であろう。「袴」は既出（Ⅱ*284*）。「猿に小蓑を着せて誹諧の神を入たまひければ」（『猿蓑』其角序）「Qixe, suru.」

（『日葡辞書』）。

大意 商人の祭の夷講とて、しがない酢売りまでが袴などつけている。夷講が酢売りに袴を着せたわけで、何ともおかしい。

考 十月二十日の夷講の句は、元禄六年冬以前の成立でなければならない。賑わう町中の行商人に目を留めたところは、前の「振売の」の句と似ており、晩年の江戸に於ける作であろう。『蕉翁句集』が元禄四年の部に入れた根拠は詳らかでない。

句形の異同については、『続猿蓑』にも刊行までに支考の手の入った疑いはあるが、芭蕉親撰ともいってよいその成立事情からして、その句形が最も尊重されなければならないことは当然である。ただ、『小文庫』の「きせにける」だと、道化た調子が「けり」よりも強く出るように思われる。『蕉翁句集』の「着せてけり」は伝写の間の誤りであろう。

古注以来「袴着せにけり」をまともに取って、夷講の遊興の席で酢売りに袴をつけさせて「酢薑（はじかみ）」の狂言の真似事などさせたと見る説が多いが、正鵠を得たものとは思えない。中では、

此吟は大商人の夷講を賀したる即興成べし。何か大相に径庭（ヲコガマシ）き振舞、誠に出入の小商人迄も、袴引懸て来る有様（コト）異々敷風情を述たる興味成べし。

酢売と限り見るべからず。常に袴不レ着者迄も、今日はとて破れ袴引ずりて阿容（ヲモネ）り集る頑人（カタクナ）の心時風（トキメク）町家のならひと云べし。（信天翁『笈の底』）

という解が、比較的よく句の内容をとらえているようである。何も遊興の席でなくともよい。普段酢売りをしている男が、鹿爪らしく袴をつけて歩いているのは、夷講の日に出入りの御店に挨拶にでも行くのだなと興じているのだ。そして、句の表現は文字通り「夷子講が酢売の様なものにまで袴を着せたのだ」（『続芭蕉俳句研究』小宮豊隆氏）と解して

よく、酢売りが夷講という祭の日とあって、普段とはちがった格好をしているのを面白く言い倣していると見られる。「酢うりは小商ひのもので、二文三文の職業である。それを恵比寿講の盛んな賑ひの中へ入れて袴を着せて興じてゐるのである。狂言が籠つてゐる」（同右、幸田露伴）というのも確説であろう。前の「振売」の句と同類の趣向ながら、表現に興じた調子を出している。前者が「あはれ」の句ならば、後者は「をかし」の句である。

803

初時雨初の字を我時雨哉（粟津原）

焦翁句集

冬季（初時雨）。

語釈 ○**初時雨**「ハッシグレ」。○**初の字を我時雨哉**「初の字を我が時雨哉」。私の愛する時雨の中でも特に「初」の字の付くそれを賞翫する、という意。それに「お初にお目にかゝる」という挨拶を含めた。（I *70*）参照。「II.」（『日葡辞書』）。

大意 お初にお目にかかります。折柄の初時雨。私の愛する時雨の中でも、特に「初」の字の付くその風情を賞翫して措かないのです。

考 芭蕉十七回忌追善集『粟津原』（桃隣撰、宝永七年刊）所収一蜂の句の前書に、「其翁或かたへ伴ひし比、初てなれば、初時雨初の字を我時雨哉と挨拶せられしも、はや句の字数と年経ル事よ」と引用されている。「句の字数」云々は、単に十七回忌に当ることを意味するようでもあるが、江戸での最晩年の作とすれば、元禄五、六年の初冬の句と見て誤りはあるまい。『蕉翁句集』には、「是は桃隣が粟津が原といふ集に、或人の句の前書に出るをとゞむ。人の方え初而行玉ふ吟と聞ユ」と注して「年号不知」の部に出し、『芭蕉句選拾遺』にも「人のかたへ初て行て」と前書して収められている。

この句、古注の解は何れも要領を得ない。もともと口拍子に乗せただけの即興吟とあって、表現不足の嫌いがある

句なのである。

「初」に賞美のこころをこめていうのが常であるが、「初の字を我が時雨」というのは、相手に惹かれる気持で初めてお目にかかりたいということと、初時雨のたまゆらのおとずれということとを併せた言い方になっているようである。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

という見方もあるが、それよりも、

初時雨が初めて降り過ぎる、その微かな風情を私はことさら賞美するのだという意味。「我時雨哉」とは、これこそ時雨の中の時雨として私の最も好む情趣である、という程のこと。初対面の人に、「初時雨」に対する自分の偏愛を述べて挨拶としたのである。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

という説を私は採る。我が好む初時雨の風情に託して初見の挨拶としたのである。

……蕉門においては初の字に賞翫の心を強く言い込めるのが普通である。そのような連衆心（れんじゅしん）の常識を背景としないと一句はなかなか理解しがたい。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

と堀信夫氏の補説された点に留意すれば、句の含蓄は明らかであろう。

804　芹焼やすそわの田井の初氷（其便）

　　　芹焼や縁輪の田井のうす氷（三冊子）

笈日記・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

冬季（初氷）。

語釈　○**芹焼**　「セリヤキ」。焼石の上に芹を置き、蒸焼にして醬油と柚子で食べる料理。同じ名で鴨や雉子など鳥肉を主材とした鍋焼式の料理もあるが、この句全体の感じからして、それではあるまい。既出（Ⅰ*114*）。なお前にも述べたように、「芹焼」は現代

では冬季とされるが、古くは季語として採り上げたものはなく、「芹」で春（春の七草の一）とすべきもので、当面の句では「初氷」が季語として立つ。「案ずるに、説叢、芹の句として春の部に出せり。笈日記の評を考ふるに、思ひやりたるなりとは、すそ輪の田井には今頃初氷やあるらんと思ひやりたる冬の句なる事察すべし。芹は活法の書に正月に出たり。されども初芹とはなし。正月七種の内の一種なれば、冬より生ひ出て、菜品に専ら遣ふなれば、初氷の頃芹のもてなし逢へるにや。……其頃を察し、思ひより侍るの雅情なり」（積翠『芭蕉句選年考』）。○**すそわの田井の初氷**　「裾廻の田井の初氷」。「すそわ」は、山の麓のあたり。「わ」は、その辺を漠然と指す語であるが、『万葉集』に見える古語「裾廻」を誤読して生じた語かという。「田井」は、田に引く水を溜めておく池（但し、「田居」と同じで、田圃をいうと見ることも出来る）。山裾の田の灌漑用水池に、その冬はじめて氷が張ったさまである。「すそわのたゐ」は中世以来の歌語であった。「或ハスソワノ田イニイタリテ、ヲチボヲヒロヒテ、ホクミヲツクル」（『方丈記』）「糊米や水すみかねて初ごほり　菊阿」（『正風彦根躰』第六）。

大意　香ばしい芹焼を味わうにつけて、この芹の摘まれた山裾あたりの田井に初氷の張った景色が、ゆかしく思い遣られることだ。

考　『幽蘭集』（暁台・臥央編、寛政十一年刊）『続絵歌仙』（宜麦編、文化八年刊）『俳諧録』（成美編、文化十年成）等には、この句を発句とした濁子・涼葉との歌仙が収められており、『俳諧録』は現在伝本の知られていない『鄙懐紙』なる俳書から引用している。積翠の『芭蕉句選年考』は、「元禄六年十一月の吟也。鄙の懐紙に酉の霜月とありて、是に、挙（ママ）も寒し卵うむ鶏　濁子　織おろす絹を筵に尋とりて　涼葉と脇・第三ありて、三吟の歌仙見えたり」と考証しているが、『金蘭集』（甘井編、文化三年刊）にも「酉霜月」という前書で見えているから、積翠の所伝は信じてよかろう。六年霜月八日付の荊口宛芭蕉書簡には、

折ふし甚五兵へ殿・儀太夫殿御見舞一宿仕候次手、如此御座候。

とあって、「甚五兵へ」は濁子、「儀太夫」は涼葉を指す。この歌仙は右に見える芭蕉の大垣藩邸訪問の際に巻かれたものと推定されよう。十一月七、八日頃の成立ということになる。『三冊子』の下五「うす氷」は孤立した所伝であ

り、同じ土芳の『蕉翁句集草稿』では「初氷」となっているから、問題にはならない。

『笈日記』にはこの句の後に、

此句は初芹といふ吏をいひのべたるに侍らんとたづねければ、たゞ思ひやりたるほつ句なりとあざむかれにける。かゝるあやまりも殊におほかるべし。

と支考の付記があり、『三冊子』に、

此句師のいはく、たゞ思ひやりたる句也となり。芹焼に名所なつかしくおもひ遣りたる成るべし。（赤雙紙）

とあるのも、支考の文に拠ったものと思われる。句意は「土鍋の芹焼の青やかなるを見れば、田井の薄氷の思ひやらるゝ」（杜哉『蒙引』）でよく、もてなしに出された芹焼につけて、冬の田園風景を思い描き、挨拶の意を籠めたのである。芭蕉の脳裏には木下長嘯子の『挙白集』に見える「からころもすそわの田井にねぜりをつみ、外面の沢にくわゐをぞ拾ふ」（「東山山家記」）「けふは大原野のすそ輪の田井に根芹をつむすこと（ママ）となる」（「西山山家記」）といった文が浮んでいたであろう。伝統的な歌語を用いているので、この風景は写生的なものではなく、古典的情趣の濃いものとなっている。「筑波嶺の裾わ（正しくは「裾み」）の田井に秋田刈る妹がり遣らむ黄葉（もみち）手折らな」（『万葉集』巻九）の歌によって常陸の名所になっているといわれ、『三冊子』に「名所」云々といっているのもそれと関連するけれども、芭蕉の意中としては、名所までは考えていなかったのではあるまいか。

805　鞍つぼに小坊主乗るや大根ひき（霜月八日付荊口宛書簡）

霜月八日付曲翠宛書簡・藤の実・五月十四日付芭蕉宛去来書簡・炭俵・泊船集・三冊子・去来抄・蕉翁句集

冬季（大根ひき）。

鞍壺に小坊主のせて大根引（陸奥鵆）

語釈 **○鞍つぼに小坊主乗るや** 「鞍壺に小坊主乗るや」。「鞍つぼ」は、馬の背に人がまたがる時、鞍の前輪と後輪の間に腰をおろす所。ここは武家などの立派な鞍ではなく、駄馬につけた荷鞍である。「小坊主」は、幼少の男の子。頭髪を全部剃っているのでいう。農家の男の子が、連れて来た馬の鞍壺に乗っている（父親などに乗せられている）さま。「鞍つぼによくのりさだまッて、あぶみをつようふめ」（『平家物語』巻四）「十二三のむすめ、六つ七つの小坊主と昇階子ながきを跡向漸くに分てきて」（『日本永代蔵』巻三ノ三）「**Curatçubo.**」「**Bŏzu.**」（『日葡辞書』）。**○大根ひき** 「大根引き」。大根を収穫することで、冬の季語とされる。地表に抜き出た大根の葉を腋に挿み、根を両手で持って抜き取るので「引く」という。（Ⅱ*429*）参照。「大根引亥ノ子過て引と云り」（『誹諧初学抄』）「按に、大根は四季共に侍るなれば、句作にて雑なるべし。作者心得べし。異名を鏡草と云。歌は春也」（『滑稽雑談』）「此詞ハ冬の当用なり。大根と略して音語ニよむベシ。京家のおほね引に効ふべからず」（『俳諧古今抄』）「鉢まきをとれば若衆ぞ大根引　野坡」（『炭俵』下）「**Cusauo fiqu.**」（『日葡辞書』）。

大意 一家総出の大根とり入れの作業の傍で、馬の背の鞍壺に幼い男の子がちょこんと乗っかっているよ。

考 『炭俵』に「大根引といふ事を」と前書がある。元禄六年十一月八日付の二通の書簡に見えるので、その冬十一月初めまでに成っていたことが分る。『陸奥衛』の句形は誤伝であろう。

大根畠で一家総出の農作業が行われている傍に、とり入れた大根を積んで行く為の馬が、のんびりと草を食んでおり、その背の鞍壺には、小さな男の子が乗っかって、無心に独り遊びをしているという情景である。玩是ない子供まで連れて来たところに、一家を挙げて出掛けて来たことも窺われるわけだ。『三冊子』に、

　此句、師のいはく、のるや大根引と小坊主のよく目に立所、句作有と也。（赤雙紙）

と芭蕉の語を伝えており、「乗るや」に小坊主を目立たせる句作りの眼目があったことが分る。これが『陸奥衛』のように「のせて」であると、子供を作業の場から棚上げした大人の大根引の作業の方に焦点が移ってしまって、「小坊主」の重みが半減する。「乗るや」といっても、勿論親の手で乗せられたわけだけれども、其処で農作業とは関わりなくひとりで遊んでいる様子がよく出ていて、その視点に新しさが感ぜられよう。江戸のはずれの田園地帯に行け

ば、何処でも見られるような一小景で、「小坊主乗るや」にはユーモラスな味もある。軽みの佳作といってよい。『去来抄』はこの句を絵柄として考えて、左のように説いている。

蘭国曰、此句いかなる処か面白き。去来曰、吾子今々解しがたからん。只図してしらるべし。たとへば花を図するに、奇山幽谷霊社古寺禁闕によらば、その図よからん。よきがゆへに古来おほし。如此の類は図の悪敷にはあらず、不珍なれば取はやさず。又図となして、かたちこのましからぬものあらん。此等元より図あしとて用ひられず。今珍らしく雅ナル図アラバ、此を画となしてもよからん、句となしてもよからん。されば、大根引の傍、草はむ馬の首うちさげたらん鞍坪に、小坊主のちよつこりと乗たる図あらば、古からんや、拙なからんや。察しらるべし。国が兄何某、却て国より感驚ス。かれは俳諧をしらずといへども、画を能するゆへ也。……（同門評）

「大根引の傍」云々の説明は、この句の情景の解説として間然するところがなく、それが「大根ひき」の描き方として新しみのある視点であることを述べているのである。

『炭俵』の「大根引といふ事を」という前書は、必ずしも芭蕉の句のみにかかるのではなく、次に並ぶ野坡・洒堂の二句をも包括するものであろう。『宇陀法師』には、

題に竪横の差別有べし。近年大根引のたぐひを、菊・紅葉一ㇾ列に書ならべ出する（ママ）、覚束なき事也。先師炭俵に、大根引といふ事をと詞書にかけり。面白事也。

とあり、これが和歌以来の伝統的な題ではなくて、俳諧で採り上げられるようになったものであることに留意している。この『炭俵』の前書から、この発句が大根引を季題とした最初であるように説く古注もあるが、前引の如く貞門初期の『誹諧初学抄』に既に採られており、元禄十一年の『大成しんしき』にも冬十月の季語として見えるという。貞門期の例句もかなり挙げられているから、最初というのは妄説である。

806 寒菊や醴造る窓の前 （霜月八日付荊口宛書簡）

冬季（寒菊）。

語釈 ○寒菊 「カンキク」。西日本に多く自生する菊科の植物油菊（あぶらぎく）の別称。観賞用に栽培もされ、秋の末から冬にかけて花が咲くのでこの名がある。地下茎から茎が真直に伸び、黄または白の舌状花が茎の先端にまばらに付く。「篤信花譜曰、寒菊、花も葉も常の菊より細也。十月に黄花を開て臘月に至る。花なき時ひらく故、賞するに堪たり。○大和本草曰、又冬菊は寒菊と云。単にして味甘し。又重葉の小菊黄色にして、秋冬堪レ寒、久しくあり。△按るに、和産に冬菊と云、其種古きにや、古歌に異名をよめり。可レ考。但残菊にや」（『滑稽雑談』）「泣中に寒菊ひとり耐へたり　嵐雪」（『枯尾花』）「Canqicu. i, Fuyuno qicu.」（『日葡辞書』）。○醴造る窓の前 「醴（あまざけ）造る窓（まど）の前（まへ）」。甘酒を仕込んだ瓶などが窓の傍の屋内にあり、その窓の外の庭に寒菊が咲いている光景である。「醴」は、甘酒を指す字。炊いた飯に麹を加えて発酵させた飲料である。季語としては夏。ここは「寒菊」が季語として立つ。「ひと夜酒　夏也。夜分にはあらず。夜の字、二句嫌也。醴（ほう）の字を書故也。あま酒ともよめば、あま酒も夏也。六月朔より七月卅日まで日毎に奉ると公事根元にあり」（『御傘』）「立家を買てはいれば秋暮て　里圃　ふつ〳〵なるをのぞく甘酒　馬莧」（『続猿蓑』上）「Amazaqe.」「Maye.」（『日葡辞書』）。

大意 台所の窓際に甘酒の瓶があるその眼の前の庭に、寒菊が咲いているよ。

考 底本とした荊口宛書簡に「頃日愚句」として記してあり、外に所見のない句で、元禄六年冬の作である。同じく「寒菊」を扱った『炭俵』の句（Ⅳ *810*）が間もなく出来たので、この方は捨てられたのであろう。

普通の農家などの光景としてもよいが、芭蕉庵の日常としても解し得る。「醴造る」の庶民的な感じが「寒菊」の趣に相応しい。『炭俵』の「粉糠」の句も佳いけれども、この句の趣も捨てたものではなく、何かの集に収められてもよかったのではあるまいか。

807　**難波津や田螺の蓋も冬ごもり**　（市の庵）

泊船集・宇陀法師・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

冬季（冬ごもり）。

語釈　○**難波津**　「ナニハヅ」。難波江（大阪湾）にあった古代の港。ここは「難波」（Ⅰ*75*）と同じく大阪の古称として用いた。既出（Ⅰ*192*前書）。古歌を踏まえたことは［考］で述べる。○**田螺の蓋**　「田螺（たにし）」は、淡水産の巻貝で、食用になる。既出（Ⅰ*154*）。春の季語であるが、この句では「冬ごもり」が季語として立つ。その「蓋（ふた）」は、貝の口を覆うもの。（Ⅲ*559*）参照。「小螺　サザイガ　フタ　アケタ」（『交隣須知』二、水族）「Futa.」（『日葡辞書』）。○**冬ごもり**　季語。これも古歌を踏まえた表現である。

大意　難波津では田螺も蓋を閉じて冬ごもりする季節だ。貴方も冬籠りの心掛けで余り出しゃばらぬがよい。

大意　『市の庵』（洒堂撰、元禄七年刊）には、この句の前に「贈洒堂」と題した「湖水の磯を這出たる田螺一疋、芦間の蟹のはさみをおそれよ。牛にも馬にも踏るゝ事なかれ」という芭蕉の文が見え、『泊船集』には「贈洒堂　詞書市の庵ニ見えたり」と前書している。膳所の洒堂が大坂に移ったのは、『市の庵』の元禄七年夏筆の洒堂自序に、「去年の夏この難波津に這出て、田螺の蓋の明暮をおもへば」とあるのによって、同六年夏と知られる。この芭蕉の句は六年冬に江戸から洒堂へ贈られたものであろう。

洒堂が大坂に進出して宗匠になった動機はよく分らないが、まだ二十代の若輩で世間知らずなことを芭蕉は常々心配していた。膳所の菅沼曲翠の弟高橋怒誰に宛てた元禄六年霜月八日付の手紙の中で、

洒堂ゟ頃日書状指越候。返翰具に申遣し候。何事をも相心得候と申越候は、貴辺ゟなど聊被仰遣候事も候にて、存知之外胸裏分別を重宝仕ると相見え候。よし〳〵これも悪からず。千歳此方の人爰に繋縛せられ、生涯是非の溝洫に溺候へば、彼躰の若もの、いまだころばぬをかちと被存候。連衆もそろ〳〵出来申由、珍重に存候。

と述べているのによっても、洒堂に対する芭蕉の心配が窺われる。若者にあり勝ちの、人の気持を考えずに独走するような傾きが恐らく洒堂にあって、その為に新しい土地で周囲の人々と摩擦を起しはせぬかと案ぜられたのであろう。現に同じ日に出した曲翠宛に、

洒堂ゟ書状こし候。此度返翰具に遣し申候。いまだ御見舞にも不参候由、沙汰のかぎりと申遣し候。

とあり、江戸詰から膳所へ帰藩した曲翠を、訪問もせずに無沙汰を続けている洒堂を「沙汰のかぎり」と叱ったという。兎に角膳所に居たうちから、曲翠・怒誰らが洒堂の後見役で世話を焼いていたことが知られよう。人との交際に円満を欠く「彼躰の若もの」の至らなさを気遣いながら、大坂でそろそろ連衆（門人）が出来て来たのを喜ぶ芭蕉であった。「難波津や」の句と前文は、右の両簡に見える洒堂への「返翰」に記されていたものかも知れない。

句は田螺の冬籠りに譬えて、洒堂に余り出しゃばるなと戒めた作意で、『古今集』の仮名序にも引かれた古歌「なにはづにさくやこのはなふゆごもりいまははるべとさくやこの花」を踏まえている。「先祝へ梅を心の冬籠り」（Ⅱ325）の句と同様に、花咲く春を予祝する心もあろう。田螺の冬籠りについては、蚕臥の『芭蕉新巻』に「田にしのからごもりとて小屋をなぞへし俗語」によったという説が見え、そんな諺を背景に考えてもよさそうである。兎に角この譬喩が俳諧で、洒堂に対する隔意のない親しみも感ぜられる。彼を田螺に比したことについて思い合わされるのは、元禄五年季冬廿八日付怒誰宛芭蕉書簡に、

田西へ御手紙被遣候、江戸の市へ梅花をもとめに遣し候間、便に貴報可申上候。

とある一節である。当時洒堂は深川の芭蕉庵に滞在中で、江戸へ梅を買いに彼を遣したことは他の書簡にも見えるので、この「田西」が洒堂を指すことは疑いない。恐らく彼の苗字「浜田」の「田」と「洒」の字のつくりとを併せた渾名とおぼしく、怒誰や曲翠らの膳所の人々の間で戯れに呼んでいたものであったろう。「田西」は「タニシ」と訓める字であり、当面の句が直ちに連想されるのは言うまでもない。洒堂のこの渾名が背景にあったことは確言してよ

いと思う。前文にある「芦間の蟹」「牛」「馬」は、世智に長けた都会人のたとえで、「牛の子にふまるな庭のかたつぶり角のあればとて身をばたのみそ」（『夫木和歌抄』巻二十七、寂蓮）を踏まえて、これまた洒堂を戒めたもの。句も譬喩によって諷戒の意をあらわしたに過ぎないが、田螺の冬籠りに俳諧的なユーモアがあり、洒堂への温かい親愛の情もあらわれていて、捨て難い趣がある。これだけ芭蕉に心遣いさせておきながら、洒堂は結局大坂で之道と対立し、最後の旅で芭蕉の大坂行の原因を作ることになってしまった。宿命的なものを感ぜざるを得ない成行なのである。

深河大橋半かゝりける比

808　初雪やかけかゝりたる橋の上（其便）

芭蕉庵小文庫・陸奥鵆・泊船集・千句塚・並松・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・鎌倉海道・五月雨山

冬季（初雪）。

語釈 ○**深河大橋**「フカガハオホハシ」。日本橋浜町から深川六間堀に架る新大橋。川上の両国橋に対して「新」という。長さ百八間（約二百メートル）、現在は中央区浜町二丁目と江東区深川新大橋一丁目の間を結ぶが、旧位置はそれより一、二町川上であった。何れにせよ、芭蕉庵からは程近い処である。元禄六年七月に建設が下命され、同十二月七日に竣工した。「大橋で見れば三幅対の橋」（『柳多留』七十二編）。○**半かゝりける比**「半ば架りける比」。橋の架設工事が半ばまで進行した頃、の意。「白川にかゝれる橋は、……ひらくる法の一すぢに渡らんための橋なれば」（謡曲「東岸居士」）。○**かけかゝりたる**「架けかゝりたる」。「かゝり」は、仕事が中途である意。「咲かゝる花や飯米五十石　桃首」（『続猿蓑』下）「さみだれやとなりへ懸る丸木橋　素龍」（『炭俵』上）。

大意 架設工事半ばの橋桁の上に、初雪が積ったことよ。

考 「深川天橋（ママ）半かゝりける比」（『泊船集』）「新大橋半かゝりたる比」（『並松』）「深川の大橋半かゝりける比」（『鎌倉海道』）等の前書がある。［語釈］に記したように、新大橋の建設は元禄六年秋から冬にかけてであった。この句はその

年十一月頃の作であろう。

信天翁の『笈の底』に「永代橋掛替」と見ているのは誤りであるが、

然ば桁渡し漸〻蜘手は打たれ共、未板も不レ乗、手摺も出来寄らぬ梁に、白〱と降懸りたる初雪の気色、眼前体也。誠に鵲の橋の有明の空共云べき風情也。

橋の雪霜は、殊に詩歌にも称し詠ずる所也。然るを、懸かゝりたると云珍敷、亦全き橋よりも、半ば出来たる姿、何とやら風流と云べし。亦初の字にも余情相通ふ妙術と云べし。

今案、山川草木の雪は、詩歌に尽す所也。故に普請半の橋を道具とし、或は大仏の柱建と云ひ、亦は小僧が笈の色と云。爰を以て俳諧と云ひ、滑稽とする所也。熟〻其意を弁へて可レ学の風流也。

と丁寧に鑑賞しているのは、よく肯綮に中っている。架けかかりの橋と「初」の字が余情相通うというのは、初雪だからそう積るわけではなく、うっすらと降った感じが、架けかかった橋の感じに相応しいことを述べたので、そういう一種の「匂ひ」を感受すべきなのである。この橋が完成すれば江戸への往来も便利になるから、芭蕉も竣工を待望していたであろう。

新兩國の橋かゝりければ

809 みな出て橋をいたゞく霜路哉　（泊船集書入）

有がたやいたゞひて踏はしの霜　（芭蕉句選）

冬季（霜）。

語釈 **○新両国の橋**　「新両国(しんりやうごく)の橋(はし)」。前の句の前書に見える「深河大橋」と同じ。**○みな出て**　「皆出(みな い)でて」。付近の住民が総出で。

○**橋をいたゞく**　「いたゞく」は、頂戴する意。便利な橋をお上から頂いて喜んでいる気持が籠る。実際に出来ることではないが、橋を手に捧げて有難がるイメージもあるところが俳諧である。「物毎も子持になればだゞくさに　野坡　又御局の古着いたゞく　利牛」（『炭俵』上）。○**霜路**　「シモヂ」。路（橋板の上）に霜の置いたさま。「里人のわたり候かはしの霜　宗因」（『あら野』巻七）。

大意　お上から頂戴した橋が出来上り、人々は総出で霜の置いた橋の上を渡って喜んでいることよ。

考　前の句で「かけかゝり」だった新大橋が完成して渡り初めの行われたのは、元禄六年十二月七日であった。この句は恐らく当日の光景を見て作られたものであろう。華雀の『芭蕉句選』の頭注には「武江の新大橋はじめてかゝりし時の吟なりと聞侍る」ともあり、「有がたや」の句形は何か拠る所があったのであろうが、聊か俗調を帯びて、芭蕉の作かどうか疑念も感ぜられ、許六の所伝の方が信憑性が高い。『泊船集』書入れの紹介が、戦後のことだったので、古注以来それまでは専ら『句選』の句形による解釈が行われていた。

810　寒菊や粉糠のかゝる臼の端　（炭俵）

真蹟画賛・真蹟短冊・陸奥衡・泊船集・蕉翁句集・寒菊随筆

冬季（寒菊）。

語釈　○**寒菊**　既出（Ⅳ*806*）。○**粉糠のかゝる臼の端**　「臼」は、米を精白する為に搗く踏み臼。「からうす」ともいう。「粉糠」は、米を搗く時に出る糠。『寒菊随筆』に「小糖」と誤る。「端」は、寒菊の場所を示す。臼の傍に花があるのである。真蹟短冊に「臼のはた」、『寒菊随筆』に「臼の傍」と表記してあるのが訓み方の参考になる。「さけとみにこぬか小米の花の陰」（『毛吹草』巻一）「江戸の左右むかひの亭主登られて　芭蕉　こちにもいれどから臼をかす　野坡」（『炭俵』上）「片岡の萩や刈ほす稲の端　猿雖」（『炭俵』下）「Conuca.」「Vsu.」「Fata.」（『日葡辞書』）。

大意　粉糠のかかる米搗き臼の傍に、ささやかな寒菊が置かれていることよ。

考　元禄七年夏の『炭俵』初出の句で、六年冬までに成ったことは確かである。また、『寒菊随筆』（梨里撰、享保四年

成）には、「ばせを庵にて」と前書して、この句を発句とした野坡との三十二句の付合を収めているが、それに付した享保三年孟春の野坡奥書には、

右誹諧歌仙者翁在世元禄六癸酉冬於二芭蕉庵一興行也炭俵集前二巻。先師不レ適意句多、故不レ満レ韵終止畢。

とあり、これによって六年冬の作と確定する。其角の自画賛に、「芭蕉翁の故庵の吟、寒菊や糠こぼるゝ臼のはたとかや」とした句形は誤伝である。

古注には、「小糠ちりたる辺に臼のありしを取のけたるは、跡まざ〳〵と残りて侘たるもの也」（正月堂『師走嚢』）と、糠の散った形で臼の跡が知れるといった解や、寒菊のさまを臼の中の米と周囲に散らばった糠に見立てたとするものがあるが、皆誤解に過ぎない。更には、この「臼」のありようにも留意する必要があろう。山本唯一博士は、

……この臼は、餅搗き臼でも籾摺臼でもない。そのようなものには粉糠は出ない。……これは米の精白につかう碓（からうす）である。碓は碓部屋とよばれる土間などにしつらえられていて簡単に移動できるものでもないし、秋から冬にかけての農仕事として使うだけのものでもない。精米が必要なとき、時に応じてつかうものである。（『芭蕉俳句ノート』）

として、「粉糠のかかっている臼の傍に、折りとってきた小さな花の寒菊が幾本か桶に入れられている。うすぐらい土間で寒菊のわびた深黄色の花色もうつくしいが、粉糠のにおいに和した寒菊の香もかぐわしいのであろう」（同上書）と見ておられ、私はこの解が当っていると思う。そうすると、寒菊の花に粉糠はかかっていないと見た方がよく、「寒菊や粉糠のかゝる」は内容上「寒菊に粉糠のかゝる」と同じとする志田義秀博士のような解釈（『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』）は採れなくなる。からうす部屋の土間を背景にして、其処に寒菊の花を置いて見たのが、この句の新味なのであろう。芭蕉が「軽み」の行き方によって見出した可憐で侘びた趣といってよい。それに関連して、山本健吉氏の左の所説も、重要な点を道破している。

……この句は、意識的に「軽み」を出そうとしている時代の作品である。……日常的なありふれた景のなかに、句を探っていると言えるだろう。芭蕉の「軽み」と言えば、こんな世俗的な題材をさぐることだと、当時の人たちに思われていた節もあり、また『炭俵』を主として現れている「軽み」は、そのような傾向の句が多かったことも事実である。だが芭蕉の意図した「軽み」は、そういった傾向で尽くされるものではない。この句の如きも、「心のねばり」を去った、淡々とした純客観的な詠みぶりのなかに、侘しげな寒菊の風情が十分に生かされていることを見るべきであり、それはこの句の「細み」であり、物の微を読み取る詩人の目の働きが、生かされているのである。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

811

菜根を喫して終日丈夫に談話ス

もの丶ふの大根苦きはなし哉　（真蹟懐紙）

蕉翁句集

冬季（大根）。

語釈　○**菜根を喫して終日丈夫に談話ス**　「菜根を喫す」は、粗末な食事のたとえ。明の洪自誠の著『菜根譚』に引く宋の汪信民の語「人咬ニ得菜根一、則百事可レ做」（人菜根を咬み得ば、則ち百事做すべし）に拠る。既出（Ⅰ129前書）。○**終日丈夫に談話ス**　「終日丈夫(しゅうじつちゃうぶ)に談話(だんわ)ス」。一日中雄々しいますらおに話をした、の意。「丈夫」は、句中の「もの丶ふ」に当り、前記（Ⅰ129）の前書にも見える語である。「終日忘想(ママ)散乱の気、夜陰夢又しかり」（『嵯峨日記』）「調子といふは、……日用の談話のうへにもある事也」（『芭蕉葉ぶね』）「Xŭjit. Fimemosu, l, finemusu.」「Danua. Catari, cataru.」（『日葡辞書』）。○**もの丶ふの**　「もの丶ふ」は、武士。ここでは藤堂玄虎を指す。［考］参照。中七を隔てて「はなし哉」へかかる文脈である。「風の目利を初秋の雲　荷兮　武士の鷹うつ山もほど近し　越人」（『あら野』員外）「Mononofu.」（『日葡辞書』）。○**大根苦き**　「大根(だいこん)」は、その座に出された食物。冬の季語である。既出（Ⅳ805、Ⅱ429）。「苦(にが)き」は、大根の味。既出（Ⅰ150）。○**はなし**　「話(はなし)」。既出（Ⅲ563）。

大意　物堅い武士のお話は、この大根の苦いような味に通う趣がございます。

考　土芳の『蕉翁全伝』に、この句と「花見にとさす船遅し柳原」（Ｖ836）の句を並べ掲げて、「此二句ハ玄虎武江ノ旅館ニ会ノ時也。大根ハ酉ノ冬、……大根ニ一折」とある（竹人の『全伝』も同様）。玄虎は藤堂氏、名は守寿、通称長兵衛、また半三郎。伊賀付藤堂藩士として千五百石を食んだ人である。伊賀関係のことでの土芳の所伝は信ずべきであるから、「酉ノ冬」即ち元禄六年冬の吟と決してよい。恐らく藤堂家の江戸藩邸に玄虎を訪ねたのであろう。土芳によれば、これを発句とした「一折」半歌仙の付合があった筈であるが、今に伝わるのは真蹟懐紙に書かれた表六句だけで、芭蕉・玄虎の外に舟竹という嵐雪門の俳人が加わっている。玄虎の脇は「一とをりゆく木枯の音」であった。『金蘭集』『一葉集』等後世の芭蕉作品集に、発句中七を「大根からき」と伝えるものがあるが、年代の古い資料には「からき」としたものがなく、信憑性に乏しい。

「苦き」は卒然として見ると、もてなしに出されたものを不味いと言っているようで、挨拶の句としてはおかしくも感ぜられるが、この語は「質実なありようを感覚的にいったもの」（加藤楸邨氏『全句』）と見るのがよかろう。千五百石の格式ある武家との話は、兎角武張って堅くなり勝ちである。そこで、もてなしに出された漬物か何か、これも質素な食べ物を材料に、機転の挨拶としたのだ。内藤鳴雪が句形を「からき」としての鑑賞ながら、

蓋し旧主の事なり旧武士朋輩の事であるから、此席上では芭蕉翁も暫く風流な世外談を止めて、専ら武道の心得などを述べたのであらう。して見れば大根辛きは其実己の事であるに、態と人の事のやうに言ひ做した、是れが矢張り辛いと云つて辛からず、真面目中の滑稽である。此句が出て一座の君臣ドッと笑つた声を聞くやうぢや。

（『芭蕉俳句評釈』）

と説いているのは、見るべきところを見ている説である。武家の堅い話と大根の苦みとの間に通ずるものを見出し、「真面目中の滑稽」として句にまとめたのであろう。元禄二年秋、大垣の戸田如水との会見（Ⅲ554）に際してもそうで

あったが、芭蕉は大身の武家の前でも妙に卑下したり諂ったりすることがなく、自由に振舞える人だったのである。

812 月花の愚に針たてん寒の入（薦獅子）

韻塞・芭蕉庵小文庫・泊船集・蕉翁句集

冬季（寒の入）。

語釈 **○月花の愚に針たてん** 「月花の愚に針立てん」。「月花」は風雅の道の代表的季物である。既出（Ⅱ*416*）。月だ花だとうつつを抜かす愚かさを戒めようとする自らの意志を言った。「月花の愚」を、風雅を解せぬ愚かさと見るのは誤解である。「針を立つ」は、元来人の体に鍼を刺して病気を治療する医術をいう。（Ⅰ*56*）参照。「足軽の子守して居る八つ下り　孤屋　息吹かへす霍乱の針　其角」（『炭俵』下）「Fariuo tatçuru.」（『日葡辞書』）。**○寒の入**　「寒の入り」。「寒」は、二十四節気のうちの「小寒」「大寒」に当る約一箇月間。既出（Ⅲ*632*）。その入りは、小寒の始まる最初の日をいう。「彼岸の入・涅槃・廿二日の事こそこはけれ」（『好色二代男』巻二ノ五）。

大意 寒の入りのきびしさが身にしむにつけて、月よ花よと浮かれて一年を過した愚かさに針を立てて戒めたくなる。

考 初出の『薦獅子』は元禄六年冬に成った集なので、この句はそれまでに成っていたものと見られる。五年冬までに出来ていた可能性が大きいが、姑くここに置くことにしたい。因みに元禄六年の寒の入りは十二月十日であった。

この句の内容は、

春の花秋の月をもいたづらに詠め過しては臘月に成ぬと驚たる風情也。人の肌骨に砭すと古文にもあり。寒気の切なる事、肌に針さすごとくなれば、よそへて身の愚さを述懐するならん。（東海呑吐『芭蕉句解』）

と解してよい。恐らくは宋儒張横渠が自分の書斎の窓に「東曰二砭愚一、西曰二訂愚一」と銘したという故事（『古文真宝』後集）の連想があり、痛い所を衝く戒めを「頂門の一針」ということも、思い合わせているであろう。芭蕉の日常は、

素堂の文に「菊に月にもよほされて、吟身いそがしい哉」（Ⅱ345頁）といわれたような風雅三昧のものであったが、時あってそれに反省の念が兆すことがあって、そういう心境を句にすることも屢々だった。『笈の小文』の冒頭に「暫ク学で愚を暁ン事をおもへども是が為に破られ」とあるのも、その一端を示したものであり、「月雪とのさばりけらし年の暮」（Ⅱ269）の句など、当面の句と似た心境の所産といえる。無用の事に生きる自分のあり方に対して、このように苦い自省を持ちながら、なお且つ風雅を生き甲斐とせざるを得ないのが芭蕉なのである。寒の入りには、「寒固め」と称して針を打って健康増進をはかる地方もあるという。この句の表現の背景には、寒気のきびしさの感じと、そうした習俗の連想が考えられよう。風雅癖を痼疾として、それに鍼治療を試みるところが俳諧でもある。

813 煤はきは己が棚つる大工かな（炭俵）

五月十四日付芭蕉宛去来書簡・陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集

冬季（煤はき）。

語釈 ○**煤はき**「煤掃き」。十二月十三日以後に行われる年末の大掃除。既出（Ⅲ630）。○**己が棚つる大工**「己が棚釣る大工」。「大工」は、家屋を建て、細工物なども造る職人。もとは土木・建築に携わる高級技術官僚の称で、後にそうした技術者集団の長をもいい、時代と共にその指す階級が下降して行った呼称である。「己が棚」は、自分の家の棚。壁に添って上から釣るように造り、床の上に造り付ける物ではないので「釣る」という。「なれ加減又とは出来ジひしほ味噌　荷兮　何ともせぬに落る釣棚　越人」（『ひさご』）「めったに風のはやる盆過　利合　宵〳〵の月をかこちて旅大工　依々」（『炭俵』下）「Tana.」「Tçuri, ru, utta.」「Daicu.」（『日葡辞書』）。

大意 普段他人の家の事をしている大工も、年末の大掃除には、珍しく自分の家の棚など釣っていることよ。

考 元禄七年の『炭俵』初出であり、同年の去来書簡に「御発句去年より被仰下候内」として記しているから、元

禄六年十二月の吟であろう。

常はよその細工にのみ追れて、我家の造作は少しも手を付ぬもの也。煤払には捨置がたく、此時に至て己が棚の破損をつくろふと也。（東海呑吐『芭蕉句解』）

誠に日比釣んと思し棚、漸〻今日己が業を己が用に立たる、いと哀と云べし。……是皆民の世渡る営み如レ此。此趣を以て、己が棚釣とは、笑し味も有て実に滑稽と云べき也。（信天翁『笈の底』）

別に「破損をつくろふ」とは限らず、新しく造る趣でよいと思うが、句意と余情は右等の所説に尽きる。所謂「紺屋の白袴」で、普段自分の家の事はかまっていられない大工が、年末の煤掃きには女房に言われてか、自宅の棚を造っている。それは何となくおかしく、世間何処にでも見られる庶民の生活風景である。其処を採り上げて軽妙にまとめた「軽み」の句といえよう。一見「つまらぬ句」（鳴雪『評釈』）のようであるが、これは「一度寂びの境界に徹した者が、再び平俗の世界に返って眺めた姿」（潁原博士『俳諧名作集』）であった。「高く心を悟りて俗に帰るべし」を標榜した晩年の芭蕉が、「軽み」と「興」を強調したのは、この句のような境地を目指したのであろう。其処に湛えられた気分を、井本農一博士は左のように精しく見ておられる。

大工のような職人は、ふだんは家のことはかえって一向に構わないものである。事実忙しくもあるだろうし、外で働いてきて同じことをまた自分の家でするのは、気のりがしないということもあろう。……その大工が、今日は珍しく自分の家の棚を釣っている。はたから見るとそれは何となくおかしい。……平生やろうと思えば容易にできるはずなのに、ふだんはちょっともやらないで、こんな日にせっせとやっている。どこか異常で、おかしい気がする。その滑稽、そのおかしみが基調であることは確かである。だがその皮相な滑稽だけなら雑俳の滑稽でしかない。しかし、この大工だって、平生から自分の家の中を便利にしたり、きれいにしたりしたほうがよいとは思っているのだ。だができない。……ようやく今日は一日自分の家にいられる。……前から妻にいわれてい

た棚をついでに釣ってやろうかという気になる。……そんな情景から生ずる滑稽は、その裏に暖かい人間的なものが流れており、庶民的な生活感情が動いており、もっといえば一抹の哀感がある。それぞれの庶民の真剣な営みの姿であるから、笑おうとしても笑い切れはしない。笑いかけて、もっと笑おうとすれば、こつんとまじめな、厳粛なものにぶつかる。この句の滑稽はそういう滑稽である。そうして作者の心中には、棚が釣れてよいなあ、というような暖かい心持ちもどこかにあろう。大げさにいえば、ヒューマニスティックな心情である。

この句もまた「軽み」の句である。いや、こういう句が「軽み」の句だといったほうがよいかもしれない。できるだけ庶民的日常性の中に発想の契機を得て、これを平易に具象的に表現すること、と同時にそれが自然の本質や人生のあわれに深くつながっていること、芭蕉の考えている「軽み」は、そういう方向のものらしく思われる。（『鑑賞日本古典文学・芭蕉』）

右の考察で説かれているように、晩年の芭蕉が目指していた「軽み」は、庶民の日常を契機とした生活詩の方向であり、人の世の営みをいつくしむ、哀愁を帯びた有情滑稽の味を余情とするもので、当面の句など、その典型的なものということが出来よう。他奇なき表現のうちにも、高悟帰俗の芭蕉の精神を読み取らなければならない。

其としの冬

814 ありあけも三十日にちかし餅の音　（真蹟自画賛）

笈日記・矢矧堤・泊船集・三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

今は夢、師去年（コゾ）の歳暮に

月代（シロ）や三十日にちかき餅の音　（芭蕉翁行状記）

――翁草

冬季（餅つき）。

語釈 **○其とし** 「其の年」。底本とした自画賛には、この句の前に「元禄七の春」と前書した「ほうらいにきかばやいせの初便」（Ⅴ*827*）の句がある。「其とし」は「元禄七」を承けることになるが、七年冬の餅搗きの頃には、芭蕉は既に亡くなっていた。従ってこの前書は、七年の初春を迎える直前の冬を意味するものと思われる。路通の『芭蕉翁行状記』（元禄八年冬刊）の前書に「去年の歳暮に」とあるのも併せ考えるべきである。**○ありあけ** 「有明」。「有明月」の略。陰暦の月の後半、明け方まで空に残る月をいう。「うき旅は鵙とつれ立渡り鳥　里圃　有明高う明はつるそら　馬莧」（『続猿蓑』上）「Ariaqeno tçuqi.」（『日葡辞書』）。**○三十日にちかし** 「三十日に近し」。有明月の形が細くなって、愈々月の終りに近い様子をいう。「みそか」は、字を宛ててあるように「三十日」の意であるが、二十九日で終る陰暦の小の月の終りの日にも用いられる。元禄六年十二月は小の月で、ここはその後者の場合なのである。既出（Ⅰ*190*）。**○餅の音** 「餅の音」。正月の雑煮や鏡餅にする餅を搗く音。既出（Ⅰ*151*等）。

大意 師走の有明月も愈々細く、月末に近い趣になった。あたりの家からは餅搗きの音が響いて来て、年の瀬も迫って来た思いが深い。

考 里圃の『翁草』（元禄九年刊）には「ありとだに人にしられですむ月の晦日にちかき有明のそら　兼好」と前書があり、『笈日記』にも「兼好法師が哥に／ありとだにひとにしられで身のほどや／みそかにちかき有明の月」と後注がある。路通も『行状記』にこの句を挙げた後に、「兼好法師身まかりぬべき前の月二十八日の夜の歌に」として「ありとだに」の歌を引いている。年代については、『芭蕉翁行状記』の前書によって、元禄六年年末の作と定めてよいであろう。沢露川の後裔の家に伝わった自画賛には、七五三縄と臼・杵が描かれている。

『行状記』や『翁草』の異形は、杜撰な誤伝とも考えられないではないが、初案の句形としてよいと思う。「月代」は、月の出の前の空が白むことなので、句の内容が聊か変って来るが、やはり「ありあけも」として月の形が句中にあった方が引き立つようである。

色々の書に注しているように、この句は兼好の歌を背景にして生まれたものである。この歌は種々の形が伝えられているが、「ひとにしられで身のほどや」というのは、措辞不束かの感じが強い。何れにせよ、隠者としての兼好の

境涯を晦日に近い有明の月にたとえた作で、伝えられるように死を目前にした頃詠んだとすれば、心細さは一層のものとなる。『三冊子』に当面の句について、兼好の「本歌を余情にしての作なるべし」と言っているのは良く、本歌の持つ心細さは芭蕉の句にも共通する余情といえよう。なお、右の兼好歌は流布の兼好歌集等には見えず、南北朝期の公卿日記『園太暦』の偽文を淵源として、寛文期以降広く知られるに至ったものという（川平敏文氏「兼好伝と芭蕉」——『近世文芸』65号——参照）。

伝兼好歌を本歌とする見方からすれば、この句の「餅の音」を勇ましいような感じに受取るのは、正しい鑑賞とはいえない。

……歌の詞をとりて文質に句をなし給へり。さて、よの中の餅搗を聞て、紙子の夜着の寝覚おかしきも、露の命を有明に観じて、墨の袂をぬらす哀しさも、十七文字に含蓄して、余情限なきもの也。（杜哉『蒙引』）

此句は景情が有り、そして感慨が滲み出すのです。みそかといふ語には顕より微に、有より無に入らんとするところをいふ意があるので、ただ三十日と日数の勘定のみに取られては味が薄い。（『続々芭蕉俳句研究』幸田露伴）

等の見方が精しいものである。細くなる月の形と共に年も暮れて行く時の流れの中に無常を観じている趣があり、路通が『行状記』で「ことしかぎり成べき教（フシエ）なるべし」と言うように、命終の期を予感しているような寂しさが感ぜられる。山本健吉氏の鑑賞を引こう。

……詩句の裁入とは感ぜしめないほど、発想が自然で、日常的で、軽い。三十日（みそか）に近い月であるから繊月（せんげつ）であり、多忙な師走の人にはありと知られぬ月である。あちこちと聞える忙しそうな餅搗の音の中に、忘れられた月が今にも消え入りそうな光を放っている。その対照が、いっそう寂寥の感を深める。これは、あるかなきかに世を渡っている芭蕉の、行く年を惜しむ心であり、老の感慨でもある。市井にあって、かえって孤独の思いを深め、景気のいい物音の中にかえって寂しさをかみしめている芭蕉の独自の声である。……この句の調べにはかなしい声

が確かにある。この句には何か縹渺とした思いに人を誘うものがある。（『芭蕉全発句』）山本氏のいう「縹渺とした思い」は、即ち露伴説の「顕より微に、有より無に入らんとするところ」であろう。歳末のあわただしさの中に、芭蕉は孤独を噛みしめ、死を予感していたのである。

815　雑水に琵琶きく軒の霰哉　（有磯海）

泊船集・蕉翁句集

冬季（霰）。

語釈　**○雑水に**　「雑水（ざふすゐ）」は、飯に野菜や魚介類を入れ、味噌・醬油等で煮たもの。「雑水」は宛字で、「増水」とも書く。今は冬の季語とされるが、古くは雑の扱いと思われる。「に」は、下の「きく」等に直接かかる言い方ではなく、ここで小休止して屈折のある語法。「雑水を食べながら」霰の音を聞くのである。（Ⅰ*157*）参照。「夕がほに雑水あつき藁屋哉　越人」（『はるの日』）「Zôsui.」（『日葡辞書』）。**○琵琶きく軒の霰**　「琵琶（びは）聞（き）く軒（のき）の霰（あられ）」。「琵琶」は、四絃または五絃の絃楽器。既出（Ⅰ*196*）。ここは、軒を打つ霰の音を琵琶の音に聞きなすことを、このように表現したのである。「霰」も既出（Ⅰ*16*等）。

大意　熱い雑水をすすりながら、軒を打つ霰の音を琵琶の音とも聞きなして慰むことだ。

考　元禄八年刊の『有磯海』（浪化撰）初出の句で、元禄六年冬以前、恐らくは晩年の作であろう。積翠の『芭蕉句選年考』は、『猿蓑』巻一に、

翁の堅田に閑居を聞て

雑水のなどころならば冬ごもり　其角

とある句を引いて、芭蕉が湖南に居た元禄二、三年頃の作かと見ているが、確かな根拠に基づく推定ではない。『蕉翁句集』は元禄六年の部に入れている。

の琵琶も亦た悲壮な音のするもの霰も淋しく、三つの配合が頗るよく利いてゐる。（内藤鳴雪『評釈』）

雑炊を炊いて喰ひ乍ら琵琶を弾ずる音を聞く折ふし軒には霰の音がすると或日の即興である。雑炊はわびしいも

というような、句中の三つの物を凡て実とする解釈が明治になると出て来るが、この句の「琵琶きく」は、「霰」の音の譬喩と見るのが自然であろう。古注の『笈の底』に、

是は簷(ノキ)の霰を琵琶に聞なしたる吟也。……先雑炊に雹(ママ)は其時節の取合にして、侘を云出たり。其余情に琵琶と云雅品を以て興を添ゆ。……檐の霰の波落々々と降り来る音は、誠に菅欃(スガヽク)琵琶共聞成さん。今案、雑炊と云笑味に琵琶を懸合て、霰と風情を顕す。妙術と云べし。

とあるような見方が、この句の場合は真を得ていると思われる。

「綿弓や琵琶に慰む竹のおく」（Ｉ196）「琵琶行の夜や三味線の音霰」（Ｉ206）等、類想の先行作に於いては、農家の綿弓の音を琵琶の音に聞きなしたり、座頭の弾く三味線の音から白楽天の「琵琶行」を思ったりしていた。軒打つ霰の音を琵琶の音に聞きなすのも、「大絃嘈嘈如急雨、小絃切切如私語、嘈嘈切切錯雑弾、大珠小珠落玉盤」（大絃は嘈嘈として急雨の如く、小絃は切切として私語の如し。嘈嘈切切錯雑して弾ずれば、大珠小珠玉盤に落つ）という「琵琶行」の詩句を背景にした興であるが、それだけでは余りに雅に偏して俳味が足りない。「雑水」というものを配合して、句は始めて俳意確かなものになるのである。堀信夫氏の指摘されるように、「雑水」は必ずしも貧しい食物ではないけれども、侘びた俳味を感じさせるものである。侘びた味を楽しみながら興じているこの句は、寂しい孤独感をあらわしただけのものではあるまい。

816 盗人に逢ふたよも有年のくれ（有磯海）

続猿蓑・泊船集・蕉翁句集

冬季（年のくれ）。

語釈　○**盗人に逢ふたよも有**　「盗人に逢うた夜も有り」。夜、泥棒に入られたこともあった、の意。「逢ふた」は、ウ音便の慣用表記である。「露の身は泥のやうなる物思ひ　荷兮　秋をなをなく盗人の妻　越人」（『あら野』員外）「Nusubito.」（『日葡辞書』）。○**年のくれ**　「年の暮」。

大意　年の暮に一年を振り返って見ると、夜、泥棒に入られたこともあった。多事だった年も、行こうとしている。

考　『有磯海』初出の句で、元禄六年冬以前という以外に、年代を考えるべき資料はない。『蕉翁句集』が貞享五年の部に入れているが、その根拠は不明である。

古注以来、年末に泥棒に入られたことと見て、押しつまっての世智辛さの感じを読み取ろうとする説が多い。盗人に逢ったことは作者の体験であるにしても、そのような見方では「年のくれ」を観念的に把握したに過ぎない。また、是は遁世の後の句と見えたり。昔は世にありて財宝をも身に従へたるにより、盗人にあひし事の有つるに、今世捨人となりては、盗まるゝ物もなければ、是ばかりも世を捨たる楽みなりとの余情見えたり。（正月堂『師走嚢』）などと解しては、隠閑自足の衒いが鼻につく。『有磯海』や『続猿蓑』に見えるところからすれば、晩年の作であろうが、軽みの時代の所産とすれば、もっとさり気ない、軽い味わいのものでなければなるまい。

かつての歳暮における盗難の体験を思いおこしていると解せないこともないが、この一年のうちのある夜、世の人並に盗人に逢ったという意外な体験が、年末にたどりついた安らぎの中で、かえってほのかなあたたかさで思いかえされているといった感じである。……「夜もあり」という口調には、怒りとか、憎しみとかを超えた、淡々とした追憶の気持が流れているようである。……一年をふりかえりしめくくる感じとして「年の暮」がとりあげられている。（『芭蕉全句』）

という加藤楸邨氏の説が、穏当なものとして受入れられる所以である。事繁かった一年を回顧する気持が感ぜられ、

ひろい意味で境涯の句といえようが、表現が余りに淡々としている為に、詩的感興には乏しい。

817 分別の底たゝきけり年の昏（翁草）

芭蕉庵小文庫・陸奥鵆・泊船集・二つ物・蕉翁句集

冬季（年の昏）。

語釈 **○分別の底たゝきけり** 「分別の底叩きけり」。「分別」は、考え・工夫等の意を持つ語であるが、ここは世渡りの上でのさまざまな遣繰算段に智恵をしぼること。そのありったけを出し尽すことを「底たゝく」と言った。「宵寐がちに朝をきしたるね覚の分別、なに事をかむさぼる」（「閉関之説」）「なじみはなけれど、そなたをいとしさに、万事を底たゝいて語ける」（『好色一代女』巻四）「Fübetuo megurasu.」（『日葡辞書』）。**○年の昏** 「年の昏」。「昏」は「暮」と同じ意に用いた。

大意 年の暮は遣繰が大変。みんな智恵のありったけを出し尽して、走り廻っていることよ。

考 元禄九年の『翁草』初出で、『蕉翁句集』は元禄六年の部に出している。六年以前、晩年の作であろう。

杜哉の『蒙引』は、

一とせをいひ尽して、先俳諧の半櫃も空になりたりとのをかしみならん。歳暮に分別の二字をかけ合せて、世俗に作り給ふ所感ずべし。

とあり、「年の昏」に「分別」の語を配合して俗に作意したことは確かである。其処に思われるのは、一年の貸借決算の集中する年の瀬に、掛取が走り廻り、取られる方は言い訳の工夫、さては居留守、出違いの駆け引き等、「分別」をしぼる悲喜劇の世界である。それ以外の事は、この句では恐らく表現されていない。芭蕉の作だからといって、「俳諧の半櫃」云々とか、

……自分もこの一年の間に風雅にはありたけの分別をつくしたことよ、というのである。表面は世態人情をいっ

て、その奥には自分の身をふりかえってみて、それをややユーモラスにいってのけたのである。（岩田九郎博士『諸注評釈芭蕉俳句大成』）

とまで解するのは、深読みに過ぎよう。芭蕉は俗世間を離れているから年末に忙しいこともない。世間を離れた処から眺めて、いろいろ馳駆奔走するさまを「やってるわい」と興じている。それが「底たゝきけり」のユーモアであろう。しかし、この句の表現は極く浅い興にとどまって、人間のあり方への深い同情といったものは感ぜられない。晩年の「軽み」も、この程度のものが好まれると、卑近な俗調に堕してしまうのである。

818　**毛衣につゝみてぬくし鴨の足**（芭蕉庵小文庫）

続猿蓑・泊船集・旅寝論・蕉翁句集

冬季（鴨）。

語釈　**○毛衣につゝみてぬくし**　「毛衣（けごろも）に包（つゝ）みて温（ぬく）し」。「毛衣」は、ここでは鳥の羽毛をいう。「ぬくし」は方言的俗語。羽毛でふっくりと包んで温かそうなのである。「千鳥もかるや鶴の毛衣とよめりければ」（『猿蓑』巻二、曾良発句「松島や」前書）「春雨や蓑につゝまん雉子の声　洒堂」（『続猿蓑』下）「あたゝかなるをぬくしといへる」（『名語記』三）「Tçutçumi, u, unda.」「Nucui.」（『日葡辞書』）。**○鴨の足**　「鴨（かも）」が冬の季語になる。既出（I *219*）。

大意　羽毛でふっくりと包んで、鴨の足は如何にも温かそうだ。

考　元禄九年の『芭蕉庵小文庫』初出で、『続猿蓑』にも収められた。元禄六年以前、晩年の作であろう。

この句については、去来の『旅寝論』に左のような所説が見える。

問曰、先師曰、発句は取合するもの也。二とり合て能（よく）とり合するを上手といへりと、許六の説に見えたり。しからば蕉門のおしへ、一物の上にて発句はなき事に侍るや。

去来答て曰、是又先師一かたのをしへ也。膳所のはいかい、はじめ此旨を聞て是になづむ者多し。我洒堂と常にあらそふ。其後洒堂武府にまかりけるに、先師告て曰、汝がほつ句皆、物二ツ三ツを取合てのみ句をなす。発句は只金を打のべたる様に作すべしとおしへ給へり。帰京の後、我に語りて前非を悔。

都て先師の門人に示し給ふや、一片に聞べからず。……凡ほつくは一物の上になき物にあらず。……先一物の上になりたる句は、

毛衣につゝみてぬくし鴨の足　　先師

此句は殊に一物の上にて作したりと、支考に語て興じ給ひし句となん。

二つ三つの物を取合わせるやり方は、まとまりやすい。そういう事を芭蕉から聞くと、それに飛びつく門人があり勝ちだけれども、句の作り方はそれだけに限ったものではなかった。洒堂が取合わせの句ばかり作るのを見て、芭蕉は「発句は只金を打のべたる様に作すべし」と言ったが、実は「金を打のべたる様」な作り方が理想なのである。右の一段では、その点に深入りせずに、取合わせとは対照的な「一物の上に作し」た例として、「鴨の足」の句が挙げられている。「鴨」という物を見据えて、外の物には傍目も振らないところが、芭蕉の作としても珍しい句であろう。

鴨の脚は短くて、然程毛に包まれているものでもない。従って「諸鳥寒気を防ぐとて、足を腹下の毛中に隠して煖(アタヽ)む。是を裘(ケゴロモ)に裹と云べし」（信天翁『笈の底』）という見方は確説である。恐らくは水辺の岸にうずくまっている鴨の姿に目を留めた句なのであろう。

まことに鴨というものが、鴨らしい感じの焦点で生かされているという感じである。……対象そのものを的確に把握する目のあったことに留意すべきである。……鴨の足を毛衣につつまれていると見るところに、唐めいた味わいがあり、そこに俳諧があったと思われるが、その根柢には鴨の実感が踏まえられているので、句に力が出ている。（『芭蕉全句』）

という加藤楸邨氏の鑑賞は、間然するところがない。「かくれけり師走の海のかいつぶり」（Ⅲ639）の句を思わせるが、それにはなお「師走の海」が背景としてあるのに対して、これは全く「一物の上」である。「生きた鴨を詠んでいるのではなかろう」（山本健吉氏『芭蕉全発句』）と見るのは良くない。食用に捕えられた物では、この存在感は出て来ないと思う。古注に引く『荘子』駢拇篇の鳧脛・鶴脛の寓言も、この場合は関わりのないことである。

819

せつかれて年忘するきげんかな　（芭蕉庵小文庫）

泊船集・蕉翁句集

冬季（年忘）。

語釈　○**せつかれて**　「せつく」は、しつこく催促すること。「ほそき筋より恋つのりつゝ　曲水　物おもふ身にもの喰へとせつかれて　翁」（『ひさご』）「Xetçuqi, u, uita.」（『日葡辞書』）。○**年忘する**　「年忘（としわす）れする」。「年忘」は、年末の句会。既出（Ⅲ633、Ⅳ731）。ここは形式上「きげん」にかかる言い方になっている。○**きげん**　「機嫌（きげん）」。ここは機嫌が好く、楽しいさま。「機嫌能かいこは庭に起かゝり　野坡　小昼のころの空静也　利牛」（『炭俵』上）「Qiguenuo yô suru.」（『日葡辞書』）。

大意　人から遣れ遣れと催促されて漸く年忘れの会をする始末だが、会を開けば開いたで、結構楽しい気分になることだ。

考　『芭蕉庵小文庫』初出で、元禄六年歳末以前、晩年の作と思われる。但し、『蕉翁句集』が元禄五年とする根拠は詳らかでない。

「せつかれて」は、自分から進んで遣るのではなく、老来人に倦むことの多い身は物ぐさなのである。人からうるさく言われて、それではと年忘れを催して見ると、それはそれで結構楽しく、人の集う賑やかさも面白く眺められる。そのような老いの心境が巧みにまとめられた句で、「せつかれて」という俗な言い方がよく利いた軽みの句である。

一般の世態ではなく、芭蕉自身の心境であろう。

范蠡が趙南のこゝろをいへる山家集の題に習ふ

820 一露もこぼさぬ菊の氷かな （続猿蓑）

陸奥衛・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

冬季（氷）。

語釈 **○范蠡が趙南のこゝろ** 「范蠡」は、中国の戦国時代、越王句践に仕えた名臣。呉と戦って句践に会稽の辱を雪がせた後、商人陶朱公となって巨万の富を築いたという。或る時その次男が人を殺して楚に捕えられたが、朱公は以前親しかった荘生なる人に千金を贈って子の命を助けようとした。ところが、使に立った朱公の長男が金を惜しんだ為に次男は死刑になってしまったという故事が『史記』越世家に見え、これに因んで西行の『山家集』中に「范蠡長男の心を」と詞書した「すてやらでいのちをこふる人はみなちゞのこがねをもてかへるなり」の歌が収められている。即ち、「趙南」は「長男」の誤りで、その「こゝろ」とは、金を惜しむようなケチな心持をいったのである。「趙南」のような誤りは、『史記』原典の知識があれば起り得ないし、芭蕉にはありそうもないことで、『続猿蓑』草稿に手を入れた可能性のある支考あたりの杜が疑われるが、「連歌家は古来愚かしき伝説によりて其儘に之を受くる習有りしなれば、これも其の一ツの例なるべきにや」（露伴『評釈続猿蓑』）という事情も考慮する要があり、この誤伝の背景をなす消息はよく分らない。『陸奥衛』の前書に「てうなん」と表記されている（〔考〕参照）のは、「趙南」の漢字を思わせるもので、同じ誤解に基づいたことが窺われる。**○山家集の題に習ふ** 「山家集」は、西行の和歌を集めた私家集で、六家集の一。芭蕉の愛読書であった。その「題」、即ち詞書は前項参照。「習ふ」は「倣ふ」の意。既出（Ⅰ*147*前書）。「あはれさやしぐるゝ比の山家集　素堂」（『陸奥衛』）。**○一露もこぼさぬ** 「一露も零さぬ」。菊の花にまつわる露を少しもこぼさずに、の意。（Ⅳ*781*）参照。**○菊の氷** 「氷」が冬の季語。既出（Ⅰ*150*等）。従ってこの「菊」は「寒菊」（Ⅳ*806*）であろう。

大意 寒菊に置いた露がびっしり氷りついて、一滴もこぼすまいといった風情であることよ。

考 「はむれいがてうなんのこゝろを」（『陸奥衛』）「西行が超南の心をいへる山家集の題に習ふ」（泊船集）等の前書が

あり、『蕉翁句集草稿』と『蕉翁句集』の前書は『続猿蓑』と同じである。『続猿蓑』の前書が、誤りを含みながらも『山家集』の影響下に成った句であることをよく伝えているのに対して、『泊船集』のように「西行が超南」では、何の事とも分らない。句は桃隣の『陸奥鵆』（元禄十年刊）初出で、元禄六年冬以前、晩年の作と思われる。

黄金色の寒菊の花にまつわる露が氷ったさまをやや擬人化して、少しも露をこぼすまいと氷らせたように言い做した俳諧である。恐らくは寒菊の花の色に「黄金」を連想して、千金を惜しんだ中国古代の故事に思い至ったものであろう。このような行き方は、晩年の「軽み」とは異質であるが、だからこそ前書が必要なのであって、純粋な詩的動機のみに依らない「ものいへば唇寒し」（Ⅳ793）の句なども思い合わすべきである。『山家集』の歌は、命に執着する俗衆の心事を、千金を空しく持ち帰った范蠡の長男に譬えたのであった。

離別

821　しぐれ行や船の舳綱にとり付て（柱暦）

誹諧曾我・蕉翁句集草稿

冬季（しぐれ）。

語釈　○**離別**　「リベツ」。ここは人との別れをいう。「前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝぐ」（『おくのほそ道』）「Ribet. Fanare vacaruru.」（『日葡辞書』）。○**しぐれ行や**　「時雨れ行くや」。時雨に濡れて行くことよ。「や」は詠嘆の切字。時雨を自動詞化した場合、雨の降り方をいうことが多いが、ここは時雨に濡れて行く人のさまについて用いられている。既出（Ⅰ*216*）。（Ⅲ*627*）参照。○**舳綱にとり付て**　「舳綱に取り付きて」。「舳綱」は、船を岸につなぐ為に舳先に付けた綱。「艫綱」と対をなす。それにすがりついて別れを惜しむ体をあらわした。「とり付く」は既出（Ⅲ*626*）。「千余艘がとも綱へづなをくみあはせ」（『平家物語』巻八）「FE.」（『日葡辞書』）。

大意 船の舳綱に取り付いて何時までも別れを惜しみ、時雨に濡れて行くことだ。

考 三河岡崎の人鶴声（荷兮門）の撰した『柱暦』（元禄十年刊）に初出し、新城の白雪の撰集『誹諧曾我』（元禄十二年刊）にも見えるので、三河方面に伝えられた句と知られる。士芳は『蕉翁句集草稿』に、

山は皆蜜柑の色の黄になりて

此白船（ママ）に出る。此句はいがにて第三に云出られし句也。白船（ママ）聞違也。いづれの集にか又、時雨行や船の舳綱に取付てと云句出る。覚束なし。蜜柑の句ごとくの違なるべし。

と述べて、発句ではなく、連句の付合の第三ではないかと疑っている。確かに「とり付て」と言い切らずに終った句作りから、そのような疑いを持つのは自然であるが、士芳の所説にも精しくない点がある。「山は皆」の句は、元禄七年九月四日伊賀上野の猿雖亭の俳席で興行された五十韻二の表五句目の付句であって、「第三」ではなかった。そして、「時雨行や」の句については単なる推測を述べたにとどまり、この句を含んだ連句の巻も未発見である。一方、「とり付て」で終るこの句の句作りは発句として異体ながら、「しぐれ行や」と歴とした切字があり、「辛崎の松は花より朧にて」（Ⅰ232）のような全く切字のない発句を作ったことのある芭蕉であることを考えれば、当面の句のような作があっても、さして異とするに当らない。この見地から、ここでは一応発句として扱い、元禄六年冬までに成った句の中に入れておく。「しぐれ行や船の舳縄に取つきて」（『芭蕉句選』）「時雨行や舟の帆づなに取付て」（『もとの水』）等、後代の書に異形も伝えられるが、元禄期の古集に見える形に拠るべきである。

この句は内容の面からも、かなり問題がある。「離別」という前書が、作者自身人を送る意であるとすれば、「船の舳綱にとり付て」別れを惜しむさまは余りに大袈裟に過ぎ、表現として当を失した感を免れない。他人の別離のさまを傍観して描いたものとすれば、それは発句よりも付句の世界であろう。このような点からも、この句は本来付句だった可能性が大きいと思う。或いは、鬼界が島に流されて独り残された俊寛僧都が、迎えの舟に取付いて共に乗せて

行けと足摺りした故事を背景にした趣向かも知れない。

海ある所にたばねたる柴を繪書て

822　須磨の浦の年取ものや柴一把　（茶の草子）

蝶姿

冬季（年取もの）。

語釈　○**たばねたる柴**　「束ねたる柴」。薪にする柴を、背負って運ぶように束ねてあるのである。「柴」は既出（Ⅱ*267*前書）。「田の畔に早苗把て投て置　孤屋　道者のはさむ編笠の節　其角」（『炭俵』下）「**Tabane, uru, eta. …… Ineuo tabanuru.**」（『日葡辞書』）。○**絵書て**　「絵書きて」。画賛句なので、前書にその絵の大体を説明するのである。既出（Ⅲ*572*）。○**須磨の浦**　現兵庫県神戸市須磨区の海岸。歌枕である。既出（Ⅰ*107*、Ⅱ*381*等）。○**年取もの**　「年取り物」。年の暮に用意する必需品。正月の飾り物等をもいう。「此人の金銀は中間の年取物に定めばや」（『椀久二世の物語』上）「**Toxiuo coyuru, l, toru.**」（『日葡辞書』）。○**一把**　「イチハ」。「把」は、束ねた物についていう量詞。一束ね。「藁一把かりて花見る阿波手哉　湍水」（『あら野』巻七）「**Ichiua.**」（『日葡辞書』）。

大意　海辺に置かれた柴一束ね。これはきっと須磨の浦の年取り物なのだな。

考　『蝶姿』（助然撰、元禄十四年刊）には「海ある所に真柴負へる人を自画して」と前書があり、『茶の草子』（雪丸・桃先撰、元禄十二年刊）には「これは信濃国根羽といふ山里にあるよし、玩竹といふ人のかたられければ、なにとなくなつかしく、巻の上に置ぬ。物語せし人も、なべてのたぐひにあらず。里の子もよくしれるなるべし」と付記している。画賛句は必ず当季とは限らないが、一応元禄六年冬までには成っていたものと見ておく。

海辺に柴一把とは、随分とぼけた絵である。それを在原行平の歌や『源氏物語』で名高い須磨の浦としたのは風雅の興で、更に「年取もの」と俗にしたところが俳諧であろう。侘びた味のある好箇の画賛句である。堀信夫氏は謡曲

「忠度」に出る須磨の蜑の、藻塩たく塩木を取る趣の俳諧化と見ておられる（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）。

823 かりて寐む案山子の袖や夜半の霜（其木枯）

冬季（霜）。

語釈 ○かりて寐む 「借りて寐む」。下の「袖」にかかる。○案山子の袖や 「案山子の袖や」。「案山子」は、竹や藁で作り、田畑に立てて人が居るように見せかける人形。弓矢を持たせたりする。毛髪やぼろを焼いて悪臭をたて、田畑を荒らす鳥獣の害を避ける「嗅がし」の語を、人形にも用いるようになったのである。今いう「カ、シ」は原義を忘れた転音。「案山子」は、中国で山田に立てる鳥おどしの人形をいう。「袖」は、ここでは「衣」に同じ。「袖や夜半の霜」と続く文脈ではないから、上の「かりて寐む」で切れるとしては、三段切れになって良くない。初五は「袖」にかかると見るべきで、直訳すれば「借りて寝ようとする案山子の袖」となる。「や」の切字は名詞を受けることが多く、その名詞に凡てを集約する俳諧的表現法である。「守護不入かゞしの弓の矢先かな」（蕪村『夜半叟句集』）「Cagaxi.」（『日葡辞書』）。○夜半の霜 「夜半の霜」。「夜半」は、真夜中。「うと〳〵と寐起ながらに湯をわかす　胡及　寒ゆく夜半の越の雪鋤　長虹」（『あら野』員外）「Youa.」（『日葡辞書』）。

大意 霜の置く真夜中は大変寒い。案山子の着物を借りて寝たい程だよ。

考 『其木枯』（淡斎撰、元禄十四年成）に「陽炎のわが肩にたつ紙衣哉」（Ⅲ449）と並べてこの句を出して、「いづこ行脚の比ならん、いとあはれなり」と注している。旅中の作とすれば、元禄四年十月の帰東の旅以前ということになるが、必ずしも旅中の作とばかりは限らない。まだ田園の趣のあった当時は、深川あたりでもこの句のような風情は見られたろうし、全く想化に成った句であるかも知れない。「陽炎の」の句にしても、行脚中の作ではなかった。ここでは姑く元禄六年冬以前の作と見ておく。

芭蕉の旅は、「とまるべき道にかぎりなく、立べき朝に時なし。只一日のねがひ二つのみ。こよひ能宿からん、草

鞋のわが足によろしきを求んと斗は、いさゝかのおもひなり」（『笈の小文』）といった調子のもので、殆んど街道筋を辿る旅だったから、この句のように、霜夜に野宿することはなかったろう。また、石上寺に於ける小野小町と僧正遍昭の贈答歌（Ⅳ779参照）や、『百人一首』にも入って有名な「きり〴〵すなくやしもよのさむしろに衣かたしきひとりかもねん」（『新古今集』巻五、良経）の歌をなぞった趣もあって、想化の句らしい感じが強く、加藤楸邨氏の『芭蕉全句』のように、画賛句かとする考え方もある。風雅な和歌の趣を踏まえながら、案山子の着物を借りて寝ようというところに、俳諧らしい興を見出しているのである。「かりて寐む案山子の」という頭韻仕立てにも、興じた調子が見える。

仙化が父追善

824　袖の色よごれて寒しこいねづみ　（蕉翁句集）

冬季（寒し）。

語釈　**○仙化が父追善**　「仙化が父追善」。「仙化」は、江戸の蕉門俳人で、「古池や」の句を巻頭にした『蛙合』（貞享三年刊）の撰者であるが、姓名、生歿年等未詳。その「父」についても何も知られていない。「追善」は、死者の冥福を祈って善根を修すること。「追悼」と同じ意に用いられる。既出（Ⅱ*287*、*439*前書）。**○袖の色よごれて寒し**　何日も着通した喪服の袖の色が、汚れて寒々としているさま。「よごれて」に日数の経過と、亡き人を偲ぶ涙が暗示されている。「五月雨や踵よごれぬ儀づたひ　沾圃」（『続猿蓑』ト）「Yogore, ruru, eta.」（『日葡辞書』）。**○こいねづみ**　「濃い鼠」。濃い鼠色。「ねづみ」は喪服の色である。「ねづみ」は「ねずみ」の仮名ちがい。「人死したる時かなしみの間、喪服とてうれへの時着る衣服を着するなり。その色は薄鼠色とて鼠色の布の服を用ふるなり」（『貞丈雑記』巻十六）「花色・ねずみ・みる茶の布子三つ卅匁」（『新色五巻書』巻五ノ四）「Coi.」「Nezumi.」（『日葡辞書』）。

大意　父を失った人の何日も着通した喪服の袖の色が、涙に汚れて濃い鼠色になり、如何にも寒々と見える。

考 『蕉翁句集』は元禄四年の部に収めているが、仙化の父の歿年は不明で、何を根拠とした推定か詳らかでない。姑く同六年冬以前と見ておく。

亡くなった人よりも、それを悲しむ子の姿を描いて弔意をあらわしている。「寒し」は季のあしらいであるが、それだけにとどまらない表現効果を持つようである。

825 古法眼出どころあはれ年の暮　（三つの顔）

冬季（年の暮）。

語釈 ○古法眼　「コホフゲン」。戦国時代の絵師狩野元信のこと。狩野派の始祖正信の長子として京に生まれ、周文・雪舟らの系統の水墨画に大和絵の技法を取入れ、狩野派の様式を大成した人として知られる。晩年剃髪して法眼の称を許された。永禄二（一五五九）年十月六日歿、享年八十四。ここは元信の画いた絵をいう。○出どころあはれ　「出所哀れ」。「出どころ」は、売りに出された絵を所有していた元の家を指す。「あはれ」は形容動詞の語幹。売りに出さなければならなくなった事情が「あはれ」なのである。「遣ひ捨し金銀の出所なく、其なりけりに内証曖済て」（『日本永代蔵』巻一ノ三）「Dedocoro.」（『日葡辞書』）。

大意 年の暮の市に古法眼元信の絵が出ている。これを手放さなければならなくなった元の所有者のことを考えると、しみじみ哀れを催すことだ。

考 出典の『三つの顔』（越人撰、享保十一年成）は年代はやや後れるが、芭蕉と親しかった人の撰著なので、信憑性がある。成立年次は、季語から元禄六年冬以前とする以上に詳しくは分らず、場所も江戸とばかりは限らないであろう。

古法眼の絵を持っていた家は、いずれ相応の旧家と思われる。家重代の名画を手放すに至った事情を考えると、零落した旧家の年の瀬の窮迫が浮び上って来るのだ。年の市に出た古画の背景に、そのような世相を見て、「あはれ」

と詠嘆したのである。「出どころあはれ」のような飾らない言い方に、晩年の風を読み取ることも出来よう。ただ、「出どころあはれ」と「年の暮」が安直に結びつく傾向は免れず、感味はそう深いものではない。

826　いきながら一つに氷る海鼠哉　（続別座敷）

木曾の谷・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・続寒菊

冬季（氷る・海鼠）。

語釈　**○いきながら一つに氷る**　「生きながら一つに氷る」。「いきながら」は、「笠きて草蛙はきながら」（Ⅰ*221*）等と同じく、「生きたままで」の意。何匹もの海鼠が一つになって氷りついているさまである。「氷」は「こおり」を意味する本字。「氷」は、その俗字である。「二宮のわか君とひとつにまじりてあそび給ふ」（『源氏物語』横笛）。**○海鼠**　「ナマコ」。棘皮動物。円筒状の体形で、やや扁平、体長は四十センチに達し、多くは褐色に黒褐色の斑点を混える。我が国の沿岸各地に産し、酢にして生食する。しゅんの時期によって冬の季語とされる。「うかうかと海月に交るなまこ哉　車庸」（『続猿蓑』下）「Namaco. i, Tauarago.」（『日葡辞書』）。

大意　桶の中で何匹もの海鼠が、生きたまま氷りついていることよ。

考　この句の板本初出は元禄十三年刊の『続別座敷』（子珊撰）であるが、これより後の『木曾の谷』（岱水撰、宝永元年成）の野坡序に、

……ある日、硯やある、発句せしに、是が腋・第三すべきよし、自手して書付給ひしより、四句め五句めとうつり行、漸一折にも不満かい置給へり。……病身の隙なくせがまれ給へる事をいとひ、彼あとつぎ侍らんとも𛀙いはずなりぬ。

と芭蕉の思い出が書かれており、この句を発句とした巻頭歌仙の成立事情が窺える。右に「一折にも不満」とあるように、芭蕉と岱水の両吟は十二句までで、以下は後年、杉風と岱水の両吟で満尾したのであった（中興期の『続寒

菊』（杏廬撰、安永九年刊）にもこの巻を所収）。『蕉翁句集』は貞享五年の部に出しているけれども、野坡の文に「病身の隙なくせがまれ給へる事をいとひ」とあるところは最晩年の深川での生活を思わせるので、元禄五、六年の冬の作とした方が相応しいであろう。

台所の流し元などにある桶に海鼠が入れられてある。何匹かが一つに固まって氷りついているさまに厳冬の寒さが感ぜられよう。そういう季感と共に、此処では海鼠のありようを見つめる作者の眼が印象的である。海鼠といえば、そのつかみ所のない姿をユーモラスに扱うのが一般であるのに、この句にはそのような「興」とは別のものが看取される。その辺の消息を加藤楸邨氏の説に聴こう。

そのひとつになつて氷つてゐる海鼠のすがたに深い愛憐を感じてゐるのである。然し、その気持は表面に出してゐない。あくまで目は冷徹に見てゐる。然し、それぞれが、「生きながら」「ひとつに氷」つてゐるすがたに感合し、その生きるあはれにとけ入つてゐる気持は、その静かな、我を抑へた表現の底から、しみじみとにじみ出てくる。海鼠といふと、

尾頭のこころもとなき海鼠かな　去来

などのやうに、笑を以て把握されるのが常であるが、この句にはそれがない。どこまでも海鼠になり入った感じ方である。冷く光る海鼠の肌の感じがまざと浮んできて、かうした生きものの生きかたをひたと感じとつてゐる芭蕉の心が、……涙を禁じえぬまでに滲透してゐるのである。芭蕉の作を現代の作に比したとき、一つの顕著な特色は、言ひがたいあるものを持つてゐることである。真実にして、しかもどこかにかなしみがあることだ。……私はそれは、芭蕉がすべての生きるものの根源相ともいふべき深処に徹して、そこに立つからであらうと信じてゐる。さういふ心の深処の色が句に反映滲透して、あるいひがたき真実にして、かなしみの色を帯びた作とするものであると思ふのだ。（『芭蕉講座』発句編㊦）

この句については、愛した肉親を失い、軽みについても理解する門人の少い最晩年の孤絶した作者の心境を象徴する作として読もうとする見方もあるが、そのような凄絶な気分は、この句の世界からは遠いもので、もっと静かな、物を徹視しつつも温かな眼ざしが感ぜられると思う。別の面からいうと、対象への感情移入の深さであろう。楸邨氏の説も、そういう感受の上に立っていることは確かである。また、そうした海鼠のありように愛憐の眼ざしを向けたばかりではなく、『荘子』に見える目鼻のない「渾沌」の寓言から、海鼠を見て老荘の無為自然の道を思うのは俳人の常識であったとして、寒ければ寒さに従い、桶に入れられれば桶のまま一つに成って氷っている海鼠に、「偉大な無為のすがた」を見ていたのであろうとする山本唯一博士の説もある（『芭蕉俳句ノート』）。そこまで思想的に見るべきかどうか、人によって見方は分れるであろうが、これまた一説として書き留めておきたい。

索引

凡例

一　語句索引には本位句として注釈を加えた発句と前書の中の語句のみを標出した。

一　活用語は原則として終止形で標出し、排列は発音に準じて、仮名遣にはこだわらない。

初句索引

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や・ら行

語句索引

あ 行

か　行

さ行

た　行

な行

は行

ま行

や　行

ら・わ行

阿部正美（あべまさみ）
昭和7年　東京生。
現在　専修大学教授。
著書『芭蕉連句抄』（1～12）
『芭蕉伝記考説』（行実篇・
作品篇）等。

芭蕉発句全講Ⅳ

平成九年十月二十日発行

著者　阿部正美

発行者　明治書院　三樹譲

印刷者　大日本法令印刷　田中忠

発行所　株式会社　明治書院
東京都千代田区神田錦町一-一六
振替口座　〇〇一三〇-七-四九九一
電話（〇三）三二九二-三七四一（代）

　ISBN 4-625-51067-8　　製本星共社